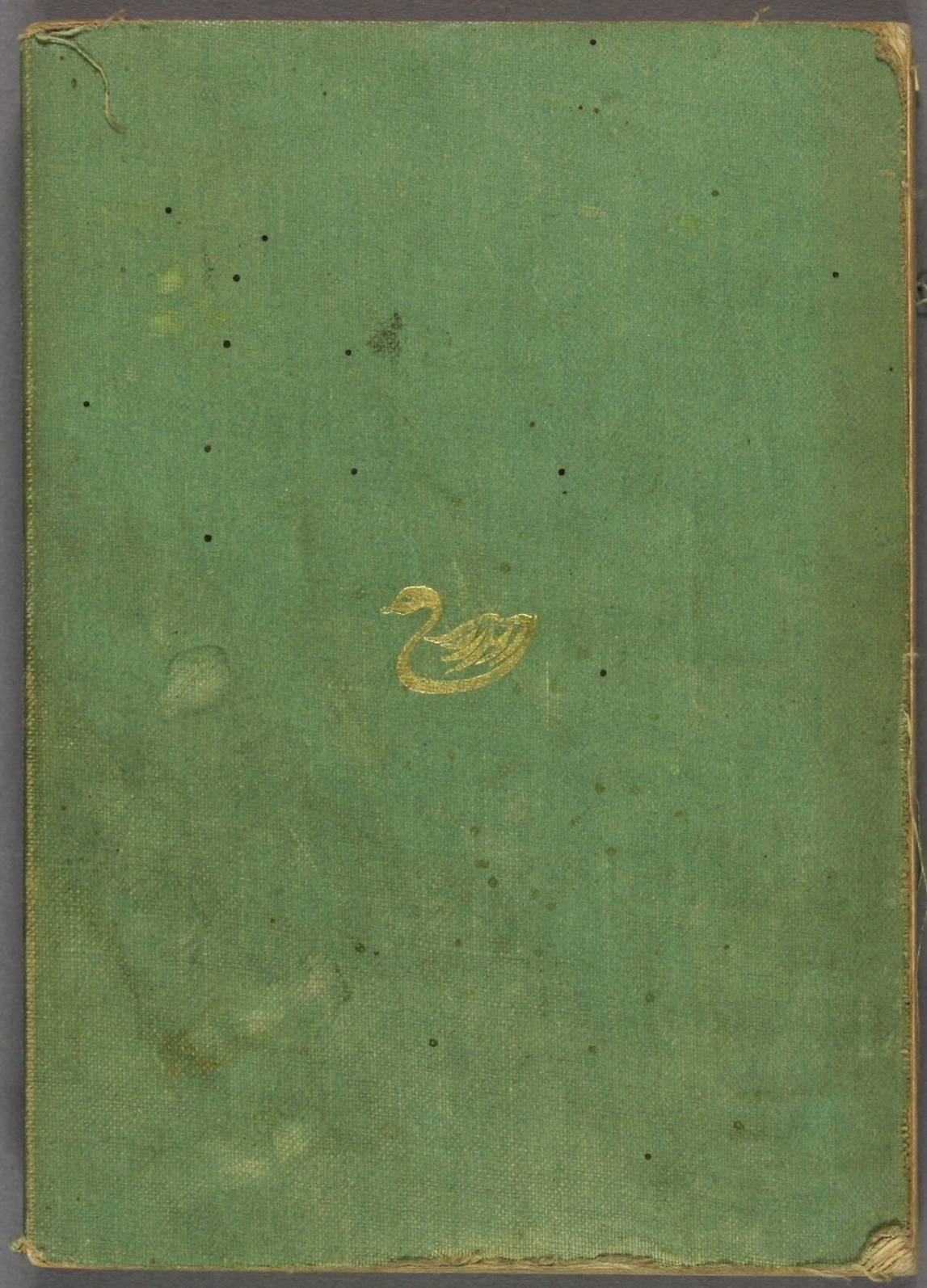
風雅集



白
水

目次

袖時雨（小説）……一
こぼれ梅（小説）……二五
京屋娘（小説）……一一五
娘姿十五區（雜筆）……一五九
鷹の羽（雜筆）……一九一
美人八容（雜筆）……一九八
送漣山人辭（雜筆）……二〇七
勇み肌（雜筆）……二〇九
京の雪（紀行）……二一四
園洲別墅（紀行）……二一六
日光結構記（紀行）……二二〇

麥藁帽子（紀行）……二三二
夏の夜（紀行）……二四二
酒池肉林（紀行）……二四八
嗣場の秋（紀行）……二六〇
神田觀機關（紀行）……二六七
おぼろ月（新躰詩）……二七七
夏の川（新躰詩）……二八七
暮の秋（新躰詩）……二八九
西關の雪（新躰詩）……二九九
涼榻詩味（漢詩）……三〇五
俳諧算盤珠（俳句）……三一二
以上

風月集

乙羽生著

袖時雨

（上）

おう影がさして、美くしいことゝ、四十恰好の婀娜ッぽい奥様が、振上げたる顔に、夏の月の清しう射して、半ば捲きかけたる簾の影の、竹縁に端居したる、これも歳は五十に近かるべき女の、鬢の邊に清光を浴せかくれば、此方は及び腰の、顔を襟に埋めたるが、弗と思ひつける如く首を擡げて、ほんにマア美

い月で御座りますこと、夫もモウ歸りまする刻限、今宵は御緩りと遊ばして下さいませ、別けてこの邊は田舍も同樣の不自由ゆゑ、決してお構ひはいたしませぬ、そして先刻からお話の一條も、夫が戻りましたなら、ちよッぴり一ト言、奥樣のお口からこれ斯うとお話して頂いたら、夫がいくら愚痴ッぽくなりましたと申しても、定めし快く納得致しませうほどに、何うぞ一言お辭をと、云ふ聲も顫はれて、袖に窃とうけたるは涙なり、奥樣と云はれし女の、やゝ顔を和らげて。お霜、あれ泣いて呉れては困るよ、もとゝ妾がさう云ふのではなく、旦那はお前も知つての通りの一酷もの、斯うといひ出されては、理が

非でも退かれぬが性分、こゝの處は殘念にも思ふかなれど、一先づ田舍に歸つて呉れ、機もあらば妾からお詫して、また呼び戻す事にもならう、くよ〳〵せずと、まアこの月でも見たがいゝよと、深切さうに云ふ奥樣の、襟元はくつきりと白く、大形の丸髷に年の數の二つ三つも隱れて、縞明石のお召に、身無しの比翼帶、月のさす方は襯衣も見え透くばかり、涼しげの打扮なるに引かへて、此方は月の光に背きつ、うち沈む顔の艶、衣も不斷着の洗ひ曝しに、振も打扮も繕はぬ愁ひの思入れ深く、兎角は露を夕顔の棚に翻して、隣れる家の門涼み睦ましきを小耳に、青薄の月に薫りて、煙るが如く亂るゝ傍、石竹の花の白

きは輝き、紅なるが影の黒く風にたはみて、小庭ながらも小瀟洒せる夜の樣、日の暮方の一ト降りに、撒水せぬに風薫りて、虫の音の蘇生たらん如きも涼しゝ。霜と呼ばれたる女の、なほ力無氣に顔さし上げて。奥樣御免なされて下さりませ、ッイ永年の御心切にあまへまして、緣起でもない泣き事ばかり、妾は奥樣のお傍に居りますのが、今年で恰度十六年、あの坊ッ樣が今以て、老爺〳〵とお仰つて下さるだけ、なほこの土地が去りたうは御座りませぬ、仰せの通り當節は正直一方では渡れぬ世間、お若い方で御器量な御發明な人樣の多いのに、夫は老る年の五十八、六十の坂にモウ〳〵近うなりましては、桃も

毛虫の旨味がぬけ、愚痴ッぽくばかりなりまして、お役には立つコ無しの律義一方、それをこうして十六年が間も、お用ひ下された且那樣の御心切、やれこれからが御恩がへしと思ふ近頃は、中症の氣味でもあるか、御覽の通り半身が思ふやうには利かぬとやら申しまして、氣分の悪い時分には、寢たり起たり、御覽遊ばしませ、その石竹も娘が緣日で買ふて戻りましたのを、昨日の朝植えましたのなれど、未だ根がつかぬかして、何うやら風にも堪へぬ樣子、いかに世間は智恵には勝たれぬ掟とは申せ、同役中では故參の夫が、何日になつても今日の境界、手堅いからと云つて金庫の番人で暮されもせず、後から次第に

乘り越されて、今ではホンの唐銅火鉢の、たゞお店の番を致しまするより、能の無い烏は、何日になつても鷹の眞似は出來ませず、旦那様のお飽き遊ばすのも、無理とはさら〳〵存じませねど、この年數になりましてから、何の顏あつて在所へおめ〳〵歸られませう、今が今まで他様に何屋の何兵衛と、名を謳はれたその身が、老耄れたから暇が出たのぢや、ソレ見た事か血氣の頃に肥桶見捨てた天罰さと、世間の噂にかゝるがいやさ、また二つには、娘のお清、あれも今年は十五歳、お坊ッ様と飯事して遊んでゐましたのが、昨日今日と思ふてゐたのに、もう高等の女學校とやらに、入れて呉れの、裁縫を習はしての

と、強請らるゝ程親の自慢、試驗とやらが近くなつたと、喜んでゐるその矢先、在所に歸ると聞いたなら、何のやうにあれが泣きませう、奥様奥様、何うぞお慈悲にもう二三年、せめては娘の成人するまで、お目かけられて下さいますやう、旦那様にお執成をお賴み申上げますると、泣くより外の情ぞ無し、彼方はそれを凛として。お霜、泣いて呉れるな、お前の心の切ないのを、知つての上の今の一ト言、妾が詫びして利かれる程なら、何んでわざ〳〵來ませうぞ、所詮これは叶はぬと、思ひ込んだなればこそ、お前にも先刻から事を分けて云ふぢやないか、男の無分別なは、夕立の雨の一ト しきり、降つて晴れゝば、

また元の月のよい中、十六年も一緒に稼業を勵んで呉れて、ホンにお前の云ふやうに、世間では儀兵衛さんの福山堂やら、旦那樣のお店やら判らぬとまで、云ふて呉れる得意場もあるのに、何時まで儀兵衛を打つ捨り放しにして置かれうぞ、實以て一寸の間だ、後の事を氣にかけずと、こゝは何うぞ妾にめんじて、一旦在所に戻つて呉れ、な、お霜、妾を怨んで呉れるなと、顏には不愍さの色を見すれど、上眼づかひに窃み見て、お霜の樣子をのぞけるさへ、此方は賴みの綱切れて、涙に沈むばかりなるを、賺すやうにして、坐を立ちさま、それぢやァお霜、妾はもう歸ります、儀兵衛が戻つたら、お前からよう云ふて呉れ

と、門口に出づれば、待ち草臥たる車夫の、欠伸を嚙み〳〵めて、履物をそと直すや否、氣は沈着けど仕打の急かれて、拳車に乘ると、ツィ其處の三軒目から、曲れるあとは月の檐、見送る窓に雲湧きて、雨にやならんと氣遣ふ空を、怨めしげに見上ぐるも女の情、かくてもとの坐に直りて、そと泣き伏する傍から、娘も涙に曇るなる門の戸を、了得にまだ月の射すに遠慮してや、物思はし氣にノツソリと、歸り來れるは儀兵衛なり。

（中）

お霜今日は遲うなつたと、半は汗に汚れたる瓦斯糸の單衣を、着たまゝの、歸るや否、竹緣の端に力無さゝうに胡坐して、譯

も無くつまらぬ〳〵と頭を傾むくるを、女房はそれと察しながらも、なほ平生の氣性を見てとつて、我から話柄を持出しもせず、何うやら御氣分がと斫り込めば、儀兵衛は顏をさし俯けた る儘、おう、少々加減がと打沈むに、藥など差上げませうかと云へば、ナニ大した事はない打捨つて置け、案ずるほどの下痢でもないが、正午時分から少とお腹が緩み出し、お店で赤玉を頂いて服んでから、もう何んとも無いが、あァ年を老れば氣が緩む、腹が緩む、嫣アいつそ田舍の方が住みよいな、かうして居る此處も邊鄙とはいふものゝ、下町の雜沓してゐる處から見ると、何んなに住み好いか知れはせぬ、熱鬧場にゐる人は、氣

が强く、人情も輕薄に、思ひやりといふものは、トンとなく、ツマリ前行く人を搔き分けても、我一人進めば濟むやうな人氣の、荒らう無うては金が儲からず、結構人だお人良だと、云ふて吳れる人樣の、自力無いのが多ければ、何んぞの時の賴みにならず、昨日の恩も、今日は紙卷莨のパイプに齊しく、吸殼と一緒に捨てゝ、見向もせぬが當世の人心で、その人の零落れては義理ある顏も鼻摘み、よし仇で返さうとも、溫石の冷たうなつては、疝氣の腰へも當てられぬな、お清こゝへ來い、孃やこゝへ來て、また何時のやうに、腰を按つては吳れぬか、おやお前泣いてか、また母アさんに叱られたな、母アさんは私と違ふ

て氣早な性質、逆らつて叱られな、おう、蚊が食ふわい、泣くな、こゝへ來てこの月でも見い、アレ虫が鳴いとるよと、慰め顔に云ふ父よりも、慰めらるゝ娘の切なさ、先刻聞いたる奥樣のお話を、知らぬ顔にお隱しなさるも、妾へ氣をかねての事かと、思ひまはせばなほ湧きかゝる涙を、袂にうけては顔さし俯けて、團扇の骨を數ひ居たり、母のお霜はいつそそれをもどかしがりて。まア貴君、氣樂さうに何を云ふておゐでなさる、妾どもに心配させずと思召して、いくら隱しておゐでても、先刻お店の奥樣がと云ひにかゝるを、また氣の早いと儀兵衛は眼で知らせて、その奥樣が何うなされた、たつた今その曲り角で、

擦れ違ひに逢ふたのは、たしかにそれぢやとは思つたが、向ふは威勢の好いお手車、此方は老躰のおひろひとて、ツイ御挨拶もせなんだが、そして宅へは何んぞ用事か。あれまた貴夫は空とぼけて、昨日やら今日やら、お店で旦那樣から何かお話はありませぬか、無いとあつては、何うやら話の撥が合はぬが、今日奥樣がおらしつての仰せには、儀兵衛奴は、これは失禮、そのナニ貴夫が老耄とやらで、店の役には立たぬから、暇を貰ふて田舍へ引ッ込めと、一口に云へば斯ういふ御難題、これが旦那樣ばかりのお辭なら、いつもの御氣性と諦めもせうけれど、アノ沈默の奥樣までが、今のやうな御言分、妾腹が立つて、

口惜しくつて、何うしやうかと思つたが、主人には勝てぬ奉公人、一生も二生も勤めやうと思ふてゐる私共を、お三どんか三助にでもおつしやる如く、年老つたから田舎に歸れ、直ぐ暇をおとりと、可愛さうに詰め腹を切らすやうな云ひがゝり、日頃柔しい貴君にこんな事を聞かしたら、口惜し紛れに何んなことにならうかと、實はお聞かせ申さぬ筈でゐたなれど、遲かれ早かれ一度は譯を云はねば濟まぬ今日のお話、そ、その話で、今もお清と二人で泣いてゐました、貴君余り酷いではありませぬか、自分達お二人が出世さへなされば、アトの奉公人は十年勤めやうが、廿年辛抱しやうが、それは構はぬ、年老つて辜祿し

た、店に遣ふては置けぬと仰しやつても、人間一生はいつも廿歳代の花ばかりではなく、お店に寂がつくと共に、奉公人も愚痴にならうさ、鯛ぢやからとて、鯉ぢやとて、骨もあれば頭もある、その脊肉のお旨しい所ばかり喰べて、尾がまづいの、鰭がたべられないのと、俎板の上に揑と投り出されたからとて、もとの通りの鯛にはなられず、人もあらうに儀兵衛さんを、ホンに口惜しい、昔時の事は忘れくさつてよ、旦那さんも奥樣も十六年前の事を考へて御覽遊ばせな、旦那樣は未だ書生上りの藥劑師とやらを肩に着て、意張つては商賣も奈良佐といふ、得意場を見つけて、薄荷の買入を賴まれたのが、そも〳〵親父さ

んの働き、その折は店と云つても、お成道を横丁の孫店、二間々口は名ばかりの猫の額で、臺所とも坐敷とも兼帶の間がある外は、直ぐ其處が隣家の土藏、諸道具と云つたところが、調劑用のテーブルが一ツ、夜はその四隅に紙を張つて、蚊帳の代りに用ひられた事もあつたとやら、そんな苦勞をしたお庇蔭に、奈良佐でも手堅い親父さんを見込んで、品物も貸して下され、藥品の買入れもさして下さる、親父さんはいつも外向を駈けずり歩き、旦那は店で賣藥の調合さ、夜晝寐ずに働いて、たゝき上げたは今の身代、それで得意先の古店では、ツイ近頃まで親父さんを旦那といひ、今の旦那樣を先生と云つてゐたのが、一

抵親父さんの正直過ぎなさる所から、何日とはなしに旦那は旦那、夫は並の奉公人扱ひされて、それから後は若手の者に乘つ越され、今日になつて、アの難題、お清口惜しいではないか、それに旦那は旦那としても、アノ奥樣が怨めしい、今でこそアノ打扮はしてゐられ、根が吉原の花魁樣、他人を魅すが商賣の、昔からの氣が失せられで、義理もあり、少しは恩もあるべき夫を、今になつて今の顏あつて、自分の口から暇を取れと云はれるものぞ、これが若し本所邊の大店なら、今頃は暖簾を分けて貰ひ、商賣も自儘勝手に出來やうもの、主を擇ばねば、十幾年の辛勞しても、みんな水の泡になつた、お清もう泣きやる

な、泣いたところが仕様は無い、時よ時節と諦めて、いつそ田舍に引ッ込まうか、おやもう夫は熟睡つてお仕舞ひなされたワ、一生の大事の話をしてゐるのに、この通だもの、お清、妾どもは一生日蔭の桃の木よ、お女郎様でも運が向けば大家の奥様、妾等のやうに年が年中働いても、なるほどにはならぬが世間、くよ〳〵思ふて、この上になほ病氣にでもなつたなら、それこそ賴む木陰のない親子、ほい寒冷えでもさしてはならぬ、お清、搔卷出して父さんにかけておやりと、人心の見透くやうなを憤れど、子ゆゑにいつか氣まぐれて、椽端に涼む夏の月、また青薄の葉に入りて、婆娑たる影の風に搖ぐも面白く、娘は

燈下に書さし展べて。お母さん、昨夜のアトを讀みませうかと、讀本のつゞきを讀み聞かすれば、お霜は夫と娘とを、等分に煽ぎながらも、見やる月は薄雲にかすれて、庭の隅には虫の聲の、都には程遠き秋の姿を、團扇の露草に見するも寂し。

（下）

零落し哀れを知る冬の雨の、よろづ振ひ落されたる林に入りて、人目も草も枯れ果てたる秩父の山里、淋しさはこゝぞと、訪ふは孤松の聲するばかり、人の心のさもしきは、雪に近き空の景色の、雲のいろにも知らるべく、儀兵衛親子の、京はかゝる他の身の、明日の時雨は我か袂よと、上野を出でゝ掛川より、

この村に遁れ來つ、それも繫がる淵明が、菊をつくる翁のあるを、少との所縁と尋ね來て、そこの山人に朽ち果てける。時雨は百の梢を洗ふて、峯は夜嵐の吹き荒むなる、麓は未だ夕陽の紅葉の、色あるを心頼み、筧は絶えせぬ山陰の清水の、夜も音をやすめぬを、せめては世を忘れぬ便りと、こゝに形ばかりなる竈を置きけるも哀れなり。儀兵衛は浮世の事の、心にかゝらぬなりたる、氣の緩みにや、どつと病の床に臥して、枕さへ上らぬ今日此頃、女房も娘も、そをいたはり侍けども、老病のじめり〳〵、霽るゝ間も無き檐の玉水の、次第に細うなりぬるぞ、心細けれ、お霜お清はその事を文しては、主なる人の家に知らせやれど、梨の礫の便すら無きのみか、やがて詫を云ふて呉れて、長くは鬼界に憂目は見せぬぞと、あれまでに誓ひし奥様の、こゝに移りてこのかたは、御狀の一ツも無きこそ怨みなれ、雁はかへり、鳥は塒に入りて、今日も夕暮の山里、お清の父の枕元に看護するばかり、淋しきは夕陽の山の彼方に隱れたるにても知られぬ。モシお父さん、御氣分は如何やと問へば、儀兵衛は病み耄けたる顔を擡げて、お清、案じるな、氣分は快いぞ、お母さんは何うした、東京へでも行きはせぬか、旦那様からは未だ御手紙が來ぬと、そのやうな事は無い筈の、屹度約されたアノ一條、若し私が萬一の事でもあらば、アトには娘、おうお

霜とたつた二人切り、何うして世に立たれやう、お霜は何うした、お母さんはと苦し氣に問ふを、女房は煎じた藥を茶碗に移して、貴夫もう煎藥は出來ましたから、一ト口呑んで下さいませ、根が風邪からの流行病、氣をお丈夫に持つて下されば、平癒も間近い、御心配なさらずと氣を沈着けて、旦那樣からお使の來るのを待つてゐて下さいませ、こゝは東京とは違つて、名醫もなく、妙藥はトント少ない、氣丈夫にしてゐて下されば、また東京まで出まして、大學の博士達にも見て貰らひませうと、氣を慰むる妻と娘、儀兵衛は斯うと覺悟しながらも、流石は恩愛の、兎角溢るゝは涙なり、かゝる中にも待たるゝは主人

の命、今日は使があるか、明日は文など來やうかと、待ち暮したる、日も一月あまり、思ふ心は矢竹に逸れども、手應へ無き玉の、外れたる的は脆くも碎けて、儀兵衛は五十八歳の、冬の日の短かくも散る寒椿、口には念佛の外に、旦那樣を思ひつゞけたる怨み死、折しも嵐に吹き折られたる冬嶺の松の杖、女房と娘とが手を取り交はしたる儘に、泣いて泣いて、また泣いて……○

＊　＊　＊　＊　＊　＊

眞綿で人を縊り殺しながら、その生前の德を頌ふて歩く僞善者の多い世は、一將功成つて、萬骨を裏み負ふせたる花の雲、日

暮里の燒場を直ぐ底に眺めながら、春は霞に鳥邊野の煙の裙を摘草と洒落ける女のあれば、それ其方の足元から、高揚りのする雲雀は花の上野山、醉ふては相手の鍬引く。三穗の谷中の天王寺に、喧嘩過ぎての坊さん達の、大施餓鬼あるぞ興なしや、見れば萬人の目のつき易き境内に、彰忠碑といふ大なる石を建てゝ、手代儀兵衛の精靈を嚴に鎮めまつり、しかも人寄せの樂隊賑やかに、廣目屋が紅白の旗花やかに飾りて、回向を世に見せしめの大風呂敷は、これぞ福山堂が慈善家として知られたる始めの催なるぞ、世は面白けれ。(卅二年八月新作)

こぼれ梅

(一)

元祿の名殘未だ失せやらで、人は蝶花のうつら〳〵と、華美のみを衒ふ寶曆の頃は、社祢の鯨自然と挫けて、骨の無き武士の多かる中に、これはまた女性の身として、一段に勇ましき二人の尼あり。

さりながらその名も伏屋の裏に、埋木の花咲く折もなく、世の秋を觀じてにや、時雨の落葉に身を任して、老いて俤の移るに、色も香も無けれども、墨染の腰衣に娑婆を包んで、門外不出、

他人に見らるゝを好まねば、盆に栽ゑし吉野櫻も年々に憔悴して、可惜盛りを垣間見られずして凋む憾みあるを、況てや女子に百年の春あるものゝあらで、一朝粉膩の粧ひ褪めては、花の木陰に駒繋ぐ人さへあるべからず。

この二人の尼の昔時の俤慕はしきは、今も眉目の間に殘る愛嬌なり。何時の頃より頭剃りこぼちて、斯かる土地に住み詫ぶるにや、訝かしき限りなりと、村内の不思議の一つに算へられけり。

名にしおふ隅田川白髭の社より、やゝ東の方に踏ん込みて、秋ならば白晝も虫の音を聞くべき閑靜なる處に、よしありげなる

庵あり。小柴垣を結ひめぐらし、門の柴戸半ば開きたり。一方は竹叢に隱れて自然の城郭をなし、一方は田の面を見渡して、清風絶ゆる間なく、垣の外には小川流れて、さや〳〵と水音の聞ゆるに、春は一枝の梅にも知られて、南は早く笑ひ初め、麗らかなる日暑は茅葺屋根の庇を辷りて、障子の骨四つ五つ目を照しぬ。只看れば容貌うるはしげなる尼の、庭前の井戸端に立出でゝ閼伽桶に水を汲み、早咲の梅花一枝手折りて、竹椽の下に立寄り。手向けの花を折りたれば、靈前に供へ給はずやと呼はれば、室内には念佛の聲頓に止みて。新らしき花を供じ給はんとな、命日の靈も嘸ぞ喜び給ふべし、いざ此方へ賜はれと云

ひつゝ、障子開けて立出で、靈前に花を供ずるは、こもまた優しき尼なりけり。手にかけし念珠に稱名の數とりながら、椽の端に直と座して。おう何時の間にか、美事に梅も咲きました な。御身も妾も斯かる身になりてよりは、花も月も慕はしき事のなく、たゞ〳〵一門の冥福を念ずるより外無ければ、春秋も知らぬ間に過ぎ。こゝに三昔しの今日は大石殿始め各々が果て給ひし日なり、松風吹いて寒月泉岳寺の墓前に冴ゆれど、妙海殿は菩提所を守護し給ひて、念佛修行に退轉なく、妾等も此處に庵を結びて、御奉公申し居れど、今もなほ慕はしきは父上の御事なり、時も如月の半ば過ぎなれば、俗にありし頃は、父上

と共に野に清香を趁ひける折なるに、斯くなりては蝶に心の移らふともなくて、徒らに餘年を貪ぼることの氣樂さよ。御身は回向仕果て給ひしか、妾の勤めは濟みたれば、代りてなし給はぬかと睦ましげに辭を交ふれば、庭前にありし尼はうち頷きて。さらば妾代りて回向いたすべし、いざ見たまへ、出家には要無き色香なれど、梅花の咲き揃ひたる抔、なか〳〵に興ある眺めなり、庭前に下立ちたまはずや、履物を參らせんとて、室内に入れば、尼は云ふが儘に庭前に下りて、其處此處とそゞろ歩く時、物申の聲して、門より入り來る男あり。年は五十路の坂を越えつらんか、相好に憎氣なく、腰には大小を佩したりけり。

尼慌たゞしく出でゝ、何處よりと問へば、男は慇懃に會釋して。我はお目付役を勤むる者なるが、弗と御門前を通りかゝりしに、折かけ垣の梅の花の、いとも美事に咲きみたれば、數奇の心に立寄りたり、煙草の火を惠み給はれと云ふに、尼は機嫌克氣に微笑みて。おう〳〵、ようこそ入らせられし、こなたへ掛けさせ給へ、妾等斯く住み詫びては、訪ふ人も無き柴の戸、雨に曝されたる椽なれど、塵は能く拭ひ置きたれば、腰を下させ給へと、うち解けて物云ふ程に、茶を汲み來りて客にすゝめ、常に客人とて無ければ、茶臺樣の器もなし、ゆるし給はれとて、差出す茶碗を客は手に取りながら、只見れば尼の掌に刀瘢とお

ぼしき痕あり。訝かしと思ひながら、その顏ちらと打瞻れば二人ともに賤しき人とも見えず、今もなほ優しき顏に、凛としたるところありて、人品の氣高きこと高家の姫君とも見擬ふべし、兎も角も若き時のさま、思ひやらるゝまゝに、客は茶に咽喉をうるほして。尼御前には、何日の頃より此處に住み給ふぞ、若かりし時は、お宮仕へなどし給へりしや、花も羞らふ御侠にて在せしならん、世の諺にも容顏美きは身を滅ぼす斧とか申す、お小姓の誰やらと、左樣した譯の事ありて、浮世の中の儘ならぬより、斯かる姿になり給へるにはあらぬか、懺悔には百の罪も消ゆると聞く、語り聞かし給はずやと問ひ出づれば、二人の

尼は涙ぐみて。いえ〳〵、さる浮事は身に覺えだに無けれども、この掌の傷は、つゝむ由ありて、年月他人に語る事もあらざりしが、仇々しき事にて、年老ひたる尼に濡衣着せ給ふことの、口惜しう思ひ侍れば、聊か身の上をお話し仕るべし、其處は端近なれば、此方に入らせ給へとて、客を一間に招じたり。

（二）

京の嵯峨野を零落し身の捨處と、荒家の裡に佗びしく暮す浪人躰の男あり。以前は播州赤穂の侍なりしも、主君淺野殿の雲隱れしたまひし後は、諸士其所此所に離散して、流浪の身の定め無き世に住み佗び、農と變じ商と化し、纔に口を糊する者の多

き中に、これはまた世渡りの事を知らぬ男にや、たゞ徒らに坐して喰うて、饑餓の來ん日を待つものゝ如し。よしや鷹は死すとも穂を摘まず、士は窮しても迷はぬものとは云へ、無爲に暮し居ては、米が天より降るものでなく、金銀は地から湧くものにあらず、働いて食ふにさへ、世辭辛き世の中なるに、浪人の分際でお米庫の二つ三つも所有て居るらしいアノ顏色は、あァ今の中に佩せる兩刀の鞘を外けて、槇木割にでもすればよいのにと、何日も近所に住む芋作が口の端にかゝりぬ。

小唄に名高き嵯峨や御室も、花の盛りの過ぎ去りては、夜は淋しき片山家、野面の秋の裏枯れつ、嵐山颪そく〳〵と、荒屋の

檐に音させて、窓に射し込む月影の、更けて一入冴えかへり、四隣物凄きまで寂寥せり。破れし垣根を結ひまはせし茅屋の裡には、病み衰へたる浪人が、布團の上に起き直りて、隙間洩る風に瞬く行燈の下に、愁然と腕組みしてうち凋れ、幾回か嘆息なして獨語やう。云ひ甲斐無き今の身上や、我も山岡覺兵衛とて、淺野の藩中にては、他人に知られし武士なりしが、かく零落れては存命ても詮なし。主君不慮の御最後ありし以來、仇吉良上野を覘けねらへども、時期到らねば手出しもならで、諸士其所此所に潜伏なし、敵方の隙を窺ふ折柄、如何せん我この病氣にかゝり、苦痛に窶れ貧に痩せ、氣力頓に衰へて、復讐なんどは思ひも寄らず、糊口する道さへ盡きし儘、餓ゑて死を待つ苦しさは、想ふに前世に犯せる罪の深くて、斯くは武士道に外るゝにや　聖賢の教にも君辱められ臣死するは理の當然なるに、病みて今迄生き延びしも、皆これ上野を討たんが爲なり、さればこそ一家中の面々も、あるに甲斐なき活計して、時節到來せんを待居らるゝに、我のみ武運に盡き果てゝ、坐して死を待つ無念さよ、さりながら大石殿が御前途見届け、その上にて割腹なさんと思ひ居たれば、今死なんも口惜し、別けて女房が心切を無にするは情無き業なり。我の病床に臥してより以來、朝夕の煎藥時刻を欠かせし事なく、馴れぬ世帶の繰廻しも、貧

をば我に知らさじと、辛苦に弱る心も掬まで、今更自害がなるものぞ。あァ辛らや男並の武士一人が、生死の境に身を置き兼るは、えゝッ殘念と、切齒をなして口惜がり、拳に落る涙をはらひて。それにしても山科の安否如何やら、大石殿は御無事なるか、都に遠き住居には風の便も聞くことならず、あァまた木枯の音がするに、女房は何故歸らぬかと、表の方をうち見遣りて、たゞ落涙に及びけり。

折から雨戸を押開けて。覺兵衛どの只今歸りました、途中で手間賃りましたので、何時までも御不自由をさせました、今日は天氣も快晴つたゆゑ、市の方も豪らう賑かで、それは〳〵面白

う御座いました、北野の天神さんへも參詣しましたら、恰度懇意な大原女に逢ひまして、變つた噂を聞いて來たが、ホンに人の心と云ふものは、明日は知れぬもので御座いますな、それはアノ山科に御閑居の大石殿がと、辭を切れば覺兵衛思はず膝を進め。おう、その大石殿が如何なされた。まァ斯うで御座います、アノ大石の御家老樣が、何うした風の吹き廻しか、後月の中旬から、祇園町の一力に流連の御全盛、幇間末社に取卷れて、揚屋酒に入浸り、太夫とやらの膝枕に、たわいも無く泥醉て御座るとか、あれでは知恩院の鐘の聲でも目が覺めまいと、見て來たやうな卷の取沙汰、妾も聞いて吃驚し、告げて呉れた女に

別れて、祇園詣りの序でがてら、近所へ行つて噂を聞けばまんざら嘘でも無いらしい、こりや斯うして居る場合ぢやないと、急いで戻つて參りましたが、息が斷れる路が遠い、ホンに隙が入りました、御壺梅は如何で御座います、藥も煎じて置いた筈、もう召上りましたかと、慰むれども覺兵衛は默然として腕を組み、唇嚙みゝめ居たりけり。

良あつて顔を擡げ。女房ども好う聞いて來て呉れた、その噂耳に入らずば、何日までも大石殿を忠義無二の武士と心得、復讐の事打任せ置くのであつたに、あア頼み難きは人の心ぢやなと、口惜氣に云ふ夫の顔を、女房つく〳〵打瞻るに、眼もうるみ血

色も悪しければ、若しも風邪など感かんかと、脱ぎある夜着をかけてやり、其身は携へ歸りたる包みを解き、中より地紙取出して、扇折をぞ始めける。

覺兵衛それにジッと目を注け。女房そりや何品ぢや。はい〳〵これは六角の扇屋から頼まれた手内職、貴夫へ申上げるのをッイ失念して居りました。ナニ手内職！えッ誰が許してその扇引請けた、涙人しても武士の女房、町人のする手内職して、夫の顔へ泥を塗つたな、そ其扇折氣に食はぬ、富を願はゞ再縁いたせ、この覺兵衛は暇を呉れる、出で失せよ、さア出て行かぬか、もう言譯は聞かぬ哩、我貧困に迫るといへど、甲冑一領傳來の

太刀一振は、死すとも側を離さぬ覺悟、さるを一時の貧に苦しみ、夫の許さぬ賤しき業して、病む身に藥餌を侑めんなぞとは、その志卑劣〳〵、えッ出て失せよと、驚き騷ぐ女房が、袖を掴んで戸外に突き出し、門かけて座に直り、涙に暮るゝぞ仔細あるべし。

（三）

後髪彈く三味線は祇園町、茶屋の仲居が取卷きに、大石良雄は本性を失ひて、腸を色酒に腐らし、海鼠のやうに泥醉れつゝ、幇間末社の手拍子に、乘つて胡蝶の夢心地、呂律まはらぬ舌頭に、池の汀の鶴龜はと、小謠唄ひ扇もて、調子とり〳〵後につく。女中はいづれ花の雲、霞たなびく振袖の、裏より匂ふ留木の薫に、良雄は一入興がりて。やァ嬋か〳〵、皆の者奥に行て遊んだがよい、もう踊は厭きて、三味線も嫌ひになつた、そう耳元でヂャン〳〵やられては、この耳が聾になる哩、馬鹿奴、岩戸神樂ぢやあるまいし、大抵にして酒も切り上げよ、燒石に水の比喩はあれど、大石に酒を爾う呑まされては堪らぬ、拙者は此處にゴロリと轉んで、ドリヤ一寐入いたすとしやう、蝶になれ〳〵莊子の夢が、アハヽヽヽヽ、女中共次へ立て只今これにて御寢なるぞと、他愛も無き肱枕は何事ぞ。身は一藩の大身として、其君辱められし上は、城を枕に討死をもすべきに、

生を偷み人目を忍びて、花に戯れ月に醉ひ、御馬前までと預りたる、命を酒と色とに奪はれ、家中の諸士と誓ひたる復讐の事抔は、今日になるまで鵜の毛程も口へ出さず、たま〳〵決意を問ふ者あれば、浮世は兎角色と酒ぢやと、大盃笠に高鼾。樽を枕の底ぬけ大盡、綽名を有喜様と呼ばれて、五條の橋より評判高し。

布團着て寝たる姿の圓山も、薄墨流す一刷毛の、闇に隱れて淡く濃く、鴨の水音聞えねど、こゝ一力の奥庭は、敷き詰めたる枯松葉に、飜れし程の露の玉、遣水清く魚躍りて、釣燈籠の向ふには、芭蕉の風に破れしあり。その椽端に大石は芋虫のやう

に轉寝せしが、四邊に人無きを窺ひ、岸破と起きて庭前じッと打眺むるに、今さし昇る廿日の月、竹の葉越にきら〳〵と、座敷の隅を照すに目をつけ、物をも云はず凋れかへり、落る涙を袖に拂ひて、ア、變らぬは月の影、變るは人の身の上やと。思はず獨語折から、栞戸の蔭に婦女の聲して。御家老様と微に呼ぶ、呼ばれて大石驚きながら、早速に身を反して寝轉び。コリヤ女中共は居らぬか、水を持てと呼ぶ聲は、未だ本性は違はざりけり。

呼べども囈語と聞流して、寄り來る者のあらざれば、良雄はその儘高鼾、頓ては前後も知らず眠りぬ。夜は次第に更くれども、

大石が四圍に人影だになく、宵の口には舞子お山と取巻きて、女護島の涅槃像の如く賑はひしも、眠れば色香忽ち散りて、蜂も宿らず鳥も栖まず、此室のみ寂々寥々たり。

表の方のざんざめく、豪遊を避けて裏座敷に、良雄はまたも起き直り、栞戸の方見瞻りながら、訝かしげに頭傾け。はて合點ゆかぬ、最前たしかに我を呼びしは婦女の聲、舞子お山が呼聲ならば、有喜樣とこそ云ふべきに、家老呼ばゝりは片腹痛し、聞說く仇上野方にては窃に忍びの者を入れて、味方の動靜を窺ひ居るとか、察する所最前の婦女の聲は、我心を試さんためのの、敵方の計略にてはあらざりしか、さるにても上野が心の穢

なさよと、冷笑ひつゝ油斷なく四方に眼を配り見れば、垣根の下に人影あり。良雄は早くも目を注ぎ、其處に居るのは誰ぢやと問ふ。彼方も後邊に意を配り、恐る〳〵近寄りて、御家老樣、御免なされて下さりませと、云へども此方は心を緩めず、刀の鯉口うち濕して、曲者ならば斫らんと詰め寄る、されど婦女は少しも臆せず、姿で御座いますと、燈籠の火前に顏さし向くるを、良雄はつく〳〵眺め了り。おう、御身は山岡覺兵衛殿が内方、何用あつて此席へは參られしぞ、他目については悪しければ、疾く〳〵立去給はれと、血相變へて云ひ出せり。婦女は潸々と泣き伏して。推參ながら此處まで忍んで參りしは、夫覺兵

衛が最期の所存を申上げんためと、聞くや良雄は仰天し。ナニ覺兵衛殿が最期の遺言とな、して〳〵様子は如何で御座ると、膝押進めて打問ふに、婦女は始終涙に暮れ、兎角の辭も出でざりき、良雄は急き込み。えッ未練なり、此處を何處と思召さるぞ、嘸どつては人目あり、事の大略搔摘んで物語るべし、早く〳〵と勵まされて、婦女は漸う涙をとゞめ。申すも悲しき事ながら、一通りお聞き下さいませ、夫覺兵衛こと本國を立退きし以來、嵯峨野の奥に侘しく暮らし居りし處、重き病氣に犯されて、足腰さへも自由ならず。無念の月日を送る中、北野で聞いた他人の噂に、赤穗の御家老大石殿は、祇園の揚屋に入浸りて、

主君の仇を討たうともせず、酒に魂打拔かるゝは、腰拔武士の手本ぢやと、取沙汰するを眞實と思ひ、聞いたる儘を夫に話せば、口惜涙に搔き暮れ給ひて、變り易き人の心やと、嗟嘆の餘り妾の不在を幸ひに、ツイ自害して果てました、其後肌の守を見れば、神佛の符璽樣の物もなく、たゞ君父讐共不戴天と書いたる遺書一通あり、これ御覽下され、懷劍までも持添へました、この上は夫の志遂げさせたければ、名を連判帳に記して給べ、婦女の淺い心から、御前樣を浮いたる方と思ひ込み、夫を先達てましたる罪を、お免しなされて下さいませと、地に額づきて泣き詫びける、良雄は嚴然と容を正し。あア覺兵衛殿

は不愍な最期を見給ひしよな、さりながら其志は屹度遂げさせやる程に、暫時山科に隠れ居たまへ、サア人目無き間に立去れと、云ひて嘯く月の前、水も眠りて音絶えつ、葉竹戦ぎて白露の落ちて閃く光あるのみ。

（四）

土一升に金一升を飾にかけて通したやら、萬家の瓦は砂子を撒きしに異ならず、草より出でゝ草に入りし、月は昔時の月影ながら、變り果たる武藏野の、腹皷打つ狸の名は、色里にのみ微に殘りて、簑輪の田甫に蛙の聲を漸と聞く、こゝ大江戸の賑はひは、またと類ひはあらざるべし。

別けて兩國橋の繁昌は、二六時中に三筋の鎗絶えたることなく、往ふさ來るさの人の足は、水ならねども波を打て、空に埃の雲を靡かせ、觀世物小屋の太皷の音は、雨ならざるに百雷の響を起す、少し距てゝこの雜沓を知らず顔なる、本所二ツ目の橋通りは、お屋敷の長屋檐を並べて、物見格子に御次男が、通る女性の品評め、續く土塀に樂書の、相合傘の戀知りか、見かけで云へば嚴格しき、五十餘りの老人が、未だ年若な娘をいたはり、急そ〳〵歩む行先は、吉良の屋敷を折曲りて、松井町なる煙草屋へ入りぬ。

老人は店の閾に腰うちかけ。十次郎殿よく御精が出ますな、拙

者は今日しも小春の空には珍らしい上天氣ゆゑ、娘を連れて墓参りに出かけました、貴殿は、お年もお若いのになか〳〵御奮發なさるゝことぢや、時に少と折入つて話したき一大事がある、一寸勝手へ參つてお耳を拜借いたさうといへば、主人は刻みかけし煙草の手を休め。ナニ一大事とな、山科より音信でもありましたか。シッ聲が高いワ、靜になされい、壁に耳あり、障子にも目がある世の中ぢや、謀計は密なるがよいとあれば、此處は端近にて他目がある、奥へ〳〵と語り合ひつゝ、娘を店にとり殘して、二人は一室へ入りにけり。

頓て老人は主人に斯くと耳打すれば、聞き了りて莞爾と笑ひ、

俄に丁と小膝を叩きて、大石殿出來されたり、小人は酒色を以て誑らかさゞれば、其隙に乘ずるの機無し、今や吉良上野介、日頃の警衛に倦みて、漸う準備を疎畧になし、剩へ好色の白痴とて、酒に溺れ本心を掻き亂して、美目好き侍女を召抱ふる由風聞す、その噂若し眞ならば、早く我方より手を廻して、御息女お松どのを屋敷に住み込ませ、討入の夜の案内をもなさしめ給へ、遲れなば他人の足跡や踏まん、さりながら最愛のお娘御を人質同樣になさるゝこと、何程か御心苦しかるべし、またお松どのが胸の中の切無きこと、餘所ながらお察し申すと、涙を隱して云ひ出れば、老人は頭をうち掉り。いや〳〵左樣は仰せ

られな、御身とても拙者とても主家沒落の其折から、一命は晩かれ早かれ無きものと覺悟の前、娘とてもその通り、御臺樣に刑き奉りて、松よ〳〵と御慈悲を下し賜はりし御恩報じに、御主の爲めになることなら、たとへ此身を粉に碎いても、親ながら氣味の好い程潔き決心を、大石殿に言ひ遣れば、そんなら直に傳手を求め、吉良の屋敷へ入込みて、始終の樣子を注進せよ、若し謀畧成就せば、四十七士の一人にも增したる程の忠義なりと、事を分けてのお勸めに、親子共々喜びて、この嬉しさを御身にも知らさうものと、態わざ參つた、十次郎殿喜んで下され、足はぬ娘が此親に優りし忠義を立てるかと、思へば何

やら鼻が高い、が、たッた一つ悲しいは、許嫁ある御身と娘と、未だ祝言の盃もさせで、王昭君が胡關の恨み、見す〳〵敵の邸内へ、手離して遣らねばならぬ武士の意氣地、あァ味氣無い身の上ぢやな、あれ〳〵店に居る娘の姿を御覽じろ、未だ十八の蕾の花、雨にもあてず嵐にも、吹かせずこれまで育てたる、親の苦勞は並大抵では御座らぬぞ、しかも十五の春の暮、お屋敷なる奥庭の、櫻も今を盛りぞと咲き揃ひたる折からとて、御臺樣には和歌の筵を開かせられ、御奉公申上ぐる女中衆も、數多自詠を參らせけるに、娘の歌はその中での秀逸とて、身に餘りたる御賞辭、其上御身と娶合せんと、勿躰ない御臺樣の御媒妁、

貝合せ好い一對の夫婦ぢやと、羨まる〳〵程肩身が廣くて、今日か明日かと祝言の御沙汰をのみ待ち居りしに、御家騒動ありてより、花に嵐は物憂き事の始めとなり、對の扇は離れ〳〵て、何處の風を便るやら、明日からの娘の身が不憐ぢや、えゝこの別れ、氣骨が折れて、宗右衛門年の五つも老つた樣なと、了得の勇士も恩愛の絆に愚痴を溢しけり。十次郎は默然として俯向きし顏を擡げ。先刻より段々の御話し、御心切あり難う存じまする、殊に御親子の御間柄、その御嘆きもさるとながら、武士の妻マツタ娘にして、敵の陣中に擒となり、忠孝二つを全うせしもの、和漢古今に其例あれば、御嘆きは御無用たるべし、拙者

には未だ許嫁のみの妻なれど、夫婦共々君に忠義を立るのは、身後の名譽この上やあるべき、さるをなどて悲しみ申さん、鶴龜〳〵と勇み立てば、老人原宗右衛門も今の言語に勵まされ。おう勇ましや聟殿、御身にさへ御異存無くば、我等親子の如何で躊躇いたすべき、娘來よ〳〵、十次郎どのより許が出でしぞこゝへ來て禮を云やれと呼び立つれば、娘は半ば羞らひつゝ、暖簾をくぐり父の傍、袴の裙に纏綿りて聲だに立てず辭儀する樣は秀丈伸びても小兒氣の、愛度無き風のしほらしさ、晴れの小袖に晴れやらぬ雲もあるかや裙摸樣、曙染にぼかせるは、娘が顏のホンノリと、これ一對の色合なるべし。

折から店へちらと來て、賴みませうと音信ふは、ッィ聞き馴れぬ女性の聲なり。

（五）

如何に忠義の爲めとは云へ、振分髪の頃よりして許嫁の、妻よ夫と晴れて呼ぶ日を樂しめば、花にも鳥にも目は移らず、命までもと意に誓ひし男に別れて、原宗右衛門の娘お琴は、王昭君の恨を呑みつゝ吉良の屋敷へ女中奉公に住み込めば、上野介固より好色無賴の痴漢とて、お琴が艶色にいかでか意馬を狂はさゞらむ、狂ひ初めては繫ぎ止むべき手綱をだに持たぬ身の、忽ち魔界に脚を辷らして、驕奢放逸酒を被むり肉を貪り、その上

口入の烏婆を說き伏せて、お琴を掌中の珠玉にせんと謀ること、斑猫の毒あるを知らずして、新菊の香に醉ふ熊蜂の危きが如し、吉良上野が警衛の尻押には、當時十八國主の隨一と聞えたる上杉彈正大弼殿の見張ありて、蟻一疋も無斷に御門は通さぬ掟なりしが、敵も味方も睨み合の合戰には、双方氣拔して、一年半年と空しく過ぐれば、何日しか互に弦を外し楯を伏せて、安眠を貪るが例なり。

上野介もそれに眞似てか、今日の今まで手出しだにせぬ赤穗の諸士を臆病と嘲り、骨無き海月と冷笑ひて、齒牙にだにかけぬやうになれば、風無き舟に帆を上ぐるに及ばぬ道理と、俄に夜

徹しの張番を止めて、たゞ老耄たる仲間二人に夜を守らせ、居眠する間々に拍子木の音かち〳〵かゝッと響かせり。

總じて高家衆の驕傲なるは、言語に絶えたる程なりしが、別けて吉良家の權勢の熾なるは、空飛ぶ鳥も落なんばかりの有樣にて、先づ大名と婚嫁を結び、分に超えたる奢を極めて、下に對することゝ、塵芥の如し。斯かれば小大名を見ることは、恰度狆狗なんどを待遇ふやうになしけるにぞ、血性男子の如何で腹を立てざらん、淺野が一太刀怨みを報ひしも、所以なきわざにはあらずかし。

やがて死ぬ氣色も見えず秋の蟬、夕陽を射くる小座敷の、障子

にちらと映し繪の、本影を眺めて茫然と過去未來の事を考へつゝ、襟に頭の半ばを埋めて、牽牛花の露欲しげなる風情するお琴、花の姿も想ひに痩せて、綾羅の衣も重きを嘲つ。やゝあつて顔を擡げ、ふりかゝる鬢の後れ毛搔き上げては、またも思ひに塞がる一間、明けて訪ひ來る朋輩さへ無きにぞ、いとゞ心も結ぼれ勝、たゞ降るにつけ照るにつけ、忘れかぬるは夫の安否、父御の消息。渡りに舟もあらぬ身は、風の便りもあらずして、蘇武が匈奴の幽囚も、斯くまで辛らくはあらざりけむ、あァ味氣なき身の上やと、袖に時雨の乾く間もなし。

折から雛といふ小間使の小娘、閾の外より聲かけて、お琴さま、

今中の間に煙草屋が來て居りまするが、貴女も一瞬吸つけ煙草召し上がらぬか、その商人の男振は、役者で云へば辰之助ぢやと皆の衆が大騒ぎで御座んすと告ぐるにお琴はうち驚き。もしやそれかと椽側傳ひ、窃と近寄り障子の穴からさし覗けば、擬ふ形無き十次郎なるにぞ、飛び立つばかり悦こびしが、顔見て嬉しい素振をば、朋輩衆に悟られて、粋た中ぢやと氣つかれたら、それぞ計畫の破るゝ源、左すれば是まで盡したる、忠義も水の泡となりなん。逢はぬ昔時と諦めて、お傍に居ぬこそ互の爲めなれ。左樣ぢやゝゝと獨語て、己が部屋に立戻らうんとなしけれど、未練に弱き後ろ髪、引かれてまたも寄り來るを、ッッと堪へて我慢して、居間に歸るや溜め涙、袖に降らして忍び泣く。

居間なる床に懸けたる軸は、まかも深雪に常盤の圖、泣き叫ぶ兒をいたはりて、頼む木蔭の市女笠、九郎に風を中てさせまじと、つくる袖垣、關の戸を叩きかねたる落人も、時節を待てば梅の花、咲いて其名を世に殘す。妾は常盤に及ばねど、時機を待つ身は一つなり、悲しき目にも遇ふてこそ、男子の爲し得ぬ効力も立つれと、氣を取直し、流石に武士の娘とて、女々敷き舉動あらざりけり。

さるにても逢ふて知らする事のあり、聞きたきこともあるもの

を、一目なりとも顔見たやと、またも未練に掻き亂す、心の絲の結ぼれは我と解く由あらざりしが。漸うにして容を改め、涙を衣もて拭ひ了り。ホンに未練に泣いて居た、こんなに氣が弱くては、所詮御臺樣に忠義とやらを立てられまい、かゝる苦勞をする事も妾ばかりの上ぢやなし、何日ぞや十次郎樣のお宅で逢うた山岡の御内儀も、遙々東へ下られて、此後傳手もある折には、當御屋敷に御奉公遊ばされて、妾と一緒に仇を討たする手筈を内通なさるゝとか、こんな大事な役目を帶びて、このお屋敷に入込みし妾なるに、何故このやうに氣弱になつたかと、胸に問ふては自ら勵む勇ましさ。俄に何をか思ひ出けん。墨磨

り流し紙を展べ、さら〳〵書きて卷き封じ、また中の間に行き見れば、十次郎は今や女中に會釋して、門より歸へる際なれば、お琴はこれぞ屈竟と、表の長屋に密と入りて、物見格子の障子引明るに、天の與へか見る人無ければ、早速に釵抜き取りて、認め置きたる書狀を結ひ付け、通りかゝる十次郎が足下に、ヒラリとばかり投げ出すを、彼方は早くも拾ひ上げ、格子の窓を見遣るを名殘、閉づる障子に急ぐ足音、右と左に別れても、思ひの種は盡きざりけり。

（六）

容目好き花の盛りをのみ愛づるものかは、婦人は若葉の三十一

二、年數から云へば、色も香も溢るゝ程は無き頃なれど、それまでには見えぬ若化粧の一得には、剃りたる眉の痕匂やかに、染めし齒並の美くしきにも、人の目を引く山岡が女房お粂、去ぬる頃大石が計略にて東に下り、本所松井町なる矢間が家に宿かりて、十次郎が姉なりと世間へは吹聽し、吉良の屋敷に出入する商人などを頼みては、只管御奉公に上らんものと、いろ〳〵心を碎きたる甲斐ありて、翌年如月の始め、諸鳥梢に順れ睦む時、上野介が舘に入込むことを得たり。

されども原宗右衛門が娘のお琴は奥勤めにして、其身は臺所廻りに働けば、十日餘は互に相見ることもならで、お琴はまたお

粂がこの屋敷に居るといふことをさへ知らずに、また四五日は過ぎにけり。

今日は初午祭の當日なるに、空は清く晴れ渡りて一點の雲も無く、春風の心地好く吹き度るに、何所よりか梅の香の音信れて、夕暮よりは月のあるを一入に、千金の儲け物と、屋敷の隅の稲荷社には、參詣の老若引きも切らず。漸う童の凧を收むる刻ともなれば、いづれも夕餐に忙しき折とて、人の足も稍々閑なるを見計らひ、吉良家の主人上野介は、黒羽二重五所紋の羽織を着流し、同じく黒の二枚襲ねを裾長にひらめかして、巾廣博多の帶に脇差のみを佩き、庭木履輕らかに踏み鳴らして、からこ

ろ〳〵と散歩く後の方に、たゞ一人附添ふは女中のお琴なり。矢飛白のお召に友染縮緬の下着を襲ね、緋金襴の帶を竪やの字に結びたり。鬱金縮緬の帶上げを垂れたるは、蝶も菜の花に擬ひやしぬらん、眞紅の襦袢を庭中の黃鸝も花とや眺めん。髮を中高島田に結ひて、銀平打の釵を挿し、手には紫の服紗もて主人の佩刀を捧げ持ちたり。肌の色は白くして雪に優り、容目美しくて天女の姿やこれなるべし。上野介滿面喜悅の色を現はして、折ふし後邊を顧みながら。琴や何んと心地好きことではないが、斯く並びある行燈に火を照しなばまた何程か美しからう、夜に入りなば女中共大勢と一緒に遊ばうではないかと云

へば、お琴は莞爾と微笑みて。ホンに御意の通りに御座います、今日一日の面白さに、壽命の百年も生延びたさうなと、お奥でお噂を申して居りました、永の月日御奉公をいたして居りますと、中にも、斯した事のありますのは、何よりお嬉う存じますと、羞らふ如く打俯けば、上野介は一入笑壺に入り。アハ、、、、、、氣の輕い事を申す女ぢや、まこと奉公は氣の詰まるものであらうな、殊さら其方位な年頃では屋敷勤めは窮屈なものぢやが、この上野介が不愍をかけて遣はせば、泣かずに辛抱するがよいぞ、そして年齒は。はい十八歲の遲そ生れで御座います。なに十八ぢやと、屋敷へ來ずば未だ苦勞だに知らぬ蕾が、多く

の人に交はりて、雨風雪に苦しめらるゝは、さて〳〵惜しきものではあると、口の中にて獨語時、後邊にどや〳〵人の足、何事ならんと振顧れば、お末を勤むる女中輩の、賄方用人に眼隱しかけて、鬼事をこそするなりけり。

今日は夜更けて就寢るまで、遊戯を搆ひ無しとの事より、家來は轍鮒の水に入り、籠の鳥の雲井に啼く思ひして、今鬼事の眞ッ最中ゆゑ、御前も構はず遁げ隱る、彼方の木蔭に潜みては、飼犬に裙を嚙まれ、此方の垣根をぐる〳〵廻りて、茨に袖をからまるもあり。鬼さん此方ぢや手の鳴る方へと、囃子立てゝは吶と笑ふ。その一群の中よりして、遁ぐるに見せかけお琴が傍へ

寄り添ふ者あり。お琴は訝かりその顏眺めて、言語やかけんとしたれども、上野介に怪しまれては一大事と、眼もて知らせば彼方は察し、此所を離れて奥庭に又も千鳥の立つ如く、パッと散りては直に寄り、笑ひ興じて樂む中に、日はハヤ嘯れて月出でたり。

上野介は居間に入り、お琴は用事も果てたれば、部屋に戻りて着替をなし、庭口より忍び出でゝ、以前の處に至り見れば、樹の間〳〵に行燈照して、火影を亂す人も無し。月はあれども葉隱れの、闇こそ好けれと忍び來る女中は山岡お粂なり。待ち設けたるお琴にも、敵地の事とて油斷せず、微けき光明を便りと

して、來る人の顔篤と見究め。お前はお粂樣ぢやないか。おうお前はお琴さま、御無事で何よりお嬉しう御座います。妾も貴女に逢ふたので、何んなに氣强うなつたか知れぬ、あァこれまでの苦勞心配で、これこのやうに痩せました。ホンに大分肉が落たさうな。そして當家の用心は何うで御座います、未だ仇討の時節は來ぬかと、十次郎樣が一方ならぬ御心痛、山科からも使者が來て、屋敷の樣子は如何ぢやと度々の中越し、それで妾も此月始め漸う此家に入込みました、これからは二人心を協せ、屹度吉左右知らして遣りましよ、お心强うお思召せと、慰め遣ればお琴は喜び。それで妾も安堵しました、そして父さんは御

壯健でか。おう〳〵御父樣も御丈夫、十次郎樣にもお變り無うて、折ふしに貴女の噂話、貴女の方でも夢見の好い夜は、屹度お噂の出た日ぢやぞえ。あらまたその樣な事云ふて、妾を嬉しがらせると喜び涙に暮れにけり。

（七）

龍も時機に遇はざるときは、空しく淵に潛むことあり、されども一旦雲を獲るの曉には、また池中のものにはあらざるべし、原宗右衛門の娘お琴は、吉良の屋敷に入込みて、敵の動靜を探るといへども、花の姿の十六七、未だ年若き身の上にては、憂き事前に重なりて、味方に知らする音信さへ、心の儘にならざ

れば、泣いて袂に時雨して、秋も過ぎ冬も暮れ、翌年二月の末つかた、梅咲いて花の噂のとりどりや、鳥も囀づる頃なりけん、待つ甲斐あつて山岡の女房お粂にめぐり逢ひ、それよりして龍の翼を得し如く、喜び勇むも道理なれ。

過ぎ行く月日の半年あまり、今年も早く秋風立ちて、巷に賣るや虫の聲、風鈴の音の靜けさにも、日和の好きを知られけり。日は嘯れて七日の月は木立に隱れ、庭は一面一刷毛の隈を描いた墨繪の松、釣り燈籠の火影も暗く、築山の彼方に葉竹戰ぎて、雨降るかとも疑はれ、泉水の響は琴の音を彈でゝ、寂として夢を喚ぶなる淋しさに、お琴は今宵は非番なれば、己が部屋へと

引下りて、行燈の下に書さし展べ、結ぼれし氣を慰むるに、晝の疲勞にや、机に臂をもたせし儘、我とも知らず居眠りけり。訝かしや今が今まで、我が部屋なりと思ひ居たるに、これは如何、いと廣漠なる原野に出でたり。時は秋の最中なれば、萩桔梗こそ盛りなるべきに、左は無くて山櫻の時を得顏に咲き誇るあり、怪しみながらも進み行けば、諸鳥梢に囀りて、霞の幕を春の山、花燃ゆるかと思ふばかりの麓の方に、小袖幕を打めぐらして、花見の群ぞ居たりける。朗々と吹きすさむ笛の音は、晴れたる空に響き渡りて、その心地好さ、言語には得も盡されず、お琴も現心になりて、笛の音の聞ゆる方に行かんとすれ

ば、側に咲ける吉野櫻の木蔭にて、駒いと高く嘶きけり、恐やと驚き走せ行きつゝ、なほ振顧りて彼方を見れば、月にも擬ふ美少年の、銀鞭を腰に挿みて、根方に倚りて立たりけり。熟々見れば矢間なり。お琴は喜び十次郎様と呼ばはりつゝ、走り寄らんと近づけば、矢間は手をもて押止め。粗忽ばし給ふな、今日は殿の御供いたし、櫻狩に參りしなり、如何許嫁の中とは云へ、餘りといへば見苦しきその振舞、人目が御座る、世間があるぞ、えッお扣へなされと叱られて、お琴は取付く島もなく、泣くに泣かれず佇立めば、矢間は繋げる手綱を解き、駒を牽き立て行かんとするに、お琴は悲しさ口惜しさ、暫時待つてと云

ひつゝも、十次郎が袖を抑へて泣き沈み、逢ひたかりしと喞ちけり。

矢間は嚴と容を改め。そは未練なり、不覺なり、御身も武士の妻女ぢや無いか、一旦心を決せし上、敵の陣中に忍び入りては、一命は元より君への捧げ物、さるを暫時の間我に逢ふ事ならぬとて、陣屋を扳け出で來りしこと、云ひ甲斐なき不所存なり、我は斯かる女々敷き妻女は持たぬ筈、然るを夫と呼び給ふは、人違ひにて侍らずや、他所をお尋ねあるべしと、袖打拂ひ塵拂ひ、駒にヒラリと乘るよと見る間に、一鞭あてゝ雲霞、跡をも見ずに駈けて行く。お琴は尚も追はんとすれば、思ひもかけぬ

横合より上野介ヌツクと立出で。お琴〳〵と呼び立つる、お附の女中も一同に。アレ召しますと云ふ聲に、弗と眼を覺ませば夢なりけり。月落んとして枯柳の枝に懸り、孤雁一聲雲重くして、風習々と衣を吹きぬ。覺めたる後も呆然と、お琴は夢を判じかね、たゞ有耶無耶の境に迷ひて、兎角に出づるは涙なり。かゝる處へ椽側の障子を開けて入り來しは、山岡の女房お糸なり。持てる雪洞の火を消して傍に置き、お琴樣何う遊ばしましたゝ、また父御の事を御案じなされてか、泣いて居る塲合では御座いませぬぞ、大石樣の方にては、諸事萬端準備も出來、今かゝと討入の日をのみ待つて居給ふのに、未だ書きかけた繪圖

面も出來上らず、思はしい音信もせねば、何のやうに待ち詫びておいで遊ばすやら、あァ心配ぢや心許なや、それではお琴樣、今宵は妾も手傳ふ程に、何日ぞやの屋敷の繪圖を、書き上げて仕舞はうでは御座りませぬか、遲れて敵に知られては一大事ぢやと、氣强く云はれて、お琴も勇み。そんならこれを書きましよと、手文庫の内搔探りて、討入りの夜に用ふべき、吉良の屋敷の繪圖面を、一心籠めて書きはじめぬ。

夜は更けて木立を度る風凄く、水の音さへ微かにて、戸外は闇夜、室内もまた靜まりかへりて人語無く、漏々と響く時辰儀の音のみ、廊下に聞えて物淋し。お琴は一生懸命に墨摺り流して

繪圖を書けば、お粂は眼を四方に配りて、他人や來ると見てあるに、天の加護にや、知る者絶えてあらざるにぞ、二人は大に打喜び、首尾克く繪圖を書き了り、翌日密に矢間方に送り屆けて、復讐の日をのみ、今日か明日かと待居たり。

（八）

時機は再び獲べからず、傳へ聞く吉良上野介は去年來の警備に倦みて、今は殆んど我に敵あるを思はず、色に耽り酒に浮かれて、露ほども武邊に心を置かぬのみか、四季折々の物見遊山に、分外の華美を盡くして、小袖幕の内には美人の粋を萃め、驪山宮の俤を移して、肉羹の山に白魚の波を湛へ、宛らの酒池肉

林を見るやうなれば、亡國の兆は眼前に迫りたり。此時に討たずして、また何の時にか討つべきやと、堀部彌兵衛を始めとして、一味の面々心を協せ、聲を揃へて申しければ、大石内藏助も今は默止難しとて、窃に城州山科の家を遁れつ、暫時踪跡を晦して、人知れず江戸に下り、討入の夜の方畧などに思慮を凝らして居たりけり。

十二月十四日は朝來の凍雲空に凝りて、一天布もて覆ふが如し。高輪泉岳寺は丘に據りて建てたる精舍にして、門前には渺茫たる滄瀛を湛へ、漁舟波に隱れて白鷗汀に飛ぶの景色を貪り、境内には老杉古松森々として、風常に颯々たり。春は御殿山の夕

暮に、花を散らす鐘を撞きて、遊人に名殘の句を吐かせ、秋は袖ケ浦の月に、看經の聲を送りて、見る人の胸を爽かにすれど、冬枯れの朝、野分の夕、驛鈴の音遠く微に聞えて、物淋しさもまた一入なり。

赤穗の城主淺野内匠頭の墓前は、流石に荒れしといふにはあらねど、一家中離散の後は、構へて手入を怠り勝になしければ、荆草間々、塚の邊に茂りて、霜夜の月を弄び、杉の木立の陰々として、晝と雖どもなほ暗かり。況てや此頃の寒空に霜重くして、墓石も凍り崩れなんとする中とて、香花絶えて人の訪ふ者なく、卵塔の傍には、霜柱の踏めば氷を碎く音あり。

斯かる處へ何人とも知れぬ旅打扮の男三人、彼方此方の石塔の間を拔けて來りつ、齊しく内匠頭の墓の邊に立止まり、後を顧み前程を眺め、見る人無きやを確めたる上、三人顔を見合せて、莞爾と笑みを傾けたり、中なる老人聲を潜め。大石殿矢間殿見る人が無くて仕合であつた、各々少しも早く亡君の御墓前に回向申さうでは御座らぬか、我々本國を立離れてよりは、態と參詣の足を遠ざけ、御墓前を荒れに荒らしたる今迄の不忠は、今日ぞお詫びを致しませう、あア〳〵老の身の、亡君の御墓を見るにつけても、先立ものは涙ばかり、愚痴と笑ふて下さるなと、合羽の袖に眼を拭ひ、愁然として差扣ふれば、内藏助もう

ち凋れ。まことと原殿の云はるゝ通り、四十七士の同志ありとはいふものゝ、敵に内意を悟られては一大事と思ふがゆゑに、心ならず御墓参も致さず、荒れたる狀を見るにつけ、亡君が御無念の程思ひ遣らるゝ、えッ、已れ憎くき吉良上野、多年の遺恨今宵ぞ思ひ知らして遣らむ、地下に在ます先君にも吉良の屋敷に照臨ましゝ、孰れもが手練の程、枉げて御覽じたび給へ、今日の今まで家中の諸士が腑甲斐無さを見給ひては、嘸ぞ切齒くや恩しけん、復讐延引いたしたる不忠の罪は、明朝一同御墓参の上幾重にも御詫び仕るべしと、涙を流し聲を上げ、拳を握りて振ひ泣く、十次郎も涙ながらに、閼伽桶の水を墓前に供へ、

合掌禮拜したりけり。

時刻を遷して人目に立たば一大事と、宗右衛門が云ふをそれぞと、各々別れ〳〵となり、家に歸りて日の暮るゝをぞ待詫びぬ。

冬の日の暮れやすく、はや黄昏となりけるに、朝より催したる凍雲、漸う暖氣を含みて、誰彼れ別かぬ頃より、一天霏々たる雪とはなれり、大石内藏助は討入の準備全く整ひたれば、今や矢間十次郎が來たるかと、隱れ家の庭前を眺めやりて、松が枝の白うなるを、心地快氣に賞めぬ。

内藏助は色青白き方にて、脊丈は中人よりは小し、柔和温順にして常に言語少く、莞爾と愛嬌多き人なるに、今宵は復讐の夜

の事とて、滿身の勇氣、滿面の喜色、溢るゝばかりなりければ、威風凛然と四邊を拂へり。

降る雪を合羽に凌ぎて、息急き駈け來るは矢間十次郎なり。冠れる笠を門口に捨て、出口の椽に腰うち掛くれば、內藏助は辭をかけ。屋敷の樣子は如何なりやと問ふ。首尾は上首尾、今宵は雪見の宴ありとて、來客も數多あれば、出入の人に立交りて、屋敷に忍び入るべしとの愚妻が知らせ、天の與へ賜ふの時機、はや〳〵屋敷に忍び込まんと、勇んで云ふを內藏助は制し止め。否々、急ては事を仕損ずる、計畧は密なるをよしと聞く、さらば此趣を原宗右衛門殿へ知らせ遣らんと、立上る袖を抑へ、

その御手配は御無用なり、拙者此方へ來る途にて、宗右衛門殿に逢ひたれば、始終の樣子を打合せ、折好き場合に合圖をなさんと約したり、御案じあるな、サア〳〵早く屋敷に忍び入らんものと、鵞毛に似たる雪搔き分け、鶴氅とも見る合羽の袖を掃ひもせず、吉良の屋敷へ急ぎ行きぬ。

（九）

武士も町人も太平の御代に馴れて、泥醉漢さへ滅多には鞘を外さぬ靜けさより、自から治に居て亂をうち忘れ、お侍が咽喉の美いのを自慢に、隆達節唄ふ元祿の末年は、馬も肥えて、脾肉のみ日毎に太る折からに、古今未曾有の一樁事こそ湧き出でた

れ。

元禄十五年十二月十四日は風神の怒號烈しくて、朝より飛雪紛々と舞ひ下り、飛んで花の如く庭を粧ひ、積りては萬瓦を裹んで、巷は布を敷けるが如し。

復讐の日を今か〳〵と待詫びたる四十七士、今日こそ多年の本望を成就して、疇昔までは無爲に暮らす腰拔け武士と、嘲けりし者の眼を驚かし吳れんずものをと、滿身の勇氣、滿腔の熱血、撲たば迸しるべく思はれたり。

多年の辛苦その甲斐ありて、赤穗の義士は首尾克主君の仇を討ちぬ、その討入の夜の摸樣は如何なりしやと、當時の人の種々

に噂取沙汰しけり。

大石良雄は十四日の夕暮より矢間十次郎と共に、吉良家の裏門より忍び入らんものをと、同志の諸士に別れて、降り頻る雪を物ともせず、一目散に駈けつけれど、未だ屋敷にては、お琴お粂の首尾整はざるにや、門扉堅く鎖して、吹雪に石橋は埋まりあり。

兩人顏を見合せて、邸内の準備は未だ整はぬなと、語らひつゝも往來の人に眼を注ぎて、更に油斷はせざりけり。

大事はこの一時の瀨戸なるぞ、千丈の堤も蟻の穴から洩るゝとか。十次郎殿前後に氣を注けられよと、良雄が云ふに打頷づき。

心得ました、が、邸内の様子は如何やら、なんと氣の揉めることとでは御坐らぬか。そは拙者とても同感なれど。急いては事の仕損じあり、其内にはお琴殿が門の戸開くるは必定なれば、暫時辛抱あれかしと、空をば佶と打見やりぬ。

夜に入りて月のあるべき宵なるを、雪は巴と降り頻りて、小歌みだに無き折からの、人は鶴氅を着て行くもあれど、みな白妙の衣の袖、濡れて鷺にも似たりけり。

待つこと良久しかりしが、門の開くべき氣色も見えぬに、兩人心は穩かならず、お琴お粂の身の上に若し變事抔ありはせぬか萬が一怪しと認められしとて、一命を捨てゝ勤むる兩人なれば、

復讐の事は死ぬとも口外いたすまじ、さアらば如何にせし事ぞと、苦慮一方ならざりき。

邸内にはお琴の物思ひ、今宵を瀬戸の大切な御用を、若し失策などあつたなら、妾は何うして好いものかと、末を案じて兎や角と隙のみ覗ふ其間に、日はハヤ暮れて奥の間は、今宵ぞ雪見の御酒宴と、銚子膳椀持ち運ぶ、足に隙無き腰元の身の上。

月無き夜を幸ひと、お琴は裏口から窃と忍び出で、雪を搔き分け踏み敷きて、漸う門へ辿り着き、弗と息して戸を開けば、此方は待ちに待ちたれば。其方やお琴かと矢間の聲、斯くとは知れど不意に驚き。えッ、十次郎様かと呼び返し、雪明りに眼を

配りて、前後をジッと透し見つ。おう、ホンに逢ひたう御坐んしたと、戀に大事を打忘れて、寄らんとするを良雄は遮り。大事の前の小事を慎め、佇立みて他目につかば事は六ケ敷、いざ門内へと、云ひつゝ闇にも意を配りて、そろ〳〵と奥に踏ん込み、腰元部屋なる椽の下に合羽着た儘忍び入りて、夜の更くるをば待ち居たり。

上野介が居間の方にては、酒宴今を盛りと覺しく、歌吹の音の手にとる如く聞ゆれば、身は椽の下に置きながらも、胸は煮え立つ憤怒の炎に憎つくき上野介が擧動かな、主君長矩公は汝の爲めに非業の御最期遂げ給ひしに、世間の手前も憚からず、歌

舞遊興は何事ぞや、今死ぬる身も知らずして、酒や女色に現無きは、最期を早むる自業ぞと、云ひ合はさねど心は一つ、顔を寄せては共々に、口惜涙に袖を絞ぼりぬ。

神ならぬ身の斯かる事とは知るべきや、上野介は雪見の酒に盛り潰され、座に居るさへも太儀の身をやつと起して椽側傳ひ、女中の肩に抱へられ、ひよろ〳〵と行く千鳥足に、敷きたる毛氈に波をよらして、香燻き籠むる部屋の内に、ごろりとばかり寐轉びては水を持てとぞ叫びけり。

お粂はこれには頓着せず、他人の見ぬ間に握飯を製へて、手早く竹皮包みになし、闇を傳ひて裏口の、部屋の戸口に立寄りて

は、前後を睨みて安堵なし、履脱石に下立て、靜に呼べば微に聲あり、妾はお糸で御坐います、何程かお餓じからう、お腹塞ぎにこれなと喰べて待ち給へ、上野殿は今がお休み、夜更を待つて呼ぶ程に、暫時辛抱遊ばせと云ひて、早くも身を隱しぬ。良雄は涙を流しつゝ。あァ是非も無き身の上や、我も一國の家老とて、千萬人の上に立つべき身を持ちながら、一つ二つの握飯に、餓をば凌ぐ境界に陷りたるかと、涙に咽ぶも道理なり。

（十）

夜の更くるまゝに雪は小歇みして、朧ながらに十四日の月の、庭前の木立を照り反して、油繪めける隈取の泉水築山の影を黑

むれば、風は篁を吹き騷がして、さら〳〵と池に音するは、積れる白きものゝ、搖はれ飛ぶなり、大石内藏之助と矢間十次郎は宵の中より、吉良家の奥庭に忍び込みて、更ぐる夜を鐘の音に待詫びつゝ、待てば嬉しきこと、悲しきこと、腹立たしきこと、嘆かはしきこと、口惜しきこと抔、胸に聚り來て、涙の露に袖を濕し、齒を嚙ひ切りて無念がるに、勇氣日頃に百倍して、腕の我から鳴るを覺えず、矢間は殊に血氣の壯漢、奥の間より洩れ聞ゆる上野介が、酒にたわい無き聲を聞きつけては、さても無念、もう忍耐がなりませぬ、奥に駈け込み、敵の細首たゞ一ト討ちにと、鯉口くつろげ椽側へ足踏みかくるを、思慮

深き大石は刀の鐺を緊乎と摑み。逸り給ふな、こゝ一時は生死のかね合、多年の辛苦を水に流すも、マッタ本望成就するも、今眼前に迫りたり、分別はこの大石が胸にあれば、騒いで人目にかゝり給ふな、潜むは伸ぶる裏なるぞ、表に同士はもう集まりたるか、えゝッ冬の夜の長さ、氣を揉ませることであると、制し止められ詮術無く。また靜まりて時を移せば、丑滿の鐘陰に響きて、其聲雪に凍るにや、天地閑然、草木も眠るかと思はれたり。

あれ聞ゆるは丑滿の鐘、時分は好きぞ、十次郎殿用意召されと、雨戸の傍に立寄れば、冴えざるまでの月影も、二人の姿を地に

映しぬ。見る人無きかと四邊を睨めば、笠松の影、枯柳の影、さては燈籠の影までを、敵の忍び寄るにやと、身構へすれど、人の氣色も無きこそ道理、果は兩人から〳〵と笑ひながら、非情の草木にも心を置かる、あァ忍ぶ身の便なさよと、云ひつゝ立てば、雨戸の口より女の顔の月に白くぞ見えたりける。

それとは早くも目を注けながら、此方はなほも油斷せず、敵にやあると月光に透して、女の顔を佶と見れば、山岡が女房お粂なり。やッお粂どの、首尾は如何と詰め寄れば、サァ寢所に案内致ましよと、大石が手を執るに、矢間も後より摺足して、椽側傳ひに寢所に進み、それ此處なりと云ふがまゝ、障子の隙よ

りさし覗く内藏之助、つく〳〵隅々見撿むれど、それぞと思ふ人も居ず、訝かりながら室内に入れば、床は空しき總枕、たゞ燻き籠めたる香の煙の、枕屏風を黑むるのみ。

しなしたり、敵は早くも遁失せしか、えッ殘念と齒切をなし、腕を撫りて口惜がるに、お粂も驚き呆れしが、弗と案じつく隱れの小座敷、アノ邪智深い上野ゆゑ、こゝを寢所と見せかけて、彼方に臥すに極ッたりと、大石の手を執らんとして、提げたる刀の刃を無手と攫めど、慌てし折とて氣もつかず、その儘暗き廊下を行けば、椽側なる鐵行燈は風に消えて、烏羽玉の闇に歩みを運ばすに、地獄の路を辿るが如く、冥々としてまた冥々た

り、廊下を出れば中庭あり、閉め殘したる雨戸の隙より、向ふの小座敷を眺むれば、伊達に造れる圓窓から、行燈の火影洩れ射して、袖垣の雪を照らしぬ。彼方にこそと勇み立ち、障子の外に立寄りて、聽耳立つれば鼾の聲あり、天の與へと喜びながらも、なほよく室内を覗き込めば、枕元の燈火は寢顏を照して、眼鼻立の具合なんど、手にとり見るより確なるにぞ、内藏之助はうち喜び、それと下知すれば、障子を蹴はなし駈け入る矢間、其身も直と進み寄る物音に、忽然と眼を覺したる上野は、枕刀を手早く拔くを、鐵扇もて丁と落して。如何上野介、我等を何と心得るぞ、陰暗き事は汝が肚に覺えあらん、去ぬる頃、汝

が爲に怨恨を呑んで、御最期ありし淺野内匠頭が家臣四十餘人、今日たゞ今主君の讐を報ゆるぞ、觀念せよと呼ばゝりつ、立たんとする上野の腰の番ひを、力足もて蹴つくれば、よろめきながら倒るゝ間に、十次郎は椽側に立出でゝ、呼子の笛を吹き鳴らすに合圖の吶喊を哄と揚げ、門内俄に犇き合へり。この物音に南北兩隣の屋敷よりは、何事の起りしかと、屋の棟に斥候を上げ、定紋打たる高張提灯を、星の如くに點し列ねつ、斥候はやがて聲をかけ。深夜に他家を騷がすは、狼籍者か、强盜か、たゞしは意趣あつての業か、隣家の交誼、時宜によつては御助太刀の一手仕らんと、呼ばゝりたり、大高源吾は聲張上げ。

否左樣なる者にてはこれなく、我等ことは播州赤穗の城主淺野内匠頭の家來、故あつて今宵主君の仇を報ずるもの、目ざす敵は上野殿一人なり、もとよりして、狼籍いたす所存も無く、火の元堅く取締り申せば、出火の憂ひもこれあるまじ、御助太刀は御無用なり、それとも强て一矢を賜はらんとならば、武門の習ひ小勢なりとも、御相手仕らんと勇ましくぞ答ふれば、斥候の武士は靜やかへりぬ。

朧ながらも月明りに、吉良の屋敷を打見やれば、右往左往の人の足は、宛ら立田川の秋にも似たり。

（十一）

浮世の夢の曉近く、入り亂れたる赤穗の義士に、長夜の眠を覺されて、寢耳に水の大叫喚は、實に三界は火宅の諺を現じて、綾羅の蓐に蝶と化したる女の童、腰元、仲間、草履取の小者に至るまで、泣き叫び遁げ迷ふ有樣は、殿司の筆に殘る地獄變相の繪に寸分も違はざりき。

されども義士の面々は遁げ迷ふ賤しきものには眼もかけず、目ざす敵は上野介一人なるぞ、物の數にも足らぬ下司下郎を失ひて、後々の物笑ひとなるな、別けて女性は緣無き者なれば、勦りて遁がせよと、表門を堅守たる原宗右衛門、老いたれども勇氣凛然と、長身の鎗を杖になして、雪に足場を踏みゞめつゝ、

拮と睨んで呼ばゝりぬ。其聲朗にして凍るが如くなれば、了得に騷ぎ立ちたる屋敷も見る間に靜まりかへりたり。

朧ながらも十四日の月、雪氣を含む大空一抔に凝りて、影は玄關の廂を照せば、亂れ入る味方の火事羽織のみ、微にそれと見え判きて、松明高張のきら〳〵と入口の板戸に映るは、星飛んで庭の松に宿るかと思はれぬ。

折しも納戸の口より長刀を閃かしつゝ、現はれ出でたる腰元二人、緋縮緬の襷、白絹の額卷を夜更の風に靡かして、群れ居る義士の眞ッ只中へ割つて入りぬ。一同この有樣を勇ましげに見遣れは一人は花も羞かしかるべき美人、後に立てるは冬の松の

色無けれど、威風犯すべからざる女丈夫なりき。大高源吾は持てる松明を高く振翳し。さても勇ましき御婦人かな、兩刀佩む武士さへ、後背を見せて遁げ失する中に、吉良殿とは如何なる所縁のお兩方か、後殿して我等に手向ひ給ふこと、天晴の御心根、大高源吾ほと〳〵感服いたしたり、苦しからずば御名を名乗らせ給へと呼べば、不思議や女性は聲うるませて。大高殿よう問ふて給はりし、妾等ことは斯世に家無き果敢無い身の上、父や夫は赤穂方の御味方ながら、娘や妻は其方様へ手向ひせねばならぬ義理、何をお隠し申ませう、それなるは原宗右衛門殿のお娘御、これは山岡覺兵衛が後家のお粂、吉良家の内情探らんため、假りに奉公するとは云へ、一日仕ふるも君は君、今主君吉良殿が討たれ給ひしを、餘所に看て遁げらるべきか、斯くなる上は所詮赤穂へも歸れぬ成行、娑婆に家無く親なくば、潔く死んで忠義を徹底きませう、サア斬り給へ、いざ〳〵お手向ひ仕つらむと、持てる長刀振廻して、寄らば切らんと身構へたり。

後邊に凛たる聲あつて。今の一言殊勝なり、それ矢間どの生擒られよと、粋なる下知に重次郎は、進みかねてや二の足踏むを、心弱しと大石はなほ聲高く。矢間どの怯れしか、えッ優しやと呼んだりけり。並み居る面々、眼を注ぎて女性を見れば、實に

これ梅か、梨の花、艶なる色の紅白は、源平いづれ旗色好きか、風情はなほも一入の、露の涙に打凋れぬ。

二人は慇懃に手を支きて大石に一禮し。妾々斯く一同に取圍まれては、所詮遁げ延びんことも叶ひ難し、存分に御成敗給はれかしと述ぶれば、内藏之助は頭をうち掉り。いや、いや、其方がやうな忠義な者を、赤穗の武士は手に懸けぬぞ、生きて忠孝全うするは、おう〳〵それよ、兩人とも尼にして遣はすぞ、此處を立て、時刻移らば故障や起らん、各々吉良上野介が首級を揚げたるぞ、積年の鬱憤今ぞ晴れつらむ、これ見られよ、この口にて主君内匠頭様を嘲りしか、この眼もて能くも我君を蔑視

たるよなと、遺恨の數々並べ立て、一同歡喜の聲を震はし、嬉し泣きにぞ泣きにける。

はや夜は明けたり。アレ〳〵東方は白んで、鷄も啼き出でたるぞ、との間に一同引揚げよと、大石が下知に喜び勇んで、吉良家の門を立出れば、朝風亂れたる鬢の毛を吹きて、その寒さ肌を劈くが如し。

されども聞き傳へ云ひ傳へて。それ前代未聞の目覺しき復讐なるぞ、今の時に見後れなば、悔ゆとも詮なかるべしと、人の山、足元の波、一條の往來を差挾んで、中央を悠々と通り過ぐる四十七士の裝束、いづれも水火の難を辭せぬ火事羽織着て、積れ

る雪を黒めつゝ行く態の男らしき、鎗の穂先の立並ぶは、佃島の朝景色かとも思はれて、帆柱の林を兩國橋の上に見けり。頓て泉岳寺も近うなりぬ。高輪の海晴れて、青波熨すが如く平かに、さし昇る旭日瞳々として水を彩り、衞の飛び立つは引揚げを喜ぶか、滿城の人は恰も狂するが如くなりき。

高輪の出口に今朝咲きし二枝の花は、これお粂お琴が義士の泉岳寺へ引揚ぐるを、遠く打睨め居るなりけり。堅やの字の帶、御殿風の髮風俗、誰が目にもお屋敷の庭に芽生えの名木と、銘をも打つべき身にて、仲間もつれず小者も無く、伸び上り伸び上りて、嬉しげに物見する樣の怪しきを、通りがゝりの人々足

を留めて睨みぬ。

（十二）

あるに甲斐無き身と思ひながらも、浮世にあれば憂き事に責められて、涙に袖を干しあへぬ人ぞ悲しき、別けて女性の身は、粉膩のたしなみありて、紅よ白粉よと裝婆を飾り、世間を躰よく包み、枯木に色香を添へつゝも、稻舟の招く方に漕ぐことの口惜しさ。

原宗右衞門の娘お琴は、親に離れ夫に別れて、今は從ふべき人も無く、盛りの花を殘無や、頭ごぼと剃りこぼちて、墨染の衣に昨日の色香を包むめり。

お粂は固より埋木の、其儘朽ち果つべき身を、亡くなりし夫に操立てゝ、吉良家へ奉公に住み込み、首尾克義士に本懷を遂げさせて、それよりは浮世に用なしと諦め、これも優しき尼となり、圓頂白衣の垢無き境界を樂しみて、念佛修行に餘念無し。

一所不住の僧ならば兎も角、形ばかりとは云へ、乾坤の間に結べる草の庵ありては、夜半の嵐に袖濡らすこともあらで、唯一念に佛を信じ、花を供して、過ぎ行く月日を送りつゝも、なほ待たるゝは義士の消息なり。

世に恐ろしき大罪を犯せる夫すらも、家に待ち居る妻の心になりては、一日も早く牢屋を出でよかしと、待詫びける甲斐も無

く、出家の今もなほ戀ひしき矢間は、父宗右衛門と諸共に、泉岳寺に於て四十七士殘らずの切腹、モ一度逢うてと思ひし綱も斷れ、お琴は漕ぎ行く船に離れて、沙丘に足摺する程の悲しさ、其日初めて罪も無い神や佛を恨んで、聞えませぬと泣く心の不愍さよ。

斯くなりては愈々味氣無き浮世を觀じて、俗を慕ふ念は露しも無く、頭を圓め、白衣を着け、腰法衣を纏ふては、見榮も飾りも無くなりて、年數も積れ、皺の波も寄れ、化粧て見すべき男も無しと、たゞ後生の事を樂みけり。

閼伽桶の清き水を汲みては、眞如實相の月影も宿れかしと願ひ、

花を佛壇に手向けては、天より種々の花も降れよと望み、偏に我が住む庵を常寂の光土に見て、浮世の風は一切飛んで來なし、墨田の土手の塵一本、この竹椽には入れまじきぞと、精進退轉なし。春は鄙ながらも田を温める風の、花を吹いて香を窓に送り、夏木立の清涼、水も氷にやならむ、秋は虫の音に哀れを覺えて、昔時の夢に涙を浮べ、寒月枯木に冴ゆる夜は、思はず書寫の筆を捨てゝ、清光卒塔婆を照らすを拜む。あゝ難有き世や樂しき娑婆や、俗にありて他人をも神をも怨みたりし煩惱は、實に意馬心猿のうたてき心にてありしと、今は珠數もて肩を拂ふことと屢々なり。

茲に埋もれて幾歳か過ぎけん。訪ふ人も無き柴の戸、水鷄にのみ欺かれしこの庵に、尋ね來給ひて、妾等が素性を問はせ給ふ御身は、如何なる因縁のある人やら、前生は必ずしも一河の流れを汲みける中にやありなん、興も無き長談義は比丘尼が馴れたる口の端とのみ思ひ給ふな、されば御身がいたく怪しみおはする掌裏の刀瘡も、今の話にて大方は察し給ひけん、固よりして浮いて尼となりし身ならば、經も讀まず、佛も念ぜず、氣儘氣隨に奉加しても世を渡るべきに、嬉しき世の中とて志ある人は我と足を運びつゝ、喜捨し給ふことゝ、これ皆大石殿が餘德、人間としてありたきは誠なり。アレあれを見給へ、梅は盛りに

咲きたり、咲くまでの辛苦を如何に思ひ給ふぞ、邪魔する雪に枝を折られ、雨風に吹き曝されて、世間を狭め、人に疎まれ、結句花と咲いたる今日の譽は、これに優る草木ありとも聞かず。武士の心懸けはこれ、婦女の手本はこれ、美くしい梅の花では御座りませぬかと、お祭比丘尼は聲麗はしく物語りぬ。男は始終を聞を畢り、膝を叩いて感心し。あア左樣な御身分の方々なるか、さりとは知らで先刻よりの無禮、平に御免下さるべし、我もお目付の役を勤めながら、斯かる名高きお兩方を今日の今まで存ぜざりしは迂濶千萬、笑ふてばし下さるな、してまた御菩提所へは折節御墓參なされますかと問へば、比丘尼は爪繰る

念珠を止め。はい、殿樣の御命日をはじめ、御家來衆の命日には何日も妾が參ります、これ御覽下さいませ、殿樣はじめ御家中衆の御位牌を斯く吊うて置きますと、紙門を開けて佛壇を見すれば、まこと香花は新らしく、常燈微に煤びたる過去帳を照しぬ。

男は四邊を眺め居けこが、弗と片脇に立て懸けある短刀に目をつけ。これ、これは、何で御座る出家の御身に不似合なと、咎むる如く尋ぬれば、比丘尼は側のお琴を指し。それその尼に問ふて見給へ、妾は確とは知らざれど矢間殿が遺物とやら、世を捨てし身とは云ふものゝ、夫を戀はざる妻やあらむ、深く問ふ

て罪を作らせ給ふなと、云ひつゝ稱名申しけり。

いざお暇と立出る男、送り出す二人の比丘尼を後に見て、香に迷ふて行く田の畔に、人知らぬこぼれ梅二輪、これも渠の身に似たる花と、神妙に拾ふて懷紙に納め、家に歸りて世の人に吹聽しけるに、人は一代にして名は末世に高く。伽羅は香あるが爲めに挫けても、消えぬ薫りの今に殘りぬ。（廿五年作）

磯部驛吊二大野九郎兵工墓一

世上毀譽如レ葉輕。　多君遠慮捨二前嫌一
吾將三一掬同情淚一。　欲レ洗千秋不義名。

京屋娘

（上）

根が浮氣をふら〳〵と暮らす藝者新道。見榮と愛想の二軒目の、花屋といふを右に折れて、三尺にも足らぬ露路あり。露路といふはたゞ文字の上の名ばかりにて、兩側の檐と檐重なり合ひ、露さへ溝板を濡らせし事なく、朝な〳〵の日暮も わづか障子の二ッ——三ッ目まで射すばかり、それからは終日拜んだことなければ、結句朝寐には持つて來いといふ處なり。氣根よく觸

れ歩く豆腐屋も、此處を氣樂横丁と名づけて、朝の一度は足早に通り過ぐとかや。されば雨の日の欝陶しさ、もしも槇木焚く家のあらば、お化粧氣にするお孃樣などの、なか〳〵住まはるべきところならねど、たゞ難有は葭町の庇陰たけありて、屑拾ふ人も住まず、襤褸買ふ商人も居らねば、本所の露路と比べにはならず。これが芝新網邊にあッたなら、通る人鼻を摘んで去るべきに。まとや隣りから隣りまで格子戸造り、一寸見て意氣なと振り返る若旦那もありき。總じて露路の窮屈なるは、此處のみに限らねど、盆栽一ッ据ゑる庭もなければ、水道の水半町先の大屋さんにあるばかり。まことに陰氣——不自由と、他人の陰氣を頭痛に病む譯ならねど、ともすれば頭痛も病みさうなは露路住居なり。岡目の陰氣と裏表なるは、この露路の三軒目の家なれ。内には歌三味線の音絶間無く。格子戸の陰の下駄箱には、墨塗の小供下駄五足十足列を揃へて、人足の繁き割には板の間は存外に汚れず。上り口の障子は玻璃の中透にて、障子越に姿を現はせし四五人の娘。お師匠さん左樣ならの聲聞くと間もなく、身はハヤ格子戸の外に見えて、しかも口姦ましく「由ちやん、履物が違がやァしないかへ」「オヤ妾のが違てるわ」「いやな人だよ、妾のをつッかけてサ」「光ちやん御免よ、アラ待ッてゐらッしやいナ、よう厶いますよ」と口五月蠅き十三

四の小娘。いま清元のお温習了りて、家路に戻る勇しさ。孰れ心は籠の鳥の雲井に啼く、思ひ嬉しきものなり「花ちやん、今日の御仕舞は例日より餘ッ程早いのね」「さうよ妾その譯知ッてるわ」「アラ花ちやんは可笑よ、譯ッてどんなの」「無ッてよ、光ちやん貴女知らないの」「知りませんよ、ほんとうに」「アラ虚。そら、そら、まだ判らないの、あの長火鉢の傍に……」「梅次郎さんが何したッていふの」「梅ちやんも今はあんな厭な藝人のやうだけれど、あれでもお師匠さんのアレで有たッて」「アレッて何んですよ」「ホ、、お弟子であッたんですとサ」「お弟子だからッて、何も可笑いことはないぢやない

か」「イ、ヱ」「ぢやア何」「それでもお師匠さんたア、をかしいッてサホ、、」さすがは藝妓新道の隣りに住居て、昧な事見聞き覺えあると見え、年に似合はぬ口の利き振り。さりとては早くはじけ豆、實に油斷のならぬ世の中と、摩れ違ふた老人は念佛唱へて通りしとか。されどつら〳〵この娘共の年を見るに、未だ男のよしあし品さだめ、しらふでする柄にもあらず。察するに無心が大膽な事を云はするにてはあらぬか、六ッ七ッの腕白小僧、よく飯事の遊びして、隣りの花坊と嫁入の眞似。添ひ寝して耻かしとも思はぬは、みな無心のさることにて、腹に汚點無き乙女氣も、また男女の影響して、苦にせぬ類ひ

なるかそも。一人が話せば一人が答へ、面相頽して笑ふ中にも、氣取ッて歩く可笑さは、何處やらに踊りの手振を覺えて、乙に天神髷の天窓をふり、緋鹿子の帶太鼓に結びて、未だ肩上の殘るも愛らし。見る間に姿はチラ〳〵と、彼方に見えずなりにけり。清元の師匠と云ふは、もとは柳橋の流れに垢ぬけせしかど、ふける年には白粉の功能も無く。若い頃は一寸の流行ッ子と、持て囃されし昔時の夢も、今となりては駿馬の骨。誰に身を任さうともなく、この露路に引ッ込みて、踊り清元の師匠に送くる月日は早く。はや一年も過し頃には、近處隣りの娘ッ子、我れも〳〵と見習ひ、お師匠樣〳〵と賴みに來る者多く、今は活

計も結句氣樂になりて、藝妓の時の氣兼せしを、阿房らしいと笑ふ時もあり。されば身の樂になるに隨ひ、心もやう〳〵蕩樂に傾きて、此頃何やら形に添ふ影法師、時々雨夜の障子に映るとか、誓古に來る娘どもの噂とり〳〵。お師匠さんと云はるゝは、藝名延定本名は菱屋お定とて、今年三十一二、未だ何處となく匂やかな姥櫻。齒をも染めねば眺め一層なり。されば娘ッ子とゝもに踊り、清元を敎へる外は、これと云ッて外に格別の用事もなければ、向ふの海水浴では長湯との噂とる位。お化粧の隙つぶしを、退屈凌ぎと思ふ氣樂。あるは長火鉢の傍に坐を占め、お三の雜巾掛するを横目で睨む位の用向、まづ隙のある

身躰なり。怪しいは雨夜の影法師、此奴未だ年若な癖に藝人風のなまめかしさ。まづ教育のない婦人には、好かれさうなめかす方、畫は清元の群れに交りて齊しく習へば、まづお弟子と云ふても宜い男。それが何うして雨夜の影法師、さても怪しや、此家怪物屋敷でもあるまい。お定は長火鉢の横坐に坐を構へて朱羅宇の長煙管を薫らせば廿二三の若者、その向ふ側に膝を頽して坐り居るのが、影法師の梅次郎といふ男なり。笑ひながら話しかけ居る側に、痩躰のさも柔和な美形一人。これは堀留の呉服屋、京屋の一人娘。年は十七、人並秀れて縹致も姿もの。たる方、此頃此處へ清元の稽古に通ふなり。今日は店の都合の

悪るいにや、例もの丁稚長松、時間を過ぎても迎ひに來ず、何うした事ぢやと待てば梅次郎に話しかけられて、乙女氣のモヂ〳〵しながら、問はるゝに答へ、語るを聞けば、なか〳〵その談話の耳ざはり好き。見れば身裝も目に慣れし番頭の質素な樣子と違ひ。意意な素振に戰として、問はるゝ事も身に染み亘るやうに覺え、初戀のこはゝ〳〵しさ。何んと云つて好いものやら、どぎまぎするをお師匠さんも悟られてか、いろ〳〵な事梅次郎の肩を持たるゝに、何んとして此場を拔けやう。こんなに恥かしい目をするのなら、いッそ早く迎ひが來れば宜いと、待つに其の人は來ず。話はいやましに進み行き、師匠のお定憚りへ立

つ間の極りわるさ、我身で我身を持て餘す位なり「お香さんモウ淺妻をお上げなすッたの」「ハ……ハイ」「夫は何うも御勉強でゐらッさやいますこと」「イヽエ一向なんで御坐います」「チト敎へて戴きたう存じます」「アラあんな……、おなぶり遊ばして……」思はず顔を紅らめ下を向いて、羽織の紐を捻ねる床かしさ「イヽエ串戲ぢやァありませんよ、ほんとうですよ、あなた」「妾知りませんよ」これはしたり「ぢやァ淺妻の身振を何う遊ばして、右の手をかう上げて。これで斯う履むので御坐いませう。どれあなたのお手を」と云ふや否。お香の手を確と握り、斯う斯うと師匠ぶらるゝ氣味惡るさ、お香は俄かに顔熱

くなりて、目はチラ〳〵し、その極り惡るさ。今が今迄こんな耻かしい目は見たことなきものを憎らしい男の心。折りから師匠のお定、手拭で兩手を拭ぐひながら、奥より來るにお香は穴へも入りたき心地。「お師匠さま、淺妻のお稽古を……」師匠のお定、お香をじッと一目見て、「梅さんに敎はつてゐらしつたのホヽヽ」「あらいやな、お笑ひ遊ばして」お香は最早坐にも耐かねモヂ〳〵する中。丁稚の長松、お迎ひに參上つかまつりぬ。「何くら待ッたか知れないよ」罪もない長松に當り惡るく、遁ぐる樣に暇乞して、門を出て見てホット溜め息。思はず振り返ッて「長松やお前早かッたね」

（中）

四里四方を二つに割ッて、東へも二里西へも二里。東海道の廻り雙六、此處からふッて京都で上る。さてさて長い通り、あめが下の眞中は東京の日本橋なるべし。其處の堀留と云へば、河には舟楫の便ありて、向ふの藥屋――唐物屋の荷倉へ、船頭が捻ぢり額卷勇ましく、荷を擔ふて這入れば、煩はしき大八の力假るにも及ばず。夜は出船の欵乃に明けて、旭きら〳〵と水を彩り。晝は入船の炊ぐ烟に暮れて。火の番の拍子木幽に響く。商家は孰れも豪の者のみ集まりて、黑塗りの土藏棟いかめしく。中にも檐下の天水桶に金目見えて、紺地に白貫きの長暖簾、筆

太に京屋の二字古風に染め出せし家は、此邊でのえらい者と見え、手代丁稚も數多く。帳場格子の陰に光るは、眞鍮の火鉢ならで、支配人の善兵衞天窓を蠅がすべるも知らで、算盤に目はパチ〳〵、はじくなりけり「半どん、若旦那の仙臺へお立ちになるのは、明日の一番だらうね」物價表を拾ひ讀みして居たるは手代半六。善兵衞に問はれて、火鉢の陰から天窓を擡げ「へイさうでせう」「さうでせうでは判からない、奥で確と聞てお出でな」「へイ」半六を澁々立たせて、次には丁稚長松を叱りつけ、「コラ〳〵行儀が惡るい、なんだその懷手は」「へイ」「あゝと貞どん、お華主の御土產に印附の手拭三反ばかり包んでお

くれ。そして熨斗紙ぢやァ品が悪るいから、水引をかけてな、いゝか」「ヘイ」折から半六奥より來り「只今奥でおッしやいましたが、若旦那のお立ちは明朝の一番滊車だそうです」「ナニ一番滊車？、それぢやァモウ荷造にかゝらなくちやァならない、奥へ行ッてモ一度聞いてお出で、荷の中へ入れる物がありませんかッて、あゝ好い私が行かう、誰れをお供に連ていらッしやるか判らないから」。善兵衛の奥に入りたる後は主無き天下、思ひ〳〵に串戯交りの高噺し。半次といふとぼけもの、莞爾〳〵と笑ひ出して。「貞どん〳〵、粂子さんが來て居るッ」。「粂子さん？、あァお粂さんか、なんだ粂子さんッて、乙に學者

ぶッて」。「學者ぶるんぢやァない、向ふを學者に見てやるんだ」「なにも子の字が付いたッて、學者に聞える譯がないやな」「だッてもそれ、何々令嬢ッて云はれるお方は、みんな子の字が付くぢやァないか、畠野芋子、そら〳〵、子の字の付のは女學者の符帳だ。宅のお香さんなんざァ令嬢ッて云ふのよりは、寧ろお嬢樣の方が適當だ、アンな踊りや清元が上手だッて、令嬢ッていふ柄ぢやないやね。お粂さんなんざァ大層學者だッて、だから何子樣ッていふのは適當なんだ」「ヒヤ〳〵」「オヤ洋語なんぞ遣ッて、ヘン」「だッて學者の談話にやァ、學者らしい返答もしなくッちやァならないサ」「アハ、、酒落てやがらァ、リ

ーダーの一册目も讀めない癖に」「リーダーを知らなくッても、レデー位は知ッてるよ」「ヤ、誰から聞いた」「聞いたゝア恐れ入ッた、僕だッて竈はストーブ、豆腐は田樂位は……」「へン、そんな事は獨案内にもありません、お氣の毒さま」「半どん失敬ぢやァないか、そんな事知らなくッて」「オイ〳〵、何を饒舌ッてるんだ、品物を出しッ放しにして」思ひがけぬ後ろより善兵衞が九天の霞をもれし鶴の一聲。一同。「ヘイ」聞けば此家奥羽中國に手廣く商ひて先代より堅氣との評判高く。江湖の信用いと愛でたくて、日に增し殖える華主の數。餘れば溢れて、主人の金兵衞ふとした病氣に死歿り、近頃漸やう忌も明け

たばかりの跡は、後家のお濱、未だ悟るといふ年にもあらねど、一人娘の成長を樂しみに、道心堅固に守りて、身裝はかへッて質素に拵へ、姿は年波の寄るに任せ、お化粧で隱す下心もなく、佛壇の花挿下女の手を待たず、食前のお勤め能く佛に仕ふ。獨り身になりてよりは、一層に店の締りに心をつけ、召仕ひを勤りて、仕入に氣を入れ、注意到らぬ隈もなければ、支配人の善兵衞も老實〳〵しく立ち働き、飾りはなけれど翼となり鰭となり。大旦那よりの家名は落すまじと、大風呂敷を脊負ッて立つ强の者、老人も居らねば家の締りはつかぬものなり。主人金兵衞の在世の頃より、娘お香に定め置ける夫あり。名を石井慶三

郎といひて、今年廿二の若盛り。一寸あの妓に好かれそうな男振り、なれど締りのない巾着旦那の類ひにあらず。廿一の秋商業學校を卒業して、或る商會の顧問役に撰ばれ。眼は實際の懸引に慣れ、廢物利用の謀方寸に秘め置く事なれば、他人の名跡を繼ぐ養子如きは好ねども、京屋とは縁家の間柄にもあり、娘は縹致好く素直の性質なれば、せめてもの頼みに親の慂慫に從ひしなり。されば金兵衛の病中より、引き續いて京屋にのみ寢泊りすれど、未だ婚禮の式も擧げねば、妹と云ひ兄と呼ばれて寢るさへ部屋の別れ〳〵。母御の心怨めしけれど、母には母の苦勞ありて、未だ肩あげも愛らしき、お香が身躰にさはりはせぬかと、慈くしむ親の心には、何歳になりても小供の樣に取扱ふは、これも眞の一つなるべし。

娘の我儘は母御の甘口より起るものにて、京屋の後家は旦那に死なれてより以來は、娘ばかりを一層に可愛がりて、それお香が何うするの、彼うするのとお手玉取て勦れば、芝居も好きになり、寄席も好きになり、好む衣裳に金銀を厭はず。花見遊山には女中の四五人も連れ、日毎〳〵の贅澤三昧、慶三郎は氣に食ねど、未だ同衾せし中にもあらねば、染々と意見も云はず、云へば何時も母御の氣色を損ずるばかりに、眉を顰めて一家に住めば、何時になく親子の間に針の棚を立てける。

お嫁さんになると三味線も習へぬ、清元も習へないと、お香のねだりに母親は延定に通はして、好き次第の藝を仕つくれば、娘心の變りやすき、たとへば春慣れぬ蝴蝶に等しく、櫻の色香に惚々して此花ならばと思ひしも、今日となりては昔の事。海棠の婀娜な姿、これにもまた心うつり、羽かた敷きて恍惚しては、思はぬ露に濡るゝことあり。さればお香も仇めかしき歌の文句に、年並ならぬ戀知り初めて人知れぬ苦勞を我から求め。踊りの身振りに仕打慣れて、通らぬ思ひに強ねて見ては、罪もない乳母に當り惡く。御飯も食べず口も利かず、夜は人より早く寐て、うつら〳〵とツイ明方の夢見惡しきに、降らす涙の玉

あられ。あられもない人に思ひをかけて、我身の上に比べて見れば、恐ろしいやら怖いやら、向ふの人の心も知らず、此方ばかりが苦勞しても、嬉しいものは初戀の頃なり。されどお香が踊り清元の稽古を望みしも、惡氣ありてせしにはあらず。此娘なか〳〵負嫌ひの性質ありて、たとへば交はる朋友の中に、唄三味線の類ひに限らず、諸藝總てのもの、己れより立ち優るものあれば、俄かにそれを乘り越したき心する癖あり。これは我儘氣儘より增長せるものなれども、この性質今一歩正道に進まば、天晴人の下風に立べきものならねど、見識如何にも狹く。交るは己より眼下の者にて、談話とし云へば俳優の噂、遊藝の

品評ごときに止れば、お香の智慧の增すべき道理もなく、上見ぬ里の蝙蝠。よく〳〵世の中に暗いゆゑに、清元の稽古を望みしも、或る宴會の席に呼ばれて、同じ年輩の娘がしてやりし藝に膽を潰し、さて急に稽古を思ひ立しなり。されど師匠の延定夫しやの果。賴まれもせぬ事の師匠ぶりて、未だ色づかぬ初紅葉に、思はぬ霜の媒するとは。賴む娘のお師匠さまがこの通り、さて〳〵世の中は怖いもの。慶三郎は面白からず日を送れども、一旦此家の養子となりては、輕々しく家も出られず。ことに知る人の思はくもあれば。暫らく樣子を伺ひ居るを、支配人の善兵衛三人の中好からぬを、粹樣に悟りて、俄かに若旦那に勸め

ての仙臺行、代替りの花主廻りはほんの名ばかり、實は若旦那に日光松島を見物させ、その留守に三人の中を具合よく和らげやうとの下心。慶三郎が氣に入りの棟梁を供にさせて、いよ〳〵明朝の出立と極りたり。慶三郎が實の妹のお粂と云ふは、今年十七才の美形。其上兄の氣性に似て、學文に勵み宗敎を信ずるゆゑに、自然見識も高く、行末は天晴の女學士となるべしと學校での評判。明日は兄の仙臺へ出立するとて、見送りの爲め泊りがけにて京屋に來れど、お香の氣性とは思はしからぬ中ながら、お粂なか〳〵如才なく、心萬事に行き亘り。その上淡泊なる性質なれば、後家のお濱殊の外可愛がりぬ。日もはや暮れた

れば、いろ〳〵と翌日の用意も了り、一家親しき物語初まりたり。一夜明くれば、平日より二時も早く起され。手代丁稚は目を摩りながら、はたき懸るあり箒取るあり。雑巾の見えぬに丁稚臺所にうろつき、御飯の煮え立ち遅きに、お三何時になく奥のお眼玉にふれ、その混雑云はん方なし。

縁り無き人の去るさへ、名殘惜しきものなるに、現在夫と定る慶三郎の、今はや奥州へ旅立たうとするに、お香は一間に籠りてお化粧に氣を奪はれ、家内の者へは顔を少しも見せず。それに引きかへお粂は兄の事、何彼にと心を注け世話する氣立の嬉しさ。されど慶三郎は堪へかねて母に向ひ「おッ母さん、お香

は何うしましたの」母は俄かに心付きし樣に、一寸あとを振り向き「オヤほんにお香は何うしましたらう、今朝は少ッとも顔を見せませんよ。お粂さん憚りさま、一寸呼んで來て下さいな。兄さんがモウお立ちなさるからッて、お坊ちゃんで困るよ、屹度耻かしがつてゐるに違ない」。お粂はお香の居間に至り「お香さん兄さんが立つとこですから、一寸見送ッて下さいッて、おッ母さんが左樣おッしやいましたよ」お香は一寸後を振り向き「オヤさう、兄さんは未だお立ちにならないの」。と云つたぎり、お化粧更らに止める氣はなし「妾はね、お師匠さんと梅ちゃんに、芝居へ連れてッてもらふ約束しましたから、それで大層忙

はしないの」。お粂はグット癪にさはりしかど、左あらぬ躰「さうで御座いますか、それぢやァお忙しいでせう、折角お化粧遊ばせ」。言葉を殘して立たんとする處へ、椽端を走ッて來し後家お濱「お香や、兄さんがお立ちになるのに何をしてお出でだえ、いやな人だよ、お前耻かしいと思ッてだらうチ」「アラあんなこと、いやな氣の早いのね。お母さん妾が行かなくッたッて、いゝぢやァありませんか」「宜くないから迎ひに來んですよ。よ、一寸でもお出な、ホンたうにお母さんに世話を燒かせる子だよ、オヤこの子は何うしたんだらう、泣いたりなんぞして、妾がチット何かいふと、直ぐ泣く人だもの困るぢやないか。そんな泣き顔なんぞ見せちやァ、かへッて兄さんの氣に障るから、モウ御挨拶をしなくッても宜いよ。ホンたうに云ふとを聞かない子だよ。」これも云ひ棄てゝ、慶三郎の傍に來れば、慶三郎は待ち兼ねし樣子にて、帶の間より時計を出し一寸眺めてオヤと驚く「お香は恥かしいのだから、慶三郎あんな子に構はないで……」。慶三郎俄かに眼色を變へしが、見れば妹お粂の莞爾笑ふ機嫌顏に氣を奪はれて、口まで出でし厭味も呑み込んで勇ましく「それぢやァお母さん行ッて參ります。みんな留守を賴むよ」「道中氣をお付けよ、いゝか棟梁賴みますぞ」「左樣なら御機嫌よろしう」見れば黑塗りの車三輛餘る一輛は善兵衛が停車場まで見

送るなり。茜色の雲追々東より西に流れて、上野の森に烏の音勇ましく、耳らくして風鈴の響チリン〳〵。

（下）

娘氣の染まり易すき、實にしら絲の亂れては、容易く解く由もなく。京屋の娘お香は、慶三郎の旅立ッてより以來は、いや增しに募る戀。されどもまだ初戀のことなれば、梅次郎が顏容の麗しきに惚れ込み、たへて氣立の善惡しを知らねば、末愛でた き戀にはあらず。一たび悟りの道に近づきなば、忽ち醒むること とあり。まことと梅次郎の樣子、一寸見て藝人肌の垢拔けせし抔、なか〳〵店のものゝ類にはあらず、衣類も人の目に立つものを

好めば、外歩くにさへ乙に氣取りて色男を鼻にかけ、誰の聲色やら妙な口の利き振り。これで女の子に好かれるとはさて〳〵世の中は樣々なり。今日はお香も慶三郎が生家の振舞に呼ばれ、厭やながらも一座には就けど、一時も早く家に歸りたき心は山〳〵、されど世の義理人情もあれば、厭やな顏も見せられず。御馳走の珍味も殆んど目を瞑ッて、口に入れし位、面白からぬ宴會なり。是までは我が眼下の者より外に交はりし事なきお香。今日此家に呼ばれて見れば、お粂の朋友と見ゆる如何にも立派なる令嬢あり。孰れ見識のあるらしく見えて、我れながら少し恥ぢらふ樣子。なれど身裝のよきをせめてもの自慢と、お粂に

導かるゝ儘に別室に通れば、此家は書齋と見えて、左程に廣き座敷ならねど、床の間、違ひ棚の拵へいと古風に見えてゆかし。お粂もお香は兄の細君なれば、眞實姉の如くいと心切に扱け目なく取り扱ひ、更らに間を置かねば、それに幾分か氣を勵まされ、庭先の景色など眺めて、思ひを遣水の此方、樹の間に光る燈籠の、池の水を射りて面白く、一入に眺め居たり。共に一座にあるはお花とて十七八の令孃。今日はほんの近付の初なれど、これもお粂が學校の朋友と覺しく、語る談話さへ思はず知らず理に落ちて、お香の氣には更らに面白からず「石井さん貴孃春の舍の妹と脊鏡を御覽遊ばして、可哀さうに學問がないので、

とう〳〵身を投げました子」「さう〳〵、夫になんぢやァ御座いませんか、水澤も教育のない女子を妻にしたので、あんな不幸……、男の薄情ばかりでもありません子、婦人だツてアノ通り顏色で善惡を定めるやうぢや、何うしてもいけません、氣立があはなくッちやァ」眼は木立の間に注げども、耳は敏くも二人の談話に向ひ、芝居遊藝の品定めに聞きあきし耳には、今の談話は聞慣れぬだけ面白く覺へて立耳すれば、これはしたり。お香が身の上を當摩する樣、我身から氣を廻しては、負け惜しみの氣性にたゞ腹立たしく「チー石井さん、何うもさうの樣で御坐いますね。西洋の小說なんぞ讀みましても、教育のない婦人

は夫婦間の愛情も……」「さう〳〵何うしても劣情に傾く樣で御坐いますワ。學識のない婦人は……」

お糸は持ち前の淡泊な氣性。一氣呵成に云ひしものゝ、氣が付いて傍を見れば、お香が恥らふ樣子の何處となく物憂げに見ゆるに、俄かに話柄を他に轉ぜしかど、お花孃は斯くとも知らで、ます〳〵話しの圖に乘りて、いろ〳〵とお香の氣に障ることのみ語りぬ。お香は負け惜しみの念募りて、口惜しさに堪へねど文學のことなど露知らねば、他より口出す便宜もなく、怨みを呑みつゝ耳欹つれば、一言〳〵氣に食はぬ事のみ多く、膽攫まるゝ樣に覺へて、坐にも堪へかぬる位なれど、暇もらふて歸る譯

にもゆかず。さりとて膝交へて話す事も慵く。家に居ては女中と打ち交りて、世間の噂咄しするは得意なれど、この學識ある姫方と言語交ふべくもなく顏を斜向けて庭先を見やれば、松の葉は針を食む如く、風にすごく柳は我をぢらすかと思はれて怨めし「お香さんチトお話遊ばせ」と云れて辭むに由もなく、座に交はりしが、二人の談話を聞くばかり、さて外に詮なし「お香さん貴孃新富の替り目を御覽遊ばして」「ハイツイこの間行ツて見ました」「左樣で御座いますか、今度の六歌仙は大層好う御座いますツてね」「さうで御座いますよ、貴孃まだ御覽遊ばしませんか」「ハイツィ學校が忙はしいもんですから……」

學問に忙がしき人さへあるに、自分は遊藝に暇なしとも云はれぬ時宜思へば恥かしき身の上なり。お花は俄かに思ひ出せし樣子「お粂さん日曜日に教會へゐらッしやいますか」「參ります貴嬢もゐらッしやいませう」「ハイ御一所に願ひます」お香は我が身に比べては、恥かしきことばかり、この年の若さに神頼む殊勝さ。我れは戀ゆゑ神頼めど、他人は身を修むるに神頼む。さても心のいろ〳〵さよ。お花はさも馴れ〳〵しく「お香さん貴嬢聖書を御覽遊ばして」「イ、エ聖書ッて何んで御坐います」「ホ、未だ御存じないのですか」お香を見て柔和に笑ひし顏。お香はその恥かしさに、ゾク〳〵と身震する程なり「聖書ていふ

のはアノ新約全書の事で御座います」「オヤ左樣で御坐いますか」「御覽遊ばすのならお貸し申しませう」「何うぞ……」「それぢやアお粂さん貴嬢の餘分がありませんか」「あアありますよ、お香さん差し上げませう」親切に聖書を取り出だして、お香の手に渡すを、開いて見れば、當てにせし插畫はなけれど、讀めば傍訓ありて解り易すし。お粂は聖書と共に持ち出だす本を、お花の前に置き、貴嬢これを御覽遊ばしましたか」お花は本を手に取り「イ、エ未だ拜見いたしませんよ、貴嬢御覽遊ばしたなら、妾も拜見いたしたう御座います」「御覽遊ばせ」お香は何本かは知らねど手に取りて、見れども横文字の讀むべくもあら

ねば、その中の繪のみ撰りて、眺めて居る傍よりお花は問ふ「お香さんそれは一冊目で御座いますか」問はれても横文字は一字だに知ねば、一さへ二さへ判らぬは悲し「一寸貴孃お貸し遊ばせ」。

此夜は三人心地好く別れしかど、お香は家に歸りても口惜しさ云はん方なく。さりとて女中に語りて鬱を遣るべき由もなければ、たゞ一間に籠りて聖書を繙き、拾ひ讀にすれば、初めの一二度とそ意味も道理も解らねど、讀むに從ひ顧みて己れの心に比べ見れば、恐ろしさ云はん方なし。次の夜は日曜日。お粂お花の二人に誘引はれて、最寄の教會に至りぬ。はや定めの時も

過ぎしと見え、室内に夥多の男女いと親しく打ち交りて、神に祈を捧ぐる殊勝さ。お香は二人の中に交りて、左右よりいと心切に聖書を敎へらるゝに、我知らず一章讀み二節誦して、齊しく讃美歌を謠へば、その聲麗はしく。良らくして心を鎭め目を閉づるに、堂中靜まりかへりて、牧師の祈禱は信者の心耳を清めしむ。また目を開けば、彩燈堂中に閃めきて、さも氣高き米國婦人の演說聞くに、一々我が身を刺すかと怪しまれ、汗流れ唇顫けども、左あらぬ躰する苦しさ。間もなく耳元近くお香の腸を貫ぬく聲『妻なる者よ爾曹その夫に服ふべし。若し敎に循はざる夫あらば、敎に由らず妻の行に由て服はん。そは爾曹の

恐懼を以て潔き行をなすと見るに因りてなり。爾曹の裝飾は髪を辮み金を掛また衣を着るが如き外面の裝飾に非らず。たゞ心の内の隱れたる人則ち壞ることなき柔和活靜なる靈を以て裝飾とすべし』この章句はお香が胸には一句一苦。過てり定まる夫ある身にて、不貞とも不操とも仇し戀に心を亂し、今更悔ゆとも詮なけれど、懺悔には萬の罪も滅ぶとかや。我れたゞ梅次郎に優しき言葉かけられしのみにて、心を亂せしとせば、この會堂の男女は皆戀ゆゑに寄べきに、神に捧ぐる祈のために、親しく交りて親しく語る。斯くしてすら、人の心の善惡の判ち難きに、たゞ一言二言云ひ懸けられしとて、それを情けに實を盡

さば、世には鬼無く、天下の人みな戀ならぬはなし。悟れば昨日の迷の雲、あり〳〵晴れて月影の冴けきに、我が後姿も恥かしく、門口まで送られし二人に別れ、家に歸りて寢に就きしが、一度ならで二度までも同じ夢。平れ伏して今迄の罪を夫に謝すれば、たゞニヤ〳〵と微笑まるゝに、一層身の上を恥ぢて、たゞ嬉し涙に夜着の襟濡らせしかと思へば、東はハヤ白み障子に寫つる鳥影二三羽。此日の夕暮最寄の待合茶屋にて、師匠の延定よりお香さまに一寸來て玉はれとの使ひ。お香はハヤよき友得てより、見識も幾分か增したれば、鄙しき踊り清元の稽古は、今日より思ひ切るべしと諦めしが、さりとて十日なり二十日な

り、師匠と頼みしその人の只今との使ひに、いそ〳〵と供をも連れず茶屋に尋ね行けば、表は舟板塀の意氣造り。庭石傳ひてお師匠さんはと聞くに、彼方は一向怪訝な顔。お師匠さんは男の方かと問はれて、お香も訝しさに堪へねど、慥しかにお宅で御座いますと問ひ答への其中へ、二階の階子をトン〳〵下り來る女中。最前迎ひに來りし者とてお香を見るや、お待兼です彼方へと案内して、奥まりたる座敷に通し、女中は萬事如才なく、このお座敷ですと云ひ棄てゝ勝手の方に去りぬ。お香はお師匠さまと云ひつゝ、障子明ればこれはしたり。驚きし聲忙はしく、姿はその儘中へは入らず。

艶々しき島田髷夕風に吹かれて、鬢の毛のチラ〳〵頬にかゝるも怨めしく。黒塗の東下駄塵を蹴立てゝ、縮緬のけだしひらつくも急がし。お香はこの夕暮に供をも連れず、一人いそ〳〵と堀留の河岸傳ひ、家に歸りて母親に物をも云はず、己れが部屋に通りてたゞ潸然と泣く、母は常ならぬ様子を案じて「お香お前何うしたの、泣いたりして、お稽古に行ッて誰かと喧嘩でもしたのかへ」問はれても答へず、たゞ口惜しさに袖嚙〳〵て、涙さへ——ほろ〳〵聲なり「コレお香、お母さんに譯をお話し、何がそんなに口惜しいのだへ」お香は口惜しさと、怨めしさに口も廻らず「お母さん口惜しつくて、モーチッとで人を慰みも

のに……」あとは問へど答もせず、女中に床しかせて寢るとの事ゆゑ。母は合點ゆかねど樣子有りげなれば、お香が心の鎭り し上にてと、思ひを殘して勝手に去しに、眠るかと思へば左はせず。燈搔き立てゝ涙を拭ひ、机に向ひ聖書繙き目を閉ぢて《アーメン》

翌日母は譯を聞きてこれも驚き、此日より清元の稽古を斷り、築地に居らるゝ米國婦人コールト、ヒング孃に就き洋學を修めしめぬ。延定より歸り來りし手代の話には、お定と梅次郎は其後近所で駈付ける程の喧嘩して、今は梅次郎の行衛も知れぬよし。お香は今日となりて、夫の離別を輕卒にせしこと思へば、

悲しく口惜しく。何んと云ッてお詫せうやら、一間の内に閉ぢ籠りて、言譯の文なが〳〵と認め、女中の手もからず、自から郵便函に投り込みぬ。心元に復りては、優しき夫の慕はしく日毎に母と影膃して。竢てば生憎に雨。晴るゝ日の少なきに、もしや道中に變りはないかと、用もなき電報度々掛けて、返事聞く事の嬉しさを、枕に通ふ移り香と見て、今宵も歸宅の夢に覺され、時ならぬ夜中に起き出て、母に何ぢやと叱られては、我れながら蓮葉に恥かしく。雨は晴ましたと云ひ扱けて枕に就けば、また一睡の夢とも判かぬ間に、夜はハヤ明けて旭キラ〳〵雨戸を射すに、氣もいそ〳〵と精一杯の化粧も、今日ばかりは

夫に喜ばせたく。お迎ひとして善兵衛を停車場へ急がし立てしが、後で無粋であらッしやると、心にも無く神様をお怨み申すも、まことと造物主の自在力ましまさば、この永い日を何んとして、塩竈よりの汽車上野に着くまでは。（廿四年作）

舞子

脉々涼風氣似秋。人遥斜日落邊樓。
沙明水碧鷗聲遠。一片煙帆是淡洲。

須磨

晩潮空咽水濱村。荒逕斜通山寺門。
公子墓邊眉樣月。漁歌聲裏又黄昏。

娘姿十五區

東京は了得に天下の大都、住む人の上を見れば方圖が無く、下を見ても方圖がなし。その上つ方は愛宕山の塔の如く、下つ方は鐵道線路の下にある新網の町にも似たり。ニタリあれば、田舟あり、傳馬船で花見する人あれば、炬燵で雪を見る客のあり、されば その風俗區々にして區々十五區の風俗は、十人十色の上に出でゝ、みな相異れる所ありと、まことや麹町娘の令孃風なる、淺草の藝人じみたる、居はその志を移すとかや。人情も此理に基き、區々に依て厚薄あり、土地によりて質素と

奢侈とあり、一錢三厘の洗湯に、糠袋一つで間に合はして、尙ほ垢拔けのする新造あれば、玉子糠、絲瓜、花筏、牡丹精、香水、小町水などを遣ふても、瓦に光無き娘もあり。水は美人に關係あるか、美人は水に緣あるか、京は女の名物にして、東京は男の產地といへり、然らば即ち東京の女の子は落第者か、否々、然らず、今や改良水道成らんとして、八百八町產湯を遣ふに便利よく、滿都の人士、悉く神田の兄哥と、高慢の鼻を齊ふし得らるゝに至らんとす。

こゝに美人十五區の時世の態を寫して、衣服の嗜好、流行の興抔左につらねたり。皆さん！御覽じませと云爾。（廿八年）

麹町區　ショールの令嬢

遲々たる春光、牛ヶ淵の邊に滿ちて、招魂祠畔に櫻咲く、只看れば紅雲一帶、近衛師團の外濠を裹んで、花と蝶と相驅逐す。彩霞あり、馬場の柵をめぐる、中に一頭地を抽ずるもの、これ大村故兵部大輔の銅像なり、遠くこれを見たまふ令嬢、玉顏を兩面張の傘に包んで、ショール着て立てる態、銅像の影法師と見るも可、着たる矢飛白の衣裳は、父が弓矢の餘光にて、何位とやらの位に叙せられ、營所の近くに卜居する武人の娘か、その姿高尚なり。

散る花や矢飛白の娘ヌッと立つ

神田區　職人のおかみさん

内儀の俗稱、山の神と呼び、おかみさんといふも、尊敬の意味は離れざるべし。正一位などいふ尊號は、貴婦人方にあらずして、却て外神田の裏店などに住む、親分達の女房につくなり。見よ、夫は終日働き通して、日給鳥の塒に歸る頃や、女房は家に在りて、一日の經濟を辨じ、夕餐の膳に一合つくる兵站部の行屆きたる仕方は、長屋中での司令官なるべし。萬筋の半纏に青耳のある八丈の襟をつけて、蚊飛白の單物は、年も葉櫻、節も極暑に間はあるべし。

更衣未だ半纏のとつおいつ

日本橋區　小紋羽織の御新造

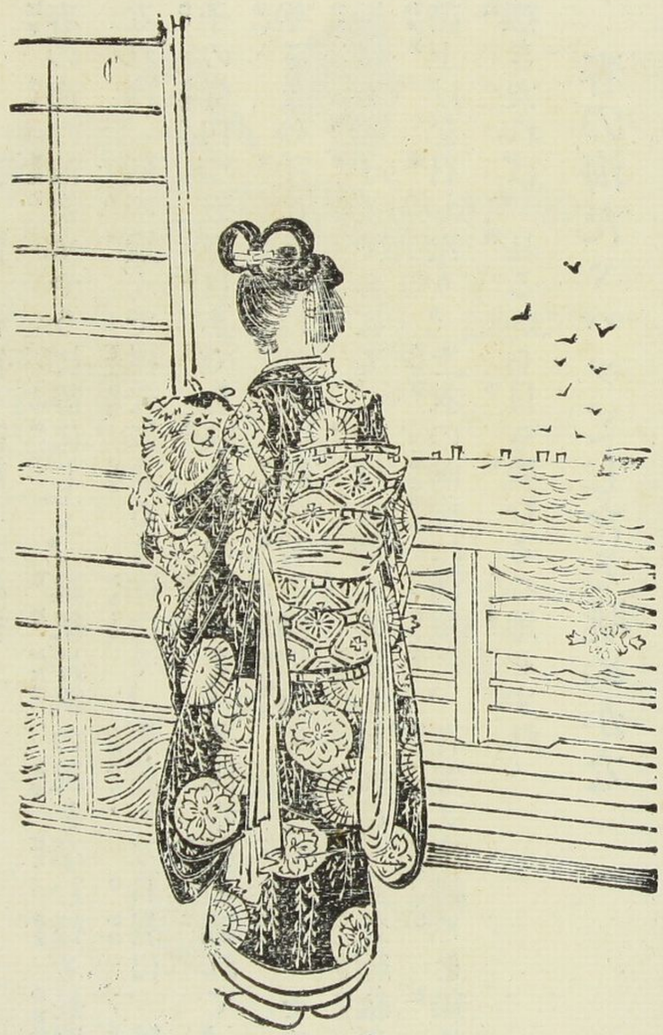
霰小紋の羽織は召せども、浮世の冬に霙降る貧乏人の境界を知り給はず。常に塗土藏の裏に起臥し給ふても、米の直は御存じなく、土一升に金一升といふ生へ抜きの本町に住めば、都の中にこれより好き處はあらざるに、物見遊山に供を騒がして、芝居の代り目は欠かした事なく、眉は剃つても、役者のお噂は止め給はず、子を産めば、乳母よ、子傅よと徵發して、其身は年中摩り研きにのみ氣を遣つて、それで御新造の役目が濟むとは、實にこれ天下の樂境。

湯がへりのピーヤリするや初嵐

京橋區　珠數爪繰りの御隱居

老ひては子に從ふの諺を守りて、浮世の事は孫子に打任し、身を佛門に歸依して、朝暮念佛三昧に耽り、珠數爪繰ることの殊勝さよ。ことさら老人の目敏き、耳敏き、また東も白まぬに目を覺し、寺の鐘に心耳を澄して、築地の六條樣へと急ぐ、冬の晨は霜柱に寒さ一入なれど、老ひの一徹合點せずして、納豆頭巾に、龜甲形の被布着けたるは、萬年も生ん心にや、年は七十幾つといふに、色も艶々して、目だに霞まぬは、此人の春長きことよ。

袖頭巾念佛たゝむ隱居かな

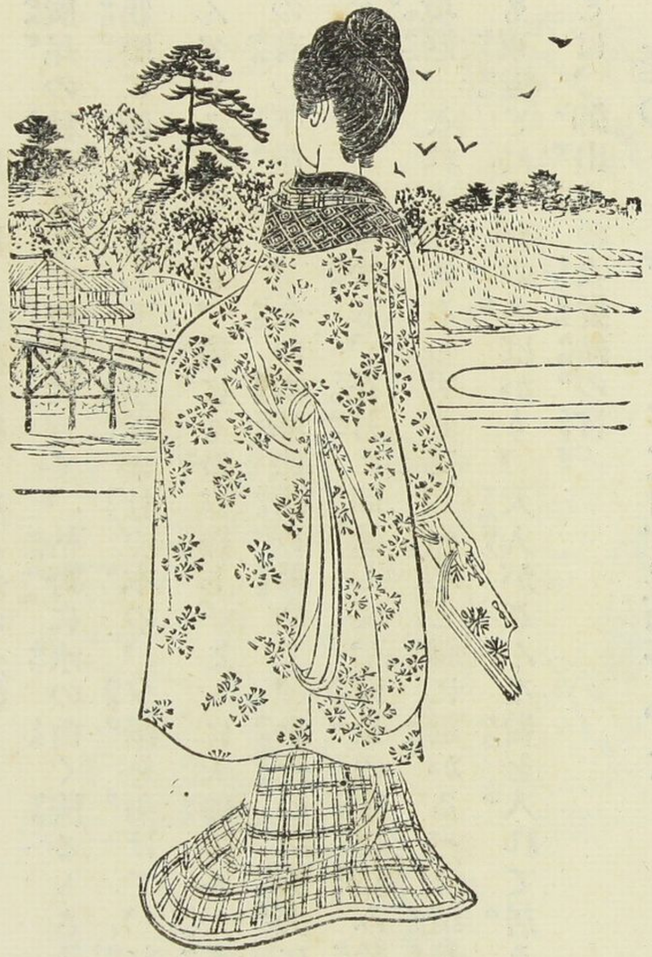


芝區

位爵も高輪のお姫様

春の海は波熨すやうに靜にして、眞帆片帆の風を孕む樣も長閑なれば、鷗の飛んで椽先に止るも面白く、影麗かな日暑は、障子の骨四つ五つ目までを映す程の温かさ。手飼の狆の馴れて、姫さまの手にまつはれば、鈴の音の幽に鳴もいとやさし。その髪はお稚子とやらにて、帶は金襴のお狹みに結び、欝金縮緬の帶上げを召したり、上衣の幽禪は薄風に、花笠と糸柳とを染め抜きれば、見るから目も覺むる心地ぞすれ。

春の海たゞパッとしたる眺めかな



麻布區　華族屋敷も廣尾邊の令嬢

廣尾の秋草はまた格別にして、枯野に水の白く流るゝさま、晩鴉塒に歸らんとして、冬近き杜の木の、夕陽を射けて、紅燃えんとする景なんど、畫にも及び難し。こゝに大藩のお大名、その昔の下屋敷を、今の本邸に改め給ひて、忠臣の三太夫に諸事を賭はせ、殿も姫も、花月に朗詠して、浮世の塵に染み給はぬ境遇、これ人間にあらずして、殆んど神に近かるべき清輿、髮も束髮とはホンの名ばかり、天人がこんな髷を入れて居まするとは、御出入の女髮結の言○

庭つゞきパノラマに見る枯野かな

本所區　春は花の顔冬は雪の肌の藝者

雪は鵞毛に似て、飛んで散亂する向島の土手を、鶴氅代りの合羽に凌ぎて、銀鼠のお高祖頭巾の、目ばかり見せたるは罪なるべし。春は花の雲に裹まれて、鬼事に客の興を添えたりしが、夏は葉櫻と世の人にからかはれて、素通の涼み船に嘲けられしも、雪の日の興あるは格別なり。山谷堀　待乳山の夕景色を向ふに眺めて、お座敷の歸り路を急げば、路には二の字の痕を殘し、家には行火を暖めて、待つお袋の慈悲深氣なる。

雪の日や竹屋はそこに見えながら

赤坂區　ゴム玉の色も赤坂邊のレデー

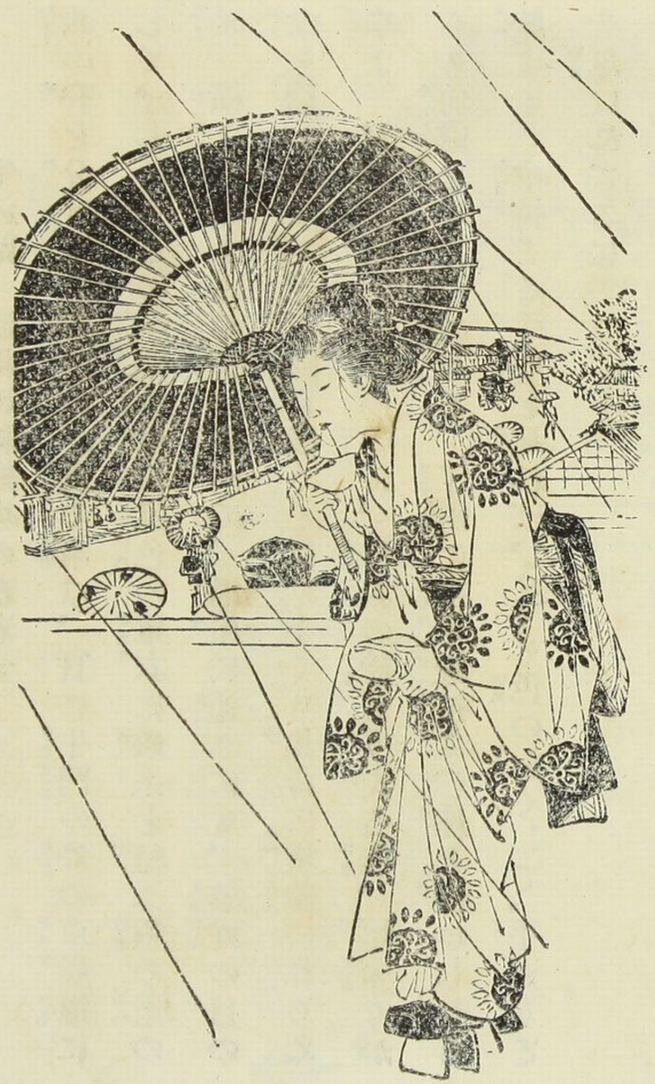
御所の甍、高く聳へて、雲を摩づれば、濠の氷の春の日に溶けて、水禽の羽音させて飛ぶも勇まし。こゝに唐織の洋服召して、お妹御と共に散歩なさるゝレデーは、そも誰人の子におはしますぞ。鳥に比するは勿躰無けれど、そのお姿孔雀の如く、ポンチットの鳥の毛は、お羽孃とでも呼ばれ給ふ姫君か、風船玉に餘念無き妹御の罪の無さは、天使か、神の子か、頬の肉は豐かにして、笑ふ顔の優しさは、春の小波の戰ぐかとも怪まれけり。

ゴム玉の蝶を追ひ越して春の行く

四谷區　黒紋の羽織はさても高尚な奥様風

まだ二十歳の坂は超え給はざるべきに、根上りの丸髷、五分玉の珊瑚珠に、金脚の釵は仲働がして呉れた奥様風、羽織の着附、小紋の上着、いづれ位などのある家の令嬢なりしや。新婚旅行の道中に若い者を羨しめたるは、ツイ近頃か、仕打の初々しき、物事の控え目なる、飯事のやうなりなど、評されて顔赤むる程の優しさは、結句花嫁の地金見えて、人間一生の快事、今この時にあるは、これなる人の身の上なるべし。

若葉して鐵漿似合ふたる新婦かな



牛込區　遠見に神樂坂の藝者姿

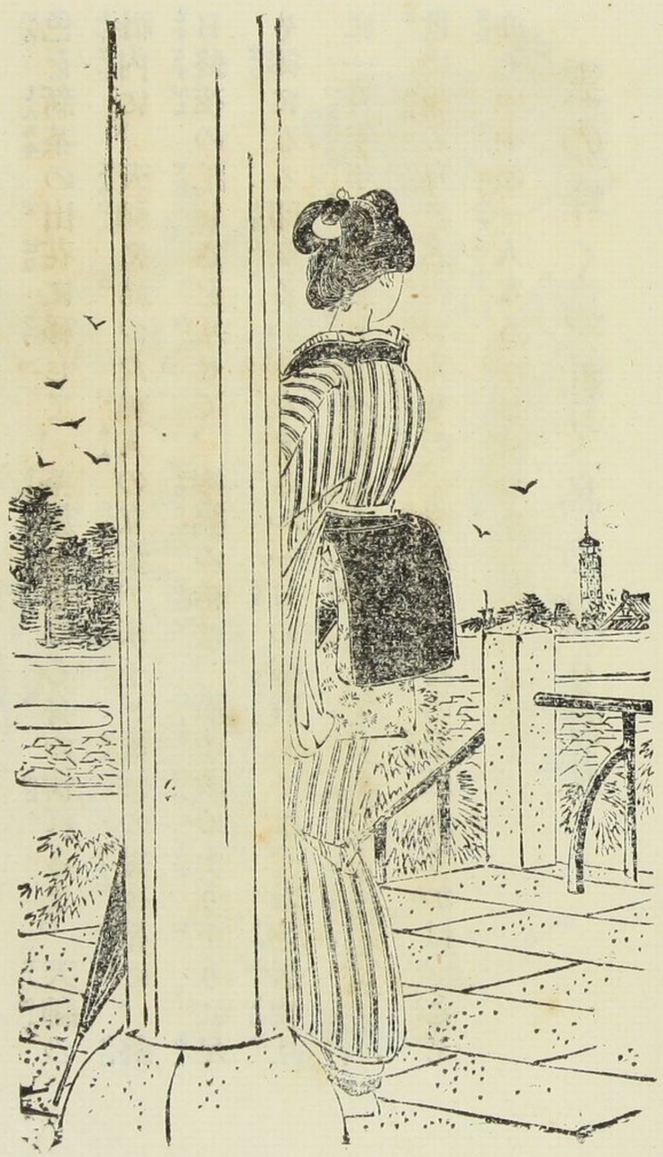
馬の脊を分けて降るといふ夏の雨は、實に牛門の外の草履道にして、しかもこの神樂坂は、空色の單衣に銀糸を縫ふ程の雨の足。横丁の姐さんが糠袋喞へて、湯屋に通ふにも、澁蛇の目の傘を翳しかけて、横降を凌ぐとは、よくも馬背に境論の起らぬ事よ。だらし無い朱子の帶に、浴衣の褄どりたる態、塲末ながらも何處となく垢抜して、了得に三味線持て、座を浮かしむる腕よと。傘持てる手筋を見れば、さても色の白くして、手どりとも思はれざるに……。

新道を夕立の颯と通りけり

小石川區　新芽は未だ柳町邊から學校通の娘

初三の月の圓かれと願ふに遲く、娘を育つる親の待遠がるは、愛の深き故なるべし。道は遙かなれども、學びの道は高等なるこそよけれと、お茶の水の邊まで通はして、螢雪の業に精出さすること、世にあり難き惠なれ。包み抱えて、傘さしかけて、柳町から通ふを見れば、春は芽を吹く、出世する。氏は無くとも、怠りなくば、玉の輿にも乘らるべし、今日の襤褸を錦繡に代へて、花を飾るの日のなかるべき。

秋の日やいま學校を出たばかり



本郷區　新茶の湯島出花は茶屋女

色を新茶の出花に移して、茶屋女となる身の憐れさよ。天神の社内に、天神に結つた美人の立姿、朱子と更紗の晝夜帶は、終日終夜の忙しさを見せて、棒縞の袷は、階子段の上り下りに足も棒になる印なるか。たまさか一日の暇貰ふては、お芝居物見に一月半年の壽命を延べて、辛氣臭き身の上を喞つも道理なり、世に籠の鳥と名のつくもの、豈傾城の身の上ばかりかは、こも亦その中の一人なるべし。

雲の蜂くづれて鳥の歸りけり

下谷區　品は上野の不忍に蓮見る娘

漢法醫者などの娘か、古風に化粧立てゝ、月前に物思ふ風情あるは優なり。文金の高髷に、菅糸の根がけ、中振の單衣に純子のお太鼓、黑塗のポックリに、コックリ思案の躰などは、悪い洒落といふべきか。芙蓉水を出でゝ、夕風袂にあまる、美人歩を轉ずれば、野草の露、はら〳〵と溢れて、轉々珠玉をまろばすも妙、日落ちて、鐘聲煙を罩め、月出でゝ、燈影水に流る。風無きか、荷葉動き、人無きか、短笛樹間にあり。光景、眞箇に小西湖。

蓮咲くや未だ靄ながら塔の尖

淺草區

未だ十歳の上を被布三ツと越えぬ嬢樣

鳩に豆飼ふも功德の一つや。淺草觀音の境內に、慈悲する親の多きは、我子の福德圓滿を望めばなり。されば仲見世の繁昌多きが中にも、翫弄物屋の數あるは、子に甘き母の夥しき證據、よし淺草寺の誓ひは淺くとも、愛の泉は深かるべし。女中に手を引かれ行く娘の年、十二か三か、きり下げの髪を、近頃ひき伸せしか、しかも上品なる姿風俗は、有福なる町人の御秘藏なるべし。衣裳の模樣は華美にしてしかも優し。行水に扇流の幽禪は、末廣かれとの心にや。

木枯をフンまへて立つ仁王かな

深川區　嵌ればこれも深川の圍ひもの

水の流れと人の身の行末は、思ふに定めぬ淵瀬にして、深川の深流に嵌り、男の圍ひ者となるこそうたてけれ。これとても素性を洗はば、濁江の岸に生ふる蘆の根にもあらざるべきに、稻小舟の思ふに任せざるより、零落して日蔭者となり、黑板塀の裏に圍はれて、匈奴に泣く昭君が哀れも他人事にあらず、黑朱子の丸帶に、明石の衣を、身に着けても、すまぬ心の結ぼれてや、洗ひ髮の頰にかゝるは、態とならぬ憂ひの籠れり。

涼しさや佃に消ゆる篝の火

鷹の羽

今歲も早く花の飜れて、春は一雨毎に地に敷くといふなる昨日今日、未だ葉櫻の葉も揃はぬ枝に、五日あまりの月の懸れるも、何處やらに淋し氣な心地がする、和田鷹城君が、雲の彼方に入相の鐘霞む夕間暮、せめても手向の花一枝と、躑躅花を折つて、君が寫眞の前に供へ、回向と共に想ひ出さるゝ、生前の逸事の一ッ二ッ、朧ろげなれど、こゝに書いつけて見んか。

年は忘れたが、僕の未だ山形市の太物屋に、丁稚奉公をして居る頃の事であつた。固より學資などいふものは、目藥にしたい

程もなく、書籍は市村といふ豪商のと、八文字屋といふ本屋の店のとで勉強した、その折その本屋には政助、大吉といふ二人の管頭がゐて、僕の貧を憐んで、竊に店の本を貸して、讀まして呉れた、まかしその本は賣品であるから、旦那の店頭に居らぬ折を見て、僕に内々に貸して呉れる、それも一冊一夜の約束で、二冊も三冊も纏めて貸して呉れた、僕はそれを白い紙に包み、手垢をつけぬやうにし、徹夜をしても讀んで返したものである、恰度その折であつたらう、或日大吉君のいふには、今東京から面白い本屋が來て居る、紹介して君を逢はさう、屋號を春陽堂と云ひ、和田鷹城といつて、商人に似合はず、義俠心に

富んで、愉快な男だと云つて話してゐる中に、一個有髯の偉男子が、白天笠木綿の大風呂敷で、本を山のやうに脊負つて、この八文字屋の店に這入つて來た、管頭は低語して、噂をすれば影とやらで、今君に話したのは、この人なんだと云つて、言葉を轉じ、時に和田君、この小僧さんは、年のお若いのに、小説が好きで、作るのも巧手なんです、何うか引立てゝ下さいと引き合はせる、僕は不愛想に一禮して、その人の顔を見ると、髪は其頃自由黨苅とでも云ひさうな伸び鹽梅、額に八の字の皺があつて、鬚は顔の半面を隠してゐる、この學者然、否、耶蘇教の牧師然たる偉男子が、これが商人であるかと、再び君の容貌

を覘ふに、威あつて猛からぬ物の云ひ振、可愛らしい口元から、滴るばかりの愛嬌を傾けて、貴君小説がお好きですと、勉強になります、お遣んなさい〳〵、旨く書けたら出版しますよと、云つて呉れた、その時の僕の愉快さ、君を神か佛かのやうにも思つた、僕は斯うして居る中も、傍に主用を抱えて居る身の上豆腐の御用が遅くなるといふ鹽梅で、急いで旦那の家に歸つて見ると、果してお目玉、それも其筈一寸二三町の處で、二三時間も隙どれるのですもの。

斯くてその翌年の春であつた、僕は一旦鄕里に歸り、病める母、君に隨行して、小野川といふ温泉に一月餘逗留して居つた、そ

の折に綴つた小説一篇を、臆面も無く、春陽堂主に送つて、出版せんことを云ひ込んだ、然るに別にその返事を聞かなかつた兎角する中その翌年の秋、母君は死去り給ひ、父君は幼より無き數に入られて、僕は邪魔する雲も無い一人者、飄然として東京に來たが、さて儘ならぬが浮世で、こゝでも二三年の辛抱泣くほど辛らい事もあつたが、それや是やで、春陽堂に原稿を送つてある事も忘れ、またその儘で二三年を送つた、時は廿七年の暮、僕が博文館と斯ふした譯になつたにつけ、君は同業者であるから、今後の引立を賴まうと想つて、君に逢つた、すると君は膝を叩いて、左も一大發明でもしたかの如くにいふ、

ア、想ひ出した、乙羽さん、貴君に私は山形で逢ふたヂ、それは今より十年以上にもなりませう、その時分は貴君も渡部二橋と云つて、私に小說の原稿を送つた事があらう、その原稿今以て保存してありますよ、今お渡し致しませうと云つて、一纏めにした中から、姓も號も今は變つてある草稿を選り出して、僕の手に渡された、僕はその用意の周到なのに驚いて、能くまア保存して置いて下された、有難う存じますと云つて、棄兒が再び出世して親の手に戻つた程の、大悅喜であつた。僕は二度も三度も禮を述べると、君は微笑して、原稿で飯を食べる商人が我が物と定まらぬ草稿を疎末にして好いものですかとの謙遜、

これでこそこの業を成就された筈と感心し、敬服した、世の方々は斯かる例を御存じはあるまいが、今の僕には不斷に例のあること、日々に何十篇といふ投書が諸方から舞込むが、受身になる當人の左迄に重きを置かぬに引かへ、作者の苦心は尋常一般ではない、が、忙しいに紛れてツイ名も無い人の草稿を、十年以上も保存し置くと云ふ事は、到底出來難い處置だ、實にこの一事を見ても、君が事務に忠實にして、用意周到な人といふ事が判る、僕も今や元の丁稚にかへり咲、これからが一花といふ盛りの年、是非君の「用意」を手本として、丁稚は丁稚だけの職分を盡したいと思ふ、古より名人は時と相關せず、放擲が

學者の豪らい所だといふやうな中に、僕も矢張一ッ水を呑んで居ただけ、事務にかけては未だ一年生の心地がして、此所小心翼々の體に御座りまする。

斯く思ひついて、筆を採つた今夜は、恰も父君が十七年目の命日、手向の花の露未だ乾かぬ中での述懷、これも他生の緣でがなあらうか。（三十二年）

美人八容

雪こそ墨田の面白き眺めなれ、鶴氅を着て俳諧する茶人の、植

半に陣取るあれば、コートつけて行く娘の子の、小梅の田甫をぬけて、土手に出づれば、吹雪は枯木に花咲かせ爺の、灰にても撒きたらんやうに、紺羅紗も霜降に見ゆるぞ興あれ、川向ふの今戸橋塲は、眠れるやうに沈着いたる景色に、枕橋をあしらひたる、川には舟を漕ぐさへ見えぬ、觀音の屋根、五重の塔、さては十二階までを、遠くパノラマの如く見せて、雪にコテと塗り立てたる、厚化粧の遠見近見、さりながら紅いものは、微塵も見られぬ、この雪の中に、澁蛇の目の傘さしかけたる玉の腕の、袖口から洩るゝ寒紅梅の襦袢の袖、春はこれぞと藤色の頭巾の顏の、たゝ目ばかりなるぞ怨めしき。

土一升に金一升の譬はあれど、昔から升で量つて見た人もあらぬを、さて日本橋の賑ひは實に言語の外なれ、車馬絡繹、肩摩轂擊といふ辭の、旨く繁昌に當て嵌りて、五分とも隙の無い、土藏造りの奥座敷は、人馬の響きも聞こえねば、表通りと變りたる浮世の裏の、閑靜にして、しかも悠々たる活計向には、お孃樣の何時も、手飼の猫を愛して、玉や々々と巫山戲給ふ外は、鈎の音のチンとも聲無く、春雨のしめやかなる、中庭にある盆栽の塵を流して、手水鉢の根の葉蘭に、サラ〳〵と音するもうれしや、斯くて管頭共にランプとか綽名さるゝ大旦那の、セ、コマしく晝の飯喫べて、店に出られし跡は、また寂寥と鳥の

立つたる古渡のよしあし、役者の噂に日も七ツ下りて奥樣の墓參濟せて歸らるゝまでは、諸事は孃樣と乳母やとの世界なる、思ふに久松とお染樣との情も、退屈紛れの、コンな時に出來たのならむと、トンだ所で哲學を研究したものと友のわれを冷評しける。

炭手前だの、服紗捌きだのと、いろ〳〵七面倒の行儀作法ありてこそ、女子の姿を優しう形つくれ、夏は涼しき風呂の湯に、松風の音を聞けば青簾の蔭に午睡の夢も覺めぬべく、秋は濃茶の飲みまはしに、淋しさの暮も忘れて、友の寄居を喜ぶめり、冬の日の爐開き、枝炭の白き色の、雪の枝とも思はれて、茶の

銘の「白」とあるにも、氣も心も沈着きぬるぞうれし、春は花に浮き立ちぬる空を見やりて、こゝは茅屋根の檐に茶の煙の立つも興あり、茶よ、茶よ、われは酒の德を汝に讓りて、新に百藥の長者に押さむ。

お茶の水の邊にこそ、今の世の清少納言、紫式部はお在すなれ、幼くして學びの窓に入り髪を唐輪に、紫の袴をひらつかせて、雪か霞かの唱歌に、春の野邊を蝶の如く飛びまはり、それよりしては蟹の這ふ横文字の、文の林に分け入りて、また踏み迷ふ言の葉の、テニハも落ちて秋の霜、鐘に更け行く月の夜を、なが〳〵しくも明方の、鷄の啼音に驚きて、夢ばかりなる勤學も、その甲斐見えて、卒業して、また百年の身を他人に寄する、女子の末ぞ憐れなる。

漾々たる春の水、これを一家團欒の裏にも譬ふべく、嫁なる人の柔順なるには、鬼千疋てふ小姑の角も折れて、お袋樣の御機嫌は不斷に宜しく、父親は何時も布袋面の福々しさ、愛の水も、笑の波も溢れて、家中は喜び聲の春の海、たま〳〵嫁の里に歸りても、舅姑の上を案じては、一夜も泊りたることは無く、今日も風折なき柳島の土手を、下女に送られて、暮れぬ間にと急ぐ家路、お三どんは膨れ面の愛嬌もの、問はざるに話仕掛けて、御新造さん、丸髷が大層お似合ひなすッて！

これも疇昔は綺羅を着飾りたるを商賣の手違ひなどより、通町の店も張り切れずなりて、八百八町も塲末の擔並に、詫びしく暮らす大家の三代目、零落れての今も、娘には美き衣着すれど、憂は目元に聚れり、この夕暮を手を引きつれて、妹と共に語らひ行く姉、容目の尋常なるはよく、ゆうに優しきも、諸人の愛は惹くべし。

天地も目覺ましてや、東の空明うなりて、夏の雲の流るゝやうに消え行き、やがて日は昇りたり、蓮の花の二ッ三ッ四ッ、齊しく咲きて、青き葉の上に、水晶の如き露の殘れるも清し、不忍の池の畔には、昨夕氣の藝者の、寢くたれ髪を五月蠅さうに

搔上げて、蓮見と洒落たるも憎らしく、猫ぢやらしの帶のしだらなき、新形の單衣を風の吹き捲くるに任せて、東下駄のカラコロの音床しく、チョイと姐さんの聲もなまめかし、彼は芙蓉水を出づるの趣あれば、此は海棠の雨の朝といふ姿あり、路に大學生に行遇ふても、洒啞々々乎たるは、蛙の面に化粧の痕もなく、口紅は摘み食ひせし時に落ちしまゝ、片頰に枕の痕の殘るもうたてし、しかも身は夜を晝なる稼業の、人並に朝起して、蓮の花見とは、物數寄屋町の姐さん達、イヨ大出來と、この處大マケに褒め置くべし。

三圍、牛の御前の花は、所謂俗に近くして、妙ならずと、乙に

澄ましたる女學生の、バイブル片手に、梅若祠前に歩を移したるは物凄し、總じて生學問は鼻につき易く、生開化は、兎角自由結婚をやりたがりて、お腹が膨れ出してから、親の許可を請ふ人の多きは、田舎出の女書生によくある事なり、長堤十里、花を織り出す向島は、鐘ケ淵に至りて、人無く、綾瀬の流は、鏡の如く澄みて、舟を行る人の、畫中に在るの趣あれば、筑波は遠山の黛を凝して、白帆の陰に隱るゝなど、何たる面白き眺望ぞや。（三十二年）

送漣山人辭

友あり、漣山人といふ。學は舶來と和製とに渉りて、今の文壇にボッチャン小説の一派を開く。近江の種を江戸の水に洗ひて、永らく市に隱戀坊なし、戀川にありて綾町と名乘る。その漣と號するは故郷忘じ難しとの意なるべし。

滋賀の浦浪には忠度も花に涙を灑ぎ、湖水に映りし月影には、紫式部も石山寺に五十四帖の服紗をひもとけり。山人この中に在りて、いかで斷腸の句なかるべき。友禪染はその鴨河の流れを汲みたるなり、初紅葉は立田山の俤をうつして、お年は未だ

青けれども、他人は其文を將て輕妙といふ、これ東男が京の水に磨き上げたる腕前なり、豈垢ぬけせざるを得んや。

山人の文章はたとへば水彩の畫の如し。多情多恨の圖取は千縷萬絲の隈を描けども、何處やら愛度氣なき所作は、なほ桃太郎の黎團子に同じく、日本一と稱してよし。予幸に山人と交を結ぶことを得て、文を談じ詩を論ずるこゝに五年、友情恰も妹脊貝の如し。今やその貝の間を割て、山人は嵐峽の麓に遊ばんとす、地は故郷に近きのみかは、東山の晩翠保津川の殘紅、一々山人が藥籠中のものとなりて、携ふる所の貝は彩毫を浸す繪の貝皿となるべきも、予が手に殘る片貝は片思ひの怨みとなり

て、花にも鳥にも涙をそゝぐ器たるべし。吁、嗟別時、名殘なほ未だ盡きじ、未練は秋の蝶と化して、行く人の餘香を趁へども、翼無き身を如何せむ。時は晩秋、殘月白く驛鈴冷なる處に、山人の行を送りて、不肖聊か餞の辭を爲す。（廿五年）

木枯や君を送りて一里塚

勇み肌

幕府世盛りの頃。しかも花は櫻木、人は武士の中の八萬騎に、坪内左近といふ侍あり。武藝において免許を得ざるものなく、殊更馬術を能し、騎射に長じけるが、ある日雉子橋御廐に出で、

譽古の歸へるさ、九段坂上にさしかゝるに、萬屋といふ酒屋の前にて、樽拾ひする小僧、または中年以上の下男なんど、店頭に仕入たる酒樽の積みあるを、各々さし上げ競べしてありしに、左近も興あることに思ひ、馬をとゞめて眺め居る中、弗と口を辷らして。その酒樽一つ位をさしたりとて、力あるものともいはれずと嘲りしに、居合はす若者ども聞きつけて腹うち立て。何を云ひ給ふぞ、己は馬に騎りあて、他人の力業をけなしなどするは、腕わざを知らぬ者の言さまなり、下りて一さし指し給ふべし、首尾克くさしたらんには、この酒樽は御身に進上すべしといへば、左近から〳〵とうち笑ひ。いざ武士の手練を見せ呉

れんずと、馬上にありて並べある四斗樽を、左右に一ッづゝ引提げ。こはかたじけなし、町人たしかに貰ひ行くぞと、馬を早めて駈行けるさまは、さすがに武家の若殿原とて、勇ましき振舞かなと、人々賞めぬはなかりけり。

雷電は世に鳴り響きたる力士なるが、寛政の頃かとよ、春を孕みし隅田川の櫻花は、昨日今日より咲き揃ひて、堤に人の山を築き、舟には何々丸の銘を打て、宵ならねども千金を惜まぬ客も多し。雷電もいざ花見んものと、容貌美き妾を伴うて、三圍の社近く來りけるに、弗と堤にて行逢ひたるは、その頃蒼蠅き朱鞘の一群、しかも劔術に名うての男谷某といへる侍が、門弟

數多引連れての花見三昧に、かねては名聲を羨む下郎の意地きたなきより、酒狂に事寄せて、一人の門弟が手にしたゝか唾をかけ、雷電の顔へなすりつけたれど、さらに意とせず。其處はあぶなし、脇差の樹の間をくゞらんよりは、花の下道こそ心安しと、土手を下りて田甫道を、妾と共に行き去りぬ。男谷は却て赤面し、いたく門弟の狼籍を戒めていふやう。世に力士ともいはれ、幕ともいはれたらんものゝ、いかでさる些細のことに喧嘩や買はん、政宗の刀は柴を樵るの器にはあらぬぞと、叱りつけしとは、實に興ある話ならずや。

人も知る鼠小僧治郎吉は壯年の頃、賭場に在りて丁半に耽け居る時など、兒分が金錢の無心を云ひ込めば、何時も胡座組みて、勝負する金錢を股ぐらより掴み出し。サアと云ひて手を背後にまはし、その人の顔を見ずして貸し遣るを、不斷の事にしければ、餘の人不思議におもひ。親分が金錢を貸すに、いつも手を背後に出し遣るは如何と問ふに。さればなり、人は今日絹布の廣袖を着たりとて、明日は菰を着ること無きにしもあらず、その時借人の顔見覺え無くば、返し呉れといふこともなるまじ、よりて背後に出して、その人の顔を見ぬなりと云へる由、江戸氣性の勇ましといふはこゝなるべし。（廿五年）

京の雪

われの京に遊べるは、いつも春の初めにして、雪の東山を、春月の夜に見ることなり、先つ年勝を三井寺に探りて、疏水を下り、蹴上げの泥を脚袢に浴びて、草鞋を三條小橋に脱ぎたりしを、柳の馬塲の漣の聞きて、われを「おのぼりさん」と罵倒せる折なりき。一夜風荒みて、さらりと降り積りたる雪の朝、川原に近き旅籠の、二階の窓を押開くれば、東山も鴨河も、雪に厚化粧の、容姿をつくりて、たゞ眞ッ白のその中に、川添の柳に鴉の止まれる、黒きはそれのみの、華やかなる朝日は、水晶簾

を透して、木屋町の翠帳を照せば、紅閨に未だ睡足らぬ美女の、日闌けて欄に凭るもありき、われは懐中寒き窮措大の、四條の蠣飯屋が手頃なる頃ゆゑ、他人の贅のたゞ小癪に障りて、財布の錢のあるに任せ、菊水の支店に、腹を鱈腹膨らして、清水に登り、雪の京を見渡したる時の愉快さ、今もなほ忘れ難し。さる程に去年の一月も、恰度京に逗留して、柊屋の二階を城廓と、用心堅固に打守りつ、他人に敗を取らざりし翌日、恰も好しモト京都守護職たりし會津侯の令息、松平容大子と、東山の雪を見捨てゝ、歸りたる時の無念さ、今もその景の眼に殘りて、忘れ難きを如何せむ。（卅一年）

まる窓を額に見立てゝ雪の山

團洲別墅

日本市川團十郎が茅ヶ崎の別莊は、遠からんものゝ、音にも聞き。近くは寄つて眼にも三升の親分が、數奇を盡せしものなる事は、先刻から知るも知らぬも、午前八時よりとの招待によつて、云ひ合はしたかのやうに新橋停車場に寄り集る、その面々には伊國公使。葡國代理公使、西國領事、外數名の伊太利人、日本の名士には積積（陳重）和田垣兩博士。神田男爵、朝比奈碌堂、尾崎紅葉、長田秋濤の各外國通と予もその列に連りて、

待合室に手を握り合ふに、いづれも團洲とは相識の士なるも面白く、滊車は八時半といふに新橋を出でぬ、一車借切の水入らずなる中には、葉卷紙卷の莨をいやが上に積み込みて、鼻からは煙、口を衝いて出づる話柄は何事ぞ、和田垣博士の川柳論、先づ幕明きを告げて。滑稽頤を解く間もあらせず、次は紋章の話から、銘々のお里を洗ひ出して、君も我輩とズウ國かと笑ひ轉けるもあれば、話は端なくも碌堂君が朴齒の古足駄の論に移りて、その相棒の古麻裏を、秋濤君の穿けるも可笑し。我が物を棚に上げて、他の帽を評する次で、紅葉君の茶絽の長袴を、珍らしと手にとり見るなど、時鳥も啼きさうなる曇空を、かけ

る瀘車中、デッペンから爪先まで、批評し合ふ事なれば、就れも身構へして、敵の襲來を恐れ入るが如きも興あり、瀘車は水を出で、山に入り、杜に隱れ、野を行く毎に、眼を窓外に遊ばすれば、天地たゞ青きが中に、白く輝く小川に傍ふて、駄馬の駈くるなど、畫にもして欲しき眺望なるを、寫眞氣ある僕の、何條見遁すべき、たゞ籠の鳥の出るに由なきを奈何せむ、戸塚の隧道の闇も、車中は葉卷莨の星の閃めき渡りて、紳士の口元の髯ある邊のみ、火を吹く毎に明きも妙なり、さて洋人の高聲にて談論するを、何事ぞと耳を欹つれば、曰く港務局權限論、曰く海軍裁判說など、御身分に相應なるも面白し、瀘車は頓て

茅ケ崎停車場に着く、見れば染五郎の羽織袴仔細らしく着飾りて。我等の一行を出で迎ふるに會し、直に茶屋に赴きて、少憩しつゝ、それより十數輛の拳車を驅りて、元の東海古道の松並木を通り拔け、百姓家の二三、夏木立に交りて建てる村外れに出づ、そこには榮華の夢を午睡に見るべき、粟餅を賣る茶店のあれど、洛陽に汽車の出來てより、わざ〳〵此處に腰を休むる、青雲の書生もあらぬなるべし、漸く濱邊に近づけば、ザク〳〵路の車は遲く、四十分ばかりにして孤松庵に着きたり、斯くて我等一行、谷口氏をも合せての十六羅漢、先づ本堂に居並びて、結跏趺坐と打寛ろぎ、マアお羽織をお上衣をと、右から左から

新橋特派の尤物が手を出して、下にも置かぬ待遇に、名々顔の相好を頽されたる處、正にこれ李龍眠の羅漢畫、和洋折衷、似た顔の無い所が妙とや云はむ、扨當日團洲が欵待優遇の一班は、秋濤君の筆に讓りて、故らに予が減らず口を叩かずと云。（卅二年）

日光結構記

この月十七日は、内地雜居といふ前代未聞の盛事なれば、歐人も米客も浮かれ出し、新柳二橋に入浸りて、赤ひ鼻毛を延ばし、碧い眼の眦を下げて別嬪さん、日光結構ありますと、和洋折衷

の駈落も仕かね間敷き見幕なるに、負け嫌ひの我黨四人が、奮然として立ちたる脚袢がけ、麥藁帽を阿彌陀に被りて、草鞋穿きの足輕く、上野停車場に駈け込みたるは、第一回の回遊列車に乗らんとてなり、時は恰も數入の十五日、さして行く地獄の釜の二荒山、明け放れたる東雲の、朝は未だ五時といふなるに、ガタリピシンと鎖す戸の、窓から白み鷄の啼く、東を出でゝ大宮や。栗橋、小山、宇都宮、さては鹿沼に、今市と、わつが四五驛を停車せしのみ、千里一飛の勢もて、八時を少し過ぐる頃、目ざせる驛に着きたりき、乘つたゞ〳〵、停車場より神橋まで、立錐の餘地すらも無き人の波、兩側の旅籠屋から、お休

みお泊りと五月繩いふを我々は他所に見て、鳴蟲山を左に、お宮の下手を直とぬけて、大谷川に沿へる茶屋に憩ひ、こゝにて寫眞機を負ふべき人夫を雇ひ、先づ御用邸を拜觀して、八幡の社に詣で、延命地藏の坂を下りて、蓮華石村に出づるに、この わたり一圓は、近々に東宮殿下を迎ふるため、道普請の用意をさ〳〵怠らず、大日堂に至りて、先づ一枚とレンズに景を疊みて、中は見られぬ玉手箱、細尾村に出でゝは、牛馬鐵道に傍ふて上り、馬返に着きたるは正午近き頃なりし、こゝにて晝餐たぶるに、湖水の名物赤腹の甘露煮と、干瓢を皿に盛つて出すを、松魚子それは何やと問ふ、こゝの赤腹は東京のハイ、奥州にて

はハヨと云ひて、我は至極の好物なり、さて香の物を何やと見れば、若き胡瓜の鐵砲漬、緣にからまる紫蘇の葉に、悪い落だが、ハイの干瓢とは、面白き洒落成ずやと、我の一座を笑はしたるも、近來稀有の一興なりし、こゝを出でゝ二三町、岸に傍ふて行けば、斷巖削り成すか萬仞の皴、水は激して、雪となりつゝ流るゝ彼方の木立に瀑布の懸るなど、奇とや云はん、妙とや稱へん、女人堂とて、昔時はこゝより女人禁制なる阪に上れば、山は嶮峻、森嚴と評しなば、川中島の形容めけど、慈悲心鳥も啼くなる木下闇、空は曇りて薄靄の、樹々の梢を裹みたる、雲の中行く九十九折を、兎角して方等瀑前の茶屋に着き、澁茶に

喉をうるほしては、また上り行く劍ケ峰、大平に出づる途中にて、果して驟雨に遭ひたりき、頼む木蔭と人無き茶屋に腰打かけて、暫時霽間を持ち居る中、我は機械に肱を置きて、うつらくと居眠る時、耳元にて大喝一聲、この野郎とて詰め寄りたるは、氣早の松魚子なり、彼方は雲助の無作法にも、他の鼻の前にて、破れ草鞋を穿き交ふるに、その飛沫の此方の顔にかゝりしとて、怒り立ちたる樣子ゆえ、我は先づ松魚子をなだめ、雲助に詫言云はせなどするに雨は上りぬ、いざこの間にと、急ぎて山を上り、平に出でゝ少しく行けば、水聲滔々として聞えたり、一行は直に華嚴の茶屋に走せ着きて、瀧の面を見渡せば、

靄深く立籠めて、瀧ある方のそれぞと明るく、わづかに白く淡く眼に映ずるのみ。水晶簾を懸けたりと、古人の評せる絶景は、見えざりしこそ怨みなれ、崖の小道を少しく下り、危うげなる掛茶屋にて、雲の晴れるを待てど暮せど、たゞ韡韡たる水聲の、一上一下、耳元近く聞ゆるばかり、折節は岩燕の黒く靄の中を翔翱して、眼前咫尺、猿架といふ一種の苔の、霧藻のやうに、大木の梢にもやゝと懸りたる枝に止まれるのみ、何時まで待てど雲の斷れぬに、止む無く歩を轉じて中禪寺に出でぬ、南岸橋の上に立ちて、湖水を近く觀望すれば、一帶の白雲萬疊の山を繞りて、青き頭の影のみを水に映せば、岸には小舟の二つ三

つ、翠樹青草の下に維がれあり、黒き華表の此方には、畫樓倒まに湖面に落ちて、欄に凭れる美人の影を蘸するなど、繪も及び無き風景なり、折から晴るゝ靄の奥より、美人の乘れるボートの來りぬ、遁しはやらぬと玉に寫して、さてその人の素性を問へば、佛公使館一等書記官ボンヂー氏の夫人及び令嬢なりき、我は直にその家に抵り、刺を通じて、事の次第を告げ厚く禮を述べて退り出でつ、行きて蔦屋に憩ひたり、こゝにて寫眞の乾板を入れ交ふべき、戸棚は無きかと搜せしかど、いづれも光線の徵塵洩れぬはあらざれば、詮無くて、地底の氷室に入り、外より堅く戸を鎖さして、寫眞の用事は辨じたれど、さて戸外の

番頭の我一人を闇處に棄てゝ、呼べど叩けど、答へは無く、氷の上の阿鼻地獄に、半餉ばかりも幽閉めたりき、漸うにして同行の及堂子、慌てゝ扇を引明け呉れしに、蘇生りたる思ひして、婆娑に出づれば日は未だ高し、これから湖水を舟にて渡り、湯本口まで蕎地に至らんものと、宿の亭主に相談ずれば、仕立船にて六十錢、只今直に出まするといふ、それ宜しと、ビールと佳肴を用意して、裏手の波止場を出帆せり、かくて舷を叩いて、朗かに詩を吟ずる松魚子、肱枕して夢想兵衛を擬ぬる春葉子、酒は濃く、肴は味美く、しかも荷負ひの老爺の質朴にして、折々滑稽を演ずるなど面白く、船は紅白だんだらの帆を孕ませて、

矢よりも疾ければ、それ新棚よ、古椰の村よと、湖畔大方は異人館なるも怨めしく、歌の濱、上野島など次第に遠くなりて、勝負が濱のやゝ近づけるを喜びつ、水は兩岸の樹影を醮して、潮面は鏡の如く輝き渡れる景の美くしさ、形容に辭なきを奈何せむ、岸に上りてよりは急ぎにいそぎ、地獄川を渡る頃は、空は怪しく搔き曇りて、山雨將に來らんとす、風は樓に滿てりなど、中禪寺に在る騷客の、詩を作れるもある頃なるに、我等は雲を衣にして、猿聲轉た感深き、この男躰山の麓より、戰場ケ原に出でたる時は、荒涼寂寞、自ら涙の零るを覺えざりき。見れば雨は咫尺に迫りたり、雲は天地を縮め盡して、たゞ目前

なる落葉松と、野の草花の二片三片、踏む草鞋の下に白く、闇を破りて咲けるのみ、人はと見ればたゞ我々の一行の、梅鉢の紋の形にかたまりて淋しげに行く原中より、白雨颯と落ち來りぬ、雨を凌ぐべき器だに無き名々の、衣もズボンも只濡れにぬれて、絞れど絞れど袖の重きを奈何せんや。かくして歩すこと一里餘、山路にかゝれば雨は霽れたり、路は湯の湖に沿ふて進むに、五日ばかりの月は出でぬ、樹の間に透して、湖水を望めば、松も杉も根より水に浸りたる、淡き影を醮せる中に、月の光の映れるなど、その景の物凄さ、冬ならば如何に哀れなるべきぞ、草臥たれば足を摺る音の、杜深き山に響きて、湯本は未

だかとの繰言は、前後の人の口より洩れぬ、崖をまはれば火影は見えて、湯の匂ひの遠くより來れり、一行は狂するばかりに喜びて、足も輕く、氣も輕く、直にその町に入りて、松本屋といふ一等宿の、第一樓に坐したる時は、たゞ歎息の聲のみなりき、濡れたる衣を脱ぎ代へ、湯に浴り、膳に向ふに湖水の鯉を煮、鮒を炙り、瀧の海苔など、名物のあらん限りを味ひ盡して、酒はビール正宗、好めるまゝの品あるに、醉も十分、足踏み伸して、按摩に草臥を按らせ、松の音に夢を任して、前後も知らず眠りける。翌朝は未だ衣の乾かぬまゝ、借衣の袖を風に吹かせて、湯本十湯、片ッ端から浴し試み、酒に濕氣を掃ふては、坐

に疇昔の苦を忘れ、また降る雨を物ともせず、升形に松の一字を印たる、番傘をさしかけたる五人男、今日は戰場ヶ原を其處此處と、景好き處を寫し歩きて、跛引く人もあらず、湯瀧、龍頭の瀧などを寫し了り、今度は潮畔をそゝろ歩きつ、古椰の茶屋の前より、また舟を雇ひて、それに飛び乘り、中禪寺に着けば日は暮れたり、今宵は蔦文の第一樓に上り、夜に入りて、絃月の微に、湖心を照すを見、白雲帶に似て、數峰の腰に搖曳する樣など、詩も成り難き風景を見盡しつ、翌朝再び華嚴の瀧を見るに、雲亦晴れで、たゞ水聲の轟くがごと聞ゆるのみ、下山の道の快よき、腋に翼を生ぜしかと疑はれて、一脚千里、瞬く

間に馬返の蔦屋に下りぬ、こゝにて名物の阿部川餅に下腹をこしらへ、また大谷川に沿ふて下り、含滿の淵を撮影し、日光町に入り、小西屋の奥の間に、我は寐轉んで詩の本に天窓を埋め、松魚、春葉、及堂は御廟拜見と出かけて、膽ッ玉をつぶしける、歸京は十七日の夜、宇都宮よりの上等汽車に一點の星亨氏、我等は回遊の赤切符なる、これも旅の恥なりかし、めでたし〳〵。

（卅二年七月）

麥藁帽子

情を以て景を憶ひ、景によりて情を憶ふとは、まことなる哉。

慌しきものは、忙殺されんとして、なほ景色の美を憶ひ、幽靜に居て、なほ且つ出世の緒をおもふなど、人の心の我儘なるは今に初めぬ事ながら、春は花の早く散りなんことを憂ひて、野山に終日遊びくらし、秋は紅葉の雨を分け行きて、猿に小簑を借らんとする。さて三伏の暑さ、夏は何として遊ばんや。儘よ一笠双鞋、山水を跋渉して、麥藁帽子の西行法師を氣取らんものと、七月の初め、ブラリと家を出れば、綠陰滿地、時鳥明方の空を啼き渡りて、錠前かけたかと叫ぶ。止しやァがれ、跡は野となれ、山の奥にと志し、車を駈けて新橋に行く。滿足に汽車に乘り、横濱まで行き、こゝより徒歩して杉田に至

る。春ならば、梅を探ぐる人引きもきらざるに、樹は青葉と變り、根には青苔厚ふして、それ花よ、香よと、弄ばれたる疇昔の樣に似ず、山には濱風徒らに吹いて、酒旗を搖かす無く、里の童の犬かけさして、唐人笛を鳴らす飴屋の、遠きより來るなど、人意自ら隱なり。吐月峯の麓より富岡の方へ行かんとすれば、境幽にして、景頗る佳。こゝより本牧の風景を眺望すれば、煙波四に迷ひ、白鷗一點天に印して飛ぶ。その地は武藏久良岐郡の東端より東京灣に斗出する岬角の名にして、横濱市を距る南一里に近し、十二天の社あり、海水浴旅館あり。懸崖千尺、老樹蟠屈して、風光畫も及び難し。遠くこれを見る時は、

花鳥の刺繡せる屏風を樹てしが如く、美なること言語に絶す。なほ進む。こゝに故三條相公の別墅あり。松青く波白き間に閑雅の結構を極めたり。金澤に入れば、景色一變す。この地南西北の三方は丘陵を環らし、東一面は海に瀕し、近く野島、夏島の小島嶼を望み、遠くは房總の峯巒と相對して、風光絶佳、所謂八景とは洲崎の晴嵐、瀨戸の秋月、小泉の夜雨、乙艫の歸帆、稱名寺の晩鐘、干潟の落雁、野島の夕照、内川の暮雪なり、歸化僧心越の詩ありて世に名高し。能見堂あり、八景を一眸に收む。能見堂は筆擲山に在り、この山に惠心僧都の作れる地藏菩薩を安ず、堂前に古松あり、筆擲の松といふ、昔日巨勢金岡八

景を寫さんとて、畫の眞景に及ばざるを歎じ、松下に筆を投じたるより、しかいふとかや、山を下り瀬戸の斷橋に至る、橋畔に東屋といふ割烹店あり、また西すれば瀬戸明神社あり、南の小島に辨財天の祠あり、江州竹生島の天女を勸請す、こゝを距る七八町、金龍禪寺あり、山を飛石山と云ひ、その頂にあるを九覽亭といふ、これ八景に能見堂を合せての名なり、算盤から割出したものなれど、牽强附會ならず。成るものならば尙ほ三景を增して、ダース樓などいふ料理屋の出來れば妙。斯くて稱名寺の晩鐘に、合方キッパリとなり、本釣鐘を打出すと、そろ〳〵暮れかゝる誰彼時、道を急ぎて朝比奈の切通しに行く、國の名

も相模と變れど、鏡だに持たねば、草臥れし姿見るともなく、疲れし足を引摺りて鎌倉に入るに、鎌の如き月柳の枝にかゝれり。月を迎りて柳の都の古跡を尋ぬるも妙ならめと思へど、疲れては詮あらずと、長谷の三橋に泊る。

湯に浴りて疲の癒え、食して餓も忘れたれば、これより月明りに古跡を探らばやと、行李捨てゝ、いとゞ身輕を覺えしまゝ、團扇の風に藪蚊を拂ひ、小草の露を踏み敷きて、其所や此所やを浮かれ行く。雪の下、扇ヶ谷の名のみにて、夏忘れぬる涼しさに、足の運びも捗とりつ、只ある坂にさしかゝれり。此所を何處と夕顏棚の下涼みする翁に問へば、化粧坂と申す。その由

緒いかに。曰く。昔時平家の大將の首を化粧して、實檢に供せしより此名ありとも云ひ、またこゝは遊女町なりしよりその名を呼ぶともいふ。この地に曾我五郎時致の馴染を重ねし遊女ありしが、梶原源太景季も齊しくその遊女を愛したれども、彼が操の堅かりけむ、時致死して後、頭をごぼと剃落して佛の道に入りたりとか、惡七兵衛景清も編笠格子に立寄りて、傘かりたが緣となり、その遊女に馴染みて、子まで設けたること演義小說に見ゆ。道の左に景清が土の牢あり、傳へ云ふ景清鎌倉に降り、八田知家の宅に預けらる、其後建久七年三月七日大佛供養の日を數へて湯水を絶ち、終に牢中に死せりと、また景清の娘を

龜ケ谷の長に預く、後その娘は亡父追福の爲め窟の傍に庵を結びて、十一面觀世音を安じ、勇猛精進にして一生を終りしといふ。その庵今は無し。翁と別れて去るに月落ちて路黑く、蟲の音四に聞こゆ。古への跡大方は頹れて、城南に行かんとして、さらに城北を忘るゝ想ひあり、家に歸りたれど、世の興亡沿革胸に浮びて、さてすがすがに眠られねば、想ひの走するまゝ、眼を閉ぢ手を叉きて、英雄の跡を追懷するに、末路の轉た凄然たるもの、比々みな然り、豈鎌倉氏のみならんや。夏艸や兵者どもの夢の跡と、實に夢の跡となり了しぬ。思ふて此處に至れば知らず、一聲の牧笛夢を喚んで寒し。

翌朝早起海水に入る、潮淺くして、三才の兒も戲るべし。此處を由井ケ濱といふ、鶴岡八幡宮の大華表より五六町、東は飯島、西は靈山ケ崎に涉れる海濱の名にして、昔し源頼朝こゝにて弓馬の技を演習したる處なり、眺望快濶。これより鶴岡八幡宮にいたる。地を雪の下と云ひ、國幣中社に列す。かくて殘る方なく鎌倉を見了り、七里ケ濱を傳ふて、江の島に渡り、金龜樓に宿りぬ。下絃の月のあるにまかせて、夜を更かす。あくる朝は片瀬を過ぎ、藤澤を經て、小田原より箱根に行く、湯本、塔の澤、宮の下、底倉、堂ケ島、木賀、木湧谷、葦の湯の、客多ければ、今西行を宿すべき貧の草の家のあらず、地獄池のほとり

に至れば、何となく天地も陰に曇りて、賽の河原は雨降らんとす。石地藏に腰うちかけて、草花などを拐りとりつ、漸うに湯の匂ひの消え行くと共に、路は下り坂となりて、頓て葦の湖の邊にいたれば、水鏡の如く、老樹欝蒼として、晝も尙ほ小昏し。離宮のある處は、小高き丘にして、嵐氣檐に横はり、水色窓に映ず、仰げば芙蓉青巒の上に跨り、俯すれば扇面湖に落て、影搖かんとす。扁舟の葉々乎たる、筏師の棹を揚ぐるなど、その景色のよきこと言語に盡し難く、權現は湖水の砌にあり、社古く神寂びてよく、箱根驛は荒れたれども、湖畔の小村、詩人の眼には何と見るならむ、月清き夜、風靜なる朝、神澄み心爽

なる時、翠草の上に偃臥して、徐に古文を誦せば、神來りて、吟魂を掠め去るべし、古人絶景に遇ふ毎に必ず筆を擲つ、知らず今の詩人は如何。この月中頃、海に浴し、山に嘯いて、東都に歸る、今日よりまたも吐呑する所の大氣、これ熱、これ血、想ふに口頭呵するもの悉く火か。嗚呼世因累あり、都門の人をして、永く身を青山白水の間に於かしめず、遺恨千秋。（廿六年）

夏の夜

五月雨のこの頃、或夜ひそかに帳塲格子を拔け出でゝ、珍らしくも松に月ある、築地の首府旅館に、こそ〳〵ものを相集まれるは、日頃親しく語らふ友の二十五人にて、今宵の主人は文武堂主、今たび初航海を世に出したる、その船出を祝はんとての催しなりけり、旅館は居留地の海岸、波の音松の嵐を聽き得べき處にありて、出船入船の欵乃面白く、佃島は前に横はり、品川の海遠く晴れて、白帆の往き來ひも興ある眺望也、欄前に安樂椅子を据へ、葉巻莨長閑に吹いて海面を望みつゝ、亞米利加は何方にあたれる、歐羅巴は彼方にやなど、窮り無き空想を浮べて、他年遠く海を渡らむ折の、所思を辿るも妙なりき、晩餐は大食堂にて、内外の人々雜集して卓に就くのなれば、早くも

雑居後の日本のごとなど云ひ合ふて喜ぶめり、支配人は米人にて、いとよく肥えたる男の、敏捷く待遇して、客に遺憾無からしむるなど一同満悦して、こゝを立出で、月の明きに浮かされて、佃島にぞ渡りぬ、乗合船なれば、多くの漁夫どもに立交りて、中流に出づれば、月は中天に澄みて、海はよく晴れたり、江に入りて碇下せる船の檣の、林の如く立並びて、白き燈を一様に吊したり、佃は月に背きて、島影一帯に黒く、渡頭に華表の見えわたれり、漸う住吉社の前に着きて、上陸し、それより社前に額づき、漁夫の町に入れば、戸々みな簾を下して、涼を床几に納れぬ、中に一人の漁童の、短笛を弄びて、節面白う

吹きすさめるあり、我等は旅の客ならねど、先づ腸を断つ想をなして、暫時は只ある橋の上に彳みたり、夜は九時にも近かるべし、帰路遠く、家遥かなる人々は、こゝより辭し去り、殘れるは同行十人、なほ月の涼しきを便りて、草に露置ける野を斜に朽橋を境にして、小川のあるを溯り、渡船場に出でぬ、そこには板葺の小屋あり、孤燈高く掲げて、客を待ち顔なれど、舟の一つだも無きを以何せむ、月光は桟橋を照らして、波の白く朽杭にかゝるのみなれば、一同聲を上げて、舟を呼べとも答ふる水の音だもあらず、斯くして半時餘も過ぎけむ、漸うにして一艘の小舟來りぬ、我等は飛び乗りて、造船所の裏手を傳ひ、

越中島をめぐりて、深川の漁夫町にかゝる、こゝにて舟を岸に維ぎ、我と心利きたる二三の人と上陸して、罐詰の酒と、肴二三種とを買ひとゝのへ、また舟に上りて、小川を溯り、洲崎辨天社に詣でぬ、松黑く波白く照りて、境古りたり、時は十一時に近かるべし、夜更けて月は澄みに澄み、空は青く凝りて水よりも清らかに、逃げ塲を失ひたる雲の、一片二片の、折々は月に邪魔して、木塲の木立に鳥の音を聞くも幽なり、やがて船は歸路に就きぬ、只ある橋下にかゝれば、上には洲崎に通ふ若者等の、綱にてもつけたらん腕車の、轟々と鳴りて雷の如く、西より東へと通ふもあるらし、舟は永代の橋下をくゞり、新川

に入れば、兩岸の白堊に月影のさして、雪よりも白き土藏の、伍をなしたる美くし、鎧橋の此方、靈岸橋のほとりには、未だ寢ぬ酒樓のありて、美人の欄によりて立てるも見ゆ、兜町の裏手にかゝれば、大家高屋甍をならべて、實に土一升に金一升の土地の、錐を立つべき隙だも無きまで、人煙に埋められたるも心地よく、澁澤氏の洋館は、電燈やら瓦斯やら白晝の如く輝きて、令息歐行の夜會にてもあるやらむかと思はれぬ、江戸橋を過ぐれば、魚河岸には漁船數多着きぬ、鎌倉邊の初鰹も海より上りて、翌日は市塲に小判の値を呼ぶべし、弗と郵便局の大時計を檢すれば、夜は正に十二時なり、月は明く興は未だ歇き

ざれど、名々明日の課業に忙しき身の、無下に夜を更かさんも愚なる業なりと、日本橋下に船をすて、みなとこゝにて袂を別ちぬ、われは今川橋の邊まで歩を運び、そこにて小石川戻りの腕車あるに飛び乘りて、神田明神の坂を登り、菊坂を下りて、巡査交番所の前にかゝれば、交番の人の我を訝かるも可笑しく、我は敲く月下の門、昨日五分刈の天窓の影の僧に似たりしも一興なりき。（三十二年六月）

酒池肉林

今茲十一月某の日は、三井一家が朝野の紳士を招待して、盛大なる園遊會を催された。其會場は、三井一家の集合場で、即ち麹町區有樂町である。見るからに壯麗宏大なる一構は、妙な言草だが、御大名の御本邸とも見える。その大門の形容から、玄關の工合、流石は天下に名たゝる持丸の、三井家の倶樂部として、些の遺憾はない。

予も此日此盛會に列することを得たので、見まゝを書いて見やうに、先づ第二の玄關には、社員が禮服着用で、來賓を奥坐敷に案内をする。

構へは日本風であるが、一面に華やかな絨氈を布きつめてあつ

て、土足のまゝで、ズーッと奥へ通られるのである。此日は生憎、朝來の雨天であつたので、惜い哉、數奇を盡した庭園で、園遊の樂を受くることは出來なかつたが、しかし廊下には例のおでんや、鮓屋、酒屋、團子屋、などが、所々に店を張つて、新柳二橋といはんよりも、寧ろ東京全都の美形が、繰り出したといふ騷ぎだから、それこそ、春の花と秋の月を、此一堂に集めたといふもの。

此等の尤物が、赤襷赤前垂、の甲斐〻〻しい仕度で、賣子になつて居るのもあれば、客引をしてるのもあつて、來賓の若旦那も、御隱居然たる御方も、見つけ次第に、何所其所の御前だの、

何々の旦那さんなどゝ、威勢好く掛聲をして、客を引く鹽梅、矢張其道は其道で、中々凄いものと、眞面目に云ふより外はない。

其中の聯隊長は、ひさご屋のお女將、喜樂のお女將、花屋のお女將などが、前後左右に采配を振つて、千軍萬馬の間を縱横無盡に驅け回る樣といつたら、實に古名將の風ありと謂つべしだ。

餘興としては、常盤津林中の得意もので、その二十幾年、鍛へに鍛へた美音を、此所一番、思ふ存分に見はした時といつたら、實に天下の善を盡したものであつた。

それからまた、家屋の構造を、讀者に紹介せんに、東西二棟に分れて居て、一は純粹の日本風、一は和洋折衷である。日本室の方は、取り立てゝ云ふまでもないが、全躰糸柾の白木造で、洵に品の好い造り方である、椽側を傳つて和洋折衷の室に入る中途に、茶坐敷がある。此室は極めて、數奇を盡したものであつた。

さて折衷の室に入れば、書院風の構造で、椽側が如何にも、廣々として居る。その外側には、御殿風の欄干があつて、所々に階段が設けてある。坐敷は疊や絨氈を用ひず、床を珍奇な木材の嵌木で張つて、天井は合天井で、極く古風な所を見せてある。

そして、室の中央には氈を布いてあつて、純子張りの美々しい安樂椅子が、幾個となく并んでゐる。その次の室はこれも合天井で、はめ木の床であるが、一躰の模樣は、頗る趣向を凝らしてある。境の襖は日本風の、極めて淡泊なものを用ひて飾りつけの金屏風や、御厨子黒棚の結構は、また頗る人目を惹くべきものである。

茲には中央に、大形の卓子が据えてあつて、極質素な卓子掛が掛つて居る。それより椽側を傳ふて、玉突室に行けば、此所は全く洋風で、他の室には、多く日本風の書畫を用ひてあるに引かへて、此所はまた極めて西洋流に、洋畫の優美なものを飾

つてある。

即ち玉突臺が二臺備へてあつて、萬般の用意、周到至らぬ隈もなく、此所に遊ぶものをして、實に搔ゆい所に、手の屆く感を起させる。其他大廣間の後部には、談話室、秘密室などいふのが、いくつもある樣に覺えた。今其構造を一括して評し去れば、御殿風の構造に、歐風の粹を交へたものといつてよからう。で、所謂和七分、洋三分の構造といへば、間違ひはあるまい。此建築の技師は、工學士横川爲助といふ人の、創意になつたものであるとのことで、目下駿河町の、三井銀行の鐵材建築も、矢張此人の擔任であるとのことだ。

扨て、立食の饗應に充てられた食堂は、今度新らたに建築したもので、大凡長さ二十間も、あるかと思ふ大食堂、屋根はトタン葺を黑く塗り立てゝ、飾るに悉く蘭の花と葉を以てして、それに紅白の電燈を點じた光景、實に龍宮城へでも、舞ひ込んだ樣な心持がする。

軈て立食となつた。予は度々、斯る盛宴にも列したことがあつたが、此時の如く悠然として、そして食餌のゆたかな、宴會は今に始めてゞある。近時大倉喜八郎君の、還曆の宴會は、其豪奢の度は、當代の紳士社會を一驚せしめて、交際場裡の一快談となつた程であつたが、三井園遊會も、其山海の珍味を山積し

た點に至つては、おさ〳〵これには劣らなかつた。で、予は他日折を得て、大倉家、及び先頃これも仝じく、還暦の祝宴を開いた安田家、及び此の三井家三家の、園遊會なるものゝ比較てふ題にて、自分の目に與じ、耳に感じたことゞもを書綴つて、一つ其優劣を論じて見ようと思つて居る。

抑も酒池肉林といふことは、一躰日本風の宴會には、多く見ざることで、實は此の立食の宴會、即ち今夜の如き、光景を云つたものであらうと、予は私かにさう思つた。見渡す限りは、雪をあざむく食卓の連なり渡つて、其間には名も知らぬ花束をつくり、三鞭の泉は地からでも湧くが如く、ポンチの雨は天から

でも降るかの樣で、飲んでも盡きず、酌んでも絶へず、滾々として平生の酒泉を湛えたのは、ても、さても心地よい次第、これを盛宴と謂はいで、抑も天下何處に盛宴と名づけるものがあらうぞ。

さなきだに燕尾服に、瀟洒たる風采の紳士の腹は、便々とふくれて、ポンチの庇蔭に、恰ら玆に一場のポンチ畫を演じ出したも、時に取つて滑稽の次第。あるは接待のシガーの煙を、四方に吹いて意氣揚々と、食堂を辭して例の安樂椅子に倚れかゝり、我物顔に陣取つた樣、鷹揚とも申上奉るべしである。

この醉客貴賓の間を、例の待合の如才内儀が、双の腕によりを

かけて、御機嫌を取る工合、長夜の飲とはこれであらうか、不夜城とは此れを申さうか。歩を轉じて元の席に歸れば、嘹喨たる音樂の聲聞えて、醉を醒ますべき、ラムチ、ビール、水菓子、ビスケットなどが、山積してある。また出口には、一家の人々が禮服を着流して、賓客を送る鹽梅は、流石に文明の風の、四邊に滿ち〳〵て居るを覺えた。

ア、世間不景氣の呼聲は、何れの里も、全じ哀れさを感ずるものかと思つたに、それは唯霙降る九尺二間の長屋住、世に哀むべき、貧民窟にのみあることで、所謂弱の肉を食ふ强者の、世に時めける富豪の家には、夢にもあつたものではなく、流石の

貧乏神も、とても祟り得ることではない。

見よ一夕の宴會に、巨萬の財を費して、以て一代に其豪富を衒ふものはあるが、悲哉、つい鼻の先は新橋發の滊車窓から、哀れに見ゆる芝、新綱の貧乏長屋に、一滴の涙を灑ぐ樣な慈善家は、とてもあることではない。今更云ふまでもないこと乍ら、世の中は正に是れ、利己と云ふことの外はないと、斷言するに躊躇せぬ、知らず今夜三井家が、費したる黃金の種子は、他日如何なる美花と化して咲く事であるか、金が金を生む世の中に、何れこれとて、棄たりきりの費をやられた筈のものではなからうと、自分が醉つた結句の管を卷いて、長々しう申すも

野暮か、兎角浮世はと、上機嫌で腕車を家に驅つた次第であつた。（三十一年）

駒塲の秋

農は國の大本といふ、で、一度は其本元なる農科大學をも縱覽しやうと熱望して居たが、今日しも不計折を得て、横井教授を大學に訪ふた。

學長の松井博士とは日本繪畫協會で、共に美術の批評を試みた緣故もあるので、かた〳〵博士を訪ねて、大學の模樣も聞かう

と思つたが、生憎不在であつて、詳細なことは聞くを得なかつた、しかし大橋某といふ大學生に導かれて、諸科を縱覽するを得たのは、頗る愉快なことであつた。

農科大學は駒塲といふ所にある。元とこの駒塲は、幕府時代には駒塲野といつて、將軍家の御狩塲となつて居た、彼の御成道といふのは、新宿から一直線に、日本橋より三里とした所である。

其時分は雲雀、鶉、雉、兎、などが多かつたで、折節はこの駒塲野に御狩があつたといふ。江戸名所圖繪には駒塲町と題して、長谷川雪旦の挿畫があつて、精細に出來て居て、道玄坂といふ

小山を、野良に物を運んでる田夫があれば、其向には秩父の山を遠く見せて、旅人の野川に裾を揭て居るところもあり、小松原の遠近に見えて、鳥の高く飛んで居るなど、中々に幽靜な景色、殆んど江戸の中とは思はれぬ計りだ。

今日大學が此に設置されても、矢張り昔の俤を存して、秋更けて尾花の波の風にそよぐ工合や、丘陵起伏して、高きには茶畠を見、低きにはちよろ〳〵と水の流れて居るなど、農園としては、尤も位置の宜しきを得たものと思はれる。裏門の方より表門までは十四五町もあらうか、其面積も一方里餘もあるといふことである。

大學は本科と實科とに分れてゐて、本科には目下四十名計りの學生がある、卒業の曉は學位を得るが、實科の方は卒業の後、農學得業士といふ肩書を得ることが出來る。

構内には幾何にも科が分れて居て、彼方の森影には山林科があり、此方の丘の傍には農學科ありといふ風で、其前後に實習すべき農園が設けられ、種々の耕作物が時に隨ふて播種されつゝある。

予は何れの科も詳はしく縱覽を終えたが、中に尤も興感を惹き起したのは、家畜病院を見た一事である。

此の獸醫學科長は、奈良原男爵の令息で、田中學士である、病

馬、病牛等が多く打臥したる室の尤も奥に施術室がある、其所には恰も我々人間の病院の如く、寢臺が設けられて、驗温器だとか、ステートスコプだとか備えつけられてある。傍の鐵製の籠樣の中には、眼を病んで居る犬や、鼻加多兒を起して居る、猫やらが、人間の患者の樣に枕を並べて居るといふ趣はないけれど、聊かも我々人間の病院に異らぬ樣な所は、また一奇觀であつた。

予が此奇妙なる病室を見舞ふた折、寢臺の上に物憂げに寐て居る犬を指して、何病であるかと尋ねて見たが、此は感冒であるといつて、犬を臺の上に立たせ、吸入器で以て、藥液を吸入さ

した、犬は乃ちチン〳〵モガ〳〵をする時の身振で、端然と尻餅をついて、大人しくしてゐた。

然る後其躰温と同じ樣に、温なる布片を病犬にかけて、看護おさ〳〵至らぬ所はない、犬も診察の間は從順にして、其病勢の一日も早く怠らんことを、切望して居る樣に見える。やがて、診察を終れば、看護人は頸輪を掛けて、各自其病室に引き取るのである。

予は今の病犬は何人の飼犬なるやと問ひしに、こは前の文部大臣、大學總長濱尾新氏の愛犬であるといふことであつた。斯樣にして、横濱居留の外國人なども、往々家畜の診察を此校に求

むるといふことであつた。

それより予は病理室、藥劑室等も順次に縱覽を終えしが、素より素人のことであるので、一々其理解を詳しく爲得なかつたものもある、しかし一見非常の興感を起して、毫も倦むことを感じなかつた、それより植物園へと廻つたが、時は冬枯の物淋しき頃なるに、名も知らぬ珍奇の草花は、晩秋を裝飾して、身は春にでも返つたかの感があつて、猶見るべきものは多かつたが、他日を期して予は愉快に大學を辭した。（卅一年）

神田覗機關

西窓に映る芭蕉葉の外には、語らふ友も無き、六疊の一間は我住む本城にして、青史黃籍四邊に散りて、さながら戰國割據の世に似たるも、主人元來懶惰なれば、洒掃の責を盡さず、首を塵埃の裏に埋めて、想を千古の遠きに馳せ、靜座書を讀む、時に蝶あり、翩々として机邊に飛來れば、身は早くも莊子の夢と化して、暫らく我あるを知らず、忽ち後邊の障子を容捨もなく、瓦落理と開く者あるに驚き、誰何すれば、見も馴れぬ貸本屋の草双紙四五冊を手にして入り來る樣の可笑しさに、眠を覺して

その双紙手にとり上げ、表紙を開けば、これは如何、世に和印とかいふなる書なるに、怫として大喝一聲、この本何ぢやと睨めつくれば、渠一向平氣な顔して、へゝゝゝ浮世は萬事お色氣ですと、取合ぬ薄責氣に呆れかへりて、双紙を戸外に投げつけ、用事は無いと邪慳に云へば、怫となさるは未だお若いと、冷笑て座敷を立出で、また、隣座敷に入りて、三國志の御用は無いかと廻り歩くは、これ神田七不思議の中の一つなり、それに未だ〳〵可笑しきは、近邊の下宿屋に居る下婢、白晝の間は垢つきし衣着て、髪も亂れし儘にとりあげぬに、はや黄昏ともなれば、夜騒ぐ蝙蝠の如く、髪梳り衣紋つくろひ、紅を濃くさし、

厚化粧する有様は、百鬼夜行の繪巻物の首座をも占むべく、思はれて怪しくも可笑しげなるが、夕餐の膳を座敷〳〵に持運び、媚を賣り世辭をふり撒きて、ポッと出の田舍書生にお芋を驕らす事、近頃大分火の手をあぐ、これも不思議中の一つに算へてよし、頓て夜にも入りければお茶の水橋のたもとに行き、涼しき風に吹れんものと、未だ寒からぬ此頃とて、八日ばかりの月代清きを幸ひ橋の上に至りて、上と下とを見渡せば、月光に向ふ對岸は青草の葉末に露置きて、きら〳〵と光る色面白く、一方の崖は、陰になりて、隈どりたる、異國の繪とも見ゆ、聖堂の森に寢鳥の聲も聞かねど、長き土塀のうね〳〵見ゆるは、蒼

龍臥すとも思はれて、師となるべき人々の、物學びする行末の目出度をも思ひやらるれ。お茶の水白く見えて、漕ぐ舟黒く木の葉浮ぶ如し、折ふし棹を下しては、澄む月の影を亂して江戸川の方へとのぼりぬ。この景色詩人の眼にはいと興あるべきも、住む家近き名所とて、左迄にも思はず、歩みをかへして小川町に出れば、此處は書生の蜂の巣とて、むら〳〵と出て來る兵子帶黨、袖腕にいたる先生のあれば、雲耶山耶譯の判らぬ豪傑もあり、先づ大道の古本屋大抵は見盡し、雜誌屋繪草紙屋と眼を配りて進み行くに、只ある牛肉屋の二階に方り、皿を叩きてオッペケ節を唄ふ殿方あり、我も以前にはこの黨なりしと、

そゞろに昔の戀しうて、其家に入るに、胡座組みて法理を談ずる民法家あれば、半熟の肉を割いて衛生を論じたまふ前期醫者どの、口角泡を吹き過して、隣の職人に談じ込まれ、失敬の捨臺詞に、情なくも敵に後背を見せたまふあり、實にや浮世は千差萬別、この二階の中に一つの世界を造れるは、妙、憶ふに氣の利いた小説家などが、若し茲に女中となつて半月も入り込まば、人間運命の説明所か、トンだ妙な趣向の湧く事は澤なるべしと、酒呑まぬ身の羨ゆるを待つ間の退屈さに、また家の樣子を熟々見れば、梯子の上り口に、一脚の床几ありて煙草盆に朱羅宇の煙管とを備ふ、床几に女中四五人、腰うちかけて煙吹い

て居る處へ、上り來し三人連の書生あり、女中は顔見るや、喫つた煙草をポンと投いて、佐藤さん、大分お見限りですねと肩頭を叩けば、來られない譯があるんだと、喞へた紙卷煙草の灰を拂ひて、わが傍に陣取りしにぞ、目も放さずその打扮を觀察すれば、蒙つた黑の山高を脇に措て、コウト何にしやうか、ロースで櫻田が宜かろう、自轉車は廻り過る、キリンは好んとした處で、花は櫻田人は麥酒、お春さん、早くして頂戴よと、自慢らしく指環を隣客に吹聽する工合、これが書生とは、情なく過ぎて涙が溢れる、着たる衣裳は、赤柄の唐綾縞の袷に白ッぽい艶消し双子の羽織を着流がし、皮色博多の帶を締めしは、何

う見ても緞帳の申上げますの種類なるべし、女中は梯子を輕業のやうに登り來て、お待遠さまと、盃盤を置いて、貴君大層お痩せなすつて。さうさ痩せる譯があるからさ。譯々ッて先刻からおつしやいますが、タゞは聞きませんよ。聞いて呉れなきやア察して貰ひたいねとニッタリと笑ふ、女中も一つ酌をして床几に戻る時、奥の方から出て來し書生、ふら〳〵する千鳥足を踏みしめ、床几の前に來て女中に串戲を云へば、一喫召上れと喫つけ煙草を出す樣は、色町の格子に縋る如し、これもまた七不思議の一つなり、後其家を立出で、小川亭の女義太夫を聽きに這入込みし大半の書生は、いづれも樂屋覗きの方にして、惡

口利くを得意と思へり、先づ樂屋口の梯子の際に居れる洗ひ張太織の袷着たる男、烏打帽子を目深にかぶりて、欄干に身を寄せ、義太夫聽くともなく失神するところへ、前座を勤める義太夫娘、眞暗な物の蔭より伊藤さんと呼ぶ、梯子口の書生、おうと返事して座を立ち、こそ〳〵と耳打して、笑つたり囁ひたり、兎角する間に中入ともなれば、樂屋より二三人の女義太夫が出て來て、例の書生に一禮すれば、書生は菓子賣を呼び寄せ、娘共に好む菓子を取らして、己れ懷中より錢とり出して、拂ひを濟まして後、樂屋に入りてべちやくちやと饒舌くる中、また三四人の書生交りて、さも睦まし氣に語り合ふは、如何なる趣旨

か、これも不思議の一つなり、寄席はねたれば、家に歸らんと急ぐに、戸田家の前に、三人の書生往來に立跨りて用捨もなき放尿、無禮な奴等と思へば、行き過ぎながら振顧るに、巡査なんか構ふものか、咎め立すると法律でいぢめてやる、法は死物だそれを活用するは腕にあり、鷺を烏と云ひくるめても、法をくゞればいゝではないか、と云ふのを聞いて仰天し、さて〳〵妙な事を聞くものかな、法律を學ぶは詐欺取財を巧手にやる爲めでもあるまいに、馬を指して鹿といふを、腕がいゝとは、これも一つの不思議なり、夜も更けたれば、足早に行かんとするに、辻待の車夫ッと出て、旦那北廓へ參りませうと跟て來るに、

宅は近所と挨拶すれば、天窓を掻いて引ッ込む、總じて書生が北の方向に足を運ばすれば、屹度北廓と跟け來ること、神田の車夫の通例なり、これまた不思議といふの外なし、漸うにして家に歸れば、家人皆臥せりしに、隣家の二階にガヤ〳〵と人聲して、ヤクだピカだと爭ふは、まがひも無き花合戰、斯くして二時も過ぎ、三時にも垂んたるに、未だ爭ひの止まざれば、われは疲れて熟睡みぬ、夜はハヤ明けて七時に近く、朝日麗かに東窓を射りて、心地いと爽快なるに、臥房を出でゝ、朝餐濟ましし、文讀み行くに、十時を過ぎたり、されども花好きの書生は、未だに眠りを覺さぬは、何の時に學問する氣ぞ、これも不思議の一つなるべし、その他にも女學生の往來、下宿破戸漢等、數〻の不思議はあれど、煩はしければ略す。（二十四年）

おぼろ月

ととし彌生の初めつかた、大磯滄浪閣に毛利家歴史編輯の人々と會して、伊藤侯爵より親しく、木戸侯未亡人の義俠の事どもを聞き知り、ふと心に感じたる節を、新躰詩とやらんに物したる。

月に化粧のおぼろ夜は

橋の欄干も影淡く
柳をわたる雁の棹
大の字山にかすれ行く
春を眠むげの川添に
酒旗かゝげたる家のある
珠簾を捲けば蘭燈の
火影は水に流る見ゆ』
都は花に色まして
駒の心は勇めども
けふ九重の雲荒れて

人のおもひの安からず
さては洛中洛外の
春おしつゝむ八重霞
君ゐます空は風寒く
鳥の塒ぞあはれなる』
右近櫻は咲きしかど
范蠡無きを奈何せむ
世は武士道にけをされて
御所の半蔀晝暗し
こゝに一人のますらをが

忠義に濺ぐ紅涙に
人の心を染めてより
橘の香の漏れ初めき』
中にも月の桂男は
この君をさす名なりけり
群議の苍に身を容れて
後に剣前に銃
身は無きものと思ひ知る
覺悟のほどぞ健氣なる
嗚呼國の爲め斯る時

いかで斧鉞を遁るべき』
故郷を出でゝ幾歳ぞ
霜は惚髪の額に重く
關山越ゆる夜はいかに
月は朱鞘の上に冴ゆ
雪に眠れる世の人の
夢は汗馬をかけ繞る
花に目覺めしものゝふの
鎧の袖を振はなむ』
それ者共よ油斷すな

志士を捕へよ縄かけよ
嵐に狂ふ花吹雪
人の膚に粟立たす
君は幸よく遁れ出て
五條の橋に身を潜め
妾は忍びて食おくる
戀は闇こそ便よけれ』
もとより妾はたはれ男の
興をたすくる白拍子
落花をはらふ繪扇に

春さしまねくさゝむしろ
山は夕榮暮れ初めて
寐よと知らする鐘の聲
三味や皷のにぎはしく
浮し立つるぞ恨みなる
東えびすの執念も
つき纏はるを振りはらひ
柳の絲に寄り添ふを
そらして立てる松の意氣
折りて投げたる三味線の

この身に報ふ撥あたり
うき世の波に幾浮沈

とりつく島も無りける」
春の夕の明けやすき

うつゝにも未だ君を見ず
夏來と知らすみそぎ川

まがつみ秡ふ幣も無し
かくても虫のくり言に

嵯峨野の昔忍びつゝ
鐘に更け行く雪の夜を

琴柱の占に夢を引く」
逢ふ夜はわけて更け易く

つもる河原の星の數
言ふべき事の跡たえて

通ふ千鳥の儘ならぬ
氣の強いのも男のつねと

怨まぬ眼にも露の玉
互の胸の有耶無耶を

明かしかねたる春の窓」
怨ずる毎に顔へる聲

忍ぶ思ひを抑ゆる胸
いざおさらばと立上る
男の影もおぼろ月
山は霞に薄隈や
三十六の刷毛つゞき
人は涙にかきくれて
花の香のみぞ殘りける』
維新のいさを今成りて
菊の匂ひのかんばしく
朝日の御旗輝きて

松の光のわかみどり
櫻の下に篝焚く
衞士の衣の影白し
御代の春風吹きわたる
花の梢のおぼろなる』

夏の川

夏の小川に來て見れば
水晶ゆるく流れ行く

みどり小暗き木立には
　鳥の啼音も靜かなり
神のつかひかわらべ等の
　すくひの網に入る魚は
げに銀盤に露置きて
　蕗の葉かげの涼しさよ
流れの裙は野にかくれ
　朝靄淡く樹を罩めて
村一ッづゝ見え初むる

旭日の影ぞうるはしき
　葉屋の檐のいさゝ川
立寄る妹の面痩せて
髪かきあぐる水かゞみ
夏こそ戀の恨みなれ

暮の秋

海のかなたは果知らず
そのはてしらぬ奥底に

國あるがごとはびこれる
あやしの雲の立ち迷ひ
傾く夕陽をおほひては
颯と吹き來る雨の脚
菅の小笠に音させて
馬追ふ鞭の重げなる』

雄鹿の島根は秋闌けて
さんざ時雨の一トしきり
降るかと見れば沖遠く

また夕榮す波の花
これは日本海の西
日は落つ韃靼洲の奥
鵬程萬里烏立ちて
ゆふべの雲にかくれ行く』

三十里程無人境
一路の白沙客を見ず
斷崖高く樹は枯れて
巖には波の痕殘る

水と陸との中行けば
四方を籠めたる水煙
銀山くづれ濤吼えて
奔馬の腹に打かゝる』

行き暮れたれど家はなし
星の明りに見渡せば
荒野に駒の二ッ三ッ
夜風に草の戰ぐ見ゆ
枯れて淋しき木立には
あぢ小屋の骨あらはなる
小高き丘に破れたる
舟一ッこそかゝりけれ』

馬子に何處と名を問へば
かなたの山の木かげこそ
世をすて人にすてられし
蘇武が澤とぞ答へける
それは唐土忠義の士
こなたは普天率土の濱

王土ならざる地無なければ
などて匈奴のあるべきぞ』

さはれこの地の淋しさを
胡北の景に擬せんかな
雪はあらねど雨雲や
羊に似たる夜の駒
折から月も出汐の
輝きわたる幾曲浦
長汀一帶雪のごと

馬上の衣寒げなり』

荻の一トむら路細く
坂を上れば家はあり
蜑の苫屋の檐もりて
火影微に煙立つ
近づき見れば榾添えて
餘念も無氣に炊ぎ居る
訪はるこまこに擡げたる
顏は戀にや窶れたり』

これは王昭の君かそも
心の蘇武のあらでやは
世はまこならぬものながら
樂しく住めば鳥の聲
いとふ浮世はいづちにも
つきまづはるは習ひなり
住めば都の山かげに
馴るこそも戀の媒よ』

花は野に生ふつぼ菫
女神の遊ぶ蝶の羽
錦をかざる夜まつりに
笑顔をつゝむ細布や
憂き事知らぬ一ッ家は
寄る年波も忘れたり
冬の爐に添ふ睦ましさ
寒梅一枝春は來ぬ』

されば うたてや 都人

利にのみ奔り飢に泣く
まいて出世のかけはしに
迷ふ人こそ悲しけれ
故郷を出でゝ路遠く
粟炊ぐ間の榮達に
父にはおくれ子をすてゝ
名聞の鬼となるぞうき』
實にこの里は仙境よ
行けども荻の花つゞき

葉は人よりも高くして
入江も村も見ずなりぬ
時しもすさむ夜嵐や
流るゝ雲に風白く
寒風山の一角は
磨ける空に影高し』

古關の雪

奥の細みち風寒く

雪ふるさとにたどり行く

われ洛陽の一書生
故山を出でゝ幾歳ぞ
眼は螢雪にさらせども
事は意とたがひてか
つまづく足も冬の道
罪無き宇宙のたゞ白し』

天地をつゝむ六ッの花
汚れし身こそ悲しけれ

父母とくにみまかりて
ふるさとはたゞ名のみなる
されども胡馬の聲聞けば
朔風もなほ懐かしく
つゝれの袖にふりかゝる
雪も涙に解けぬらむ』

人はかくとも白旗の
松原行けば家見ゆる
檐にそびえし一ト笠の

松も昔の友なりき
文讀む聲はそも誰ぞ
雪吹き立つる夕風に
錦を織るか機音の
胸にこたへて響くなる』

われ零落の瀬に沈みし
出世の路は雲隔つ
妹は誰をか待ちつゝも
衣に誠をこめつらむ

逢ふに嬉しき恨あり
語るに盡きぬ名殘あり
今はた戀に亂れなば
青雲いよゝ遙かなる』

男子生れて二十年
それより花の春はあれ
忍ばれぬ身を忍びてぞ
人の上にも立たるべき
吹かばふけ風降れや雪

髮白くなるまでも
精神一たび到りなば
獅子王吼えて丹花落つ』

さらばや父母の墓に
今非つばらに懺悔せむ
階前の雪路絶えて
夕陽赤く鳥歸へる
よし成功を告くる日の
ありとも塚の恨めしく
一百里外のふるさとに
たゞ戀のみぞ殘りける』

（卅二年八月新作）

涼榻詩味

一日の課を終へ、月に歩して、小石川にかへる、お茶の水は淡く、松影參差、小舟遠く去りて、杳々無からんとす、路初音町に入り、家に歸りて、先づ水を草花に灌ぎ、緣端に胡坐して、涼を竹蔭に納るゝに、終日の勞苦を忘れて、詩想新に湧き、惡

詩二三たちどころに成れり、燈下に書して、同人に示せば、衆皆笑つて可否を云はず、醉後歩を移して、氷川田甫に至るに、螢火點々、一川緩く野を流るゝ處、景色畫の如くなるを如何せむ、我は畫手にあらず、此景描くべからず、我はた詩家にあらず、風光を謳歌するの技無きを悲しむのみ、去て涼榻に詩趣を味ふ久しく、下に掲ぐるもの、乃ちその數首のみ。

信濃漫遊汽車中。讀伊藤侯爵所携頼山陽日本政紀。

鳥啼花落九春空。鐵路彎環究又通。一部麟經看未盡。
火輪飛度萬山中。

過雨宮開墾地

春山杳々雪斑々。落葉松間路似灣。剖判以來不毛地。
深林滿目水潺湲。

宿雨宮別墅與劍客日高氏話

一任春寒吹朔風。對盃中物意融々。鎮西劍客恨猶在。
話到戰時還涙紅。

汽車過輕井澤

轔々車響夢難閑。路入碓氷幾險艱。不怪朔風寒透骨。
天邊雪白淺間山。

城山館偶成

據丘高閣夕陽中。滿目山川望不窮。往事回頭茫若夢。

野花飄盡烏呼風。

善光寺

暗々廊中色即空。寺僧頻說彌陀功。由來三寶衰頹久。
衣食香龕不發蒙。

川中島

荒涼戰跡咽川聲。疎柳寒煙暗恨生。千古英雄呼不返。
春山唯有雉兒鳴。

妙義山

轆轤聲中景色遷。摩霄妙義忽當前。山如筆架狀奇絕。
騷客古來眞不傳。

大磯招仙閣訪末松博士

海光雲影共茫々。一縷茶煙望裏長。欄角几邊相對坐。
與君話舊到斜陽。

客中偶作

夢繞楚雲湘水樓。人生何事似浮鷗。疎林無影霜有色。
月冷山村黃稻秋。

題田家插苗圖

仄路回迂傍野川。渡頭人家樹如煙。遽然甘雨壓山過。
水白苗青田又田。

題山水圖

雨餘春漲上漁磯。滿岸桃花濕不飛。極目空江帆影斷。白鷗一點印天歸。

文武堂主人大橋君刋初航海。招予等數十名。

飲築地首府旅館。內外人雜集。宴頗盛大。故及。

五洲之水渺無關。偕卓不論華與蠻、歐酒米羹今夜會。陶然聯手醉歌還。

同人十名。航佃島。賽住吉祠。舟中所見。

夏月涼輝一水流。佃洲影黑喚將酬。小舟容與暮煙裡。華表高邊是渡頭。

島上聞笙

點々漁家對月明。晚風如水入涼棚。少年亦解風流事。獨弄清光吹玉笙。

越中島

物換星移面目更。越中島就日鍊兵。月明來照砲壇上。耳底猶聞嘲叭聲。

舟中偶得

臨水畫樓人未眠。湘簾高捲月明前。紅顏如玉愁猶在。望殺搖々來去船。

船着日本橋

上岸高歌學謫仙。陶然被酒又登船。櫓聲伊軋忽驚夢。

日本橋頭月影圓。

花鳥集校了之夕偶然有作

十年苦學志難成。還訂殘編對短檠。簾外清光月前樹。
落花聲裏闇傷情。

初夏曉起偶得

雨足林丘曉色清。幾竿新竹映窓明。小禽繞樹低飛處。
一顆黃梅落有聲。

（三十二年作）

俳諧算盤珠

夫子帳場格子に隱れて、算盤珠に精根を疲らし、銀煙管をやに下つて、二一天下のスヂ者を氣取る、たま〳〵五月雨の晴間無きに、下町通る、番傘を算へては、一ィ二ゥ三ィ四日市から、濡鼠のやうになつて、歸る小僧をつかまへ、まァ聞けと俳諧の講釋、請ふ隗より始めよとて、郵便受箱に投げ込んだる、屑も積つて五十句とはなりぬ。これをしも千句と溜めなば、また例の貯金文學ともならうか。

菜の花に橋一ッ越せば出町かな

おぼろ夜や棧橋につく棹の音

若菜つむ人の出で逢ふ土橋かな

坊主山に麥二三寸そよぎけり
揚雲雀其處に川あり畠もあり
村はづれ杉二三本ほとゝぎす
明け近き峠の村やほとゝぎす
宿坊に碁を圍む夜や鹿の聲
雲よりも下に鹿聞く峠かな
弗と欄に凭れば鹿聞く夕かな
若竹をうつし繪にする小窓哉
卯の花の闇に一ッづゝこぼれけり
出戻りの紫陽花怨む姿かな

暮るゝ間や卯の花にそふ小酒盛
月細く卯の花垣にかゝりけり
卯の花に雨の夜ばかりつゞきけり
若葉かげ綾瀨は白く流れけり
萱きあへぬ門を水鷄のくゞりけり
木下闇村まで遠き麓かな
置きかへた机の下の藪蚊かな
親のゐる方へと向ける蚊遣かな
陳皮焚いて一人蚊を遣る親父かな
金魚鉢を蚊帳の中から眺めけり

竹植えて窓からのぞく月夜かな

筍を早起の子の見つけたり

若竹やいつの間にやら雀の子

從兄弟同士行儀揃へて田植かな

夏の山高低無しに茂りけり

五月雨や傘さして來る樽ひろひ

小簑ほす角の花屋や五月雨

氷屋のまだ起きて居る夏の月

隣りではモウ寐たさうな門涼み

今朝植えた竹の光りて飛ぶ螢

富士筑波それからそれと雲の峯

時鳥弗と見上げたる御堂かな

赤馬車の塵をかけぬく暑さかな

短夜の欄に居眠る禿あり

嬢さまの裳やいづれ燕子花

秋の日の杜から暮れて水白し

城あとに柳二三本散りかゝる

時雨るゝや山莊に立つ茶の煙

枯柳河岸に身投の噂あり

野狐のあとくらましぬ枯尾花

かけ茶屋や廣尾あたりの秋の色
棹の音入相寒き野川かな
やけ跡に假家二三軒冬の月
榾の火を見かけて遠き入江かな
たそがれの海を千鳥の雲に入る
蘆枯れて入江の村に汐のさす
年の暮わが反古買はむ人もがな

（三十二年作）

風月集終

評判記

花鳥集

内田不知庵

●乙羽子の貯金文學

乙羽子の所謂貯金文學五部三千頁、『花鳥集』を以て其最後の卷とす。裝釘善美を盡し飾るに名士の題詞畫を以てす。本年上半期の文學は乙羽子の全集に依て壓倒せらるゝ世評嘖々たるも宜なる哉。『花鳥集』の凡例に乙羽子の自傳を載す。之と氏が新小説に載せたる和田蘆城子を追懷する文と若桑籠の小照錄とを併せ見れば子が經歷を能く知るを得べし。方今の文壇多士濟々たりといへども概れ中等の產ある家に生れて實際の辛楚を知るもの少ければ乙羽子が經歷の如きは既に珍とするに足る。況んや奥の僻邑より出で赤裸々を以て東都に地歩を作りしに於てをや。

書賈にして文事の心得あるもの蔦屋重三郎あり。逢摩屋及び辛子屋の如きも相應の文才あり。リチヤードソンに到つては實に近世小說壇の領袖なり。フォルスターの如きも亦優に專門文學者たるべき俠倆を蓄へたりき。乙羽子に於て殊に奇とすべきは初め賈人の家に長ゝて牙籌を學ぶ傍ら讀書掛管に耽りしが終に一地方の文名に慊らず筆を携へて東都に遊び夙に硯友社中の秀才として知らる。才藻技量既に尋常にあらず。其後入て博文館の業を助くるや氏が細謹愼密なる經營の成効せしもの少からず。經紀の才亦決して尋常ならざるなり。今や姑らく筆を擲つて再び牙籌を握らんとするに臨みて多年の蓄財を擧げて悉く五部の大冊子を上梓するに費す。而して此乙羽全集は遍く讀書社會を動かして書肆店頭到る處之を求むる顧客の應接に忙がしといふもの即ら氏が文に賢く且つ商に巧みなるを知るに足る。

余が乙羽子と相知る今より十二年前なり。某の家に遊びしときに偶々座に一客あり、眉目秀麗にして加之も溫厚敦樸の風あり。主人介して曰く是れ羽陽の文士二橋散士なりと。當時政治小說盛んに行はれ就中佳人之奇遇の雄文大筆は江湖を騷がして此種の脚色文章を學びしもの連りに續出したりき。二橋散士は亦此種の作者にして文章未だ少年の稚氣を脫せ

ずと雖も穩健流暢頗る誦すべきものあれば余夙に此名を記臆せしが、初めて相見るに及んで其作は燕趙悲歌の音あるに反して其人は極めて朴素質實なるを驚きたりき。二橋散士は今の乙羽子にして、當時の處女作は即ち五部の貯金文學中の一なる『累卵之東洋』なり。

其後乙羽子と余と其居相近接せしをもて屢々往來し、子が昔し山形の商家に在りし時夜る衣を被ぎて和漢の雜藉を涉獵し句を錬り文を工風して細心研究し、或は同好の者と計つて數葉の雜誌を編輯し匿名を以て窃に先輩を諷して忌諱に觸れ、或は蓮荷畑に肥糞を施しつゝ句案に耽り、或は風雪の日峻坂を越えつゝ將に凍餒せんとする時猶ほ文章の工風を怠らざりしを聞き益々子が往しへの天才と同ト經歷を踏めるを推量したりき。當時氏は同鄕青年と共に小屋を賃して互に炊事の勞を取りつゝ晝は各々職に從ひ或は校舍に通ひ夜は孤然たる孤燈の下に各々其衾を擁して讀書研鑽に餘念なかりき。宛然たる原寇の生活なり。昏て薄暮子が廬を叩きしに室に燈なくして屋後に聲あるを聞き、家を繞りて後園に出づれば數箇の黑影環を作りて濁みたる聲を揃へて鄙唄を歌ひつゝ手を掉り足を搖がし巧みに節を合して舞躍し興に浮れて人の來るを知らざるものゝ如し。余乃ち其名を呼べば環中の一人聲に應ゝて來るもの乙羽子にして。相見て噓然として笑ふ。子が磊落は概れ斯の如し。

乙羽子が初め從事せしは繪畫叢誌及び風俗畫報の二雜誌編輯にして、二雜誌の聲價ある氏が力に負ふ處少からず。氏が雜誌の材料を採集する極めて細心周到にして博く群書を借覽し或は遍く博識の士を訪ふて質し考證益々深くして曾て飽くを知らざるなり。子が造詣の深きは蓋し爰に原づく。乙羽子の小說にして初めて世に聞えしは讀賣新聞に載せたる『京屋之娘』及び『露小袖』の二なり。(共に『若葉集』及び『花鳥集』に收む)。當時既に定評あれば今は繰返すを要せざれども近頃子が文章を評するもの往々纖麗に過ぎて却て輕浮に失するを云ふ。然れども輕浮は今の小說家が通有する文弊にして乙羽子の才敏も猶ほ免かるゝ能はざりしは惜むべしと雖ども其間まゝ天眞流露せる文字を認むるに頗る多きするに足る。且つ斯の如く流暢清麗にして機智詼諧に富めるに係らず極めて明晰平易なるは稀に見る所、元祿以降の小說文字に精熟するにあらざれば容易に作る能はざるものなり。

『千山萬水』及『名流談海』の二篇に集むるものは重に最近の作に屬す。『千山萬水』を評するもの多く乙羽子の山水觀察が平凡に過ぎると文章の殊に輕佻なると其旅行が紳士的にして雅興に乏しきをいふ。小說家の旅行記の往々輕佻に失し易きは今の時弊なれば特に乙羽子をのみ咎むべきにあらず。又其曾遊が必ずしも常に紳士的ならず時として膝栗毛的なるさ

へありて詩人旅行の雅味を掬すべきものあるは『長柄山の夜雨』或は『七湯めぐり』等を見て知るべし。且つ子が觀察は自然よりは寧ろ人情風俗に親むが故に山川名勝を描くものよりは却て土俗俚謠等を見免さゞるを長とす。旅行記と山水記とは決して同一ならざれば余は寧ろ子が風俗畫報的長處を認めて氏の旅行記が常に若干の智識を與ふるを喜ぶ。而して『海嘯行』及び『噴火行』二篇の如きは事既に慘憺なれば他の諸篇に勝れて極めて壯絕なり。子が舞文の才の愈々尋常ならざる以て見るべきなり。

『名流談海』に到つては近年の歌書なり。現代名士の像と口吻とを併せ寫して其人物を髣髴せしむると共に性癖思想の一變を示したれば以て明治の史料とすべきもの少からず。殊に海舟、況齋、紅葉、露伴等は席上談話に長ずるが故に宛然其人の聲を聞く心地す。亦一種の技倆といふべし。

要するに乙羽子は其多才多能を以てせば恐らくは今の文壇に匹儔なかるべし。小說、隨筆、紀行等は勿論漢詩、和歌、都々逸、端唄、新躰詩の末に到るまで凡そ文事に關するもの必ず試みざるはなく、同時に寫眞家、旅行家、美術家として聞え、且つ善良なる交際家、篤實なる商業家として知らるゝもの豈に稀に見る奇才ならずや。殊に子が寫眞術の如き有繋

に美術の嗜好深きが故に意匠頗る巧妙奇拔にして殆んど專門家を凌んとする技倆あるは『千山萬水』及び『名流談海』の口絵を以て證するに足る。其才量の饒多なる誠に不思議なる哉。

『花鳥集』は乙羽子が最も後の集なり。嘗に其量を以てするも普通作家を凌ぐに足る。今や此集を名殘として姑らく牙籤に韜晦せんと欲するも子猶ほ春秋に富めば前途悠々造詣量るべからず。況んや氏の多才多能なるは縱令百忙の境地に住すといへども畢竟文學は其生命たるが故に驅ては更に進歩したる第二の『花鳥集』を見るべき日決して遠からざるを信ず。

『花鳥集』成る日、子、余に告げて曰く、『人往々僕が書き捨ての零篇をすら集めて恥を後世に貽すを諫むるものあり、然れども後世豈に永へに恥を傳ふるものならんや、誠に恥づべきものならば後世は永く傳へずして忽ち埋却し了るべし、豈に深く憂ふるに足らんや』と。畢竟自から忽ち忘らるゝを知らずして恥を後世に貽すを恐るといふものゝ如き己れを知らざる自惚の沙汰にして此毫しも修飾せざる奇拔の言は偶々是等の嗚呼なる自者を誡むる針鈴たるべし。連りに分外の虚榮に動かされて謙德を矯飾するものゝ如きは却て乙羽子の大膽無邪氣なる告白が痛快なる諷喩が爲すに如かざるなり。

『花鳥集』中白眉たるべきは『元祿時代と英一蝶』と『松壽軒西鶴』となり。考證該博なる稀に見るの文なり。『人品五十題』及び『衣食住』の如きは其博覽と好事とを知るに足る。其他の諸篇小說隨筆等は別に批評すべき人あれば余は爰に擱筆す。（卅二年五月二十日讀賣新聞）

●乙羽子の花鳥集

乙羽子が所謂貯金文學の中、最後の大集と聞ゆる『花鳥集』の寄贈に接す、是れぞ五日の一石、十日の一水、積りて千山萬壑と化したる三百餘頁の大冊なる、卷秩整齊、意匠富贍、善盡し美盡して、綺麗比なし。卷を披けば春畝、霞山の題辭ありて、子が交遊の周きを知らしめ、巽軒、紅葉、露伴が贊序ありて、本集及子が性狀を明かにし、雅邦、桂舟の畫ありて、麗更に麗を加ふ、又以て此集が尋常の出版物にあらざるを知らむ、蓋し子が文壇を去る紀念なりと云、集中收むる小說二十篇、英傑史傳七篇、人品五十題、衣食住、晴好雨奇、漫筆紀行、有らゆる篇章羅して剩さず、讀む者をして、山を送つて水を迎へ、花盡きて月出で、大觀小景去來して、殆んど目睹に遑なからしむ、固より集中の諸篇は、曾て一度び評壇の是非に上りしもの、今敢て屋上屋を加ふの要を看ずと雖も、子が多年の研鑽蘊

蓄を傾けて、此大集を成せしを思へば、子が造詣精力の一樣ならざるを知り、併せて子が明治文學史上に尠なからざるの貢獻を多とし記せずんばあらず、殊に此集が、直に君の多藝多能なる性格を現ト八面玲瓏の才藻を示すに於て、我輩は子が未來の有望なるを慶せざるを得ず、思ふに子や此大著を紀念として文壇を去ると雖も、別に他面に於ける成功が、更に此大著と均しきものあるを信ゝて疑はず、我輩は子と文壇に相別るゝに際し、大に囑望の情に堪えず、

我輩に明治の小說家にして、此好紀念を留めて、新乾坤に入らんとする最も規矩ある進退を欣び、且つ以て他の範となすに足るを覺へ、坐ろに妄言の冗長に亘るを禁ずる能はざりき、乙羽子我が言に首肯するや否や（卅二年五月廿九日毎日新聞）

松居松葉

●花鳥集

大橋乙羽往年著す所の作幾十種を網羅して五卷の書を作る曰く『累卵の東洋』、曰く『若菜籠』、曰く『千山萬水』、曰く『名流談海』、曰く『花鳥集』、而して花鳥集は一千二百頁彪然たる大冊彼が文學の雄麗、筆力の强健を示して餘あり彼近者筆を投ゝて實業界に馳驅せんとするの意あり則ち從來作る所の著を美裝して其詩神を祭るなりと事甚だ序あり彼が實業界に

於て成効すべきは此一事を以て尙ほ窺ひ知るに足らん乙羽は我と鄕里を近うし幼にして、商家の走僮たりしが如き其經歷我と太だ相似たり殊に彼が書を借りて今日の素養をなしつる山形の八文字屋はわが其店頭に圓機活法を繙きて番頭の叱責を受けたる桑折の八文字屋の緣戚たるに至つて彼我の緣太だ淺からず然も彼は細心勤勉日夕進步して止まる所あらざるも我は乃ち粗鹵狂狷碌々として人後に立つ事久しく四方の志を藏して却て空しく兒女の戲をなす此花鳥集が暫く乙羽が文壇を去るの紀念なるを聞くに至つては始んと我をして愧死せしめんとする者あり我、今は其文學上の評隲を試むるの力なし、たゞ自から此集が我を勵ます事殆ど良師友の如くなるを彼に向て深く感謝するのみ（卅二年六月五日萬朝報）

星月庵

●花鳥集

『花鳥集』はまた乙羽庵全集ともいふべきものなり、賛すべき點につきては世評早く之れを盡くせり、しかも其の讃辭につきての批議さへ出でしほどなれば、予輩の言ふべきこと殆どなし、案するに乙羽氏の文は彫琢によりて却りて文氣を殺ぐの弊あるものにあらざるか、予輩は卷中收むる所の二十餘篇の小說よりも、文として寧ろ『元祿時代と英一喋』の如きを取る、文氣奔放の際に妙味おのづから存すれば也、小說にては『露小袖』『霜夜の虫』及び之

れに對する卷末の批評が、暗に二十二三年頃の文壇の一部を指示するを覺ゆ、中にもおもしろきは其の批評なり、小説の本意は文章にあらずして其の觀念にありと講釋する不知庵主人なれば、人一代の浮沈を描くはやがて人間界の無常を説明するものなりと哲學めかす忍月居士あり、紅葉柳涙知十諸氏の批評など、今は人の忘れたるものさへ其の中に見るを得べし、

此等の批評によりて、予輩の教へらるゝ一つは、小説中より直理を歸納し來たるの方法如何といふ問題也、今日の評壇に立ちて、流石に忍月居士が前迹の跡を追ものあるべしとは思はれざれども、されどたゞ異なるは度のみ、本質に於ては多く之と徑庭なきが如き筆法また必すしも無しとせず、花に着して春の色は紅しといふも一の抽象的事實なり、葉はゞめて發するが故に春の色は綠といふも、均しく抽象的事實にあらずや、近く夫の『太陽』記者によりて稱説せられたる時代精神の論の如きも、予輩は其の論意を否定せざると共に、之れを事實に徵し之れが内容を定むるに於て、愼重なる研究を要すべきこと勿論なりと信ず、（卅二年七月中旬讀賣新聞）

●花鳥集

紫山生

是れ乙羽氏五大著書の隨一にして最も大部のものなり收むる所小説、隨筆、人品評、紀行凡そ百餘編にして紅紫錯落百花の亂れ咲ける如く讀む人をして卷を措くに忍びざらしむ、中に就き趣味深きは『人品五十題』にして月前燈下古人と臂を交へて教を聞くらん心地す、若し夫れ氏の小説に堪能にして紀文に老熟せるは世の知る所更に叨々を要せざるべく『衣食住』『晴好雨記』の欄下に列せる諸編を家庭及び旅行家の珍として愛誦する所なるべし卷頭伊藤侯近衛公の題字井上（哲次郎）紅葉露伴諸氏の序文あり雅邦桂舟二氏の口繪共に清麗を極む吾人は此書の清風明月と相並んで避暑驅蟲の席に缺くべからざるを信ず（卅二年七月廿五日中央新聞）

●花鳥集

貯金文學との銘打つて乙羽氏が世に出されたる五冊の内一冊流石に文壇を去らるゝ置土産には恰好の書にして近來稀に見る所の目覺しき美本仕立、一千ページに餘る大部、中味は氏が硯友社中の一青年として諸先輩に將來有望と囑目せられし時代に艶曲の筆を走らせし露小袖思ひ川を初めとし此一冊に新著の作を網羅し盡したり精讀しなば往時目にし尙ほ記憶に存する興味を喚起して面白かるべく然して後妄評を試むるも可なれども既に博文館一

門の人々が擧つて讃美の聲を大にしたるのみならず卷末に附したる當時諸大家の評にても眞價は明かなれば兎角の評は今更野暮なるべし只終りに云ふべきは『名流談海』『千山萬水』と共に此書は氏が今日迄文學上に於ける半面を知るべく且つ現時の寂寥たる文界に兎も角一異彩を放ち幾分の活氣を與へたるの功は沒すべからず氏尙ほ春秋に富む蘊蓄せる詩想は今後他の方面に顯はるゝの日を待たんかな(卅二年七月時事新報)

●花鳥集

大橋乙羽子は貯金文學として曩に累卵の東洋、若菜籠、千山萬水、名流談海等を著作したるが今又た花鳥集を上梓したりけり此の花鳥集と云へるは一千一百ページ餘の大冊子にして小說あり傳紀あり逸話あり風俗觀あり紀行文あり美術に關する事あり悉く是れ出色の妙文字、之れを繙けば恰も百花園に遊んで嬌紅艷紫を一眸の中に收むるの趣なくんばあらず製本も亦た頗る美を極め明窓淨机の好侶伴たるべし春畝霞山兩公題字最も筆力の雅健が見るに足る矣(卅二年七月東京日々新聞)

●花鳥集

橋本雅邦畫伯今年齡六十四孜々丹靑に勉めて日夜苦心慘憺の狀年若き畫家の及ぶ處にあらずさる程に彼の貯金文學の開祖乙羽の藏人、今度又々花鳥集てふ冊子の出版を企て口繪の揮毫を雅邦畫伯に依賴しにるに畫伯はまづ畫題を名工苦心の圖に命じ、在昔畫聖兆殿司、意を畫道に注ぎて身に垢付けども洗はず衣破るれども繕はず通天橋下霜葉紅に、溪水白き畔、地を鑿ちて茜色せる土を掘り中てそを繪の具に使ひて佛畫を彩りたる苦心の態を描き出すべしといへり、これ雅邦畫伯が兆殿司苦心の圖をかりて今の靑年者流を誡むる諷刺畫にあらずやと或人はいふ、因に記す京都通天橋の下今尙繪の具といへる處ありて兆殿司の遺蹟を存せり(卅二年七月八日讀賣新聞)

●眼前口頭(一節)

綠雨

○乙羽庵主人花鳥集一本を贈らる。釘裝に於て、紙數に於て、實にすばらしきものなり。生憎やわれ之を讀むの暇を得ず、人の已に評せるを見るに、讃辭に於ても、亦實にすばらしきものなり。最早暇を得んことを願はゞ、おくれて讀むの要なかる可けれはなり。

○貯金文學とは拾つるの意か、拾ふの意か、太だ明瞭ならずと一記者は曰へり。われは其意義の不明瞭なる間に、乙羽子が手腕の潛める者あるを認む。但し文學上、そは何の緣由ありやといふが如きは、不通を極めたる門外漢の言なるべし。(卅二年七月讀賣新聞)

●乙羽子の花鳥集

あき生

花鳥集は所謂乙羽子の貯金文學として知らる有名の著書なり体裁の優美なる事紙質の善良なる事印刷の鮮明なる事紙數の多き事卷頭挿畫の念入なる事等に於てたしかに明治文壇産出物中の第一位に位するもの乙羽子の斯道に力瘤を入るゝの勞やまた大なりといふ可し乙羽子頃者筆を燒いて實業に從ふの意ありさてこそ文壇へのお名殘として子がこれ迄文壇に貢献したる所のものを悉く掃集め來りてこゝにかの貯金文學をなし花鳥集を成せるなりと傳ふさりとてはまた本意なき事の限りにぞある本篇收むる所小説としては往年批評壇を騷がしめたる露小袖をもひ川等を始め出世奴小夜衣等の佳作あり下つては諸種のスケッチ、隨筆、紀行文等を掲げ眞にこれ百花繚爛の觀あり何さま千餘頁に渡る事さて一〻評せん事は素より思ひもよらねど露小袖をもひ川等に於ける艶麗花の加き能文は今もなほたしかに渇仰者を有すべく夏の虫女畫師等の近作にはたま絢爛を出でゝ平旦に入るの趣を見るべし近衛老公英一蝶等を寫せるの筆將た拙ながらず衣食住の部には殊に子が長所を見るわが最も愛するはかゝる小品にあり、緣結び、お正月、初午、娼家法、歌比丘尼等殊に誦するに堪たり紀行文は例の如しと評せんのみ兎にも角にも自ら資を抛つてかゝる美本を出す事近

頃殊勝の道樂ここそ申す可けれ（卅二年七月大坂毎日新聞）

●乙羽子の好著

我、先輩としては乙羽大橋又太郎氏に負ふ所あるなり。我の今日新報社に在りて徒らに碁盤目の罫紙を汚し、覺束なくも操觚著の仲間入をなし得らるゝもの、是れ畢竟氏の賜物なり。氏往年『風俗畫報』の主筆たりし時我は共に机を列べて其の知遇を受け、氏の博文舘に入りて駙馬となられたる後に於ても、常に示導を受しこと實に尠少ならずとせず。氏、頃日、千山萬水、若葉籠、花鳥集、名流談海、の好著あり、印刷、裝釘の美と共に行文の艶麗なる如何に文壇を騷したるか、評家筆を揃へて比しく近來絶無の名著作となし、氏の名聲籍甚たり。氏は此の著述を限りとなして暫時筆を算盤に代へんとすと、今後、我を示導し我を勵まされたる氏が艶麗なる作は數年間見るを得ざるべきか、是れ氏と最も深き緣故なる我ならずとも誰れか遠憾の情に堪にざるものやある、殊に我にあつては此の感を一層深からしむる者あるなり。（卅一年七月德島新報）

●花鳥集

大橋乙羽氏が『貯金文學』の殿として出でたる此の集は其の裝釘の美、紙質の善良、印刷の

鮮明、口絵題辭等の入念なる事は明治文壇に類稀れなる程のものなり、一千二百頁餘の大冊小說、記傳、逸話、風俗觀、紀行文、美術雜筆等氏が十年來の著述を輯めたるもの而して此の集を公けにせるは氏が今後筆を投ぜて牙籌を事とする生活の局面一轉の紀念に殘さんが爲なりとぞ。本篇收むる所小說には往年批評壇に持囃されたる『おもひ川』『露小袖』を始め『小夜衣』『霜夜の虫』等の作を載せ『人品五十題』『衣食住』『晴好雨奇』等の中趣味の津々たるものあり頗る長篇なれば今一々詳評するの餘裕なし他日機會を得て更に所思を述べん

（新小說第四年第七卷）

●大橋乙羽氏の五大著

或は之を貯金文學といふ、曰く『累卵の東洋』曰く『若榮籠』曰く『花鳥集』曰く『千山萬水』曰く『名流談海』是れなり、天眞の筆致、美麗裝釘、流石は博文館の養子として氏の特得なる意匠を凝らし、あらゆる贅澤を施したる、吾人は氏を以て出版華族と呼ばん哉、乙羽氏夫れ此纒頭を領受するや否や、（中央公論）

●乙羽子が五大著作

乙羽子が五大著作、最終の卷花鳥集の一編、近來の大著美裝大冊に出版界を賑しゝは事實

なり、其の內容に至りては中々讀み盡すべきに非す、されば是が精評に至りては秋の夜長を期すべく今はたゞ書名を紹介するに止めん、兎まれ子が例の才筆艶麗の文流暢の筆殊に其の小說より紀傳逸話等隨筆的文字は暑中休暇の好伴侶たるを保證す、（早稻田學報）

幽　堂　生

●乙羽氏の花鳥集

寂寥なる今日の文界に於て、大出版物として其名噴々たる大橋乙羽氏の五大著書は、氏が積年の貯金を投ぜて自ら刊行したるのゝ聞えたるが、累卵の東洋、若榮籠、千山萬水、名流談海の四書相續いて發行せられたるが中に、千山萬水は畏くも　乙夜の覽を賜はりしものとして殊に讀書界の耳目を聳動したりき。而して這回其後殿として發行せられたるは、近衞公、伊藤侯、井上博士及露伴、紅葉兩大家の題序と雅邦、桂舟兩畫伯の口絵とを有したる花鳥集なりとす。其輯むる處は過去十餘年間の氏が著作に係る小說（おもひ川、露小袖、出世奴、小夜衣、男の腕、夏の虫、高利貸、忠孝二筋道等十數篇）紀行、傳記、逸話、隨筆等（近衞老公、大石良雄、加藤清正公畫像、元祿時代と英一蝶、松壽軒四鶴、鹿山公、菅公畫像辨、人品五十題、衣食住、晴好雨奇等）にして何れも氏が流麗なる筆に成り、所謂元祿文學の眞を得たるもの。其小說に就て是非は既に一度世の批評に上りしを以て、今

重れてこゝに言はざるべし。中に就て晴好雨奇の如きは、氏が得意の紀行文にして、讀過一番、夢魂の其境に飛ぶを覺ふるなり。

本書特色として見るべきは、先づ其製本體裁の優美高尚なるにあり。殊に表紙花鳥を現したる意匠の如きは、流石に乙羽氏の考案として感服の外なきと共に、桂舟氏の美人畫の艶麗なるに加へて、小說雜誌などに多く見る事を得ざる橋本雅邦翁の極採色口畫の異彩を放つあり、實に氏が苦心出版物として見るに餘ありといふへし、終に臨み我等は氏が能く逆境に忍びて我文學界に忠なりし結果、今日の順境を得、以て其抱負を行ふの期に達したるを、氏の爲に、我文界の爲に悅ぶものなり。（卅二年五月烟草倶樂部）

宮田木佛

花鳥集

大橋乙羽の貯金文學五大著述最後の一卷『花鳥集』は出でたり、內容は吾人未だ繙かざるを以て知るによしなしと雖外見頗る美しき大著述なり、此書は彼が舊作の小說史傳隨筆等を輯めしもの乎彼が忍耐と勇氣とに服す。（早稻田學報）

貯金文學

乙羽、春來貯金文學の名の下に花鳥集を出だし、千山萬水を出だし、若菜籠を出だし、名流談海を出し、累卵の東洋を出す。本年半期の文壇は彼れが獨占に係るといふも過言に非らず。勉めたりと謂ふべし、才筆縱橫、彼れに幽遠莊重の筆なしと雖も、假令ば涼風を趁ふて清泉を求むるが如く、自轉車に乘りて明媚の山水を迎るが如く、淡澹、明快、讀むものをして瑣の快感を傷けざらしむるの技能に至りては多く得難き所、殊に一局に偏せずして及ぶべき丈け力を多方面を試みて比較的成功せるもの硯友社中彼れに及ぶものなし。而かも惜むべし、彼れはこの五篇を名殘として暫く文壇を去り專ら牙籌に從事すべしといふ。（卅二年六月近畿評論）

乙羽、渠は曾て紅葉等が組織せる硯友社一派の才物として大に囑目されたりし一人なるも の筆が餘りに多面多角的にして小說、漫筆、紀行、其他あらゆる方面に手を出さざるはなく 又一として大なる成効を認識せるものを見ず之蓋し渠が才氣の英發にして此に至らしめたるものならんと雖も到底その理想的文界の人にあらざるは明なり其の自然を觀察するの淺薄なる其情感を寫すの俗氣ある飽くまでも渠は商界の英雄として博文館の主人たるに耻ざるなり博文館由來此の種の半文半商的人士に乏しからず水哉然り青軒然り之其俗流に勢力

ある所以ならんか然かも乙羽はその中に於げる最も文學者らしき一人なり其所謂貯金文學なるものよく渠が理想の全殼を網羅して餘さず或は明治文學の一異觀を以て見るを得んか、（卅二年六月革進雜誌）

名流談海

高談雄辯耳聞齊。賴此一枝靈筆携。侯伯子男兼雅俗。
詩文徘畫集東西。洋洋有氣春如海。澹澹不言花欲蹊。
我不訪他他訪我。磔川幾日簇輪蹄。（めざまし草）

●名流談海

此れ亦大橋乙羽氏が例の貯金文學の一として出版せるものなり例に依つて卷頭色摺の石版畫數葉を載す曰く伊藤と山縣侯曰く京都無隣庵曰く大隈伯と菊花壇曰く渡邊國武子庭園曰く石黑男と多聞山莊曰く末松男夫妻曰く紅葉子乙羽氏が撮影に係る、談ずる所の名流は山縣元帥、伊藤侯、故勝伯、大隈伯、福羽子、渡邊子、石黑男、佐藤少將、櫻痴居士、西村茂樹氏、幸田露伴氏、前田香雪氏、橋本雅邦氏、黑田清輝氏等にして外に著者が口述の素

人寫眞談及本會道中話を揭ぐ、讀み去つて胸禁爲めに清く逸興緒間より透出するの妙あり。（中央新聞）

●名流談海

本書は著者大橋乙羽氏が山縣伊藤兩侯を始め故勝伯、大隈伯、渡邊子、福羽子、末松青萍男、福地櫻痴居士等朝野の諸名流を歷訪して其談論を筆記したるものにして啻に奇言快話の紙上に躍如たるのみならず朗讀一番興味津々として盡す恰も諸賢と一堂に相會して風雲を喝破するの趣ありき。（東京日日新聞）

●名流談海

表紙に記して曰く「著者の寫眞癖は獨り名士の風采を撮影するに滿足せず萬談雄辯奇言快話を靈筆に寫して遂に新書の著となりぬ」を以て本書の面目を窺ふへし、朝野名士の談話讀んで篇を終るを知らず卷頭の寫眞版と對照せしめて感愈々深し。（讀賣新聞）

●名流談海

大橋乙羽氏が諸家を訪問して其の談話を筆記せるもの、政治家あり學者あり文人藝士あり、明窓淨机の下之を繙けば殆ど一代の名流が更るゝ吾人の前に現はれて其の高談快話を闘はし應接隙なきが如き感あらん、特に著者が其の談話を寫す傍ら或は住居のさまを叙し或は其の風采を描かんと試みたるは用意周到にしてよし、全篇を通讀して頤を解くべきこと笑ふべきこと嘆くべきこと悅ぶべきこと等千差萬別なるうち耳たちて聞え眼だちて見ゆるは山縣伯が故太閤の豪放を語りて

畢竟今の豫算々々で攻めつけられて大工事も出來なからう、土木局長の淺野に百萬石も遣つて置くといふやうな大膽でなくては世界へ押出しての大事業は六ヶ敷からうさといへる、勝伯が現代の士を評して

物識になると人間が弱くなる、三代目唐樣で書く賣家札で、今の人達もその三代目の格だ

と冷罵したる、其他幸田露伴氏文章推敲談、黑田淸輝氏の洋畫問答など最も有益有趣味なるものならん、卷首諸名流の寫眞肖像亦此書の價値を增すこと幾倍。（都新聞）

●名流談海

乙羽子に三癖あり其根本の癖は旅行と交友して旅中の見聞を記し應接の感懷を矜せんが爲めに文癖となり旅中の風景を寫し知人の風貌を傳へんが爲めに寫眞癖となる故に子の足跡

日本に洽ねく氏交友朝野に亘らんとするに及んで其文才其寫術益々佳境に入る今之を集めて小冊子となし予の三癖を世間同好の人に分たんとするものにして愛すべき小冊子なり卷頭先づ各家の肖像庭園の寫眞數葉を以て飾られ山縣伊藤勝大隈其他所謂名士の談片續々として顯し來る處春雨書窓の讀本なり唯其微瑕を指せば板元の口上滑稽に失するを奈何。(日出新聞)

●名流談海

卷中緝むる所園藝談(山縣侯)滄浪閣談(伊藤侯)美術談(同上)洗足軒話(勝伯)古今小說談(同上)雅俗談(同上)經歷談(同上)圓藝利用談(大隈伯)王政振興談(福羽子)俳諧一家言(渡邊昇子)支那談(渡邊國武子)茶の湯談(石黑男)文學談(末松男)日清戰話(佐藤少將)懷舊談(福地櫻痴)幕末談(西村茂樹)芭蕉翁の話(小崎利準)身の上話(栗本鋤雲)詩人の話(尾崎紅葉)修文談(幸田露伴)意匠談(前田香雪)動物園の話(看守人某)丹青小言(橋本雅邦)洋畫問答(黑田清輝)の二十四篇に附するに素人寫眞談(著者)木曾道中話(同上)の二篇を添へこれにも例の自撮に係る美麗の寫眞數葉を載せたり其口述の孰れも趣味津々として盡さざる所眞に談海の名に反かずと云ふべし。(山陽新報)

●名流談海

乙羽子の著瀟洒たる袖珍本なり收むる處山縣伊藤勝大隈福羽渡邊石黑末松福地西村諸名流其他數名の談片にして久我老翁の題字と寫眞版に一層其躰裁を添へ春日秋夜將た瀛車中の好侶伴たるべし。(河北新聞)

●名流談海

本書は其凡例に見ゆる如く當今第一名流の談話を採集したる者山縣侯の園藝談より黑田清輝氏の洋畫問答に至る迄或は文學に或は美術に或は科學に或は戰話に二十餘名家の譚話を詩味ある筆に寫して蒐集し附錄として著者口述の素人寫眞談、木曾道中話等あり殊に卷頭には著者特意の寫眞繪數葉を付したれば優美絕妙言ふばかりなし。(東海新聞)

●名流談海

大橋乙羽善例の袖珍美本にして子が名流を訪問したる談話觀察等に關する隨筆を輯めしものにて卷首に篇中人物の各色寫眞版を挿み篇中の重なるものは山縣元帥の園藝談伊藤侯爵の滄浪閣談外一件勝海舟の洗足軒話外三件大隈伯の園藝利用談渡邊子爵の俳諧一家言同國武子の支那談末松男爵の文學談福地櫻痴の懷舊談小崎利準の芭蕉翁の話尾崎紅葉の詩人の

話幸田露伴の修文談橋本雅邦の丹青小言黑田清輝の洋畫問答著者の素人寫眞談等。(秋田魁新報)

●名流談海

本書はこれ大橋乙羽氏の特得の寫眞術を以て天下英雄の風彩を撮影し特得の靈筆を振つて現下名士の高談快話を描寫したる一種の蓄音器なり若し夫れ卷頭掲くる所の伊藤侯、山縣侯、勝伯、無隣庵、大隈伯菊花壇逍遙、波邊子庭園、石黑妻女末松男夫妻等の鮮麗幽邃の寫眞を一覽し然る後諸侯伯子男の奇言快話を朗誦一過すれば天下の英雄現下の名士と一堂に會し親しく快談欵語するもの丶如く讀み去り讀み來りて興味津々卷を措く能はず忽ちにして山縣侯を椿山莊に訪ひ忽ちにして伊藤侯と滄浪閣に語し或は勝伯の清談を洗足軒に聞き或は大隈伯と菊花園を逍遙す何等の快事ぞ實に天下の奇書春宵の好伴侶。(米澤新聞)

●名流談海

這は大橋乙羽氏が近著中尤も饒味あるものなりと信ず。讀過の際面白く感ずたる所を抽出して自家の所感を簡短に下さん、是れも紹介の一風變りしものと見ば可ならん。先づ山縣元帥の『園藝談』中に在來の造庭師が「山と云へば盆畫の山を模し水と云へば鱒の住みさうな池を雛形にする」を排し山縣流の庭園はそれでは氣に合はぬ何處までも幽邃と豪壯と兼ね備はらなくちやいかんと云ふ考で今度は我流にやつて退けたとあるは好む所を見て其人品を知ると云ふに愜びて將軍は將軍らしいと思ひぬ。勝伯が「古今說談」の中に

露伴と云ふ男は四十歲位が彼奴なかゝの奴だ學文もあつて今の小說家には珍らしく物識で少しは深かさうだが お前懇意か、さうか、面白い、郡司大尉の弟だ。さうか、それから紅葉と云ふ男もあるなアレハ才子だ小說の外に仕事を遣る奴だ書いたものに才氣が現はれて居る

とあるは伯が烱眼に服する其の書を讀んで其の著者が他の例面を透見するは容易に似て容易ならず。

馬琴の八犬傳も德川の末の事を書いたのぢや畢竟不平鬱勃の氣を洩したのだが唯見れば何の意味も無いその意味の無さいうなのが巧手なのだ

と云ふは『八犬傳』の批評としては兎も角小說一面の眞理を道破せるものとして現時の作家

も亦服膺するに足る尾崎紅葉氏が「詩人の話」に現是自稱詩人の薄志弱行を罵倒して旋て夫れですから私は詩人たる本分として不及ながら斯う心掛けて居ます世間が或著作を讀んで其詩人を想像する時に於て其の著作の天品たると共に筆を執るところの詩人其人が性行と云ひ品位と云ひ廉直で純潔崇高なる天職に負かない人物であつて啻に著作が天品で立派なばかりでなく其詩人が慕ふべく仰ぐべき人であるとしたならば著作に非常な價値を增してまた詩人に一段の光を與へるのであらうと思ひます夫れに詩人其人が沒道德破廉耻なる人物で義理人情も知らない市井無賴の徒と撰ばない厭ふべきものであると知つたならば既に筆を執る詩人が學むべき人物であるから其著作の是非は偖て置て學み蔑むに違ひないのですから詩人は大紳士でなければならない

云々能く現時文壇の弊を喝破し得たる穩健の說也特に詩人文學者の位地未定なる我が邦に於ては此の注意の緊要なるは一層甚しきものあり作と著者とは理の上に於ては各々獨立の裁判を受くべきものならん而も情の上に於ては特に現時の作家にありては此の間殆と分ち難き關係あるべし詩を具象的に人を教訓するものとして見たる一側より云ふ時には其の効果の强弱と著者の人格の高下とは至大の關繫あるや論を待たず。幸田露伴氏が「修文談」に

一體文章を成すには一期二期三期四期位まであつて達筆な人は其の一期乃ち最初浮び得た思想を直に文に寫し其の儘公にする人が多いが其れは賛めべきでない上手のする事で銘人のする事で無いと思ふ人已に文を作らうと思ふ以上は一期の思想に誰にでも起るが其れを練り其れを鎔かし或は火にかけ水に浸して一分一厘狂ひの無い點まで敲きあげてこそ眞正の各文とも鍛鐵とも云ふべきなれ例へば月を描くのにブンマワシ遣ひッ放しにするのは一期で先づ雲を描いて見せるのが二期で描かぬ月の影を水に見せるのが三期でツマリ月も畫かず雲もあらぬ冬夜の何處か月の寒い心持を或る物體に移して見せるのが四期ではないがブンマワシの月を刷毛で塗り隱す位なら誰でも出來るが其の月を月と云はずして月の心持を見せるのは經營慘澹の極で無くては出來ぬ

と云へるは文を學ぶものゝ充分翫味すべき說なりと思ふ元より這は構想以外の苦心と知るべし即ち表現（エキスプレッス）の工夫を云ふものの也。黑田清輝氏が「洋畫問答」の中には移して直ちに現時の小說家を敎ふるに足るもの多し曰く

新流の方は一年や二年かいたつて出來たもので一面の畫の形を成したるのはチョット少い其形を成したものが出來ないと云ふのは其處が新派の得意な所で始めつから畫をこし

らへる事は無用です只物を見る目の寸法を拵へる其内に手は獨で慣れて來る其れで先づ目の寸法と云ふ側をしつかり固めて置いてそれから油絵をやらせる時には人の形はすつかり書けると云ふ工夫にさせるのである

云々小説家が徒らに文章趣向などに心を傾盡して世間を見る眼の据所をきめず又其の眼の玉を研かざるは現時の通弊なるが如し「目の寸法を拵へる」と云ふは曾に畫家が修業の心得のみにはあらず又

人間は神樣でないから一々寫生して其れからそれを畫師の考へ次第に直して往かなければ立派な絵はかけない

と云ふは是れ寫生と醇化は相待ちて始めて名畫を成すの理を説くもの直ちに移して新派小説家の座右銘となすに足る。著者乙羽氏が「素人寫眞談」中に

寫眞と云ふものは成るべく絵に近づか無くちやならず絵は寫眞と近づか無いやうにしなくちや面白く無いと思ひました詰り寫眞は絵の材料として寫し絵は其れから美な所ばかりを取つて嫌な所を捨てゝ仕舞つたら大變宜いだちうと云ふ私の考へです

一箇の美術論として聞くべきものありと信ず又

先づ寫眞は景色と人物とが主であるが人物は寫す場所が定まつて光線の度も何時は幕をどれ位に引くと一定して居るから景色よりは易すい所もあるです然し人間は口を利くから寫眞を見て見れば其人に似て居るとか似ないとか批評する詰り寫眞師は其の人の特色を第一に見付けて此の人は横向の方が特色が現はなるとか或は正面の方が宜いとか大概見當を極めて寫眞に掛るんです商賣にする寫眞屋はその人の顔の特色を寫すのが肝腎で特色を旨く取られば寫眞が似ないから畢竟お客が來ない

多年實驗より來たる説なれば其の道の人は頗る參考となるべし諸名家の寫眞版絵、印刷用紙製本等は『千山萬水』などに優るとも劣らず。發行所は例の博文館也。（新小説）

●名流談海

クセノホンの錄せる『ソクラテス言行錄』は此哲人を傳へて餘りあるもの、實に有益の書なり、大橋乙羽子の『名流談海』果して明治照代の諸大家を傳へ得るか、吾人は必しも強て乙羽子を以てクセノホンに比するものに非ず、而も子が例の才筆を以て政治家に文學者に美術家に道德家に荷も一個の見地を立て優に明治史に其名を遺せんとする諸大家の半面を描したる筆跡は真自然を活寫して世に紹介せる『千山萬水』と相列んで見るべきものなり、此

書は氏が嘗つて諸處訪問の際話頭にのぼりし談話を輯錄し、合せて主客膝を交へて相語りし當時の狀景を叙せるもの、山縣侯、大隈伯の園藝談あり伊藤侯、橋本、黑田兩畫伯の美術談あり故勝伯、末松男、寺田、尾崎兩氏の文學談あり福地、西村兩氏の幕末懷舊談あり、殊に政事家が美術談園藝談など其人々の半面を窺ふに足る。文章は言文一致あり雅俗折衷あり皆誦すべし、卷頭例によりて御得意の寫眞畫を入るゝ總八葉、就中尾崎紅葉子が二兒を擁して立てる圖の如き掬すべき一種の風あり。（早稻田學報）

●名流談海

忽にして有聲畫、忽にして無聲詩、噫大橋乙羽子の詩意畫情坌湧横溢何ぞ夫れ玆に至れる、嚮に花鳥集、若菜籠、千山萬水等の著あり而も今亦此書の發行に接す開て閲するに初め山縣元帥の園藝談より、畫家黑田清輝氏の洋畫問答に至るまで二十四回二十名家の清話を輕々の詩筆を以て描寫し卷首に精巧なる是等諸家に關する寫眞畫を置き卷末には氏が寫眞談木曾道話あり躰裁美麗意匠優雅蓋し出版界有數の作たる論を待たず今滄浪閣に伊藤侯を訪て歸るの卒筆を錄して其の文彩の一抹を紹せんか

大磯、大磯、汝は唯松青く沙白きばかりが取柄でもあるまい、枯林影淡くして水に聲なく、寂たり鳴立澤、咄、鳴立澤、一羽波を蹴て飛ぶ時、彼衆鳥の齊しく立つことそれ急なる可きか、非耶、（中央公論）

●名流談海

本著板元の口上に曰く『……當今天下名流の高談快話を其儘寫して世に擴むる一種新發明蓄音器の大賣出し評判〳〵』と、現に、當今名流二十餘名の面白き談話を吹聽したる好蓄音器にして文學美術談のおとなしきあり政治、園藝談の騷々敷あり工藝繪畫談のジミなるあり千音萬響交〻して應接の遑あらざらしむ、終りには著者自身の二篇あり、斯の如き新發明好蓄音器を世に紹介する著者は眞に『當今天下名流』の一人といふべし、（慶應義塾學報）

●名流談海

此書は當時貯金文學者として有名なる乙羽子著なり聞說氏に三癖あり山水癖、愛畫癖、寫眞癖是なりと、然るに今や獨り肖像を撮影するに止まらずして其高談雄辯奇言快語を寫し其肖像と共に其人物を知らしめんとて氏が從來筆寫し來たれる談話を輯めたるもの即ち此「名流談海」なり、例により袖珍の美書能く架上の飾とすべし、集むる所山縣、伊藤、勝、

大隈、福羽、雨渡邊、石黑、末松、佐藤、福地、西村、小崎、栗本、尾崎、幸田、前田、橋本、黑田等現時各界の名家は大概收めざるなく、各其新色を現はして紙面に活如たるものあるは遺が子の才筆の能くし得る所か、特に動物園看守人の話など一奚采を添へたるもの面白く、黑田橋本兩蓋伯の繪頗る利する所あり、加之ならず卷頭に掲けたる寫眞藏は種々の色模をもて印され尾崎紅葉子が二兒を擁して立てる繪など妙なり。(日本教育)

千山萬水

長谷川天溪

●讀千山萬水

大橋乙羽君の紀行文を蒐集して、是に雅麗なる寫眞版數十枚を添加したる者を『千山萬水』とぞ言ふ。六百餘頁の大冊にして紙質の善良なる、印刷の鮮明なる、近來稀に看る所の出版物也。否此書の内容は誓く措くとするも、其形式に於て善美を盡したるは、吾が出版界に於て殆んど空前なりと謂ふも可なり、

開卷先づ讀者の目を驚かす者は其寫眞銅版なり。前後二十余頁、方二寸有余の風景八十餘を集め、綠赤紫或は縹等十數色を以て是等を刷り、一毎に着語を添え、是を表はすに又蠟色を以てしぬ。色の配合其宜しきを得、甲乙互に調和して彼れ是を殺さず、此れ彼を壓せざるは、遺に苦心經營の功なりと謂ふ可し。且つ其紙質は外國の美術專門雜誌なんどに使用する者を撰ひたれば、手に取る者、看る者に、快感を能ふると疑なし。實に此書たる、乙羽子が出版物の標本として世に饑表したるに非ざるにやと疑はる。

莫敎、書中に蒐集せる所は、古きは明治廿一年より新しきは昨三十一年の紀行文、前後通して百三十餘篇。之を排列するに先づ『九重の山水』（赤坂御所）より『濱の離宮』を首めとし、富獄に登り、箱根七湯を廻り、東海道を傳うて京都に遊び、木曾路に分け入りて信濃に出で、善光寺に禮拜し、川中嶋に昔を忍び、去つて仙臺地方を遍歷し、歸つて日光山中に幽を探り、宇都宮を經て常陸に轉じ、勿來關を過ぎて磐城に名所を尋ね、再び仙臺より盛岡をかけて青森に行き、茲に轉じて羽後の海岸を傳ふて酒田に下り、更に最上川に沿うて尾花澤に宿り、米澤に着し、更に磐城の白石に歸りて材木巖の勝を賞し、斯くて後東都に歸着せるとことはなしぬ。洵に此書は、茲に至つて自から一段落を成せり。以下歩調を改めて鹽原より尾頭峠を越え、横川を經て再び山王峠を踰えて南會津に入り鶴ヶ城の古址を忍んで、若松附近の奇勝を廻り、磐梯に登山して、又米澤に足を休めたり。斯くて後、置くに『海嘯行』を以てし、次で東京附近、大磯、横須賀などの風景を述し、箱根を越えて名古屋に遊び、直に笠置山の今に及び、京に出で、吉野の花を尋れ、須磨寺に敦盛の亡靈を慰めて舞子の濱に涼を取り、最後に附するに折々の詩歌を以てせり。以上素より一貫した る旅行記にあらず、否彼年、此年、彼月、此日の紀行文なれど、順序よく排列せられたるが故に、年月日を見ずして通讀する者は、自から大旅行を企てゝ東海道より木曾路を辿りて信州より東北七州を遍歷するの感なくんばあらず。且つ其間に各地の人情風俗、さては古事傳說里謠などを見聞したるが僅に錄したるを以て、此書を一の旅行案內記として見るも興味津々たるべしと信ず。

乙羽子は才筆あり。文章に彫琢修錬を加へたる跡なくして、いとなだらかに筆底の走れるは、子の特色と稱するも不可なけん、是を或一流の文士が物するが如き、難澁なる文字を羅列し、有りもせぬ想像を絞りに絞りて、怪しき形容を附するに比較せば優ること蓋し數段の上ならん。

更に言はしむれば、無理の無きこそ乙羽子の爲に賀すべきなれ、去れど往々地口の迸出するは吾人が子の文の爲に惜む所なり。『如何なる風のふく吉町』底の文字は相成るべくは、無くもがなと祈るなり、さなきだに子の文章には『よいさまがせと立つか弓、矢竹心の名々も』的なる古風の臭味あるなれば、茲に又もや地口的滑稽を加味するに至つては、折角の文章に大瑕瑾を與ふるのみならず、作者其人が發達したる嗜好を缺く者とし憎悪せらるるに至るべし。

自然は吾の親友なり、否人類の慈母なり、吾人が自然に接する場合の消極的結果は、人類の制限を離脱して平安を得るに在り、而して其積極的結果は茲に生命の圓滿を發見するに在り。吾人は自然に於て完了せる生命を發見す、而して我等は其生命の一部なるを知覺す。自然は吾を生みぬ、故に我は自然を愛すると共に之を尊敬す。即ち自然は優美なり、而して崇美也。されど若しもミルが自然を觀ずたるが如く、分析的に之を眺めなば、蓋し宇宙の深遠廣大なる價値は滅亡すべし。

乙羽子著『若菜籠』を評する場合に於て、吾人は同氏の紀行文を以て寫眞なりと云ひぬ。洵に然り今『千山萬水』を通讀するに當つて吾人は愈よ其繪畫にあちずして、寫眞的なるを知れり。乙羽子は確かに自然其物を愛慕すること猶ほ嬰兒の母に於けるが如し。去れど同ぐく愛慕するに於ても二樣の差別あり。是を歴史上の事實に據つて發明すれば、古代希臘人が、主觀及び客觀の調和せる意識を以てせる者、及び基督教擴布の當時及び其以後主客兩觀の分離したる時代の人心が慕ひたる即ち是なり。前者は母の膝に在りて母を慕の是に抱かれたるを嬉べる是なり。後者は遠隔の地に在りて鄕里の慈母を慕ふ者なり、されば後者に在りては、己が主觀に立したる思念を客觀に移して自然を見ると、前者に比して更

に深遠なりとす。

然らば乙羽子は如何に自然を追慕するか。子は、慈母の膝上に在りて慈愛の顏を見るが如しと答ふるに躊躇せず。看よ氏の紀行文を。一旦胸中に主客の分離を味ひ、偖て其後に自然に對する一思想を樹て、是を以て日月星辰、山川河海を連續せしめて不可分の一躰と成なせるの跡なし。去れど子は飽までも自然を總合的に眺めたり、乃ちあどけなく自然の妙相を知覺したる者なり。而して是を傳意するに、亦心狀態の儘を以てし、其間に我欲の念を挿入せざるが故に、自然は能く一躰として現はさる、若し氏が茲に文章行文の妙を衒はんとするが如き私欲を萌しなば、叙し來る所は、悉く散亂にして毫も一躰たるの形相を備へざるべし。寫眞や一人の思想を發現する者に非ず、只有りの儘を傳ふる所即ち特色なり。是れ吾人が同氏の紀行文が、繪畫的と稱するよりも、巧妙に撮影せられたる寫眞に近しと云ふ所也。

乙羽子の紀行文には同情あり、是れ吾人が特に賞揚するの價値ありと信ずる所なり。世に多くの紀行文ありと雖も、其多くは同情の念を缺けり。去れど子の作は、孰れを通讀するも、濃かなる同情の念を以て滿つ、故に文字は總て暖かにして、或一流の旅行家が物する

如く冷かならず。

斯の如く緬想し來れば、子の紀行文は、米國文豪アーヴイシグが『スケツチ、ブツク』の俤あるを覺ゆ、彼は流麗なる筆を以て英國の人情風俗習慣を觀ぜ、虛心平氣に、而も暖かなる同情の念を以て是を寫しぬ。是れ實にエマーソンと趣を異にする所なり、然りと雖もアーヴイングにはユーモアありて、乙羽子の文には此要素あるを認めず是れ吾人の深く遺憾とする所なり。（讀賣新聞）

◉千山萬水をよみて

田山花袋

御寄贈の千山萬水、この上もなく面白く閲讀致し、恰も身再び其地に遊びたる如き心地せられ候、ことに見事なるは、卷頭にかゝげられたる色さまゞの小寫眞にて、しかもこれが御自身自から跋渉したる處々を、自から撮影したまひしとの事は、他人の眞似の出來ぬ事と、羨しく候、小生も貴兄と同じく山水放浪の癖ありて、烟簑雨笠の興に耽り、殘山剩水處として尋ねざるなく、窮地癖境地として至らざる處これなき身に候ふが、大空の美しく晴れたる朝など、右に大海の渺茫たるを望みながら、少しく山の腰あたりになりたる高き街道をたどり行く時のたのしさ、或はくたぶれて宿かる頃や藤の花と翁がよみたる夕暮の宿の一風呂の心地好さなどは、旅に出でたる人ならでは、共に語る事の出來ざる境と存候、まことに旅はある人の言ふ如く、一種の道藥には相違あるまじく候、されどこの道樂ほどをもしろく樂しく罪なき者はあるまじく候、朝夕友とする處は、自然そのものにては山、雲、水、海、霧、花、古墳、人にては馬夫、草刈童、田舍小女、老婆、老翁等、一として心を惡しく氣を腐らするものは無之候、しかして雨には雨、晴には晴、月には月、風には風と、各異りたる興をわれ等に與へ呉れ候ふば、いかにうれしき事には候はずや、小生はかねてより日本人の天然に對する感の籠きを慨くものゝ一人に候、西洋などにては、農夫商賈の卑きに至りても、皆親しく天然に親炙し、恰もおのれの親かなんぞのやうに、或時はその懷に抱かれ、ある時はその袖に縋り、悲しき時は天に叫び、嬉しき時は地に伏すといふやうに、萬事天然に對しての感の起しかたが、深く鋭くしかもやさしく候、されば讀本などを讀みても、草や花や山や水の事を記したるもの多く、且つ親切に候、決して日本人の如く、老いても猶野の草花の名を知らぬやうなるものはあるまじく候、日本人は概して天然に對しては、冷淡に候、他人が何んぞのやうに思ひ居候、甚しきに至つては、花が咲いたとて何が面白いなどゝいふ人さへ有之候、慨すべき事には候はずや、されば其

弊は數て文學の上に及び、歴代の巨作大篇と言はるゝもの〻中にも、天然の美を後景に用ひて、不言の中に無限の興味を備ふといふやうなるものは頓と見當り申さず候、惜しむべき事に候、

さてそのやうな事は後廻しとして、何か批評を書けとの仰に候へども、小生は御存知の通り、批評は大の下手に候ふ間、これに御免蒙り候ふて、貴兄の遊跡と小生の遊跡とを比較べ見候ふも、却て興ある事かと思はれ候、貴兄の遊跡は大抵東北諸州を以て主腦とせられ候ふが、東北七州の中にても、小生の最も羨ましと思ひしは、かの八郎潟の奇勝を貪り視て、象潟の古跡をたづねられたるの一段に候、小生の奥羽漫遊を試みたるは、明治廿七年の秋にて候ふが、小生も實にその八郎潟をば第一の目的として參りたるにて候、然るに不幸にも、盛岡より秋田に踰ゆる國見峠といふ處にて足を傷め候ため、秋田市まで足を入れながら、空しく中通りを眞直に山形に歸るやうなる始末にて、遂に一瞥をもその美しき八郎潟に寫すること能はず候ひき、それにしても貴兄が露伴君と共に、欵段に騎して、悠々六里の砂原過ぎ行きしさまは、いかなるべき、アヂ小家の物淋しけにたてたる間にて雹に逢ひながらも猶詩を吟じつゝ過ぎ行きしさまはいかなるべき、ことに怒濤雪山を湧かす日

本海の波の上に、落日蕭條として沈み行くさま、蘇武の古事を思ふて荒草離々たる中を過ぎ行きたるさま、あるは寒風山下十尺の蘆花灣を見ざるの奇景、北浦の名物雄鹿鄙の棹歌の曲、湯本の寂々る浴槽のさま、など、思去り思ひ來り候へば、堪えず興の湧き來り候ふて、何故にかの時足などの傷みしか、何故に多少の苦痛をしのびでもその荒海の濱に行きて、その奇景を探らざりしかと、轉た追懷の情に堪へず候、思ふにその海岸には、沙山處々に起伏し、十里人影を印せず、怒濤徒らに岸頂の奇岸怪石を嚙んで、沈み行く落日かつくづくと見てあれば、おのづから涙の零つるをも、禁ぜざるやうなる處も候ふべく、荒涼たる斷磯、寂寞たる絶濱、難破船の名殘の斷柱片桅の、處々に凄しく散在するやうなる處も候ふべく、或は又松影の青く一帶の白沙を蔽ひ、半傾きたる斷帆の影の、さも〳〵心細げに岸頭をぬひつゝたどり行くやうなる景も候ふべく、あるは又ふと路は岩石と白沙との高く海中に突出したる一角の處に出でゝ、其處より見れば今まで歩み來りたる沙山も、松原も、怒濤も、岩石も、皆一瞬の下に顯れ、前には又、わが行くべき岬の絶端、わがやどるべき漁村の夕烟などの、いと明かに指にてもさゝるゝやうに見えわたる處も候べくと、いろいろに思遶し申候へば、興湧き情躍りて殆盡くる所を知らず候、されど小生も一度は必

すその絶海の一端を訪ふつもりに候間、其節は貴兄の遊べる跡を尋て、寒風山の蘆花に、湯本の浴槽に、蟻の戸渡の奇岩に、各往年の貴兄の遊をしのぶべく候、

次に羨しきは、信州松本より犀川の流を新町へと下りたまひし事に候、この奇景を耳にしたるは、已に久しき前にて、信州の友人は、誰彼となく皆この景の絶特なるを賞し申し候、ある人などは、天龍川などより餘程立勝れ居り候とさへ申し候、これも小生は二度まで志して、松本へは參りながら、いつも洪水やら何やらの爲め未だに志を果さず候、殘念に候、

久米路の橋なども、極めてよしと聞及び申候ふものを、

木曾の馬籠峠は、新道に因り給ひし爲め踰えたまはざりしやうに候ふが、これは惜しき事と存候、《勿論新道にも奇勝多く候へども》落合より馬籠までの間の、眺望に富み雲霧の變化に富み居候事は、木曾第一と小生は感じ申候、ことに、新道の出來候ふてより、人馬の往來の無くなりたる爲め、まことに荒驛僻村の趣に富み候ふて、馬籠驛などの零落したるさまは、さながら詩中の景に候、木曾山中昔の風景の殘り居り候は、このあたりばかりかと、小生はつくづく感じ申候、

會津、盤梯の旅行も羨ましきものゝ一つに候ひき、塔の峠など、世にかくれたるめづらし

き處もあるものかと、覺えず心ゆき申候、柳津の山水、かねてよりよしとは聞きたれど、がくまでとは思はず候ひき、小生の會津につきての旅行の望は、あれより少し南に入りて、只見川に添ひたる諸溫泉を探り、大桃檜枝岐あたりまでも、奥深く入りたき事に候、小生の知人に、もと會津の藩臣なる一老爺あり、この人は維新の節、檜枝岐にて農兵をつのりて、操練を敎へたるものゝよしに候ふが、この人よく南會津の勝を說きて、檜枝岐附近の山水の奇、風俗の淳ぱ、天下に比なしとまで賞贊いたし居候、如何なるべきが、小生は暇あらば、上州戸倉より南會津の山水をも探りたき心に候、

あまり長くなり候まゝ、此處にて筆をとめ候ふが、筆には例のごとく圓轉洒脫といふ處ありておもしろく、よくさころの風俗などにも細かに眼を注がれたれば、一部の風土記とも言はるべく、興味津々、覺えず讀耽るばかりにて候ひき、されど文詞の批評は他に人あるべくと存じ候まゝ、此處には畧し申候、いづれ面晤の節、萬々申出づるつもりに候、明治卅二年三月六日、花袋生、乙羽大兄、（文藝倶樂部）

千山萬水と名流談海

松葉生

ジョン、ナポッタは倫敦の銀行家なり、其市場に入るや、勤勉精勵、牙籌を手にして錙銖

を爭ひ、常に一時をも閑過せず、しかも其一たび金銀堆裡を去るや、彼、蟻の心理學者たり、人生の美と快樂を論へる大詩人たり、英國の風土を詩的に評論解說せる科學者たり、其事物に精勵にして其趣味の範圍の廣き、彼が如きは蓋し甚た罕矣、大橋乙羽が博文館の事務に鞅掌して極めて勤勉に、傍ら文を爲り書を著はし、名家を訪ひ、勝地を跋涉し、努めて其趣味の範圍を博うせんとするもの、思ふにチボックに學ぶ者耶、若し彼にして尙ほ事務に、文學に、刻苦精勵怠るとなく學を積み德を積み識を積み財を積むと甚だ大ならば、安んぞ東洋のチボックたらざるなきを知らんや。其近著「千山萬水」は彼れ鴻爪の痕を一冊に萃めしもの、卷頭の寫眞は幾十の勝景を一處に集めて、坐ながら人をして名山名水に遊ばしむ、近者　畏こきあたりの乙夜の覽に入るを得たりと、亦著者の光榮なり、「名流談海」は著者が名家を訪れて、其聞き得たる談片を錄せしもの、卷頭の寫眞例によつて美且つ鮮、著者が寫眞に於ける技倆の非凡なると共に、如何に其處世の才に富むかを知るに足らん。（萬朝報）

●千山萬水

樗牛生

乙羽子の『千山萬水』出づ、烟霞寫眞の痼疾あるもの遂に是著無かるべからず。記する所は皆子が足履目睹の實景、夫の空文を駢列して措辭造語の巧を衒ふものの比にあらず。殊に卷頭の日本百景は精巧の極。紛々たる駄小說に比して何等の好著述ぞ。（太陽）

●千山萬水

宙外生

『千山萬水』は乙羽氏が紀行文百三十餘篇を聚めたるものにて、卷頭に附せる十三色刷の寫眞版畫は氏が得意の技術にて撮影せるものゝ由にて、光澤ある舶來紙を用ゐて鮮明に調製したれば、美事なること云ふばかりなし。本篇は誰やらも云ひし如く寔に氏が三長所の凝結とも評すべし、氏が得意とする旅行中の見聞を、氏が得意の叙景記事の文に附し、之れに得意の寫眞版を添へたれば『累卵之東洋』よりも『若菜籠』よりも立優りて見らるゝも無理ならず。氏が文は流麗暢達、詩趣掬すべきもの多しと雖も、繪畫的叙述に力むるの餘、間々眞景眞情に一抹の蔭を掛くるが如き弊なしとせず。されど一部の旅行案内としては大成せられたるものゝ一なるや疑なし。紙數殆ど六百頁一々精讀して詳評する能はざるを憾みとす。吾人が見たる中の一節を抽出して其の一斑を示さん。「曙見東海道」の中に

相州藤澤を過ぐるに雪は全く霽れて空は青絹を奬せるが如し箱根に入れば天寒く雲低く峰より瓜ず山風は樹々に積れて粉雪を捲き上げ紛々として窓を打てども景色の面白さに

寒さを忘れて頭を外の方に出すに皚々たる雪は谿を埋め山を裝ひて絹張山の俤をうつし水は碧潭に螺卷の岩に碎けて滔々たる危橋あり渡る者は漁翁なるか荒村あり嵐の爲めに竹の籬を荒されて酒賣る家の旗もなし其の奇拔なる山色その雄壯なる水光我の畫師ならざるを憾みとするのみ清見潟に至れば海波穏にして其色瑠璃を凝らし富士の峰半面の影を落して白きこと鶴に似たり三保の松原は遠く晩翠を凝らして美人の帶かと怪しまる叙景の筆力を窺ふに足るべし、序なれば氏に參考までに云はん(能代竹枝)の中秋田音頭の文句は改版の折に(秋田名物、八森鰤、雄鹿では雄鹿鰤卷子、能代春慶檜山納豆大館曲貪器)云々と訂正せられたし。(新小說)

●千山萬水

『千山萬水』は大橋乙羽子がその序に記せる如く「十數年の筆の立場に頗杖つきて懷を雲水に寄せたる日記、塵の積りて百餘篇となり」たるをこたび博文館より改めて印刷に附したるもの表紙と云ひ紙質と云ひ印刷と云ひ乙羽子が凝りに凝りたる丈ありて如何にも鮮麗なる事なり殊に口繪は勿躰なきほど最上の光澤ある洋紙に數種の色をもてお手前ものゝ縮寫眞八十餘種を摺出したる見るから目の覺る心地せり中に收むる處の紀行文所謂千山萬水

はまづやんごとなき九重の御園生より始めて北は津輕外が濱邊より奥羽の景色探り盡さゞるなく中仙道、東海道は云はずもあれ西は奈良須磨明石吉野初瀬の奥まで例の寫眞機と共に道中したる日記を掲げたるものにして一部の日本名勝案内記とも見る可く山水もまた子が得意の筆に依つて正に光彩を放つものといふ可しいで子が文章に就て云はゞ素より十餘年に渉る日記とも見る可きものなれば文躰も自ら一致せず拙なるもあり巧みなるもあり一ゝ批評するは到底堪へ得ざる處なれど概して云へば文章の綺麗にしてまた甚だ意氣なる處あるが子の長所なる代りに肝腎の景色の方が朦朧として充分に讀者に感得せしめ得ざるの弊あるは遺憾なりそは兎に角に吾人は乙羽子が山水に忠實なるの點に至つては大いにこれを多とし机上の珍とするに足る可きこの美麗なる小冊子を紹介するに吝ならざるものなり

(大阪毎日新聞)

●千山萬水

華山生

日本の末永子の富嶽遊草眞に珍本以て臥遊の資に供すべし大橋乙羽子の千山萬水亦是れ好著古人は一枝の筆を載せてといふ乙羽子に至ては則ち然らず一枝の筆に加ふるに一組の寫眞器を以てす前に古人なしと謂ふべし。(人民)

千山萬水

紫山生

乙羽子の千山萬水刻成る、製本の美、紙質の精、近來の出板に罕に見るところ、卷頭に挿むところの名所寫眞數十葉の如き、巧緻賞すべし、乙羽子の紀行文は世已に定評あり、其叙景中に處々奇譚を交へたるは子の長技にして又欠點ならん、吾人は全體として其瀟洒脱俗なる筆致を愛し、之を諸君に推擧するに吝ならざるものなり。（中學世界）

千山萬水

綱齋生

大橋乙羽氏が其舊作を集めて累卵之東洋及び若榮能を出版するや何處の烏が言出しけん此ぞ貯金文學よとて其噂さ文壇に隱れなかりき貯金と云ふ心は氏が貯金を振出して出版すてふ方に解するものあれば否々賣溜めて其金を積む心ならんと釋くものもあり、いづれにしても果報惡しからぬは氏が筆の雫ぞかし、今度出でたるも同じく貯金文學の由にて『千山萬水』此なり其製本の美麗にして挿繪の色刷に美を盡せる點より見れば如何さま貯金振出文學と覺ゆれど氏が例の流麗の筆にて描し千山の光萬水の色を見るに及びては其賣行の如何に多かるべきかを思遣りてさては純粹の貯金文學の名に適せりとこそ感ずるなれ載する所の紀行遊覽文數十篇讀み去つて東海東山の名山大川、京奈良の麗風軟光の間を寫眞機持

たせて歩み行く氏が姿さへ髣髴と浮び出でゝ興味津々たるを覺ゆ（中央新聞）

千山萬水

二月二十六日の日曜は、洵に美しい日であつた、空はうら〳〵と地には塵一片も立たぬ穏やかさ、前栽の梅は折から昨夜の雨を帶びて、一しほ艶立ちたるに、隣家の子飼の鶯が舌足らずの鳴音も嬉しい、門には可愛らしい下駄の音の聞ゆるのは、野邊には吉野紙のやうに、此面彼面にはほや薄霞のかゝつて、若草の萌え初めたのであらうか、自分は氣も暢び〳〵と机に凭りかゝつて、乙羽君の「千山萬水」を繙ひて居たが、不圖松は濱風に行義を亂して、丘（丘へと陣き、平沙は雨に波に塵を洗はして日に照るところ、水晶よりも美くし、丘には青き草あり、碧の海、白き波の、岸を拍ては高く低く日輪輝の聲を送り、磯の千島は、立つ涙に飛び交ばして、白帆かけたる舟の四邊をめぐるなど、況んや富士は湯上りの影を落して、霞ばかりの涙模糊、二天雲も無き今日の姿は……

と云ふ處に眼を觸れると、その繪のやうな彩色の筆に動かされて、急にむら〳〵と自然の美にうたれて仕舞ふた、あ〻旅の淋さだ、閑かなる春の旅に如くものは無いと、自分は急

に旅が仕たくなつた、更らに頁を飜してその日繪を見ると、青や赤や綠やで刷り上げた、山容水態の繪よりも美くしいのが、二十頁ズラリツと排列されて居るのに、もう堪らなくなつて來た。

少年諸君、自分が君方に旅を勸めたいのです、勿論みだりに危險な遠旅は宜しくないが、日曜の天氣佳い日などは、誰彼誘ひあつて、草鞋脚半に身を緊めて、春の山巻の海、平和な一と日を過すことの、何んと愉快ではあるまいか。

春もやゝ景色とゝなふ月と梅これからは一と日〳〵と好い時候に趣ひて、野邊行けば董丹英央、山は霞に海は終日のたり〳〵と、袂を風に弄ばせながら、千山萬水を懷にして二里又三里足元輕く行くことの、何んと愉快ではあるまいか。（少年世界）

青軒生

●千山萬水

とは乙羽氏の紀行文集にして、去る二十一年より三十一年中の所謂千山萬水を寫したるものなり。冒頭の繪口に二十頁八十箇所の色摺寫眞版を掲げ、見るからして心地よき美くしさ、五彩燦爛眼を眩して、表紙の美と言ひ印刷の鮮明と言ひ、凝りに凝りたる製本、千山萬水爲めに其光りを添ふ。而して其寫眞は氏が道樂の長所、旅行は素より其道樂、紀行文

は、最も氏の長所なる繪畫的美文より成りて、此書は實に氏の三長所を集めたるものなれば惡からう筈なし。鄙も都も殆ど日本中の景勝を寫し盡して、まゝ異風習俗を畫き出し、さながら風俗を觀るの思ひあらしむるは嬉し。斯く氏の長所を集めし書冊に向つて批評らしきこと言はんは素より野暮の沙汰ながち、强て一言を費せば、其文の面白く繪畫的に詩趣あるだけ夫れだけ實景に遠ざかりて、言はゝ景容澤山に流るゝ瑕疵あり、併し斯は氏の短所にして長所なり、言はずもがな。兎に角にわれは此書を目して累卵の東洋よりも若榮籠よりも勝りたる著作とし、且つ旅行好きの人の好伴侶たるべきを紹介す。今氏が此書に辨せし序文を記せば、

西行法師の繪に笠と杖とを放したるは少なく、芭蕉翁の像は、旅仕度の儘なるが多し、されば光陰は百代の過客、天地は萬物の安旅籠、生老病苦の合の宿にて、世は一六の寶の目の、上り坂あれは、下り坂ある、道中わづか五十年、東海道廻双六から、振出しと上りの風袋を引き、餘れるを一つ振つて人を追ひ越したのが、下から親分と立てられて、駕籠ならば乘客、舁ぐ男は雲助の、毛嚅にソヨと秋の風と、細かい所に目を着ける俳諧師も、物の哀を知るは旅ならずや、こゝに十數年の筆の立場に、頻杖をつきて、懷を

雲水に寄せたる日記、塵の積つて百餘篇ことはなりぬ、みな是ふところ兒と可愛がりたるを、今おもひ切つて獨旅をさせ申す、ソレはて餘り不憐だと、おつしやる方のあるに任せ、親の慈悲から極内にて、手前直傳の寫眞師をも道連として手放す上は、世は情けなるお得意樣方、昔の圓位や桃青と同樣に、矢張これをもお目かけられてよといふ。

桂月生

●千山萬水

千山萬水、乙羽子の紀行文を集む、乙羽子旅行を好む、世の俗人とは、多少異なる所あり。然れども、未だ共に山水の樂を語らざるが如し。乙羽子の足跡は未だ京都以西に及ばず、而かも普通旅人の行く處にのみ旅行して、其境は平凡の地、高山の幽をひらくでもなければ、深谷の奇景をさぐるでもなし。所謂紳士的に、車でがらくと飛び行きて、深く窮めず、また深く自然の美を味ふ樣子もなし。眼孔なく、見識乏しく、文章また輕佻にして、ゆかしと思ふところは一つもなし。到底これ文人の紀行文と云ふべからず。文人旅行家としては、われ青琴を取り、花袋を取る。麗水は未だし。乙羽は猶更也。然れども乙羽の如きは、豎子なほ教ふべきの概あり。能うべくんば、少くとも足跡を日本全躰につけよ。名の聞えざる奇勝絶景をさぐれ。今少し自然を批評し得る眼孔を養へ。文章の輕佻なるを避けよ。

ついでに紀行文について一言す、世の紀行文は虚言多し。文章に役せらるゝを免れず。唯文章を面白く且つ綺麗にせむとして、尋常の景に對するも、言葉を飾りて之を形容す。故に眞の絶景に至りては、また稱賛すべき言葉なし。平凡の地に遊べば、紀行もまた平凡なるがあたり前也。強ひて之を奏張し、潤飾するは非也。乙羽氏の紀行、この弊少なきは、なほ喜ぶべし。（文藝倶樂部）

●千山萬水

本書は乙羽生が自ら寫眞器械を携帶して千山萬水思ひのまゝに歴覽し到る所の眞景を撮影したるもの八十種を卷頭に掲げ其紀行は流麗の筆を以て各地の勝景を寫し出せるもの百十餘篇の多きあり此書を繙けば居ながらにして山水の明媚を髣髴の間に觀るを得ん其製本印刷とも十分の意匠を凝したるを覺ゆ。（東京朝日新聞）

●千山萬水

大橋乙羽氏の紀行文を蒐集し合せて得意の寫眞を添えたり躰裁の美粧飾品たるの資格あり我評して曰く乙羽君の紀行は小説に勝り乙羽君の寫眞に紀行に勝ると乙羽を知るものは恐

らく我に與みせんか（日本新聞）

●千山萬水

大橋乙羽氏の著にて其の固癖たる旅行毎に筆を執れる紀行文百餘篇古きは十年前のものもあり卷頭は掲げたる名所古蹟の寫眞八十餘圖も總て著者の自から描せしにて悉く美はしき彩色にて印刷せり其の袖珍の躰裁の麗はしき、印刷の鮮かなる、用紙の品善き當今の出版界には頗ぶる數寄を盡せるものゝ一なるべし之を聞く著者本書を出版するが爲め損失を省みず其の數年儲蓄しる所を擧げて之を補へるが故に同人皆名げて「儲金出版」といふとかや春晝秋夜机上燈下の友とするも良し月夜雨日車中船窓の慰みとするも亦特に妙なり（中央新聞）

●千山萬水

是れ乙羽子が紀行文集にして頁數五百七十有餘、例の袖珍冊子なり。やんごとなききはの題字もあり、阿諛的文士の序跋はなきも著者のはしがきあり。乙羽子の面影見えてをかし。卷頭得意の寫眞畫美麗を極め、七色を以て色どりたる狀實に千紫萬紅山神河伯も滿足したるなるべし。況んや子が妙筆文に亦之を寫したるに於てをや。卷末詩あり歌あり、子も亦

多能なるかな。（帝國文學）

●千山萬水

此書破笠輕鞋峨々たる山嶽も攀づべく滔々たる洪河をも横斷すべき雲水の客大橋乙羽子が紀行文集なり、子爵長岡護美氏卷頭に題して曰く破璃暎影術通神萬水千山寫景新畫手從饒心匠巧天機活潑豈全眞踏遍東西南北州名山勝景總探幽喜君造化羅胸臆收拾煙霞付臥遊と實に著者の足跡東西に遍く南北に印し美麗の景壯大の觀處として殆んど跋渉せざるものなからん、而して到れば即ち是を寸毫に描し玻璃鏡に寫し以て世に紹介する事を任とするは乙羽子が得意とするところ、繙き來たれば九重の山水、濱の離宮、富士の山苞、京遊記、木曾五鷄行、松本城、善光寺、日の松島、新奥の細道、故郷の錦繪、雲の細道、海嘯行、多聞山莊、葵阪の大邸、目黒の秋、逗子の避暑、笠置山の今、多武峯、島原の春宵、夜雨の泉山、車上馬背等五百七十有餘頁の文章送迎に遑あらざるものと云ふべし、且つ啻に其量に於てのみならず質に於ても觀察の面白き文章の輕妙なる讀書社會妙個の伴侶と謂ふべきなり、特に卷頭に添へたる八十葉の寫眞版は乙羽子獨得の寫眞術を以て七色に刷出したる狀美麗を極め千山萬水の價値を加ふるものたり。猶ほ吾徒は其文躰に就き更らに次號に於

て紹介批評する所あるべし。（早稲田學報）

●千山萬水

千山萬水とは大橋乙羽子が、十數年間の紀行と旅日記とを大成したるものなり、子が能文達筆の士なることは、世既に定評あり、而して子の寫眞に妙ある、是亦一般の認識する所、長岡子爵本書の首に題して曰く、乙羽子千山萬水刻成賦レ此充二題辭一「玻璃映レ影術通レ神。萬水千山寫レ景新。畫手縱饒二心匠巧一天機活潑豈全眞」と又曰く「踏遍東西南北州。名山勝景總深レ幽。喜君造化羅二胸臆一收二拾煙霞一付二臥遊一」と、眞に然り、挿む所の風景寫眞八十名所、畫趣あり、詩趣あり、全く凡手の寫す所にあらざるなり。黑田侯爵亦「鴻鵠思不群」の五字を題して、暗に凡流にあらざる無きを云ふ、之を印刷するの用紙、悉く舶來の光澤紙を用ひて、彩色を代ゆること十有三回、實に近來無比の贅澤品、本文紀行の數一百三十餘篇、文妙境奇なるのみならで、含む所の內容に、風俗的趣味多き點は、他の紀行文に見ざるところ、今その一斑を擧げんに、京遊記の中に子が嶋原太夫道中の記に「名だゝる角屋の屋外に立つ、時に花車來る、牽くもの雛妓あるべし、盛裝、次に禿二人來る、高き黑塗の木履を穿ち、紅き衣を着つたり、肩より背に太夫の名を記せる、目覺を懸け、

頭には花簪をさしぬ、次は太夫なり、兵庫に結立の髮に鼈甲の笄を交叉に挿し、顏は厚化粧しつ、衣は白無垢を襲ねて、帶を前に結びたり、素足に黑の木履を穿ち、八文字踏んで、徐々と歩す、襠は金糸銀糸に縫箔せる華奢摸樣、牡丹に狂ふ獅子あり、鶴に踊る鯉あり、その美麗眼を眩ます、大傘にはその紋を染めぬき、柄は長くして、男の背後より翳せり、男は萌黃の衣を着け、茶木綿の帶を締めぬ」と、その光景睹るが如し、此の如きもの、篇々これあり、以て各地の風俗習慣を知悉するを得、加うるに俚歌俗謠を挿み、舊聞古事を引きて、土地山川の考證を明にしたるなど、一の名所圖會と見るも可なり、殊に東北の地方にありては、東遊記、東遊曆を除く外は、恰好なる名所圖會あらざりしに、本書出でゝ、隱れたる奧北の山水は、新に光彩を發輝せりと云ふを得べきが、本書紙數六百餘頁、旅行用書としては、第一に位すべき美本なり。（太陽）

●千山萬水

大橋乙羽氏の紀行文を集めたるもの卷首に五度擢の寫眞版十數葉を附し製本の贅澤なる多く比を見ず左れど實の之れに伴ふものあるや否やに至ては多少の疑なき能はず（報知新聞）

大橋乙羽氏、性遊歷を好み、東西に行脚し、風景、吾意に適すれば、之を寫眞に映じ、心懷の興趣浮び來りては、之を文に錄す。廿五年以來觀光遊歷の記文、及び其寫眞を收めたるもの、之を名けて『千山萬水』と云ふ。寫眞版景畫の美、紀行文字の佳、共に見るべく、之を讀み、之を觀て、書中また風景を探ぐるとを樂しむべし。製本の美また之に適ふ。（女學雜誌）

●千山萬水

●千山萬水は大橋乙羽子の著述に係るクロース袖珍美本にして一見瀟洒なるが如しと雖も表紙に押型せし折紙折目に千山を利かせ下に萬水の流れをあしらひ裏に乙羽の二字にて鷗を印したるなど餘程入念のものにして卷首に百景の各色寫眞を挿入し卷中は乙羽子が例の西行の歌行脚芭蕉の句行脚を通り越し寫眞行脚と洒落れ出せし餘に出てたる紀行文にして其の本縣に關するものは矢立嶺の黑雲、能代竹枝、雄鹿の島山、蘇武澤古事、寒風山湯本の凄雨、戸賀と門前、金川灣の大雹、八郎潟の清波、土崎の割烹、秋田の蕗摺、象潟の今昔、有耶無耶の關、鳥海の山風等にして能代竹枝中秋田音頭の文句中「初森ハタ〳〵」は「八森鰰」「雄鹿鰤コ」は「雄鹿鰤子」「能代シンケン」は「能代春慶」（有名なる漆器にして子の知らざ

る筈なれど）「ひやま納豆」は「檜山納豆」の誤記なるべく文章の流暢にして情景竝び到り愬ふいなる小說抔に深入りせず露伴以外に紀行文の一生面を開きしは最も多とせざるを得ず（秋田魁新聞）

●千山萬水

是れ我郷立町二つ橋音羽屋出身なる乙羽子の著、子が二橋散史又は乙羽子の號あるはこれが爲めなり此著六百頁の袖珍冊子にして本書の躰裁意匠は凝りに凝り卷首に子が特得の妙技なる內地勝景の寫眞版八十個を挿みたり每景着色を異にし頗る美麗なり本文紀行は筆を九重の山水より起し富士登山、木曾道中、奥羽山水、東京近郊、京坂地方、舞子、須磨等足跡殆んと海內に洽く到る處景勝は勿論古今の俗謠まで仔細に觀察し加ふるに行文流暢一たび卷を披けは手之れを措く能はず就中鷹山の遺風と題する條に「先づ米澤の町に入りて心地よく覺えたるは戸々夜をこめて機を操る音なり月は無けれど砧の聲にも聞きなされて故郷に着きても羈旅に在るの思ひしたりきこゝは鷹山公が遺風の今も存りて士風は篤實人情も輕薄ならず殖產起り工業盛に富の度も平均して家並の揃へるも嬉し」と叙するあたりは吾人もまた嬉し卷尾に車上馬背と題せる詩をり〳〵草と題せる歌も中々に面白し思ふに

乙羽子の本色の文學に在りて紀行文は尤も其長所なり詩俳歌句みな其好む所にして尙は且つ寫眞の特長あり子はそれ多藝の人と云ふべきなり。（米澤新聞）

●千山萬水

卷首掲ぐるに主人の手に成ぬる八十種の寫眞を以てしこれに百廿餘篇の紀行文を纂めたるものなり文と景と相俟て其美を極むる所讀者をして些遺の憾なからしめたり。（山陽新報）

●千山萬水

大橋乙羽氏が旅行癖あることは知らざる者あらざるべし、氏が足跡は洵に宇内に洽く、東北より山陰山陽と、其紀行は積んで山を成せり、東北七州、木曾五鶏行、奥州三度笠等は其優なるものなり、今是等を一卷に收め千山萬水と名げたり、卷頭には氏が撮影に係る山容水態二十葉を挿みたり、洵に旅行案内としてはこれに越したる者なかるべく、そも又美文として讀むも面白し。（少年世界）

●千山萬水

既に記したる乙羽子の『千山萬水』は愈々來る廿五日頃を以て出でんとす其体裁はまづ卷頭に各所の山水八十餘を小形の寫眞版にとり之を種々の色刷りなしたるものを挿入して一双

の貼りまぜ屏風の如くならしめ本文は子が例の流麗なる紀行を以て埋め天下の名山大川を網羅したるものなりと。（讀賣新聞）

●千山萬水

大橋乙羽子が流麗優雅の筆以て能く内地の山川を跋渉したる紀行集を名けて千山萬水と稱す幾十種の色刷寫眞版を以て光彩を添ふる事なるが附錄として名家談叢ありこは伊藤山縣兩侯なぼどめ諸伯子の訪問談なるが、中に伊藤侯の美術談最も興ありと聞く。（美術）

●千山萬水

『千山萬水』とは大橋乙羽子が其紀行文百三十餘篇を蒐集したる者にして、各地の風景八十餘を方二寸驗の寫眞銅版として口繪に掲載せり。紙質は頗る上等なる者を用ゐ、是等を印刷するに美麗なる彩色を以てしぬるが故に、讀者に審美的快感を與ふるに誤らず。紀行文は東都附近は言はずもあれ、京坂地方より須磨明石の明眉なる光景、木曾山中の幽玄なる、東北地方の壯嚴たる山水を網羅して餘さず。而も例の才筆を以て文を綴りたれば、一讀中々に趣味多し思ふに其内容は暫く度外に措くも、其形樣に至つては近來稀に見る美術的出版物なり。殊に各地の人情風俗より、古事傳言に至るまでを記錄したるを以て、一の旅行案

内記として看るも決して遜色なし。吾人は茲に同著に就きて贅言を加へざるべし、但し長谷川天溪氏が讀賣紙上にて批評したる所を以て足れりと思惟するが故に、同書の如何は暫らく是に讓りて、茲に只其一斑を紹介するに筆を止む。（日本美術）

●千山萬水

聞らく乙羽子は一種の才筆を有するの人、行文恰も平板水を流すが如く坦々として更に澁滯する所なしと、然り然れども其の結果言辭往々無意味に失するとなきにあらずと雖とも、強て難解の文字を羅列して得意とせる或る一種文士に比して優さると萬々なり。本書は明治二十一年の頃よりして三十年に迄る子が紀行文を輯錄せるものにて、極めて興味津々たる文字なり、而して附するに種々に著色せる數十の寫眞版を以てし、讀むものをして身その境にあるの觀あらしむ。且其紙質釘裝よく整ひ優に近世出版物の標本とするに足すものにして、是れ丈にても本書の價値は充分なり況んや乙夜の覽に供せられしを聞くなや、只吾人の遺憾とせる所は稍々ユーモーアに欠くる所ならさるかを疑はしむる是れなり（新世紀）

●東京たより

徳富蘇峰

乙羽子『增補千山萬水』を贈らる。子は（ブックメイキングクラフト）造書術に於ては、既に室に入るに似たり。若し此の特技を利用して、博文館の出版物に、新方面を開拓せば、世を益すると疑ひなかる可く候。平民的出版物に於て、社會を益したる博文館の功は、掩ふ可らず候。今や宜しく其の一半の餘力を以て、善良なる貴族的出版物に竭す可きの時節到來したりと存候。而して其適任者は乙羽子に候。英國詩人（ウヰリアム、モリス）の如きか、其の豐富、高崇、清麗、精巧なる意匠を以て、造書術に、生面を開き獨り讀むのみならず、見てより多き快味を感ぜしめ候。さりとて記者は、乙羽子の意匠に、逐一同感を表するものにあらず候。寫眞は妙品なれとも、彩色刷、及び其の取り合せには、聊か遺憾なき能はず候、青萍の東北雜詩は、概して讀む可く候。S、Kの富士山に百合花の表紙は、寧ろ悅ぶ可く候。文字は先づ消化し易く、著者の多角的なるを見る可く候、若しそれ贊評の如きは、卷末六號三十二頁に亘る諸氏の言に盡き候。以上。

●千山萬水

名勝の寫眞八十、記事文百廿餘、これ此書の内容なり、著者大橋乙羽氏が寫眞の技倆を賞するとと共に其の自然を唄ふの伎才を見るべし、「月の松島」と題する條下

渡月橋は夢の如く、離島は眠れる獅子の如し、月のみ獨り醒めたるにや波白く光りて、山影淡く水に落つ、こゝに馬洗ふ若者あり、馬は栗毛の骨逞しく、男は牧者の風俗鄙びたり、月前の波に馬を洗へば、滿身月を浴びて、蹄も滴る銀にや化しぬらん、云々

など何等の詩境何等の詩味ぞ、卷首寫眞中此の實景を示せる、是と義仲碑の寫眞に二人の兒童を點出せる落想など謫天情仙が所謂「文章より典型を得たり」と評せるもの頗る當れりと言ふべし、寫眞紀行文共に奥羽より畿内中國にまで渉り時節がら旅行の業としても調法ならん(都新聞)

●千山萬水

一枝の筆に加ふるに寫眞器機を以てし双々相俟つて寫景記勝共に其神に入るは乙羽子の千山萬水なり漫遊避暑の客が絶好の伴侶と謂ふべし頃ろ增補再版の上新たに市に上ぼす釘裝變更に美を添へ完全なる日本の名勝記、漫遊案内とはなれり即ち增補の分は殘山剩水と題し南海の奇關西の勝を以てしたるもの、景象の雄偉なる東北の山川と相映發し讀んで倦むを知らず文章また流麗快暢なり(毎日新聞)

●千山萬水の完璧

天皇皇后兩陛下、皇太子殿下の御覽を辱なふせる大橋乙羽氏の紀行文千山萬水は發售未だ久しからざるに早くも第五版を重ねて其賣高は近目の出版物中第一なりと聞く、今度增補せしは前版になかりし中國九州四國の勝地麗景にして名けて殘山剩水といひ例の五彩絢爛なる寫眞版數十葉を加ふ、是に至つて帝國本土の名山名水を披き之を机上一冊の間に觀るを得て初めは較慊焉たりし恨の銷にたるこそ嬉しけれ(廿二年八月廿二日中央新聞)

●千山萬水

乙羽大橋氏が五大著述の一なる千山萬水は、こゝに五版を重ねて、卷末には『殘山剩水』なる一篇と、美麗なる着色寫眞版數葉とを附して出版されたりもとより世評嘖々たる此の書のことなれば、こゝに多く辯ぜず、(廿二年八月廿四日富士新聞)

●增補千山萬水

畿内及東北三道の勝景を天下に紹介したる彼の千山萬水に附するに西南四道の山水を網羅したる「殘山剩水は」有田樵谷、春山鶴峰二氏の手に成れるもの雄健の乙羽が明快の文と相俟つて千山萬水の名茲に全し矣(日本新聞)

●增補千山萬水

本書の初版は嘗て我が社が世人に紹介せし所なれば再び言ふの要なし唯其の增補に就て言はんか卷末に於ける「殘山剩水」は即ち今回增補として加へられたるものにて「松風村雨」「雲耶山耶」の二篇を以て成り四國中國九州の案内記とも評すへく輕妙の筆もて巧みに各地の名勝を記し加ふるに幾多の寫眞圖ありて一見人をして其の名區勝境に逍徉するの想あらしむ(卅二年八月廿五日山陽新報)

●增補千山萬水

是れ山水癖と寫眞癖とを以て有名なる大橋乙羽氏の著なり氏の曩に此著あるや盛に江湖に歡迎せられて一版二版より第五版を重れ今回增補して趣味いよ〳〵津々たるが如し、乙羽氏は其紀行に其寫眞に一種の靈腕を有するのみならず又た頗る製本印刷上の智識に富めりと聞けるが千山萬水の躰裁の如きは從來曾て見ざる所にして卷首に挿める幾多風景の寫眞は固より紙質堅緻にして文字鮮明假ひ之を讀まずとするも若し机上に一本を置かんか書齋の躰裁自から具はるべく若し之を他に贈らんか醇酒鮮鱗に優りて高尚の贈品ならん、一部の定價五十錢にて東京博文館の發兌に係る(卅二年八月廿七日福岡日々新聞)

●千山萬水

平生濟勝有因緣。畫樣風光寫出妍。且自鏡中撿花木。忽於紙上現山川。好看撮影版千景。愛讀紀遊文幾篇。五大著書方欲就。貯金一囊亦何賢。(めさまし草卷の三十五)

拍子木　丁太夫

●千山萬水を讀む

乙羽子『累卵の東洋』を出し、『若菜籠』を出し、更に又『千山萬水』を刊行す。『千山萬水』の後に『名流談海』といふ、名からして博文館めきたるを、出されけるが、こは此頃流行する名家訪問錄にて、乙羽子の文を覗ふに足るものなられば言はず。近ごろ、又『花鳥集』を出さるよし、盛なりといふべし。さかう切口上で、冒頭に紹介すると、長谷川天溪先生のお株を横取するやうにて、先生氣を揉みたまふかも知られど、丁太夫さる野心は毫頭も、これなきものと安心して、次のくだりを讀みれかし。

『累卵の東洋』は、さるところにて見本といふを五行ばかり讀み、老人ならば本卦返り、花ならば狂咲き、よくも今ごろかゝる作を刊行せられたるものかな。先づ序文の名家揃ひといふにお目とめられませう、これは先さまの口條なれば、紛れぬやうにお斷り申上げて御免を蒙り、さてその次が『若菜籠』なれど、目錄だけ拜見するに、例の『鎗持勘助』といふ名作が目にとまり、蛇厭ひが青大將の蛻を踏みつけて飛び上がるやうに身震ひして讀む氣に

ならず。さて、最後が『千山萬水』なれど、これも下手な言文一致ではないが、……で濟まさうと合點する矢先、例の長谷川天溪先生、いの一番に『讀賣新聞』にて下へは置かず二階座敷は、チト古い。下谷へ行かず凌雲閣では、新らし過ぎて解るまいが、さにかく電線に搦んだ紙鳶のやうに、高いところへ揚げたまひしそ、一番鎗の功名として乙羽子の御感斜ならざりける。かゝるところ、例の三宅青軒大人、若いやつらにおくれな取りそ、褒め晩れて若殿の御不興うけては、かなふまじと、さすがは老人だけ、『文藝倶樂部』にて念入りに油をかけられ、それより油の相場、俄に高まりぬと、相場附錄六號活字の商況には見えざりし。

これを手始めとして、宗徒の面々、いづれも忠勤を抽んずる樣、他所の見る目もいぢらしかりし。其道を以てすれば、君子も欺き得べし、さすがの丁太夫、著年の悲しさ、ウカと釣られて讀む氣になり、一册取寄せて、先づ表紙のクロスに感ド入り、寫眞の美しさに魂消え、紙の良きに、モ一ツおどろき、さてこれからが娛しみと、本文を讀みはじめて二度吃驚！

乙羽子の文を評するものはいふ、繪畫の如し（青軒大人）乙羽子は自然を愛す、自然を慕ふ

ことは赤子の慈母に於ける如し（天溪先生）と。夫れ繪畫にも流派あり、種類あり、階級あり、大づかみに繪畫の如しと言はむは、廣義に失すれども、さる煩はしき問題を避けて、たゞ『美し』といふぐらゐの比喩ならむか。げに羽子板の押繪も美しかり、芝居の道具立も麗はしかり、紅殼塗の玩器もきらびやかなり。金文字入『千山萬水』の表紙を美しとすれば、乙羽子の文いかで美しからぬかは。と話が、とかく理に落ると、そこらで『霹靂雷の如し』は怖れるから、これから世話にくだけること。

先づ氣に入らぬは、その所謂繪畫の如き美文に、駄洒落の多いとなり。（この文にも駄洒落が多いなどゝ言ふなかれ、こは毒を以て毒を制するなり。とかく、横鎗は河中島以來禁制なり）『いかなる風の福音町より殿樣のお召よ』とは、緣雨の『かくれんぼ』に『戀風の福よしから』とあるを眞似たのか、何だか知らぬが、これは待合の名、かれは町の名と、けゝめこそあれ、孰れもおもしろからぬ骨頂なり。骨頂といへば、『項上の葦の湯は毘沙門、天に近かるべし』かう腰斬の刑に處せられてはたまつたものにあらず。かゝる駄洒落は、小石同樣、ゴロ〳〵轉がつて居れば、一一拾ふほどなたも御退屈、こなたもチト御退屈なれば、このたびは至て罪のある駄洒落を摘まむに、富士山を描きて『富士は素肌の白粉氣も

なく、云々』又『況んや富士は湯上りの影を落して、腰より下の足高や、裙はぼかしの涙模樣』などは何たる情なき形容ぞや。崇高とも、壯嚴とも、優美とも、かいなでの詩人の筆には、到底上らぬ三國一の名山なり、靈山を、よくも汚し居つた、こゝな大罪人め、素肌の白粉、湯上り、腰より下、裙はぼかし、卓陋とも、媟褻とも、俗惡とも、開いた口のふさがらぬは、あながち鳶に魚を攫はれたときばかりでなし。肌より腰、腰に緣ある語を指ぜむとて、愛鷹を、恣に足高と書き改めたるなど、おそろしの智惠や、おもしろの才覺やな。自然に吸引されつる詩人の偉いづこにある、イヤサ、赤子の慈母に懷くごとき畏と愛と敬とが、何ぺーッの何行にある、乙羽子は慥に自然を玩んだのである、只寫眞の具に使ふたのである。長閑けき空に心なく遊べる禽を、狙ひうちに射落して愉快がる紳士もある世に、自然を玩ぶ紀行文士のあるも、好配劑である。丁太夫は、決してそれを妨げぬが、あまり喧すくお太鼓を叩かれるが耳に障つて癪の蟲が我慢せぬ。

丁太夫に諮あり、三下りでも四上りでも、絲に戲らぬこと請合なれど、春の日長の眠氣さましに聞きたまへ、マアかうだ。『太鼓叩きやれお太鼓を、叩いてお金が出るならば、法華の坊さん丸儲け』坊さんの下に丸さいふ字を繋いだところは、腰から下の足高といふ筆法

だ。天溪先生にして在らしめば、『この文にしてこの評あり』かね。チット失敬、これではひねきの引き倒し、御免さふらへ。

それから――餘り長くなるから手短かにやるが、――乙羽子、チト歷史でもお讀みなされてはいかゞや。箱根山にて、『豆州蛭ケ小島は、袖の雲をへだてゝ見ゆ』と、蛭ケ小島は、いづこに在るやら御承知にや、幹末の漢詩、鎌倉懷古に、『緬想蛭島幽囚客、沙頭幾回夜按戟』とあり、解しえてり、乙羽子は、蛭ケ小島を島嶼と考へてござることを。かういふ落語がある。山出しの權助に、四谷のどこそまで、使を賴んだら松火をくれといつた、何で松火が入用だと聞くと、谷が四ッあつちやあ夜道が險呑だとさ。文字に因りて土地を解釋すれば危いかな。蛭ケ小島の島嶼ならぬことは、同地麥畑の中に現存する、寬政二年に建てた碑を讀めば知れる。

名之日島、亦非有江海之環洪濤壯觀也、實最爾寥闊之野而已、今者不誌、往者其泯。

撰文は、豆の鴻儒、秋山富南翁の筆である、翁十二ヶ年を費して豆州志稿十三卷、海島志二卷を著はした人で、その言頗る憑據となすに足る、土人は今蛭ケ小路を訛つてゐるほどで、勿論沙などのある土地ではない。『槍持奴の尻振る癖は僕の持病と御免れへ』などさ

ながら壯士芝居の臺詞のやうな氣障な、卑陋な、蟲唾の迸る文句を考へる暇があつたら、チト地理や歴史でも勉强さつしやい。トツイ柄にない文句を驚べたくなるも、誰のためとおもふ。

近刊の『文藝倶樂部』に、同書に對する、花袋と桂月の評が出た、花袋曰く『圓轉洒脫云々、興味津々覺えず讀耽る云々』と、竟に楊子雲が虛頌を免れずサ、それも對手が、王半山ほどの人物なら虛頌も少しは甲斐あれど、大橋乙羽庵先生ではイヤハヤ。桂月曰く『乙羽子旅行を好む、世の俗人とは、多少異る所あり、然れども、未だ共に山水の樂を語らざるが如し云々、所謂紳士的に、車でからく飛び行きて深く窮めず、また深く自然の美を味ふ樣子もなし。眼孔なく、見識乏しく、文章また輕佻にして、ゆかしと思ふところは一つもなし』これこそ齒に衣着せぬ直言、この人さすがに硬骨あり。高山なにがしが、『太陽』に、いたく麗水を抑へて、ムヤミに乙羽を擡げたるに比すれば、眼おのづから高低あり。乙羽子よ、『良藥口に苦し』も、君の耳には蛸だらうが、岸上の賞軒、桐生の悠々、宮川の雲外、奥村の不染、上村の左川、長谷川の天溪、猪波の曉花、武田の櫻桃、三宅の青軒など申す大文豪を、たやすく駕御する君の腕前は、天晴れながら、君の才は默洒落を吐くに足り、原

稿を仕入るに足り、書を賣るに足り、繪紳をかつぐに足るのみ。詮ずるところ、あきうどの半は戯作者化したるに過ぎざれば、ゆめ文學者の仲間入なしたまひそ。

之を聞く、土井晚翠氏、詩集『天地有情』を出版せんとして、博文館に諮るや、應ぜず、高山大町二文學士斡旋頗る力めて、わづかに上梓の運をえたりと、今の文學書類を公刑せんとするもの、多くは博文館と春陽堂に倚りて、命脈を繫ぐ、而して博文館の、特に出版界に重きを成せるより、今の所謂文學者なる軟骨動物は、阿附迎合に是れ忙はしく、小石川さま(乙羽の綽名なりとか)の御感に入らんことを專一に心掛くるよりその著書とさへいへば、言ひ合されど。同じ念に、甲も乙も、暗涙を呑んでヤンヤと喝采するなりとか。博文館の阿婿、乙羽先生の靴紐を釋くにあらずんば、明日の薪米を奈何せむとは、文學者の薄志弱行お話にならず。斯る淺ましき世に、大詩人出でよ、大豫言者出でよと、焦るは、溝に鯛の泳がぬを訝むより、なほ愚なりとやいはむ、黄河の清むこと、或はあるべし。今の世に大詩人斷じて出でじ。出づるとも活きじ。

假に博文館をして、文學界を占領せしめんか、東西々々、このところ役割を御覽に入れまする。大詩人、大橋乙羽庵、文學博士大和田建樹、小說家の泰斗三宅青軒、批評家の木鐸長

谷川天溪、美術學校長武内桂舟、讀者は朝鮮の學生が、天溪先生の飜譯に隨喜し、歸化の臺灣土人が、青軒大人の仇討小説を渴仰し、髮床の八や熊が、青軒桂舟懸け合ひの都々一駄洒落を歡迎して、人氣湧くがごとけむ。人才彬々、吁嗟、諸子の前途も亦多忙なるかな、羨むべし。オット、多忙は多望の誤り、とかく今の生若い文學者は宛字を書くので困りますテ。

未だ『千山萬水』を讀まざるお人は、左に抄せる一節を咀嚼して、その文品のいかなるかを看よ。

一同不動尊に詣でんと、麥の方へ出づれば、百千鳥百囀づりの別嬢が、白きものをこちたく塗りて、粟飯の亡鬼ともいひさうなのが、おかけなさいませ、お寄なせいませと、五月蠅云ふのを通りぬけんとする向側の端に、紫寒冷紗の衣を着たる女中あり、紫式部が石山寺參籠といふ見榮にて、客を引く所、太肉にして、細女尊に矢飛白のお召を着けさせ申したるが如し、蓮子手を拍て笑ひ、これが今日の獲物ならむといふ。最高點にて可決。石壇を上り社殿に三拜して、歸る道すがら比翼塚に立寄る。竹林の中にツンと澄したものなり、櫨さん紫さん、今爲に在る、編輯來り吊ふ目黑の秋、かう多勢の詣では淋しかるべ

き處が、陽氣過て涙が出る。

氣障ッぽい黃色な聲を振立て、ぞべら〳〵と往來する樣、宛として觀るごとし。斯る俗書が、長れ多くも陛下乙夜の清覽を辱ふしたるかとおもへば、獻ずたるものは盲目蛇に怖ぢずのたぐひ、齒牙に懸くるに足られど、傳奏の勞を執りし人、果して能く背に冷汗を濕へざるなきや。

追遙かくれ、鷗外出でず、露伴昔日の覇氣なし。社會の好尚日に墮落す、これ果して誰の罪ぞや、なぞゝ生眞面目になりて、半鐘鳴る最中に悠長らしく火元の詮索でもあるまい。鐘が鳴るやら、撞木が鳴るやら、向ふの和尚さんに聞いて見な。（卅二年六月文庫第三號）

若　栄　籠

長谷川天溪

●若栄籠を讀む

昔し英の文豪バルクは、時の女小説家バルチーの處女作を讀みて夜を徹しけりと傳ふ、吾れ固と精神上及び物質上に於て非常なる素寒貧、所詮はバルク先生の足元だに及ぶべくもあらざれど、『若栄籠』を通讀せむがために午後六時より夜の一時頃まで寒燈の下孤脚に向ひて鵜の目鷹の目なりしは其形式に於て稍似たるを覺ゆ。去れば此を讀むに連れて、吾が狹隘なる心の中に、思ひ當りし事はた考察せし所少きにもあらざれば、今次に記臆に浮びしが儘綴りなむ、元より大晦日より元旦の煩はしき際、不平酒飲みつゝ書き下せし物なれば、支離滅裂讀むに堪え難き箇所も多かるべし、去れど予自身は小賣弄を以て甘んずるにあらむ、遮莫此は是れ予の思慮のみ、主觀的思念のみ、入若し余を看なば、それ或は大なる憾懼ならん乎。

『若栄籠』さは乙羽君の文集なり。小説あり、隨筆あり、新躰詩あり、紀行あり、俳諧あり。

而して通讀し來れば、乙羽子の思想も窺ひ得べく、理想も把捉し得べく、技倆も知り得べし。去りながら今此等の諸方面を一々捕へ來つて評論するは煩雜にして到底出來得べからず、殊に俳諧の如きに至つては余の喋々すべき限にあらず。

小説と銘打つたるが中に、尤も圓滿なる作は『子煩惱』と『世話女房』との二篇なるべし。茲に圓滿なる作といふは其意他にあらず、形と想とが相調和して、形の勝ちたるも無く、想の浮びたるも莫きを謂ふ。但し上記の二篇は素より此文集中比較的に形と想とが相調和したる者にして、其他三篇の小説に至つては皆此兩者の平均を失へり。總て美術品なる者は所謂没理想ならざるべからず、シルレルの所謂フォームがマッターの内に没して而もマッターの爲に征服せられざる所に妙ある者にして、此點に於て上記の二編は集中尤も秀でたる者なりと謂ふべし。

然りと雖も五篇の小説中、簡單にして而も好く他を代表し、是を以て乙羽子の畫く所寫す所、はた氏の理想とする所を知り得べき作は、卷頭に掲げられたる『春の夜』なり。是れ明治廿一年末の新作にして、能く明治廿七年、同廿八年、同廿九年の諸作を代表する者ならん、換言せんか、乙羽子のチピカルチークは即ち此一篇の小説也。今少しく此點に就さて

詳言せむ。

假りに吾等をして以下述ぶるが如き一人物を想像せしめよ。即ち未だ社會の風波に觸れず、絶海の無人島に育ちたる一人ありて、其人のインスチンクトが剛情にして勇猛、否寧ろ自我的（エゴイスムカル）にして劣け厭ひの性格ありと假定せよ。偖て此人間を連れ來り、多少を云はず商業界の智識を吹き込み、次で其男に惇德の所爲ありて遂に世に捨てられたりとせんか。其人物の行末は自然の結果として『春の夜』中の乞丐となるべし。更に此人間をして畫の術を學ばしめむか、轍ち美的理想に依拠して勇猛不退の精神に驅られたる畫伯先生即ち『世話女房』の主人公岸苔となる。更に此男をして德川家末代の下郎社會に置かしめむ乎、乃ち槍持勘助と成つて現出すべし。次に此人間を女性と見立てゝ教育なき海濱の賤女と見よ、又乃ちお房と成つて現はるべし。此等の諸人物を仔細に看取せよ、皆己が立てたる理想に縋り剛情不屈、飽くまでも自我を押し通さむず人物のみなり、只其境遇の異るが故に、其作動に於て彼是差異あるに外ならず。即ち彼等の所爲ある傾向（インクリナーション）は皆同一形式に出づる者なり。而して此着想を最も明晰に而も簡單に表白せる者即ち『春の夜』なり、是れ予が此の一篇が他を代表するに最も適切なりと謂ふ所なり。

乙羽子は兎に角に人生に於ける悲劇的方面（The tragical aspect of life）を眼中に置けり。即ち其の主人公は浮世の罪業或は誤謬の試驗を通して遂に高尚なる理想を追求するに至る、然りと雖も子の畫きたる人物は、未だ其自我的情熱を滅したる者にあらず、其の人物は、未だ理想の爲に生存するにあらずして尚此の娑婆に執着して常に泣く者なり、故に一面より言へば凡て壓世主義の奴隷と成り終りたる者のみなり、念ふに此の點は即ち著者自身の性格を示す者なるべし。煩腦即菩提といふ高遠なる一言は、子の腦中には智識的に存在すと雖も未だ此に對する一の信念なきは明々瞭々たり、否寧ろ此點に於て迷ふ者也。須臾らく看よ作中の諸人物を、表面は各自の立したる理想の内に在りと雖も、裏面に於ては未だ煩惱の絆を離れず、娑婆に執着する厭世家のみなり。お房といひ、岸苔と云ひ、勘助と云ひ、乞食先生と云ひ、未だ娑婆の波瀾を潜り拔けざる者のみなり。此點に於て此諸小說が嚴正の意味に於ける小說とならずして、單に一の娯樂として取扱はるゝ所以なり。殊に『犬ざくら』の一に至つては、諸小說中の駄作とし言はざるを得ず、素より人生に於ける悲劇の力を現出したる者ならんと雖ども、其着想の狹少なる決して特出すべき程の者にあらず、而も結局に何等の見るべきなきに至つては甚し、暗黑の方面を寫實的に畫くも好し

然りと雖も其一面に於ては理想の光明を認識せしめざれば、始んど小説と云ふの價値なし。即ち『犬ざくら』は一の新聞的記事に外ならず。

更に飜ッて五小説の品位を定めむか、結構の上より言ふも、はた着想の上より言ふも、總て自然なるは子煩惱と世話女房の二篇なり、此兩者は殆んど兄弟たり難しと雖も、強ひて等級を附しなば、子煩惱を以て兄となし、世話女房を以て弟分となすべし。お房は婆婆の大波瀾を潜つて已が安心立命の位地を作りぬ、而も彼女が浮世の罪業に遇ひ、悪魔的の誘惑に邂逅したるは、人間として陷るべくも、又自然に而も盲目的なり、由來悲劇的の一要素は其盲目的なる所、其無意識なる所にあつて、是より意識的に雄大高壯なる理想に據つて生活する其刹那にありとす。之に反して世話女房の夫は多少作者が故意に其境涯を造り出したるの厭ひあり、更に言はしむれば、岸苔が意識的に悲哀の境遇に舞ひ込みたる傾あり。若し彼の眼識が超自然的實在を眺めたりとせんか、彼が意識的に悲劇的勢力の試驗に遇はむとするも、其は耶蘇が悪魔に試られんが爲に野に往き、四十日四十夜食ふ事をせず端坐して耶和華の神を眺めたるが如く其如く莊大高崇なるべし、去れど岸苔は什麼に、單に名譽心に驅られたる俗物のみ、彼は名譽の前に俯伏して是を拜したる者なり、悪魔が耶

蘇を携へて峻嶮の山に登り、示すに天下列國の尊榮を以てしたる時、神の子は曰はく、撒但よ退け主たる爾の神を拜し之にのみ事ふべしと錄されたりと、吁其雄大崇高なる既に言舌の境を絶せり、若し岸苔にして斯る底の大理想ありたらん乎、彼が意識的に悲哀の内に突進せしは却て崇美なり、然るに彼は復俗物の一人のみ、即ち前後の平均を失へり、此點あればこそ吾人は子煩惱を以て第一位に置かむと欲するなれ。

小説より轉ずて所謂雜筆に移らんか、予は此數篇は寧ろ小説の部類に劣れるを公言するに憚らず。今比喩を以て言はば、吾人の不老泉或は淡粧濃抹等を通讀するに當り、猶ほ石鹼玉を看るの感あり、兒童が霞の穴より吹き出す石鹼玉は眞に見事なりと雖も、其眞面目は只虚空なるのみ、然り雜筆は其形式に於ては誠に婉麗なり、されど吾人は予が殊更に雅文躰を撰びたるを憾とす、否予の裏情は現はれざるにあらず、然れども其情緒は斯る文章に由りて大に殺滅せられて、讀者の同情を惹くの引力を失ひぬ。昔日新井白石は『侍る』的文字を綴りて自傳を著したりと雖も、而も是れ彼の失敗なりき、噫乙羽子も亦同轍を踏みて失敗せり、若しも予が小照錄の筆法を以て不老泉を物したらんか、讀むとし讀む者誰か悲哀の情を催さざらん、看よや不老泉中の涙を、其眞相に於ては神聖純潔の血涙なれど、

惜哉其文章の餘りに形式的に走れるが故に、乳母の手に養育せられ生の母の慈愛を知らざる貴公子が半ば形式的に流す涙となり畢んぬ。吾人はフロックコートの貴公子が絹のハンケチにて涙を拭ふよりは、野人が骨ばりたる粗き手もて、はふり落つる血涙を拭ふ深刻なる悲哀に深く同情を表す。

更に進んで新体詩に入らん、前後通にて三篇なれど、比較上傑作と稱すべきは『柳ゃもと』なり、是れ梅若の悲劇を寫して諸行無常の佛教勸念を歌ひたる者也、去れど此一篇のみならず其の他二篇共に詩的氣韻に乏しくして散文的（プロゼーク）なるは少しく讀者の興を破るならん。殊に都々逸又は端唄の口調殘留して口惜しく、若しもバルンが俗調俗語を取りて其詩想を傳へたる如くんば、吾人何んぞ此俗調を批難せんや、只想の凡庸にして形式上のみに五七調を撰びたるを遺憾とす。

去つて紀行文に到れば、乙羽子の技倆更に明瞭に表現せらる、紀行文は一個人の天然に對したる場合の心的狀態を表はす者なり、而して乙羽子は宇宙を全き者（as a whole）として常に觀ず、『春の夜』の叙景に於ても、亦子が宇宙を不可分の一物として看るの傾向瞭々たり、即ち子が畫き來る所は彼れ是れ互に連絡融和して嵌入の跡なし、由來今日多數の紀行

文は、猶ほ寄せ木細工の傾向ありて甚だ見苦しけれど、乙羽子の作に至つては此缺點なし而も子の畫く所は頗る客觀的なり、然らば即ち子は何に由て森羅萬象を全き緣者として記載しなすか、予の看る所を以てするに、子は主觀に由りて萬物を連結せず、只巧妙なる技術に據りて山河草木さては天の諸躰を結び附けたり。宇宙全躰を總合的（シンセチカル）に觀て、茲に高遠なる理想の現れたるありと觀ずるは乙羽子の特色に非ず、花の樹頭に開くを見、月の水底に澄めるを觀ずて、下化衆生の相よ、上求菩提の機よと思惟するは蓋し子の紀行文に非ず否寧ろ心を虛無の鏡として映ずる萬物を技倆を以て結ぶ、然り子の紀行文は繪畫にあらずして寫眞なり。此故に吾人は子の宇宙に對する想念を知り難し、去れど予輩は子を以て客觀的紀行文に最も成功圓熟したる者なりと推すに吝ならず。

予は此文集中重なる物に就きて鄙見を綴りぬ、而して今此諸部類を悉く眼前に置き更めて其品位を定めむか、第一に位すべきは小說にして、第二位に紀行文、第三位に雜筆を置くべし、次に第四位に來るべきは何ぞ、予は俳諧を見るの眼なしと雖も吾が思惟する所より齒に衣きせず言はしむれば正しく此部類を以て茲に位せしむ可し、隨つて新躰詩は最後に位す。斯くの如く讀み去り批し來つて卷を閉づれば、表紙の色の配合復一段の美を添えて

眼に映じぬ、聞く下村觀山氏の意匠なりと、再び卷を開けば、富岡永洗氏獨得の美人窓に寄つて黄鳥を窺ふ、彩色の美麗なる道に浮世繪に其名高き永洗氏の筆なり、殊に美人の面影が垢ぬけたるは賞すべし。更に手に取り上げて繙くと少時、紙質の善良なるは忽ち吾が心に快き感を與へたり。妄評多罪。(卅二年一月十四日讀賣新聞)

若　榮　籠

大橋乙羽子の著編中小說あり雜筆あり新詩あり紀行文あり俳諧あり子の多藝多能なる確に明治文壇に立つて一曉將たるに耻ぢずといふ可し小說に於ける春の夜(卅一年末作)一乞丐兒を點出して「已等が目から觀た世界觀よ、ヘン馬鹿馬鹿しい、世の中が何んだと言ふんだ、今が春で花が咲いて、鳥が啼いて、あア面白い云々」の語をなさしめしに過ざるも行文老熟といふ可し世話女房一個偏屈なる畫家岸苔に配するに師の愛孃たりしお園及び一子小太郎を以てし一面には世才に長けたる相弟子苔石を描出して却つて偏屈なる岸苔の心機を一轉するの資となし終に京都博覽會に於て岸苔の畫きし猛虎圖金牌を受け「岸苔は如何に嬉しかりけん、病み窶けたる身の這ふが如く立出づるを、女房お園はそを勸りて、齊しく席場に直立たり云々」又燕尾服着飾り「苔石の「寢狀の實の一ツだに獲ざりしに引換へて」と局を結べる唯苔石の於園に對する愛の朦朧たりしのみ他は短篇として佳作たるに耻ぢず(廿七年作)槍持勘助一種の傳記演繹躰小說とも言ふ可きもの犬さくら某鑛山大盡の妾お政といへる元は下谷の藝者……木村良吉といへる大學生と情を通じ居りしが木村は卒業前よりして再び來らず某金滿家の娘お園に緣者を求めて妻とし之を踏臺にして洋行し學士の上に學士を買ひて歸朝し鑛山局の技師となり百圓の月給取る身となりしより初生なるお園を冷遇し放蕩三昧に其日を送り遂に再びお政を訪ひて情交を暖めお園を離別して身も不面目に官を辭して大阪鑛產會社といへる「怪しの株屋の技術長となり」と政を妻となしたりといふに終る今時の學生中這般の腐腸漢なしとも斷言し難し乙羽子何か感ずる處ありての作ならん「ジッと木村の顏を睨めつけて、眉間に蛇の樣な青筋を云々」の如き二三の言ふ可き事あれど敢て爰に難ずる程にも非ず子煩惱は仁右衛門といへる邪慳なる大工を父としたるお房性來美貌にして又順從長太郎といへる夫を持ちお花といへる娘まで設けしが仁右衛門夫婦の貪慾なるより家内風波穩ならず長太郎は暴飲家となりて職を廢しお房は歎かれて某紳士の愛妾となりしが長太郎酒の爲に死しお花の雪中に凍餓せるを救ひて大に悟る處ありお房お花と共に都に來りて花賣となりしといふもの先づ劇八分小說二分の作と見

たり此種の作は最も子の長ずる處なるが如し（廿八年作）

去れど雜筆に於ける不老泉の悲愴なる紀行に於ける富士登山記の流暢なる共に篇中の好文字小說に勝り新躰詩に勝ると萬々特に不老泉を推して壓卷とするもの或は評者が同情の此點にのみ偏重なるやも知る可らずと雖も不老泉なる哉不老泉なる哉子が尤も眞面目に執筆せるも篇中唯此文字あるのみ血あり涙あり噫不老泉！製本袖珍風にして優美日繪は艷麗なる永洗子の筆を勞す（三十二年一月十三日東京日々新聞）

法科大學　中村かつら

○わかな籠

○先づ表紙の見るから美し
やとものすれば若榮つむ子に見えたり
振袖や美しき娘の若榮つむ
○春の夜
○新年の御慶とあり
おぼろ夜や小謠うたふ乞丐あり
文學者のさてもの〳〵しき御慶かな
○世話女房
○はしかきすこし剽げたり
繪師の妻は繪具を解きて春くれぬ
かりそめに若榮賣となりしおどけかな
○槍持勸助
○口畫の美人
槍持の槍ふり立てゝ花の散る

○犬ざくら
こゝろありて花盜人となりにけり
○望鄕臺
古里はあなたなるらし花咲雲
○子煩惱
○かこひの梅
花賣は親子なりけり二人すれ
紅梅はかこひの中に咲きにけり
○不老泉
○柳がもと
母の爲に孝子の汲みし清水哉
さすらひて柳がもとに立ちよりぬ
○淡粧濃抹
○浮世の影
春雨や繪の品定め小夜ふくる
朧夜や櫺子に映る影法師
○田家風月
○富士登山
山樵の柴に添へたる躑躅哉
日きら〳〵自衣のつゞく富士詣
○小照錄
○木曾路の春
十年の昔なりけり朧月
同行五人木曾路の春と尋れたり
○點景山水
○鹽原の夏
繪筆もちて行かんとこそ思ふ日の永き
湯を出でゝ欄に倚る時風すゞし

○江楓漁火
品川や紅葉の中の海晏寺
○雪のふるさと
狐なく駒形欅に日はくれぬ

○ながれの末
冬籠句三百に酒一斗也
○讀み了りて
とりぐにもの珍らしき若菜かな

（卅二年一月五日讀賣新聞）

若　菜　籠

さは乙羽子が累卵の東洋についだ第二の自費出版ださうだ、ポケット形の可憐な躰裁で、開卷第一に永洗子が新年試筆の絶艷絶麗な乙女の圖の木版摺、これ一枚でも、雜誌屋店頭の素見の客が見ずてにはえまいとの評判だ、が中身は短かいちよいとした小說五篇と、あとは隨筆紀行新躰詩俳句取りまぜ十數篇、いづれも雜煮餅に持たれた人々へ春の讀料として極輕い所をとのそも〳〵の注文なれば、一つ〳〵に取り出して評する程のこともなからう春はいとゞなまけて、新刊の評など一切抛げてある中へ、友誼上評するなら善惡ともに早いがよいとの事に、まづ初の小說五篇より讀みはじめた、中で僕は犬ざくらを面白いと思ふ、春の夜は新作らしいが、成程文章は流麗老錬に相違ないが、たゞ作者のレツトリツクを見せられたまでがと思ふ、雜筆では淡粧濃抹、望鄕臺などがおもしろく、紀行では鹽原の夏がその跡をつけるやうでおもしろかつた、一言以て此の書を評すれば、無邪氣な、可憐な、閑窓の讀料とでも言はうか、（卅二年一月三十日讀賣新聞）

風　塵　錄

◎大橋乙羽子、昨秋より今春にかけ、袖珍もの二卷を出す。累卵の東洋、若菜籠、是也。一は博文館よりて、他は東京堂よりす。共に子が自費出版に係るといふ。

◎累卵の東洋は政治小說を以て居り、若菜籠は短篇の世話小說、隨筆、雜錄、紀行、新體詩、俳句等を收む。一は子が弱冠の作に係るといひ、他は概ね晩近の述作とす。

◎表裝、口繪、印刷、用紙の鮮麗、嶄新なる、間然する所なし。殊に諸名家の跋文、序文の、累卵の東洋に於る、小說の口繪の、若菜籠に於る、開卷第一、讀者の膽を奪ふ者は是也。

◎若菜籠は晩近の述作なる丈けに、其行文概れ、流麗、滑脫、誦すべき、銘すべく金玉の辭柄に富む。之に反して累卵の東洋の文字、生硬、澁怪、難ずべきもの尠らざるを見る。

◎累卵の東洋　其結構、可ならざるに非ざるも、其着想に至ては毫も採るべきものなし

乙羽子が思想の經歷を語らむとするは可、而も之を以て文界別に主張ありといはゞ、我は子の爲に竊かに其迂を憐まずむは非らず。

◎佳人の奇遇　經國美談、是等の作品が、政治小說として將た美文界の逸品として、怪しき迄の賛辭を博したるは十年前の昔也、其思想の上よりいへば、累卵の東洋は確に一昔以前のもの也。

◎惟ふに乙羽子の意、茲に非らず。東洋の形勢に感憤するものあり圖らずも舊稿、刻下の時世に適合するあるを見て、文學以外別に讀書界を鼓舞振作せむとしたるに在る可し。

◎亡國の涙、慷慨の念慮。切齒。扼腕。文弱。腐敗。熱血。斯の如きは不祥の文字也。美文界の禁物也。政治家、經世家を以て任ずるものと雖も、容易に口にすべきに非らず、乙羽子小說家を以て美文家を以て、今や是等不祥の文字を羅列して縱橫臆する所ならしむ蓋し時世の罪也。

◎一戀愛小說を出したるが爲めに、紅葉を目するに色事師を以てする能はざると共に、一政治的作品を出したるが爲めに、政治的手腕を認めたりといふ能はず。

◎過去に於て、小說家たりし乙羽子は將來に於ても小說家たる可し。過去に於て美文家たりし乙羽子は將來に於ても美文家たる可し。

◎美文家たり、小說家たる乙羽子は、爾後決して累卵の東洋の如き、破格の著作を爲さらむことを望む。

◎時世止むなく無んば、別に道あり。宜しく筆を焚て、文壇に袂別すべき也。

◎我は若葉籠に於て、乙羽子の本領を認むるを喜ぶ。小說見る可し。雜筆見るべし。紀行見るべし、新躰詩、俳句、皆見るに足れり。

◎小說に於ては最も槍持勘助を採る。春の夜は小品物の上乘と云ふべく、世話女房、子煩惱、犬ざくら皆愛すべき短篇也。

◎不老泉、淡粧濃沫、小照錄、望鄕臺、何れも著者が既往を語るもの、麗文、乘筆、殊に乙羽子が文章家としての手腕を見る。自己を吹聽せむとする此種の文章は殊に困難なるものなれば也。

◎富士登山、鹽原の夏、紅楓漁火、何れも紀行文なり。子が寫眞機を荷ふて、單鞋、孤節至る所の靑山に踞て白水に臨むの狀、歷々、紙表に溢る我れは全篇の中、最もこの紀行文を愛す。

◎子が新躰詩は雅俗の調和最も宜しきを得たるもの、多く小說的趣向に成ると雖も、詩形頗る掬すべし。柳がもとは我は愛誦せしもの也。

◎要するに若榮籠は、徹頭徹尾、乙羽子の作品なり、何れの部分にも子が形影の彷彿するを認むる也。多樣多趣味なる子が頭惱は最もこれからの袖珍的作を物するに適せり。

◎唯惜むべきは、子が想を後にして、先づ文を遣るの弊あること是也、外形にのみ力を盡して其內容を粉飾したるが如き姿の、殊に著しく現はるゝの一事也。

◎文ありて想なき者と、花ありて實なきものと、共に完全なるものに非らず。要は兩者相伴ふに在り。乙羽子たるもの之を思へ。（卅二年二月廿日京都新聞）

若榮籠を讀む

畏友乙羽大橋君開春匆々一書を著す題して若榮籠と云ふ余新年の賀狀を替へて寄贈に接す一言なかるべからず

余と乙羽君とは恰ど師弟の情誼あり曾て博文館編輯局樓上に於て日夕教を受けたりき君や宏才博辯文雄に筆快に所謂筆下万語成り墨上春を生ずるの概あり蓮山人の乙羽君を評するの言に曰く彼れは三面六臂の佛以上と敢て過言諛辭とのみ聞くべからず君は文才あるに加

へて事務的才能あり言を換へて曰へば多能多面萬藝に通せざるなきもの現時は博文館支配人として畫策縱橫、同館の規模爲めに大なるを致せり君が聲名の朝野に高き故なきに非ざるなり今若榮籠を讀む各編孰れも二度の御勤め洗濯物なれども才藻起絕意匠富贍直ちに君の多才多面を現せり其裝裝の何ぞ奇麗なる其鹽梅の何ぞ秀妙なる其文章の何ぞ玲瓏なる再讀三讀更に倦くを知らざるなり就中編中の「不老泉」の如き君が性行を活現して欽羨に堪へざるものあり慈母の痛臥するに方つて不老の泉を千疊の岳裡に汲むの孝心近世の美談にあらずや君が文に成效し事務に成效する所以此赤心精誠より出づるに非ざるなきを知らんや若し夫れ細評に至りては之れを後日に讓り以上を記して妄評に代ふ君余が言に首肯するや否や、巳亥三日蘭雪迂人妄批（卅二年一月六日箱館日々新聞）

若榮籠

是れ大橋乙羽子の著、子の文と想とは江湖已に定評あり、今將た何をか贅せむ、曩に「東洋の異彩」を著はして政治小說熱望の讀者を醫し文壇の批評頗る囂しかりしが今又新年の讀書界に此の好箇の讀物を寄與せられたり、三百余頁の可憐なる小冊子、鉛裁活字鮮麗優美表紙畫の若榮籠は下村觀山の意匠になり、富岡永洗の揮毫に係る口繪の美人は永洗の妙技

頗る愛すべく春の夜、世話女房等數十編を收め新作あり舊作あり、春花秋月絢爛清逸一讀卷を措くに堪へざらしむ、新年の進物等には無上の好品なるべし（卅二年一月七日米澤新聞）

●若　榮　籠

若榮籠とは大橋乙羽のスケッチを蒐集せし小冊子なり短篇小說として春の夜世話女房搶持勘助犬櫻等ありその他雜筆あり紀行文あり新俳詩あり俳句ありいづれ取々に面白き節なきにあらねど殊に見るべきは短篇ものよりも寧ろ雜筆にあらん、その平易流暢の文頗る愛すべきものあるのみならず讀むものをして乙羽その人を彷彿せしむ、新俳詩及俳句の如きは只彼の多藝を表するに過ぎざるのみ、冊子の体裁は頗る意匠を凝したる者永洗の美人畫は濃艷らんとす、新年の進物等には一寸妙ならん（卅二年一月大阪毎日新聞）

●若　榮　籠

乙羽子が春の夜、世話女房、鎗持勘助、犬さくら、子煩惱（以上小說）不老泉、談粧濃沫、田家風月、小照錄、點景山水、望鄕臺（以上雜筆）かこひの梅、柳がもと、浮世の影（以上新躰詩）木曾路の春、鹽原の夏、紅楓、漁火、雪のふる鄕（以上紀行）ながれの末（俳諧）を輯めし袖珍本にして口繪美人聽鶯圖は永洗の筆に成りし極彩色奉書刷にして表紙觀山の意匠も旨く外粧内容共に面白く年玉等に恰好の書なり（秋田魁新聞）

●若　榮　籠

本書は大橋乙羽氏の著作に係る短篇小說、雜筆、紀行、新躰詩、俳諧等都合二十篇を收錄して一卷となしたるものにして艷美可憐の小女を口繪とし寸珍の美本なれば旅行などに携へて徒然を慰むるに適當なり（下野新聞）

●若　榮　籠

大橋乙羽氏の著作にして東京博文館より出版したる『若榮籠』の袖珍は頗る美本紙質さいひ表裝といひ流石は書に贅かる急所を知る乙羽氏の好みだけに何處に一點の拔目もなく表紙の意匠は下村觀山氏口繪三十餘度摺の極彩色木版畫の揮毫は富岡永洗氏彫刻は五島の刀摺師は例の市松の腕見事なるは云ふだけ野暮なる可し扨て卷中收むる處は美文あり韻文あり紀行あり俳諧あり新作舊編摘み納めて一籠の中に色もあり香もあり氏が繪畫的文章を味ひ氏が寫眞的詩想を知らんと欲せば必らず一本を求む可きものなり（神戸新聞）

●若　榮　籠

◎『若榮籠』（大橋乙羽氏著）博文館より發賣せり。這は乙羽氏が全集の一部にして、袖珍

の極上美本也。收むるもの、「春の夜」(新作)を始め「世話女房」「鎗持勘助」「犬さくら」「子煩惱」等の舊作に係る短篇小說、其の他雜筆、新體詩、紀行文、俳句など無量二十餘種あり。「春の夜」は氏が近作中の白眉とも云ふべきものか、雅俗文の筆ゆきめでたく、往々緣雨、一葉などの名作かとも見間違ろゝ秀句少なからず見ゆ。一度豪奢をつくせるものゝ乞食となりさがりて、春の夜の月に對して、感慨を述ふると云ふ筋也。「春の夜はおぼろ隱しの絹羽織を、態とらしく引ッ張りたる高帽の新學士、」「マア御機嫌よろしう、と無理やり捨てゝ、行く先は隔つ屏風の雲千重、誰が書き捨ての川柳、入江に沿へる一と村の、磯からつゞく床の山、島立つ古渡の舟底に、未練を殘す塗枕は、幾夜の影や映すらむ」。などにて其の文體の一斑を示すに足る。(新小說)

●若　菜　籠

これ例の乙羽子が新著にして、年始狀代りに知人に配りしもの。書は袖珍の愛らしき小冊子にして、收むる所小說あり、紀行あり、新躰詩あり、俳句あり、意氣を極め、粹を極めたるものなり。

子の小說はさらく〳〵と白粥を啜るゝが如し、新躰詩に至りては全く見るに足らず、たゞ子に取る所は紀行文あるのみ、蓋し飄遊は生命にして、紀行文は子の最も得意とする所、好きこそものゝ上手なれの一語實に吾を欺かざるを知りぬ。(慶應義塾學報第十二號)

●若　菜　籠

大橋乙羽の作、小說、雜筆、紀行文、新體詩俳偕の嫩芽を一籠に蒐めたるもの、わけて敬服すべき程のものもなけれどあつさりしたる若菜のくた〳〵しからぬはめでたし概して意匠の雋邁秀逸なるものあるにはあらざれども乙羽生由來一流の才物流麗婉曲の文字が讀者を厭かしめざるとは確かなり、「春の夜」は憂世を睥睨して俗世の榮耀を屑とも思はず風に嘯き明月と對語せる風流洒落の乞丐をうつしたるもの「槍持勘助」は曾て主人に供して槍を持ちたる豪俠放膽の從僕が臨終の俠氣を叙したるもの共に根もなく果もなき摘み上げられたる春草の一ばしなれど輕快の筆妙趣自ら具はれり、「世話女房」もありふれたる筋なれども女房が幼兒にせがまるゝ所より其良人たる畫師岩苔が貧窶に迫りたるにより同輩より卑下せらるゝを憤り卷舒時ありと澄し込みたるにも似ず一番奮起して心身を粉にし名畫をかき上たる結末の所まで辻褄の揃ふたるかきふりめでたし、犬さくらは義理ある二人の女性に搦められたる一學士が妻の家なる財寶大方竭したる後二世ならぬ此世の緣もぷつと截り

て以前の女と東京を駈落ち關西に於て嘗昔のをは棚にあげ、とある會社の社員となりて華書を街ひ居る所にて擱筆せりこゝにて筆を止たるは反て面白し今の世の人の心ざまはなべてかくこそ「子煩惱」は此書の傑作なり血もなき涙もなき夫婦と血は分たれど之に髣髴たる息子と其妻と及び其間に設けたる頑是なき少女とか此篇の人物なり天外の奇想といふにもあらざれども内容は短きわりに豐富なりお房が良人に訣れて妾奉行したるのちお花が祖父母にさいなまるゝを無邪氣なる此少女が母を慕ふと其父が路頭にたふれたるを扶けむと焦思する所なと掬すべき所多しことに七里が濱の黄昏に寄せ來る濤を相手取りおのが薄幸を嘲つ稚な心の可憐さを描きたる所。此少女が乞食となりて骨身に泌みる雪降りの寒さに耐えかねて小供心に憂世をはかなみ斗らずも母に邂逅し嬉しさのあまりに怨言などを放ちつゝむかしを語る所は坐ろに哀涙を灑かしむ此末段は舞臺にも上せたきものなり憾むらくは母の女性は幼女のそれに及ばずお房が其良人の死をきゝて「死んだ、おとッさんか、ソリヤ眞實か」と血相をかへたるばかりにて其他に悲み傷む言葉の見ねさるは殘念なり、お花は遂にまだ褪めやらぬ色香をやつして花賣女となり「花は賣まりすれと實を賣らぬ心は根のない枝が證據」と見憐るゝ痴漢をさとしつゝ健氣の心をまもりて殘る半生を送りたりゝ若し文の妙處を求めなば其他に多しといへともそは讀者の判斷に任ず要するに此一篇は獨り此籠中の尤物たるのみならずすべての小説界に一頭地を抜くものといふべし、雜筆紀行文は一々撮み取りて品定するいとまなけれは畧しつ只筆力の雄健なるは小説に於けると異ろなきとを紹介しおかむ、新體詩に於ては作者いさゝか見劣りせらる口調の俗めきたるところあるは鐵幹に似てしかも遜色ありこは作者獨特の領分にもあらねばあまりに責むべきにもあらず、兎に角作者の技倆は此小編の中にて窺ふを得るなり。(卅二年一月帝國文學第五卷第一號)

若　榮　籠

是れ大橋乙羽が貯金出版として知られたる第二の文集也。乙羽は當代の所謂才子也、渠は一面の紳士也、交際家也、事務家也、文章家也、寫眞師也、旅行家也。故に渠が文を爲くるに於ても、小説もやり、新体詩もやり、紀行文もやり、隨筆もやり、漢詩もやり、俳句もやる。唯和歌と劇詩とは吾人之れを見ざれども、渠にとりては盡し朝飯の茶漬なるべし然れども八百屋主義なるもの、動もすれは一に專らならざらむとす。吾人は若榮籠に由りて渠か多面にして多才なるを知ると雖とも、亦吾人をして心服せしむるの作なきを憾む、

新躰詩は更にも言はず、數編の小說中「犬さくら」を除くの外は畢竟拙作のみ。但し雜多の隨筆は當面才子の反映として一讀に値べきものなきにあらず、若しそれ紀行文に至りては更に近刊の千山萬水を描寫せるを見し上にて、再評を加へむ乎。（中學世界第十二號）

●若　榮　籠

知君筆下具春風。著著齊若收榮籠。新體之詩垂柳綠。短篇小說嫩花紅。或言論盡差傾北。未害紀游多屬東。又見刊書延頸待。千山萬水寫眞中。（めさまし草卷の三十五）

●若榮籠を讀む

大橋乙羽君が多年新聞雜誌等へ揭げし小品を集めて一卷とせしもの題して若榮籠といふ、年頭のとし玉には恰好の表題なり、しかも其製本その表紙すべて輕妙を極む、所載の數篇は篇々皆佳ならぬにあらぬも卷頭に載せし作者のはしがき及び卷末に錄せし俳句「ながれの末」の二篇は先づ余して刮目せしむ、由來君の筆はあまりに行屆きすぎ、その病は餘韻に乏しやを思はしめしに、このはしがきの輕妙、あくぬけしたるに驚けり、已にして卷末の俳句を讀む首々皆妙、蓋しさきのあく拔けはこの俳趣より得來りしならむ、こゝに四首を摘み、君の俳味を紹介す（知十）

下町や番傘つゞく春の雨
一人して淋しいか僧の蚊遣焚く
柳ちる小川に秋は流れけり
枯木立又枯木立村のある　（世事畫報第二卷第二號）

●若　榮　籠

袖珍の好冊子、題して若榮籠と云ふ是れ著者乙羽子が其はしがきにものせる如く、何にもかも明げましては若が〳〵りたる若榮籠にて諸舊の諸筆を輯めしもの、小說あり、雜筆あり新躰詩あり、紀行文あり、猶ほ加へては俳句あり。由來著者は才筆を以て知らるゝもの、今此篇を繙くに當り小說五篇の內「世話女房」の如き「子煩惱」の如き其想に於て見るべきものなしとするあられど寧ろ吾徒の取る所は筆致の巧妙なる輕敏なる點になくんばあらざるなり、見よ其措辭の妙に入れる其譬喩の輕快なる、是を其序言に徵するも猶ほ且つ全豹を窺ふに足らん、殊に繙き來つて其新躰詩に及べば「かこひの梅」の如き「柳がもと」の如き自在に俗語を收用して詠み出せるところ思はず案をうつて快を呼ばしむ、猶ほ吾徒は此書に就て云ふべきものなきに非ず、而も新春屠蘇の香未だ覺めず、徒らに不體の文字を列べて

敢て醉餘の言をなすは却て此好著を瀉すの恐あれば、今ほたゞ紹介に止めて七草のストトンとお囃子は底も蓋も御存じの御客樣の方へまんべんなく依賴するものとせん、呵々（早稻田學報第廿三號）

累卵之東洋

◉累卵之東洋を讀む

在法科大學　中村桂軒

赤本黃表紙に飽き、戀愛小說俠人傳に飽き、滑稽小說に飽き果てたる日本の讀書界は、早晩政治小說の新版圖たらざる可らずとは、予が夙に觀望し豫想したる所なりき、果して多藝多才の聞高き乙羽子は、此時其機を外さず、累卵之東洋と題する一篇の政治小說を著はし、忽にして初版を賣盡して再版を重ね、新聞に雜誌に日報に、二號活字圍點付の大々的廣告を揭げ、人をして殆ど之を讀まざる者は日本人に非ざるの感を起さしむ、洛陽の紙價爲に貴く、繪草紙屋の塵頭人山をなす底の盛事なしとするも、政治小說の作出を揭望する事大旱の雲霓嘗ならざる現時の文界が、如何に之を待設けたるかは蓋想半に過ぐる者あらん、幸にして厚交ある評者は其一本の寄贈を受くる榮を荷へり、寄贈を受けたるは再版なり、先づ執て之を開く、渺たる小册子、而も殆ど其四分の一は、巳海舟先生の題詞、曰某君の序文、曰某山人の跋等を以て埋められたり、是れ即ち小波先生が所謂交際家としての

乙羽子が文學界に名譽ある知友の尠からざるを表彰し、著者の所謂絢爛の光を放つに至れる者ならんか、然れども評者は多數讀者と共に未だ多くの敬意を表する能はず、トンビの下往々襤褸の辱を見る事あればなり、而も若し果して多數讀者が之に依て眼先づ眩し渴仰禮拜措かざる事あらんか、是れ日本文學界の進歩が未だ如何ばかり地平線下にあるかを示すもの、評者私かに涙なき克はざるなり。

開卷讀下忽ち見る一個の壯士あり云々といふに至りて、評者又聊か嗟噫を發するを禁ずる克はず、夫の東海散史の佳人之奇遇は如何ばかり幼稚なる我が文界の賞贊を博せしかば著者亦記する所あるべし佳人之奇遇なる聲は評者が未だ讀書界の人とならざる以前既に已に貧本屋の軒前に最囂しく聞えたるものゝ一なりき、今にして之を見る、其措辭の妙形容の美、妙は則妙、美は則美、之を措いて將た何の採る所ぞ、現時の幾分か進歩したる文學界は、復た羹日の如く、爾く小供瞞着的の文字を羅列して而も得々たるが如き文士を憤らざる底の寬宏なる胸量を存せざるを奈何せん、著者にして若し東海散史にかぶれ、佳人之奇遇を繰り返すが如き事あらば、我現時の讀書界の望に背くの罪太だ輕からざらんとす、是れ評者が未だ一頁を讀了せざるに先づ想ひ浮びたる贅語なりき、不幸贅語は贅語たるに了らず、一度讀過し了りて、再び佳人之奇過を讀むに非さるかを疑ひし評者は、著者に呈するに、さきに東海散史に捧げしものより多くの讃辭を以てする克はざるを憾みて已まず、而も諸大家諸先生が序文に跋文に鼈頭の評言に悉く蜜より甘き讃美の辭を以てせられたる所以を異みて已まず、而も或點に於て珂水先生が、若猛省干茲更費思料再三則一編文字亦足以與佳人之奇遇新帝國策諸書雁行而已、と宣ひし評言の唯り評者の心を獲たるものあるを覺ゆ。

更に他の側面より瑕瑾を求む、題して政治小說といふもこれ政治小說に非ず、政治小說に非るのみか、政治小說らしくもあらざるを奈何せん、政治小說は地理書に非ず、即度の氣候風土を說き、安南柴昆の位置地勢を叙するが如き、贅文字は姑く許す可しとするも、强て更に小學の門に入らしめらるゝ讀者の迷惑は甚だ尠しとせず、政治小說は歷史の教科書に非ず、支那の興亡史徒に讀者の惓怠を惹起するなからんや、本書果して桂月先生の評言の如く、嗚呼これ乙羽子が當年方寸の東洋經綸策を具躰的にあらはせるものなるか、何處に著書方寸の東洋經綸策を見る可き、强て之を索むれば末文一段の猛虎を以て暴英に擬するの一段か、果して然らば所謂東洋經綸策なるものは、虎屍に踞して刀を拭ひ囅然一笑す

るにあるか、之をしも東洋經綸策といふ三歳の童子と雖且首肯するに躊躇せず、高山先生は之れを名けて日本主義といふ、日本主義大に可なり、乙羽子の東洋經綸策大に可なり、之れを以て政治小説累卵之東洋――四十八頁の序跋と堵の如き鼇頭評言とを以て飾られたる小波先生の所謂政治家としての乙羽子の著書の骨子と爲す、評者は多數の讀者と共に聊か失望せざるを得ず、政治家は講釋師に非ず、政治小説は歴史地理に非ず、政治家は策士たらざるべからず、滿腔縱横の立策、之を演説するも可、論説するも可、或は小説的架空の事實に擬するも可ならずとせず、後者に於て始めて政治小説を見る、累卵之東洋を説いて累卵之東洋を泰山の安きに置くの策を建てざるは、未だ目くして政治小説となすを得ざる可し此點に於て評者は故末廣鐵腸先生を惜みて已まず、雪中梅といひ南洋の大波瀾といふ、寔に是れ好箇の一政策、而て大々的政治小説の半面を發揮したるものに非らずや、讀書界は未だ雪中梅の名を忘れず、猶南洋波瀾の聲を記す、佳人之奇遇の爾來を迎するが如く爾く飢渴を覺えざるなり。

日を極めて罵るは文士の禮に非ずとは評者と雖夙に之を知る、而て嘲罵を惟れ事とする評者も亦此書に於て、覺えず案を拍て快哉を絶叫せし好文字の存する事を隱蔽する克はず、

かの杞人所憂行五節の如き眞に痛壯淋漓誦み去て鐵腕の鳴るを覺ゆ、而も往々詩の如きの文景情兩から目睹するが如きを覺えしめ、詞華絢爛才情紙面に溢れんとするあるは、著者の最得意とする所、本書の價値彼にあらずして此にあり、殊に結搆奇想突如として筆を起し、忽ちにして支那、忽ちにして安南、國を憤る壯士あり、夫を悲む美人あり、古を談ずるの老僧、猛虎を劈くの勇士、彼去り此來り、變轉出沒、興混なく、覺えず結末に至て餘音の嫋々たるが如きに至ては、著者の手腕か所謂弱冠の時より優に時流に超出せしを見る、筆路晦澁行文粗策といふもの、もとより著者の驗辭たるに過ぎず、評者は少しく毛色の異りたる短篇小説の小乘として本書を世に紹介するを憚らず、後進非才敢て著者及び諸先生の尊嚴を讀す事多し、妄評罪當死多謝々々。

◉「累卵之東洋」を讀む

在法科大學　桐生悠々

友人乙羽君著「累卵之東洋」出づ、惟ふに「累卵之東洋」を讀む者は皆いはむ、憾むらくば、此の如き書にして十年以前に出でざりしを、蓋し其形に於て、又其神に於て俱に十年以前の稚氣を脱せざればなり、去かはあれど、其稚氣を脱せざるところは、やがて著者が世に對して大に誇るところに非ざるか、故いかにといふに、「累卵之東洋」は、著者が當

年の意氣を公示するに、最恰好なる一方法なればなり。

「累卵之東洋」は著者が少年時代に於ける思想の所現なり、故に此書を評せむ者は、須らく少年の思想を以てせざる可らず、プラートンは一世の大哲なりき、而かも近世の哲學思想を以て渠を評せむは、時と處とを忘るゝ者に非ずして何ぞ。

「累卵之東洋」出づ、其結構や妙ならず、其文章や亦妙ならず、而かも愛すべき少年天眞の狀は躍如として見るが如し、抑少年の智識は直覺的なり、其直覺的なるが故に、其眞理たるところ又決して少なからず、「累卵之東洋」は其形實に於て、俱に十年以前の稚氣を脫せざるにも拘らず、宛として現時に於ける國家交際の狀態を直寫せり、モノポリー主義は、東洋が西洋に對して採りたる政略なりき、而して今や即ち奈何、師弟の地位は顚倒せり、而かも昨の弟は昨の師に得たるところを以て、これを昨の師たる今の弟に施しつゝ、モノポリー主義は、啻に英が印度に對して採るところの政略たるのみならず、今の西洋が今の東洋に對して採るところの唯一の政略なり、想ふて玆に至れば、「累卵之東洋」は單に所謂慷慨悲歌のみに非ざるなり。

我れ乙羽君を知ること千玆年あり、偶「累卵之東洋」を讀みて、我も亦小波子と同じく、

滑稽家、小說家、美術癖ある紳士、寫眞術に巧なる才人、事務家、旅行家、交際家としての乙羽君以外に、別に敬服すべき一の乙羽君あるを知れり、そは小波氏が所謂大經論ある政治家に非らずして、當年の意氣軒昂たる乙羽君なり、乙羽君在焉。

◉「累卵之東洋」を讀む

慕風閑人

世に萬國公法なる者あり、而も是れ唯白人國交の規なるのみ、人に愛の教なる者あり、而も是れ亦唯白人相互の愛なるのみ、其自由を說き平等を唱ふる、亦皆白の自由平等たるに過ぎず、是れ既往現下を通じて更らざるの眞狀なり、東方に國し人の白ならざる者、一たび想ふて此に臻る、誰か悚然として懼れざらんや、近來隣邦の物騷なる、邦人の韓を曰ひ清を云ひ、露を言ひ英を謂ふ、其聲益々高きを加へたるは事實なり、而も未だ片言隻句の夫の大雄氏が生地文化の母親たりし東方一故國の現狀に說及せし者あるを見ず、曾て天保時代の邦人は、其宗教の三國傳來といふの故を以て、日本國の外に唐、天竺の二國あるを知りたりき。而も天竺を知るに於ては、自國及唐國の如くならず、趣もすれば之れを星辰と同視して恰も天上に懸れるかの如く想像する者多かりき、是れ今日に於ては、茶上の一笑拙たるに過ぎずと雖、東洋平和を大呼し大東合盟を高談する者、時に此敬す可く而も又

哀む可き一放國を度外に置き、論者の意想中絶へて現はれざるが如きは何ぞや、現代開明の民も、印度に就きては、夫の天保度翁媼の想像に比して、餘り上達せざるものゝ如し、斯の如きの時に於て、吾人は此雄篇を手にすることを得たり、感喜曷ぞ窮まらん、篇末の一段、嘗て吾が法親王御遭難の箇所と覺しき邊に於て、大蟲を介して、印度日本兩國傑士の握手を看る、議する所其れ何似、恭く香華を供して、般若波羅密多、ひののもとくに兩傑士の健在にして其『グランド、スキル』をして有終の美あらしめんことを佛陀に祈り奉る、（戊戌天長節の夕）

◉「累卵之東洋」を讀んで

曉花生

膠洲灣占領、旅順港借用、事既に陳腐に屬せり、而して之に踵げるものは皇帝蒙塵、國王蒙難、公使館護衛兵、名士走竄、軍艦派遣、示威運動、頻々又繁々、瞬一瞬時、倏忽報來するの打電は、一として寒心せざるはなく、凄慘たる大勢、聞くとして毛髮竦然たらざるなし、噫、近者漫々たる東洋の風雲は、急激の事態一として雷霆霹靂、電光石火の大慘狀を瀆出する伏魔殿的現象を包含するもの、豈に彼の卵子に卵子を累ぬる者に非ずして何ぞや、此時に當つて『累卵之東洋』出づ、思はざりき、著者乙羽氏が滿腹の經綸を椽大の筆に

進らしめしもの、其稿の蓄なること將た新なることは我敢て之を知らず、只所論の慷慨淋漓たる黑奴兄妹を拉し來りて密に流離轉々の狀を畫く、明確の論堂々の議、何爲れそ夫れ一部の小部ならんや、否優に氏が綽々の餘裕を示すものに非ずして何ぞ、眞に敬服に堪えざるなり、讀了一番敢て記す、妄言多罪。

◉讀「累卵之東洋」

竹林巖

二三世紀以降、大塊の頑雲痴霧は亞細亞の版圖を黑く覆ひ來りて印度は亡び、埃及は死し、安南は呑まれ、緬甸は逝き、朝鮮少に餘脈を保ち、其能く獨立の躰面を東洋の天に維持しつゝあるは實に我大日本と支那との二邦あるのみならずや、此時に當り東洋の天地、亞細亞の盟主として旦に支那の眠を覺ましつ前門に虎を逐ひ、夕に朝鮮の夢を呼びつ後門に狼を防ぎ、朝鮮をして朝鮮人の朝鮮たらしめ、支那をして支那人の支那たらしめ、東洋をして東洋人種の東洋たらしめ了らんず天爵あるものは其れ何れの邦なりとするか、我大日本早に嚢に見ありてや、向に友邦の革新を促さんがため或は萬朶の花を折りて八道に匂はせ、或は百錬の鐵を揮ふて四百餘州を靡かせ、以て恩威二つながら施し、且つ彼れ丹髯碧眼子の膓漿を衝きて優に亞細亞の天下を經營し來りしより、忽ち泰西億兆の髯眼を悚動せ

しめ、たまゝ彼をして油斷大敵也と疾呼せしめ、條ち視る大塊の頑雲痴霧は今や一に東洋の局面に向つて更に一層黑く蒸し起りつゝあるなるを、就中海に大なる獅子ありて牙を研ぎつゝ、陸に大なる驚あてり爪を砥ぎつゝ、東洋の累卵を攫み去らんとしつゝあるなるを、吁、我東洋は之を先天既決の命數なりとして甘んずる歟、吁、我東洋は終始主動的東洋たる能はず受動的東洋たりとして頽くある歟、我東洋の態度其れ奈何、固より風雲萬々丈の間にあつては沈重の風色なかるべからずと雖も、亦仁者として山を樂み、亦智者として水を樂む如き悠長なること能はざるなりとす、即ち勇者として仁者の山智者の水を呑吐するに餘あるの大抱負なかるべからざるなりとせりき、夫れ苟も之が大抱負なくして徒に沈重の風色を粧ふも、是れ猿の沐浴して冠りせると何をか異ならんや、其れ然矣。然るに我東洋の態度今日果して奈何、累卵！日又日に累卵!!、噫。

乙羽大君玆に涙淋漓禁ずる能はざるか「東洋之累卵」の著あり、披きて之を閲せば警世鍼言、血滂沱、紙背に大君が秘藏の大日本刀ありて暗々裏に猿の冠を兩斷し洛せるを見る、快絶！。絶壯!!!、明治三十一年天長節、谷中靈梅院に於て識。

◉累卵之東洋

友人乙羽子其舊著「累卵之東洋」を寄せて批を需む、披いて之を讀むに、硬的文字を以て一家の政治的抱負を吐露したるもの、宛然彼の「東洋之佳人」の片影

倘し荔枝の蔓に九年母を生ず、驢馬が獅子の兒を生むを以て奇なりとせば、乙羽子が此著を出したるは奇の又た奇なりと稱すべし、何となれば滑稽家、小說家、美術家、寫眞家、旅行家なる乙羽子の手中より所謂東洋の大經綸を擲たれたるは宛かも八百屋の筺より大鯨の出たるが如く、藝妓の三味線箱よりバイブルの現れたるが如き感あればなり、漣讃美して曰く子の多面多藝なる優に三面六臂の佛以上に出づと、是れ强ち米櫃の禁厭とのみ聞くべからず

予は乙羽子と舊交あり、一燈の夜雨十年の心、相對して志しを語の時、既に子が慷慨悲歌氣節を負ふの青年なるを知り、文を以て世に立つ方に硬文學の方面に於て成効すべきを期したりき、爾後子の徑路は側面に向つて奔り、遂に此の天分の發揮を見るに到らずして止みぬ、今此の著を讀むに及び、私に懷舊俯仰の感に堪へざると俱に、世の意外とする所に非ずして世の意外とせざる所は即ち予の意外とせざるを得ざる所なるに驚く

淺薄の議論なりと說くは野暮なり行文糅雜なりと嗤ふは酷なり、不健全にてもろの一氣直

性、沈痛悲愴なるを取れ、空にても涙の多きを取れ、赤からずとも血の饒きを取り、脂粉の氣のなきは偶々以て少年子弟を鼓舞するに足らむ、只た著者の所謂諸先生の序跋は寧ろ之を讀まざるを以て妙となす(毎日新聞)

◉累卵之東洋

乙羽子の著東洋の累卵とい〳〵る政治小說は予が十年前の舊作なる由にて、今回公にするに至りしは、西力東漸の勢日一日より猛にして、東半球の輿地圖は纔に支那日本とを除くの外、悉く虎狼の爪牙に懸り、而かも支那老大國將さに西力の爲めに、蹂躪せられんとするを慨し、遂に日本の今後印度の覆轍を踏むなからんを願ふの餘り、壯年の意氣を奮起して、世の同意に訴ふるものなりとぞ。(讀賣新聞)

◉累卵之東洋

小說家としての乙羽君は世人既に之を知る、此書は氏が筆を中央新聞に執りし當時、時事に感ずる所ありて、著はしたる政治小說なり、否な小說にあらずして一の經世策なり、此の人にして此の著あり、寧ろ異とすべきなり、今や東洋問題日に急なり、此書時事に多少の補ひなしとせんや、又た文章を學ぶものゝ範と爲すべきものあり。(都新聞)

◉累卵之東洋

乙羽子の政治小說は初めて之を見る、筆を印度の興敗に起して、東洋の危機を論ずるに、佳人之奇遇的一種慷慨淋漓の妙味を覺ゑしむ、昨今東方風雲慘憺の秋、志士再讀の價値あるべし。(毎日新聞)

◉累卵之東洋

此の奇題を設けたる袖珍の一小美冊は乙羽子が、我が中央新聞に在りし頃作れる政治小說なり、今始めて、上梓して世に出せり、佳人之奇遇と比して、文章の巧麗遠く及ばざるも、其の趣向は寧ろ其の上に在るが如し、(中央新聞)

◉累卵之東洋

本書の例言に曰く「本書予が弱冠の作、慷慨悲歌不平鬱勃の氣紙幅に溢る、爾來之を深く匣底に秘したるもの、一に將來の推移を恐るればなり」と、今や博文館諸氏の序跋を附記して出版せらる、往年佳人之奇遇を愛讀せし少年は、また本書の愛讀者となるべし。

越後生

(萬朝報)

◉累卵之東洋

乙羽氏舊作の政治小說也、印度の一青年が國運興復を謀りて、辛酸流離する者を寫す、佳人之奇遇を學で、未だ至らざるもの。（國民新聞）

◉累卵之東洋

「累卵之東洋」は乙羽子の舊稿なるべし、佳人之奇遇に酷似したる漢文調もて、一篇のおもしろき小話をものしぬ、表紙の繪は不折、序跋の數は本文の短きに反して最も多し、よろづ體裁よき小冊子なりけり。（時事新報）

◉累卵之東洋

署して政治小說と云ふ、乙羽子自ら言ふ、本書予が弱冠の作慷慨悲歌不平鬱勃の氣紙幅に溢ると、蓋し眞然なり、其結構一奇士を描き出して、印度の回復を策し、以て西力東壓の根抵を履へさんとするに在り、諸家の叙跋嘖々として稱贊措かず、袖珍の小卷、不折子の意匠に出でたる表裝、頗る愛出たし。（日本新聞）

◉累卵之東洋

「累卵之東洋」は一冊の政治小說にして乙羽子の著なり、蓮山人の序に筆を小說に假りて大に東洋の經綸を論ず、其の時弊を慨し、人心を鼓舞するもの、堂々政治家の風ありて存せり、嗚呼何等の快文字と、誰やらは喫驚せり。（東京朝日新聞）

◉累卵之東洋

乙羽子の政治小說也、海舟伯の題字其池高山巖谷等諸子の序文と太華桂月等諸子の跋文とを附す、佳人之奇遇以後始めて此種の小說を見る、片々たる小冊子と雖も、讀了して中々面白きを覺えぬ。（報知新聞）

◉政治小說

抱月

乙羽君その著「累卵之東洋」を寄せて評を求めらる、作者が弱冠の血氣にまかせ筆を呵したる政治小說なりといふ、題を英領印度の志士智度といふに假りて、歐人の暴橫、印度支那東洋諸邦の危機を說く、其今日に刊行せらるゝ頗に偶爾ならず。

文體結構といひ、中に歌行を挿みて、全篇の趣味すべて佳人之奇遇にかだぐれるまで、吾人が此書によりて想ひ起すは、正しく十年前の我小說壇なり、讀詩社會の好尙の度なり、十年の星霜、歷史の上には眞に半頁にだも値せずして、獨り移れるは小說壇の氣運なる哉彼の士は言はず、我が文壇に元祿の風一たび吹き靡きてより、戀愛小說、暗黑小說、狹斜小說、宜しく並在すべきもこの時を追ひて相起るや、人は應接に遑ながらんとして、一是

一非、論壇は多事に忙殺せられんとしぬ、而て尋いで出でしものは、最近政治小説の呼び聲なり、嗚呼政治小説か、政治小説か、十年の昔、乙羽君が「累卵之東洋」を草せし頃は、實に政治小説の時代なりしなり。遮莫「累卵之東洋」を讀みて、私に疑ふ、今日の所謂政治小説とは如何なるものか、人は歴史の反覆を説けど、人事豈反覆せんや、十年前の政治小説は斷て今日の政治小説にあらず、然らば世の政治小説といふもの、如何の意義ぞ、新小説に宙外君の再び之を論ずたるものありと聞けば、吾人は其の意見に接したる後、大方の説を聞きて更に論ずることあらん。

終に臨み、吾人は少なくとも以上の意によりて、「累卵之東洋」の今日に出でたるを喜ぶ、殊に作家たる乙羽君の手より出でたるを喜ぶ、其の他は必ずしも言ふを須ひざるべし、さるにても面白きは十數年前の小説的趣味なり、顧みて打ち笑むを禁ぜざるもの、豈啻に吾人のみならんや。（讀賣新聞）

◉眼前口頭（一節）　綠雨

「累卵之東洋」、是れ何等の悪文字ぞ。他を愚にするに先ちて、己を愚にする者とも謂はんか、われは久しき友なる著者のために、之を公刊したるを惜む、殊に太甚しく惜む、桂月氏の一文のみ體を得たるを除きて、諸家の序跋亦拙し。（萬朝報）

◉文界雜報（一節）

「累卵之東洋」これは乙羽子のの著である、時事に慨する所があつて、十餘年前の舊著を今出版するといふのであるさうだが、眞面目でそんなことを云ふ作者の氣が知れぬといふものもある、これと何の關係も無いのであるが、我等は最近の「新小説」にある内田魯庵の「うきまくら」を見て、兼て望んで居た政治小説は、ちよいと斯ういふかたちでやつて貰ひたいと思つた。（文庫）

◉柳短微煙錄（一節）

政治小説の呼聲に力を得たる者か、曾た又東亞の事自に非にして激越自ら禁ずるに堪へざるに出でたる者か、今回乙羽氏が翁冠の舊稿「東洋之累卵」を匣底より公衆の前に曝け出した、博文館編輯局の諸先生惣幕出揃ひの序跋いと物々しく、おまけに客員然たる桂月氏の文も愛嬌だ、本書の價値は寧ろ、乙羽氏が文學的才能の發達を稽査せんには必要の者であらう、又其裏面には「佳人之奇遇」といふ者が、いかばかり、我讀詩社會を影響したかを考證せん時の材料にもならう。（反省雜誌）

◉時　文（一節）

大町文學士

亡國印度の慷慨家、英人の獄に陷る、其妹之を救ひ、身反て獄に陷る、兄、國を脱して波斯に行く、志を得ず、支那にゆく志を得ず、遂に安南にゆきて、日本の志士と山中に相會す、是れ乙羽が「累卵之東洋」の脚色也、少年の時の作なれば、嚴密の批評をなさむは野暮なるべし、思ふにこれ發端にして、一篇の脚色、決して茲に完成せるものに非ず、佳人之奇遇にかぶれたるは一目明瞭なれども、亦以て乙羽が當年の意氣込を伺ふべし、文はなほ未熟なれども、詞藻豐富、才華爛發、流麗華贍、人をして覺えず卒讀せしむ、之を少時の文とすれば、われは其文才に驚かざるを得ず、今の小説に普通なる例の戀愛なく、代ふるに兄妹の友愛の掬すべきを以てし、慷慨の氣、一霜に溢る、以て少年の氣を鼓舞するに足る、少年の讀物として珍重すべき也。

先づ印度の滅亡、次に安南、次に大韓國、次に支那の分裂、而して其次に來るべきものは何ぞや、内、政權を爭ふに急にして、眼孔未だ國外に達せず、或は達するも、大韓國、もしくは支那に止まりて、安南にだに達せず、況んや印度をや、聖跡をして長く白皙人種の手に落ちしむ、十年後の今日、なほ人心を外に轉ぜしむるに於て、この書の影響する所の

少ながらざるを信ず。

巻中の詩は、感服せざれども、巻首に載せたる詩の中にて、

峰巒中斷大江流。紅樹青山滿目秋。三十里程行不盡。一帆夜泊荻花洲。

の一絶の如きは優に詩人の域に入れり、但し里程を六灣と改めぬ、灣とは海でも川でも屈曲せる處を云ふ也、知らず、乙羽首肯するや否や。（文藝倶樂部）

◉政治小説

竹井文學士

近時政界の波瀾震蕩につれ、政治小説を誘奬せむとするもの多けれど、作家は絶えて斯界に試みむと欲するものなきは何ぞや。

項來乙羽子政治小説『累卵之東洋』を世に公にしき、其例言によれば、本書は子が弱冠の作にして慷慨悲歌不平鬱勃の氣覺えず紙幅に溢れしもの、今や時運の趨勢に感發して之れを上木せしものなりと云ふ、印度の志士智度と云ふもの、英國の壓制を憤り、窃に獨立の義旗を擧けむとせしに、時日に非にして志事と違はず、危機一髪將に一敗地に塗れむとせしが、纔に難を遁れて支那安南を經歴し、遂に日本の壯士日野某に邂逅するに於て談畢る、滿紙悉く憤慨的文字を以て充塡せられしもの、多少の興味はあれど、要するに結構粗笨に

して首尾整はず、固より小説として見るの價値少なき也、遮莫、著者は云ふ、此議を發する所以のもの文を飾り辭を弄ぶの從事にあらず、亦大に感ずる所あるを以て也と、是れに由りて之れを觀れば、此作題して政治小説と謂ふも其實小説にあらずして一種の經綸論策たり、經綸の論策を捉らへ小説の規矩を以て擬せむとす、作者を難ずるには當らず、寧ろ評家の野暮とも見るべき也。（中學世界）

◎累卵之東洋

乙羽子の政治小説「累卵之東洋」は、東京堂より發兌せらる、是れ子が弱冠の作なりと雖ども、千秋の意氣、流麗の辭藻、共に見るべし、筆を亡國の事に假りて東洋連衡の策を論ずる所、轉た今日の時事に適切なるものあり、唯一部小説として是を視れば、情の到らざるもの、事の盡されざるものあるを惜む、卷中錄するの『杞人憂行』の一詩、以て是書の性質を視るべし。

杞人所憂在東洋、隻手固期掃天荒、庶事兄弟鬩牆、自襲社稷毀廟廊』歐人跋扈日促々、暗逞權謀極殘毒、印度蒼生泣虐政、埃及帝王空放逐』只剩日本與清洲、敢將外交付悠々、都門士女耽歌舞、日夕宴安不知愁』自古奸雄害世道、龍驤虎視貪不飽、妖霧冥々太平

海、隣島沒去又隣島』月照沙漠影如烟、風鳴椰樹響仗弦、此夜無限孤客恨、決眦按劍望秋天』（太陽）

◎累卵之東洋

有誰生

政治小説々々々と猫も杓子も雷同して號吹せる文壇に夫れならば一つと昔ながらの勇氣を出して『累卵之東洋』と題打ちし小冊子を印刷せしめし乙羽子の健氣こそ有難けれ、之を喜んで卷首に叙したる高山林二郎氏が得たり賢こしとお得意の日本主義をふりまはしたるも難有、嗚呼敬すべき哉敬服したる小波子が大經綸ある政治家と著者を紹介したも難有く、落想超凡神變鬼化、一種慨世の意と號けぶ珂水子の跋、筆力雄渾紙有風雲氣と記せし春汀氏の跋、奇氣横秋……作者抱負之所存可以視、……亦見不遑字烹句煉之未之間也とあはてたる賀軒子の跋、這般慷慨悲歌の文字あらむとはとびつくり仰天せる桂月子の跋皆是難有涙の溢ぼるゝ底の妙文字ならざるはなし、偖て乃處で其本文を讀み行けば明月悲みて埃及頽れ紅花凋みて土耳古衰ふの如き明句の全篇所々に點出せるなど何れ難有からぬ所はなき近頃の好著なるべし、蓋し難有き政界の風雲に難有き政事小説を見る我等もやがて彌陀の彼岸に近くことなるべし穴賢々々。（早稲田學報）

◉「累卵之東洋」を評す

三宅青軒

本書は乙羽氏の所著にして、其少年の鋭氣を驅り、即ち情熱し腕自ら顫ふの時になりしもの、概評は前きに揭げたれば、今其書に就て細評を試みん、全體の仕組は、英國の爲めに殆んど亡滅せんとする印度の悲運を慨き、こゝに智度の想ひを以て、劈頭先づ『印度可建英可斃二億蒼生豈無靈』の句を以て全局の話説を提げ、而して滔々數千言、智度が心胸淋漓たる慷慨を滿目蕭條たる印度式微の風光に反映せしめ、乙羽氏が最も長所なる繪畫的叙景の文を舞して、時に鄰邦の興亡を論じ、時に美術の衰殘を悼み、時に佛教の頹廢を惜み、一轉英國の暴横を憂憤するのこころ、夕陽浪浪に落るの外界と、双々景情を叙し來りて、坐ろに汨羅に行吟する楚人を想はしむ、此間の文字實に得易からざるの才華を吹かして、確かに感興を起さしむるの價あり、而して智度の妹羅夢なる一少女を點出して千古の翠松紅蘿を纏はしむるの結構を成したるは好けれど、羅夢の描寫極めて疎にして、兄妹相別るゝ時の景情亦足らず、讀者をして喰足らぬ感を抱かしむるは遺憾なり、智度が羅夢の助けに依つて、逃げて支那に入るの後は、作者愈々其擅長の叙景を盡くして、眞に支那風光の畫幅を成す、特に其吟ずる所の古詩の如き、悲壯の音、激越の調、人をして坐ろに傷心に

堪えざらしむものあり、『月照沙漠影如煙。風鳴椰樹響似弦。此夜無限孤客恨。決眦按劍望秋天』の句の如き、實に金聲をなすものと云ふべし、われは乙羽氏の文を知る、其長所は、其天才の在るに任せて、力を外界の叙景に擅まゝにし、しかも一氣呵成殆ど推敲を費さざるに在り、其短所は、殆ど人心の内面を描き出さず、好し描き出すも甚だ粗雜なるに在り、是故に本書亦此長所をあらはすと同時に其短所をあらはす本書の價値は即ち此に在るなり、作者幸ひに余の妄言を容れて、こゝに自家の長短を顧み、而して其長所なる繪畫的叙景に全力を竭し、加ふるに字句の鍛煉に其思考を費さば、蓋し當今の文詩中作者の右に出るものなからん、予は作者の天才が、この方面に向つて英發せらるべきことを信ず、是れ確に信ずる所なり、故に盡言此處に及ぶ。（文藝倶樂部）

◉「累卵の東洋」に就いて

越後のコメツキ生

近來の文壇が頗と振はざる事は御同樣殘念至極に存じ居り候折から、作日大々的珍書を求め得候て、種々の感慨涌出致し候故、大要を書中にて申上候、其珍書は博文館の若旦那又太郎、號は乙羽とやら申す仁の著述にして、政治小説「累卵之東洋」と申すものに御座候、紙數は僅か百卅頁足らずの袖珍冊子に候へ共、躰裁と云ひ印刷と云ひ、流石に點の打ち所

なき、實に可愛らしき小本に候、乙羽と云ふ名は太陽の寫眞版の側にて善く見る所、又た時折は紀行文或は小説などにても覺え有之、餘り上手な作家とも存じ居らず候へ共、兎に角マメなる可愛き作家と記臆致し居候處、政治小説、しかも東洋問題に大經綸あるとの事を、只今始めて承知仕り候て、たゞ驚くの外無之候、此書を見て最も感心致候は。前後に並べある序や跋の多き事に御座候、其筆者は文學士高山林次郎先生を始め巖谷の小波、大町の桂月、島谷部の春汀、紫山賀軒等、出でゝは文壇の大將たり、入つては博文館の忠臣たる歴々の面々手揃ひに候、これらをや威風堂々とも申し奉るべき御有樣と感涙を催し候、序文の中にも高山先生が「事を亡國に假りて其壯心を舒べたるもの蓋し予と國家の憂を共にする者なり」など申され、小波先生が「堂堂政治家の風あつて存ぜり、嗚呼何等の快文字……圖らざりき此大經綸ある政治家としての乙羽子を今日に至つて初めて知らんとは……子の多藝多能なる優に佛以上に出ずるものあらずや」など書きつけあるを見候てはひたすら恐れ入り申候、お世辭も其度を過せば滑稽となり、諷刺と相成るとが聞き及び居候、若且那が俄かに政治家、佛以上に昇進仕候事、文明の餘澤と難有涙にくれ申候、小生の友人は此書を指して、博文館の御婿樣の威光は大したものだ、前後に太家先生を召し

連れて道化芝居をして居るなどゝ申され候へ共、これは禮を知らざる野人の暴言と存じ候、何ぼ兎もあれ、東海散士黨を食への御手際、金玉の文字、堂々の論議、小波先生にあらずとも、敬服の至りに御座候、と小生も賛め申候間、博文館内閣の出來候曉は相當の御褒美御周旋の程貴下まで豫め願置候、筆末ながらへスチンゲをマーケットドレートンの破落戸と記載有之候へ共、これはクライヴの誤に無之やと愚考仕候、右は内々御注意までに申上候こと故乙羽さんの機嫌を損ぜぬ樣貴下より御序の節乙羽さんへ御つたへ被下度候、記者足下。（慶應義塾學報）

◉累卵之東洋

東海散士の佳人之奇遇に似たる政治小説(?)也、全躰漢文口調にて、振り假名なければ、通常讀書家に讀めべきものにあらず、讀める人に取りては、有難かるべき書にあらず。（人民新聞）

◉累卵之東洋

乙羽ぬしより送りこさる、少しはかり批評らしきものをせんと思ひたれど、これは君が少年の作とやらにて、君自身にも小供らしきを云々し玉へる程なればと、こゝに筆を止めぬ、

佳人之奇遇的の文なれど、やはり少年時の作なり、同館同人の序跋なかくにぎ〳〵しきとなり、躰裁は小まゝやくれてをかし。（日本新聞）

◉累卵之東洋

乙羽子が弱冠發憤する所あり、一氣呵成したる政治小説にして、印度亡國の一壯士を藉り、巧に滿腔の不平を發露したるもの、行文雅麗間々流暢を欽くの憾あるは是非もなし、殊に中村不折子の意匠に成れる表裝は愛すべし。（大坂毎日新聞）

◉累卵之東洋

標題の如きものあり、之は例の博文館の婿殿乙羽先生の大著也、本書予が弱冠の作、慷慨悲歌、不平鬱勃の氣、紙幅に溢ると曰ふは、御本人自からの御吹聽、通俗之を自畫自賛流とは申す也、先生の友人巖谷某の賛序には、此大經綸ある政治家としての乙羽子を、今日に至つて初めて知らんとは、嗚呼、とあるは則ち當世流行の追從的御世辭、オヘッ言葉とは申す也、累卵は則ちかさねのたまご也、乙羽の著せる政治小説とやらの標題也、化けて出たらば可笑しかるべしとは、綠雨が序文中の文句也、賞めたのやら、嘲つたのやら、何には兎もあれ、毀譽褒貶種々の方面ある中に此の書は嘲笑せらるべく如くに文林を賑はした

る珍本として人間の手に置かれたりとかや。（日本人）

◉累卵之東洋

印度の志士智度とやらが、難を逃れ支那安南を經めぐり、一老僧に遇ひ、また日本の人目野基邦に邂逅すといふ話、著者弱冠の作なるよし、なるほど中學生徒の口吻らしきも見えたり、序跋批評ともに當世の名士とやらいはるゝ御方の諂諛的文句を以て充たされ、中には見すぼらしき漢文のもあり、全躰に於て佳人之奇遇に似て及ばざる者何の奇もなく、何の妙もなし。（帝國文學）

◉累卵之東洋

是れ乙羽子昔し硯友社にありける比の舊著なるが、圖らざりき此の慷慨激越の經世談を聞かんとは、天竺の志士「智度」砂上に書して曰く、印度可レ建英可レ斃、二億蒼生豈無レ靈と、筆を此の感慨に起して、破牢國を逃れ、遂に日本壯士と會見するに至り、忽然筆を收む、餘韻長し、正に是れ『佳人之奇遇』に彷彿たるもの、頗ふる乙羽子の才筆を發揮す。（女學雜誌）

◉累卵之東洋

讀て奇もなく妙もなく、想の取るべきものなく、文の見るべきもなし、これを知りながら、

人の勸めにまかせて梓に上ぼされし政治小說、これをしも聞くべくんば、小學生徒の政論亦聞くべし、我はむしろ著者の板に上ぼられし勇氣を愛す、麗はしき小冊子。（反省雜誌）

◉累卵之東洋

袖珍の好小冊子、元是れ著者が其年少氣鋭の際になりし政治小說なりと云ふ、繙いて一讀すれば嘗つて乙羽氏が「佳人之奇遇」に耽けりし頃湧溢滾々たりし其滿腹の經綸策を印度の一偉男兒智度なるものに托せしものなり、文章剛健よく其趣向と比例す、乃ち秋夜の伴とすべし。（早稻田文學）

◉累卵之東洋

著者自身「本書余が弱冠の作、慷慨激昂不平欝勃の氣紙上に溢る」と、吹聽せる大層物と知るべし、百二十頁の袖珍本に四十頁の序跋エライものかな。（東京經濟雜誌評）

◉累卵之東洋

乙羽庵主人の著が久く吾人の眼に觸れざりしが、今茲に久しぶりにて其政治小說に接するを得たり、題して「累卵之東洋」と云ふ、著者今日の危運に對する抱負以て想ひ見るべし、筆調輕快通讀の際、壯氣身に滿ち來るを覺ふ。（大日本）

◉累卵之東洋

累卵之東洋は、乙羽氏未だ世に出でず、偃蹇傲兀情焰中に鬱して外に發洩する能はざるの中に成りしもの、故に其想悲壯沈痛、其文軒昂激越、實に乙羽氏の文中未だ嘗つて見ざるところのもの、文字稍洗煉を缺くの遺憾はあれど、如今軟弱小就の外に於て別に一旗幟を樹つ、細詳は他日に讓るとして、こゝに其好著たることを推奬す。（文藝倶樂部）

◉累卵之東洋

「累卵之東洋」とは乙羽氏の好著たり、多情多熱の一箇印度俠黑兒を拉し來つて、隻手英國の苛刻を擺脫せんとを企圖す、血あり淚あり、滔々たる軟弱文字中、優に一異彩を放つ、人は久しく不健全たる小說に倦きたりし折柄、ゆくりなくも今悲壯の文字に接す、吾人は双手を擧げて斯書を歡迎するものなり。（少年世界）

◉累卵之東洋

こは乙羽子の新著に係り、印度の一偉男兒が本國の現狀を慨し回天の大志を抱きて諸國に流寓したる顚末を綴りたる一篇の政治小說なり、落想行文共に『佳人之奇遇』に髣髴し、其神王し情激するや、讀者をして拍案快を呼ばしむ、夢に仙闕に遊びて美術を論ずる處、

舟を西湖に泛べて古今を觀ずる處、蓋し全篇中の精彩なるべし、杞憂行の詩五篇また一誦の價値あり、年少氣鋭の諸君、請ふ一讀あれ。（中學世界）

◉累卵之東洋

乙羽子の著「累卵之東洋」といへる政治小説は、予が十年前中央紙へ掲載せし舊作なるが、今回東京堂より公にしたり、之は西力東漸の勢、日一日より猛にして、東半球の輿地圖は纔かに支那日本を除くの外、悉く虎狼の爪牙に懸り、まかも支那老大國將さに西力の爲めに蹂躪せられんとするを慨し、遂に日本の今後印度の覆轍を踏むなからんを願ふの餘り、壯年の意氣を奮起して、世の同意に訴ふるものなりとぞ。（山陽新報）

◉累卵之東洋

「累卵之東洋」は乙羽子の舊著、政治小説と標榜したる小冊子にて英國の暴政、印度の亡國、支那の腐敗等を描し二三の好漢出でゝ東洋建國の大策を劃せんとすと云ふ筋なり「佳人之奇遇」に酷似せる文調にて行文尚粗策なるを免かれざれども雅馴の箇所なきにもあらず。（中京新聞）

◉累卵之東洋

著者乙羽子が東洋諸邦の衰頽を慷慨し假りに印度の壯漢智度なる者を主として自家の憤懣を發漏したる好政治小説。（扶桑新聞）

◉累卵之東洋

乙羽子少時東洋の時事に慨して、一氣政治小説を呵成したるもの、今上梓して「累卵之東洋」と題す、時局に鑑みるもの亦以て愛誦すべし、文字亦雅健、趣工特に斬新たり、（河北新聞）

◉累卵之東洋

題して政治小説累卵之東洋といふ、何ぞいかめしきや一個有爲の印度人を促らへて亡國の形勢、征服者の虐政を畫き來る、其趣向稍々東洋散士の佳人之奇遇に似たり、而かも彼は浩瀚の大部冊、波瀾あり抑揚あり、文章高潔にして措辭又苟くもせず、是れは即ち僅々百二三十頁に充たざる短篇にして首尾殆んど完からず、而かも文辭巧を窮めむと欲して却て拙、間々誦すべきの美辭なきにあらずと雖ども全篇を通じては斯筆力の一致を見るなし、趣向平凡、乙羽子の作として下劣なるもの蓋し柄にもなき仕事に手を着けたるの過となり、若し年少時代の舊作にして當今の筆にあらずといはゞ其れ迄なり、併し學生作文の模範位には適當ならむ。（新北陸）

◉累卵之東洋

政治小說の題名を冠して印度の時事を論評す、方今東洋問題の研究一日を忽にすべからず、經綸の策一刻を爭ふの機に在り、之れが畫策を樹て人事は、惟り吾人の翹望のみに非す、東洋の名を奏する本著は果して能くこの希望を滿たすべきか、文章粗笨未だ精刻ならず、著者の政見那邊に在るを知り難し、遺憾百二十餘頁の袖本はして、躰裁甚だ佳なり。（北海道每日料聞）

◉累卵之東洋

「累卵之東洋」は、乙羽氏著政治小說、佳人之奇遇的行文を以て、篇内人物の口を藉り、東洋經綸の策、不平鬱勃の氣を吐露せるもの。（北門新報）

◉累卵之東洋

政治小說「累卵之東洋」は、乙羽の著、此れ著者弱冠の作、爾來深く匣底に秘せしもの、今や西力東漸の勢日一日に迫り、老大支那國も亦將に蹂躪されんとす、唇顫えて舌寒し、夫れ一政治小說と雖燈下繙讀せば豈に無慮の感なからんや、勝伯の題字其他序跋等多し、袖にするを得るの小册子なり。（越佐新聞）

評判記終

明治三十二年九月五日印刷
明治三十二年九月八日發行
明治三十二年九月廿八日再版發行
明治三十二年十月十五日三版發行

正價金三十五錢

著者兼發行者　乙羽生事　大橋又太郎
東京市小石川區戸崎町六十一番地
印刷者　石川金太郎
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　株式會社秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
彩畫筆者　水野年方君　圖案　中川葦舟君
木版彫刻　五島德二郎君　鏤版印刷　猶興舍堀君
彩畫印刷　吉田市松君　製本　前田福次郎君

不許複製

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館
大取次　東京神田區表神保町　東京堂
大阪東區備後町四丁目　盛文館

特約大賣捌所

東京　東海信文合資會社
同　北隆館合資會社
同　良明堂
同　水野慶次郎店
同　栗原春堂店
同　盛中書店
同　田中書店
同　飯塚文堂書店
同　盛文堂
同　服部書店
大坂　吉岡平助
京都　東枝律房
同　飯田信文堂
名古屋　川瀬代助
同　永東書店
同　新聞合資會社
横濱　有隣堂
同　倉田屋書店
同　丸屋書店
同　吉岡支店
同　松井新聞合資會社
神戸　內藤傳右衛門
同　內田濱吉
同　川岡清助
松江　小鹽自治堂
札幌　龜井藏次郎堂
高松　向井藏次郎堂
松山　川又銀藏
水戸　太田支店
大津　八文字屋太右衛門
山形　佐藤庄兵衛
盛岡　鶴鳴閣
同　煥乎堂
前橋　今泉道次郎
弘前　近松德太郎
同　關西圖書會社
津　河島九右衛門
同　學海堂
高岡　郁文堂
岐阜　水琴晨平堂
松本　素月
米澤　西澤喜太郎
長野　千葉久留米
同　菊竹壯助
宇都宮　河內壯吉
佐賀　多田屋支店
秋田　成見清兵衛
四日市　伊藤善太郎
栃木　宮川庸三郎
尾道　兒玉芸香堂
酒田　鈴木喜八
高田　高橋書店
滨松　兒玉芸香堂
足利　鈴木喜八
石卷　高橋書店
山口　三島屋源三郎
谷泉堂
山口　超世德之助
一二三館
覺張治平
西村六平
長島爲三郎
宮阪日新堂
長崎進一郎
修新堂
川南重祐
白鳥書店

同　千葉
同　長崎
同　國館
新潟　廣島
金澤　
同　仙臺
同　博多
富山　德島
同　岡山
和歌山　
同　鹿兒島
熊本　福岡
靜岡　甲府

熊谷久榮堂
克與文
魁櫻井產作舍
積善館號
積善館支店
佐木村勘
近宇都宮館源
宇田川文書店
積善館文書店
三井文書助
中田義三郎
平岡書店
武內彌三郎
週田營兵衛
吉崎太右衛門
品川正書堂
長田幸次郎
柳內書店

（後付の二）

此外全國各地到ル處ニ賣捌店有

（後付の三）

之候間最寄ニテ御購讀希上候

近衛公爵題字伊藤侯爵題詞井上文科大學長序文、（石版眞筆）
紅葉、露伴兩君序六十五翁橋本雅邦翁、武内桂舟君極彩色口繪
乙羽生著　（本書評判記三十二頁入）

（後付の四）

賜天覽

小說あり、紀行あり、一種の眼光と一家の筆致とを以て社會觀を描寫し、風俗を記述したる雜文あり、小品大作、蔚然として羅集し、以て著者の全集とも見るべきもの、花笑ひ鳥啼き風薰し雲湧く、晴雨讀、以て著者を悉すべく、以て清閑を消すべく、又以て南船北馬の佳伴たるべし、

總ソロース洋裝美本
四六版紙數千三百頁
正價金壹圓郵稅二十錢

小說　おさ露高
くも
ひら
小利

川山袖貸

史傳　近衛公　鷹山老　元祿時代と英一蝶　松壽軒　西鶴

出世　大石　良雄
小夜　菅公　畫像
當錦　加藤清正公　畫像
赤十の　逸話　五十　題
男の　畫像　品
夏夜　二　人
女の　身の番の　こゝには逸話、叢閒五十種を集めあり人物の品位、時勢の變遷、人情の差異などを窺ひ知るを得べし
忠孝　福
霜の　賀
捨の　筋
か　む
貧　み
一　の
鬼　の
孤　の
人　の
世間

奴衣裏字腕し師道虫經薄病槍涙入帳

風俗　衣　食　住
こゝには冠婚葬祭の大禮より衣食住の沿革、古今年中行事などあらゆる風俗を眼前に睹るが如し

紀行　晴　好　雨　奇
こは地理上の所說、或は紀行等を集む

右出版いたし候、用紙製本の美麗、印刷口繪の鮮明なるは、著者得意の大手腕を揮ひ、大意匠を凝らせるものに御座候、是非一本御買上被下度、さすれば看板にいつはり無き證據は上り可申候

再版着手中

（後付の五）

侯爵黑田長成君題字、　子爵長岡護美君題詩
男爵末松謙澄君序（東北紀遊十六頁）
幸田露伴君序　黒田清輝君畫　中村不折君畫
梅痴、謫天、質軒君題詩、乙羽生著（本書評判記三十二頁挿入）

賜天覽

增補千山萬水

全壹冊洋裝金字入袖珍紙數八百餘頁
順美製本
改正定價五拾錢
郵税拾錢

第五版

幾内東海東山道及中國四國九州風景寫眞百廿景
（十數遍彩色刷寫眞口繪廿八頁挿入）

本書は辱くも九重の御覽を賜ふの榮を得、發售以來忽ち第五版を重ぬるの運に會したれば、更に大增訂を企て四國中國九州一帶の案内記六十四頁と、其地の風景寫眞三十二ヶ所とを加へ、且つ旅人智慧の板てふ新遊戯をも挿みて、初版以來紙數百五十餘頁を增加し、一層釘裝を美にしたれば、之に優れる旅行案内はあらざるべし

（後付の六）

九重の山水　日光山の一夜　鳥海の山風　海嘯行
濱の離宮　阿武隈川の秋　吹浦の俗謠　柳の都
植物御苑　常陸の平潟灣　酒田の覽寇　逗子の避暑
富士の山苞　勿來關　最上河畔の夜泊　椿山莊　横須賀の夏月
七湯めぐり　波立の藥師　尾花澤の下露　芭蕉庵　箱根の一夜
三保の松原　相馬の野　多聞山莊　熱海の冬
清水の龍華寺　川浦　鷲山の遺風　深秀園　清風明月
京遊記　松島　阿古屋の松陸　葵坂の大邸　月瀬の春
木曾五雞　さんざ時雨　龜岡の文珠堂　春の　箜篌山の今
太田の渡　竹駒の社　二井宿の義民　長柄山の夜雨　奈良の古都
日吉峠　津輕の淺虫　材木巖の奇勝　花見汐干　法隆寺と初瀬
須原の宿　碇が關の雨　目黒の秋　武多峰
原床　矢立峠　鹽越　吉野の花
覺の跡　墨雲　横川の不動瀧　練馬めぐり　曾見東海道
楼の雄能代竹枝　南會津の片山晒　柳島の萩寺　雪の三井寺
蹤の鹿の島山　塔の嵯峨　花屋敷と道灌山　四京めぐり
義仲の舊里　若松城　夢香洲　島原の春宵
烏帽居峠　蘇武澤古事　柳洋の山水　行春の日暮里　京の東山
松本城　寒風山　喜多方の在鄕　盆あるる記　夜雨の泉山
下川　湯本の凄雨　磐梯登山　江の島入洞記　青丹よし
善光寺　戸賀と門前　米澤の夏　鳴の羽田　舞子の濱
川島　金川灣の大雹　新奥の細道　口の渡　須磨寺の櫻漬
月の中　八郎潟の清波　飯坂の月夜　武藏野の夏　車上馬背
嚴美溪の櫻　土崎の割烹　故鄕の錦繪　青梅八景　なり〳〵草
平泉の廢趾　秋田の踏摺　雪の細道　杉田梅見の菜　（增補目次略之）
外が濱路　象潟の今昔　火行　晴野雨記
有耶無耶の關

（後付の七）

紀行あり、小説あり、美文あり、韻文あり、小品に俳句に、新作舊編、著者が得意の作は容れて可憐なる此一籠の中にあり、春の野にあこがれて摘み溜めたる千種の若菜、秋夜春晝の玩びには、之に過ぎたる佳品あるまじ、御評判〳〵、

全壹冊袖珍美本
紙數三百二十頁
正價金二十八錢
郵稅四錢

若菜の春（表紙廿遍刷）
下村觀山畫
美人聽鶯（口繪卅遍刷）
富岡永洗畫

（後付の八）

小説
●春の夜　●世話女房　●鎗持勘助
●犬さくら　●子煩惱

雜筆
●不老泉　●淡粧濃抹　●田家風月
●小照錄　●點景山水　●望郷臺

新體詩
●園ひの梅　●柳がもと　●浮世の影

紀行
●富士登山　●木曾路の春　●鹽原の夏
●江楓漁火　●雪のふる郷

俳諧
ながれの末

第四版……發兌

（後付の九）

從一位勳一等八十五翁 乙羽生 久我建通公題字 著

名流談海

第三版

口繪 田中猪太郎製版 亞鉛銅版着色 舶來光澤紙摺

伊藤侯と山縣侯○伊藤侯の肇蹟○勝伯○京都無隣庵○伊藤侯と大隈伯○渡邊國武子庭園○石黑男と多聞山莊○末松男夫妻○橋本雅邦氏○紅葉氏○露伴氏○動物園の虎

著者の寫眞癖は獨り名士の風采を撮影するに滿足せず、高談雄辯奇言快話を靈筆に寫して、遂に此書の著とはなりぬ、卷頭の寫眞に風采を知悉して而て後朗誦一過すれば、宛も諸賢と一堂に會して握手欵語するの妙あるべく、其讀去つて興味盡きざる、實に近來の奇書なり、

袖珍洋裝頗美本
總クロース金字入
紙數三百餘頁
正價金參拾錢
郵稅金六錢

（後付の十）

目次

●山縣侯爵の園藝談
●伊藤侯爵の滄浪閣談
●伊藤侯爵の美術談
●勝海舟伯の洗足軒話
●同伯の古今小說談
●同伯の雅俗談
●同伯の經歷談
●大隈伯爵の園藝談
●福羽子の王政振興談
●渡邊昇子の俳諧一家言
●渡邊國武子の支那談
●石黑男爵の茶の湯談
●末松男爵の文學談
●佐藤少將の日清戰話
●福地櫻痴君の懷舊談
●西村茂樹君の幕末談
●小崎利準君の芭蕉の話
●栗本鋤雲君の身の上話
●尾崎紅葉君の詩人の話
●幸田露伴君の修文談
●前田香雪君の意匠の話
●橋本雅邦翁の丹青小話
●黑田清輝君の洋畫問答
●看守人某の動物園の話

▲附錄▼

●著者の素人寫眞談
●同 木曾道中談

本書評判記……十六頁ノ（後付の十一）

風多集

新版

口繪＝極彩色密畫＝清風美人圖……水野年方筆

文壇睡れり、著者獨り三伏の炎天に晝寢もせず、夜も深更まで目を覺まして、少しの間にも、ソラ散文、ソラ韵文、新聞讀む外は三分の隙も惜みて、作る程に書く程に、又も此冊子はなり書齋のあした、繙く所として、風清く月白からんものなり。

全壹冊袖珍
總クロース美本
新案寫眞版入
紙數三百二十頁
正價金三十五錢
郵稅六錢

（後付の十二）

小說

●袖時雨（新作）
●こぼれ梅
●京屋娘

新躰詩（新作）

●おぼろ月
●夏の川
●暮の秋
●古關の雪

雜筆

○娘姿十五區
○鷹の羽
○美人八景
○送蓮山人辭
○勇み肌

紀行

○京の雪○夏の夜
○團洲別墅○酒地肉林
○日光結構記○駒場の秋
○麥藁帽子○神田覗機關

俳句漢詩

○俳諧算盤珠
○凉榻詩味

六大著
發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（後付の十三）

公爵 二條基弘君　侯爵 黑田長成君
伯爵 勝 安芳君　子爵 福羽美靜君
子爵 長岡護美君　男爵 石黑忠悳君

題辭……（石版眞筆）

（袋付の十四人）

井上文學博士、肝付少將、高山文學士、大町文學士、朝比奈知泉、幸田露伴、尾崎紅葉、佐々木信綱、大岡長峽、野口珂北、川崎紫山、巖谷小波、廣津柳浪、齋藤綠雨、高橋太華、中內蝶二、三宅青軒、田山花袋、野口寧齋、岸上質軒、柳井絅齋、中村桂軒、桐生法學士、烏谷部春汀、坪谷水哉、林微笑、宮川雲外、森烏城、奥村不染、上村左川、長谷川天溪、猪波曉花、武田櫻桃、竹林巖、

以上諸家題辭序文跋批評

乙羽生著

累卵之東洋

第五版……明治三十二年六月出來

全壹冊洋裝袖珍
中村不折君諷刺畫
正價金十八錢
郵稅四錢

岌々乎として、將に累卵よりも危からんとする者は、東洋刻下の形勢に非ずや、茲に於て印度洋畔奇男兒出で、隻手頽瀾を既倒に廻さんとを謀る、悲壯淋漓慷慨欝勃、天破れ月駭き、風闇く花泣く、半宵朗誦すれば鬼神も爲に壯烈に哭せん、見よ、見よ、日本の快男子、

發兌元　東京市神保町　東京堂

14
2026

當温泉は名物に多く生絲山水明媚の勝區に御座候
地場皆様御存じの織物織物等あり産地に御座候
に傍に

旅館

本店は當市第一繁華街にして近傍に電信郵便局銀行各社等列あり故に旅客の事を辨ずるには便利此上なしと存じ候

米澤市立町二ツ橋畔
音羽屋本店
渡部治兵衛

米澤（佐氏泉）停車場脇
音羽屋支店
渡部はる

支店は米澤停車場の前面にありて古松あり泉水あり遠山近丘風景畫の如く實に都人珍客の休泊に適し頗る爽快の趣有之候